

# 東蒲池門前遺跡

-福岡県柳川市東蒲池・西蒲池所在遺跡の調査-

福岡県文化財調査報告書 第240集

国道385号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集

# 東蒲池門前遺跡

—福岡県柳川市東蒲池・西蒲池所在遺跡の調査—

福岡県文化財調査報告書 第240集





1. B区遠景（東から）



2. B区出土陶磁器



1. B区北調査区トレンチ土層 ( $q-q'$ ) (貝塚含む) (南西から)



2. B区4号溝土層 ( $h-h'$ ) (南から)

## 序

福岡県では、平成 16 年度から平成 23 年度にわたり、国道 385 号三橋大川バイパス道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成 19、20、22 年度に実施した柳川市東蒲池および西蒲池に所在する東蒲池門前遺跡の調査の記録です。

遺跡は有明海沿岸地域に形成された粘土質地盤の低平地に立地しており、周辺には弥生時代から近代までの遺跡が点在しています。特に近隣には、鎌倉時代から戦国時代まで周辺地域を統括した蒲池氏の居城があるとされ、またその菩提寺であった崇久寺が再建されています。今回の調査では、そのような蒲池氏と関わりのあるとみられる中世の遺構・遺物が確認され、下層では弥生時代中期から終末にいたる貝塚が検出されて、かつての社会、生活復元へ多大な成果を収めることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成 25 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長 西谷 正

## 例　言

1. 本書は、国道 385 号三橋大川バイパス道路改良事業に伴って発掘調査を実施した柳川市東蒲池および西蒲池に所在する東蒲池門前遺跡の調査の記録である。一般国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第 3 集にあたる。
2. 発掘調査・整理報告は、平成 22 年度までは福岡県土木部柳川土木事務所（平成 20 年度から県土整備部柳川土木事務所、平成 22 年度からは県土整備部南筑後県土整備事務所）の執行委任を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、平成 23 年度からは福岡県県土整備部南筑後県土整備事務所との協定のもと、九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、各区の調査担当者（A 区：岸本圭、B 区：坂元雄紀、C・D 区：齋部麻矢）が行った。遺物写真の撮影については、巻頭図版・図版を北岡伸一が行い、IV の図版を九州大学とパレオ・ラボ㈱がそれぞれ執筆箇所について行った。空中写真の撮影は、㈱九州航空および㈱空中写真企画に委託し、ラジコンヘリおよびバルーンによる撮影を行った。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は、各区の調査担当者（A 区：岸本、B 区：坂元、C・D 区：齋部）が行い、それぞれ発掘作業員が補助した。
5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、新原正典・小池史哲の指導の下に実施した。
6. 人骨の分析は九州大学の協力を得た。出土遺物の図面・図版自体や図化の参考とした CT スキャンおよび 3 次元デジタルスキャンとその画像化は、九州国立博物館の鳥越俊行氏と輪田慧氏の協力を得た。朱の確認・撮影には九州国立博物館の志賀智史氏の協力を得た。また、木製品の樹種同定は九州歴史資料館の小林啓が行った。
7. I～III の「図版」とは基本的に巻末の写真図版を指すが、IV 中の「図版」はそれぞれの箇内の写真図版を指すものである。
8. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
9. 本書に使用した周辺遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「羽犬塚・柳川」および 1/50,000 地形図「佐賀・熊本」を一部改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
10. 平成 23 年度から福岡県教育庁総務部文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。
11. 本書の執筆については、I・II・V を坂元（アジア文化交流センター）が、III-1 を岸本、III-2 を坂元、III-3 の特殊遺物を城門義廣が、その他を齋部が行った。IV では分析を実施した九州大学、東京大学および㈱パレオ・ラボの各担当者が執筆した。編集については、坂元が行った。

# 目 次

序	
例言	
目次	
図版目次	
挿図目次	
表目次	
I　はじめに	1
1　調査に至る経緯	1
2　調査・整理の関係者	2
II　位置と環境	3
III　調査の内容	7
1　A 区の調査	7
(1)　調査区概要（基本層序を含む）	7
(2)　調査の経過	9
(3)　遺構と遺物	10
(4)　小結	23
2　B 区の調査	24
(1)　調査区概要（基本層序を含む）	24
(2)　調査の経過	28
(3)　遺構と遺物	29
(4)　小結	94
3　C・D 区の調査	96
(1)　調査区概要	96
(2)　基本層序	98
(3)　調査の経過	100
(4)　遺構と遺物	101
(5)　小結	121
IV　自然科学分析	123
1　出土人骨について	123
(1)　はじめに	123
(2)　人骨所見	123
(3)　まとめ	123
2　動物遺体の同定	124
(1)　はじめに	124
(2)　試料と方法	124

(3) 結果と考察.....	125
3 貝殻成長線分析 .....	133
(1) はじめ.....	133
(2) 試料と方法.....	133
(3) 結果.....	135
(4) 考察.....	136
(5) 結論.....	138
4 大型植物遺体 .....	142
(1) はじめ.....	142
(2) 試料と方法.....	142
(3) 結果.....	142
(4) 考察.....	143
V 考察 .....	145
1 弥生時代の周辺地形に関する予察 .....	145
(1) はじめ.....	145
(2) 今回の調査成果から.....	145
(3) 周辺の様相.....	145
(4) まとめ.....	147
2 崇久寺と関連して .....	147
(1) はじめ.....	147
(2) 各調査区の溝の相関性.....	149
(3) 寺域の変遷.....	150

## 図版目次

- 巻頭図版 1 1. B 区遠景（東から） 2. B 区出土陶磁器
- 巻頭図版 2 1. B 区北調査区トレンチ土層（q - q'）（貝塚含む）（南西から）  
2. B 区 4 号溝土層（h - h'）（南から）
- 図版 1 1. 調査区遠景（北から） 2. 調査区全景（東から）
- 図版 2 1. 調査区全景（北東から） 2. 調査区全景（上が南）
- 図版 3 1. 1 号土坑（南から） 2. 2 号土坑（東から） 3. 3 号土坑（南から）
- 図版 4 1. 土坑群（上が西） 2. 土坑群（西から） 3. 4 号土坑（北から）
- 図版 5 1. 5 号土坑（東から） 2. 3・5・6 号土坑（北から）  
3. 4 号土坑から崇久寺を望む 4. 1 号溝（西から）
- 図版 6 A 区出土遺物
- 図版 7 1. 調査区遠景（北上空から） 2. 北調査区全景（上空から）
- 図版 8 1. 南調査区北半全景（南から） 2. 南調査区南半全景（上空から）
- 図版 9 1. 1 号土坑（西から） 2. 2 号土坑（北から） 3. 3 号土坑（北から）

- 図版 10 1. 4号土坑（北から） 2. 4号土坑土層（北から） 3. 5号土坑（南から）
- 図版 11 1. 6号土坑（北西から） 2. 7号土坑（北から） 3. 8号土坑（北から）
- 図版 12 1. 9号土坑（西から） 2. 10号土坑（北西から） 3. 11号土坑（北西から）
- 図版 13 1. 12号土坑（東から） 2. 13号土坑（南から） 3. 14号土坑（北から）
- 図版 14 1. 15号土坑（北西から） 2. 16号土坑（東から） 3. 17号土坑（北東から）
- 図版 15 1. 18号土坑（北から） 2. 19号土坑（東から） 3. 20号土坑（西から）
- 図版 16 1. 1・2号溝（上空から） 2. 1号溝東壁土層（a-a'）（西から）  
3. 1号溝西壁土層（b-b'）（南東から） 4. 2号溝土層（c-c'）（東から）
- 図版 17 1. 3号溝（南から） 2. 3号溝西壁土層（e-e'）（東から）  
3. 4・5号溝（南から）
- 図版 18 1. 4号溝土層（f-f'）（北から） 2. 4号溝土層（g-g'）（北から）  
3. 4号溝土層（h-h'）（南から）
- 図版 19 1. 4号溝土層（i-i'）（北から） 2. 4号溝土層東壁土層（j-j'）（西から）  
3. 5号溝東壁土層（k-k'）（西から） 4. 5号溝土層（l-l'）（西から）
- 図版 20 1. 6号溝土層（m-m'）（西から）  
2. 北調査区貝塚トレントチ土層（n-n'）（6号溝含む）（北から）  
3. 北調査区貝塚トレントチ土層（p-p'）（6号溝、貝塚含む）（南から）  
4. 北調査区北端トレントチ土層（o-o'）（6号溝含む）（北から）
- 図版 21 1. 大溝南東側トレントチ土層（w-w'）（西から）  
2. 大溝南西側トレントチ土層（v-v'）（西から）  
3. 南調査区南北トレントチ土層（t-t'）（大溝含む）（南東から）  
4. 南調査区南北貝塚トレントチ土層（s-s'）（東から）
- 図版 22 1. 南調査区東西貝塚トレントチ土層（u-u'）（北から）  
2. 北調査区貝塚トレントチ土層（q-q'）（南西から）  
3. 北調査区貝塚トレントチ内木器出土状況（西から）
- 図版 23 1. 南調査区南北貝塚トレントチ内北側木杭（①）検出状況（東から）  
2. 南調査区南北貝塚トレントチ内北端木杭（②）検出状況（南から）
- 図版 24 土坑出土土器類等
- 図版 25 1号溝出土土器類等
- 図版 26 4~6号溝出土土器類等
- 図版 27 ピットおよび包含層出土土器類等
- 図版 28 南調査区貝塚出土土器
- 図版 29 北調査区貝塚およびその他の下層出土土器
- 図版 30 1. 出土石製品① 2. 出土石製品② 3. 出土石製品③ 4. 出土石製品④
- 図版 31 出土石塔類①
- 図版 32 出土石塔類②
- 図版 33 出土木製品および土製品
- 図版 34 出土金属製品およびガラス小玉

- 図版 35 出土骨角製品
- 図版 36 1. 調査区全景（右が北） 2. 調査区遠景（北から）
- 図版 37 1. C 区全景（北から） 2. D 区全景（北東から） 3. 1 号土坑（C 区）（東から）
- 図版 38 1. 2 号土坑（C 区）（北東から） 2. 1 号溝（C 区）（北東から）  
3. 1 号溝（C 区）土層および遺物出土状況（北東から）
- 図版 39 1. 2 号溝（D 区）上層土層断面（北東から） 2. 2 号溝（D 区）下層土層断面（北東から）  
3. C 区土器貝殻層堆積状況①（東から）
- 図版 40 1. C 区土器貝殻層堆積状況②（東から） 2. C 区土器貝殻層遺物検出状況（北から）  
3. C 区土器貝殻層検出状況（北から）
- 図版 41 C・D 区出土遺物①
- 図版 42 C・D 区出土遺物②
- 図版 43 C・D 区出土遺物③
- 図版 44 C・D 区出土遺物④
- 図版 45 C・D 区出土遺物⑤

### 挿図目次

第 1 図 柳川市の位置	1
第 2 図 周辺遺跡分布図（1/25,000・1/100,000）	4
第 3 図 周辺地形および各調査区位置図（1/2,500）	8
第 4 図 A 区遺構配置図（1/200）	9
第 5 図 1～3 号土坑実測図（1/40）	10
第 6 図 1・2 号土坑出土土器類等実測図（1/3）	11
第 7 図 4～6 号土坑実測図（1/40）	12
第 8 図 3・6 号土坑出土土器類等実測図（1/3）	13
第 9 図 7 号土坑実測図（1/40）	14
第 10 図 7 号土坑出土土器類等実測図（1/3）	15
第 11 図 1 号溝出土土器類等実測図（1/3）	16
第 12 図 2 号溝土層実測図（1/40）	18
第 13 図 2 号溝出土土器類等実測図（1/3）	19
第 14 図 出土石塔類実測図（1/4）	20
第 15 図 ピット出土土器実測図（1/3）	20
第 16 図 遺構面出土土器実測図（1/3）	21
第 17 図 下層包含層出土土器実測図①（1/3）	22
第 18 図 下層包含層出土土器実測図②（9～12 は 1/6、他は 1/3）	23
第 19 図 出土石製品実測図（1/2）	24
第 20 図 B 区遺構配置図（1/200）	25
第 21 図 1～5 号土坑実測図（4・5 は 1/40、他は 1/30）	30

第22図	1～8号土坑出土土器類等実測図(1/3) .....	32
第23図	6～9号土坑実測図(8は1/40、他は1/30).....	34
第24図	10～13号土坑実測図(10は1/60、11は1/40、他は1/30).....	36
第25図	14～17号土坑実測図(16・17は1/40、他は1/30) .....	38
第26図	9、11～14、17・19・20号土坑出土土器類等実測図(1/3) .....	40
第27図	16号土坑出土土器類等実測図(1/3) .....	41
第28図	18～20号土坑実測図(18は1/30、他は1/40) .....	43
第29図	1～4号溝土層実測図(1/40) .....	46
第30図	1号溝出土土器類等実測図①(1/3) .....	47
第31図	1号溝出土土器類等実測図②(1/3) .....	48
第32図	1～3号溝出土土器類等実測図(1/3) .....	50
第33図	4号溝出土土器類等実測図(1/3) .....	54
第34図	5・6号溝および北調査区内トレンチ土層実測図(1/40) .....	57
第35図	5・6号溝および北調査区北端トレンチ出土土器類等実測図(1/3) .....	59
第36図	南調査区北部の略図およびトレンチ土層実測図(略図:1/300、土層図:1/60) .....	61
第37図	大溝およびピット出土土器類等実測図(1/3) .....	62
第38図	南調査区包含層出土土器類等実測図①(1/3) .....	64
第39図	南調査区包含層出土土器類等実測図②(1/3) .....	65
第40図	南調査区包含層中西端トレンチ出土土器類等実測図(1/3) .....	66
第41図	北調査区包含層出土土器類等実測図(4は1/4、他は1/3) .....	68
第42図	南調査区貝塚出土土器実測図①(1/3) .....	70
第43図	南調査区貝塚出土土器実測図②(1/3) .....	72
第44図	北調査区貝塚出土土器実測図①(1/3) .....	74
第45図	北調査区貝塚出土土器実測図②(1/3) .....	76
第46図	北調査区中層貝塚およびその他の下層出土土器実測図(1/3) .....	73
第47図	出土石製品実測図①(1は1/1、他は1/2) .....	80
第48図	出土石製品実測図②(1/2) .....	82
第49図	出土石塔類実測図①(1/4) .....	84
第50図	出土石塔類実測図②(1/4) .....	85
第51図	出土石塔類実測図③(1/4) .....	86
第52図	出土石塔類実測図④(16は1/5、他は1/4) .....	88
第53図	出土木製品および土製品実測図(5は1/4、他は1/2) .....	90
第54図	出土金属製品およびガラス小玉実測図(2は1/1、5は2/1、他は1/2) .....	91
第55図	出土骨角製品実測図(5は1/1、他は1/2) .....	92
第56図	C・D区遺構配置図(1/300) .....	97
第57図	C・D区基本層序模式図(1/30) .....	98
第58図	C区西壁土層実測図(1/40) .....	99
第59図	1・2号土坑および2号溝土層実測図(2号溝は1/60、他は1/40) .....	102

第 60 図	1・2 号土坑出土土器類等実測図(1/3) .....	104
第 61 図	1・2 号溝出土土器類等実測図(14 は 1/4、他は 1/3) .....	105
第 62 図	淡黄灰色土包含層出土土器類等(1/3) .....	106
第 63 図	土器貝殻層出土土器実測図①(1/3) .....	107
第 64 図	土器貝殻層出土土器実測図②(1/3) .....	109
第 65 図	土器貝殻層出土土器実測図③(1/4) .....	110
第 66 図	土器貝殻層出土土器実測図④(70・71・77・81 は 1/4、他は 1/3) .....	111
第 67 図	土器貝殻層出土土器実測図⑤(105～113 は 1/4、他は 1/3) .....	113
第 68 図	土器貝殻層出土土器実測図⑥(1/3) .....	115
第 69 図	土器貝殻層出土土器実測図⑦(1/3) .....	117
第 70 図	土器貝殻層出土土器実測図⑧(1/3) .....	118
第 71 図	土器貝殻層出土土器類等実測図(217～221 は 1/4、他は 1/3) .....	119
第 72 図	出土ガラス製品、土製品および石製品実測図(1 は 1/1、2～8 は 1/2、他は 1/3) .....	120
第 73 図	出土木製品実測図(1/3) .....	121
第 74 図	Walford 法による市販の福岡県糸島市加布里産ハマグリの成長図 .....	133
第 75 図	採集季節の分布図 .....	136
第 76 図	年齢構成の分布図 .....	136
第 77 図	ハマグリ・ハイガイの成長速度 .....	138
第 78 図	各トレンチの季節分布 .....	139
第 79 図	採集季節の分布 .....	139
第 80 図	弥生時代の周辺地形想定図(1/2,500) .....	146
第 81 図	崇久寺周辺の地形および調査区内溝略配置図(1/1,000) .....	148

## 表目次

表 1	国道 385 号三橋大川バイパス関係発掘調査地点一覧・遺跡名相対表 .....	7
表 2	B 区遺構一覧表 .....	95
表 3	C・D 区特殊遺物計測表 .....	122
表 4	東蒲池門前遺跡出土貝類 .....	125
表 5	東蒲池門前遺跡出土動物遺体(貝類以外) .....	126・127
表 6	貝殻成長線分析試料リスト .....	134
表 7	日周線による季節区分(Koike, 1980 他を基に作成) .....	134
表 8	東蒲池門前遺跡出土ハマグリとハイガイの採集季節・年齢 .....	135
表 9	東蒲池門前遺跡出土ハマグリ・ハイガイの各年齢における殻高(mm) .....	137
表 10	東蒲池門前遺跡から出土した大型植物遺体 .....	142

# I はじめに

## 1 調査に至る経緯

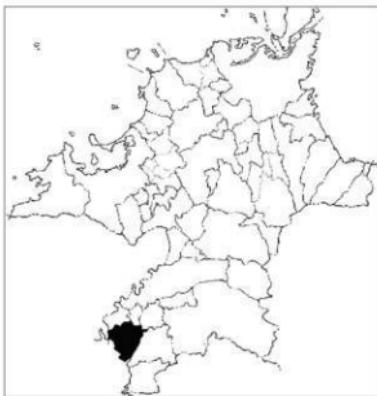
東蒲池門前遺跡は、一般国道 385 号三橋大川バイパス建設に伴い発掘調査した遺跡である。一般国道 385 号は、福岡県柳川市を起点として佐賀県神埼郡吉野ヶ里町を通り福岡市を終点とする延長 67.7 km の幹線道路で 1975 年に路線指定された。地方生活圈相互の連絡とともに、地域住民の通勤・通学等の日常生活をはじめ農林業や商工業及び観光業等の経済活動に貢献する重要路線と言える。三橋大川バイパスは、この路線のうち柳川市三橋町柳河から大川市大字下木佐木までの延長 3.86 km の区間に亘り、交通混雑の解消及び歩行者の安全確保を目的とし計画された。この区間は、近隣の幹線道路である

国道 442 号及び有明海沿岸道路を相互に連結する重要な位置にあたるが元来道幅が狭く、近年

の交通量増加・車両大型化による渋滞で幹線道路としての機能が損なわれていた。また、歩道整備の遅れで歩行者、自転車の安全な通行に支障があり、これらの理由が事業計画の背景にあった。

平成 13 年度より事業実施され、施工対象用地の解決とともに順次試掘・確認調査を経て、文化財の確認された地点では本調査を実施した。各本調査地点に対応する試掘・確認調査の日程は、平成 16 年度本調査の東蒲池池遺跡で平成 16 年 7 月 8 日、平成 19 年度本調査の東蒲池門前遺跡 A 区で平成 18 年 4 月 17 日、平成 20 年度本調査の下木佐木安堂遺跡で平成 20 年 11 月 26 日である。残りの平成 20 年度本調査の東蒲池門前遺跡 B 区、平成 21 年度本調査の西蒲池池田遺跡、平成 21・22 年度本調査の西蒲池池淵遺跡（I 地点）、平成 23 年度の西蒲池池淵遺跡（II 地点）は、いずれも平成 19 年 11 月 13・14 日の試掘・確認調査で大枠の調査範囲を把握した。また、平成 21 年度に、東蒲池門前遺跡において、バイパス道路と現国道 385 号との連絡道路の設置に伴う付帯工事が追加され、その対象地を平成 22 年 6 月 25 日に確認調査した結果必要となった本調査は、同年度中に実施された。

調査時点での遺跡・調査区の名称の設定にあたり、道路や水路等で区分された範囲について、年度内で連続して近隣箇所を調査した際に、同一遺跡名の異なる調査区として設定した場合がある。その結果、小字との対応や遺跡の内容による遺跡名・調査区相互の関連性に齟齬があるなどし、既存の包蔵地の括りで捉えても解消されない点があった。そこで、報告にあたっては、柳川市教育委員会と協議の上、調査成果に則して遺跡名および報告の括りを整理することとした。調査時と報告時の名称・区分けの対照は表 1（7 頁）に示しており、大川市所在の下木佐木安堂遺跡以外は近接しているため、ある程度の広がりをもって連続する蒲池遺跡群内に、複数の遺跡が包括される形になる。なお、報告以前における発見届等の各種文書や年報等、出土遺物の注記では旧名称での記載である。



第 1 図 柳川市の位置

事業区間で本調査不要や本調査終了の地点での施工の結果、起点から東蒲池交差点までの 780 m（東蒲池蓮池遺跡調査地点含む）が平成 20 年に供用され、大川市大字鬼古賀から終点の大川市大字下木佐木までの 1540 m（下木佐木安堂遺跡調査地点含む）が平成 22 年に供用されている。

## 2 調査・整理の関係者

	平成19年度	平成20年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）					
総括					
教育長	森山良一	森山良一	杉光誠	杉光誠	杉光誠
教育次長	植崎洋二郎	植崎洋二郎	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦
総務部長	大島和寛	荒巻俊彦	今田義雄	今田義雄	西平田龍治
文化財保護課長	磯村幸男	磯村幸男	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋
	(本副理事)	(本副理事)			
副課長	佐々木隆彦	池造元明	伊崎俊秋		
参事兼課長補佐	中園宏	前原俊史			
参事兼課長技術補佐	池造元明	小池史哲	小池史哲		
	小池史哲	伊崎俊秋			
参事	新原正典	新原正典			
庶務					
管理係長	井手優二	富永育夫	富永育夫		
庶務担当	洞上大輔	藤木豊	近藤一崇		
調査・整理報告					
調査第一係長	小田和利	小田和利	吉村靖徳		
技術主査			齋部麻矢		岸本圭
主任技師	岸本圭	坂元雄紀	坂元雄紀		
		(アマズダシシテ)			

## 九州歴史資料館

総括			
館長		西谷正	西谷正
副館長		南里正美	森田隆行
総務室長		圓城寺紀子	圓城寺紀子
主任主事		近藤一崇	近藤一崇
調査・整理・報告書作成			
企画主幹（文化財保護室長）		飛野博文	飛野博文
企画主幹（文化財保護室長補佐）			吉村靖徳
参事補佐		小池史哲	小池史哲
技術主査（文化財調査班長）		小川泰樹	小川泰樹
技術主査		齋部麻矢	齋部麻矢
技術主査（保存管理班長）		加藤和哉	加藤和哉
主任技師		坂元雄紀	坂元雄紀
		(757北冠セシテ)	(757北冠セシテ)
技師			
		城門義廣	
		小林啓	

## II 位置と環境

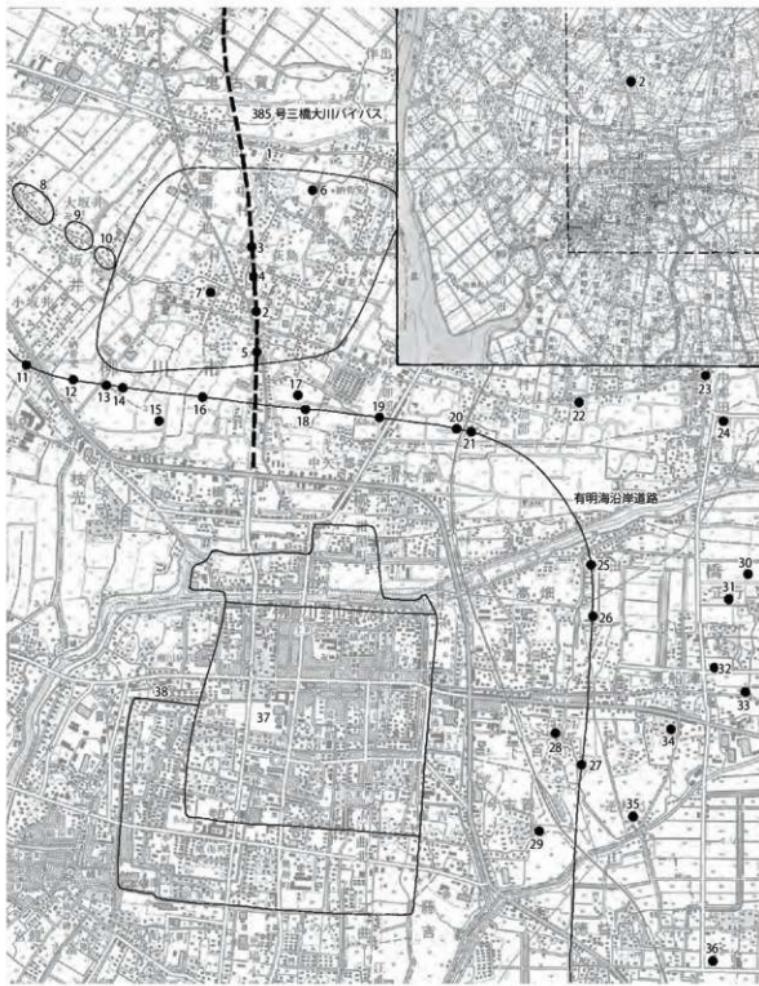
本遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部の有明海沿岸部に位置しており、平成17年2月5日付で旧柳川市・三橋町・大和町で合併し、現柳川市となった。北は矢部川水系花宗川、太田川およびクリーク等を境に大川市・三瀬郡大木町・筑後市に接する。東は矢部川を境にみやま市、西は筑後川を境として佐賀県と接し、南は有明海に面する。

筑紫平野は筑後川・矢部川その他の諸河川が運搬してきた土砂で埋められ、一部人工の干拓も加わってできた福岡・佐賀両県にまたがる九州最大の平野であり、福岡県側を一般に筑後平野と称し、また矢部川流域の南部平野部分を南筑平野とも呼称する。有明海沿岸部については、大小の干拓地が鱗状に展開していて、日本の代表的海面干拓地帯である。また、それぞれの河口部には干潟が発達する。

筑後川は阿蘇山を水源とし、九州北部を西流して有明海に注ぐ九州最大の規模の一級河川で、流域延長143.0km、流域面積2860km<sup>2</sup>に及ぶ。筑紫平野を貫流して久留米市西部あたりからは下流域となり、福岡県・佐賀県の境界と概ね対応しながら南西方向に流れ、河口付近で柳川市に沿って有明海に至る。矢部川は大分県・熊本県との県境山地である奥耳納山地・筑肥山地の水を集めて西流する全長61kmに及ぶ、筑後川に次ぐ一級河川であり、八女市・筑後市・柳川市との境をなし、海岸近くで飯江川と合流し有明海に注ぐ。その水源地は狭小にもかかわらず、5市をはじめ複数の地域にまたがり、流域面積は620km<sup>2</sup>、灌漑面積は11,000haにもわたる農地を潤す。なお、柳川市域を貫流する沖端川・塙塚川は矢部川より分岐する一級河川で、沖端川は柳川城内の堀割への導水の供給源となっている。

筑紫平野の一部である柳川市域は、矢部川およびその支流である沖端川・塙塚川による大量の土砂の堆積に加え、有明海の潮汐による大きな干満差が影響して形成された冲積地と、近世初頭以降干拓によって非常に広大に造成された土地からなる。完新統の冲積低地を構成するのは、非海成層の蓮池層と海成層の有明粘土層である。有明粘土層は極めて軟弱な地層で、海棲貝類の貝殻片を混入するのが特徴である。その形成時期は完新世、高海面期である繩文海進のピーク時期の前後と考えられ、有明海干潟や海底部分では現在もその形成が続いている。蓮池層は、筑紫平野の汽水域から淡水域で形成された非海成の冲積層の総称で、低地の表層に広く分布し、層序関係は有明粘土層と同時異相関係にある。市域の標高は1~6m程度と低平な平地で、水田地帯が広がっており、水田の用排水路の機能を果たすクリークが網の目のようにりめぐらされる部分もあり、当地方の景観を特徴づけている。なお、本報告の対象遺跡の所在する柳川北部の東蒲池から西蒲池は、標高3m程度の低平な水田地帯が広がる中に集落の集中範囲も認められる様相である。

本調査地点の所在する有明海沿岸周辺地域において集落が進出するのは弥生時代からで、筑後川左岸に形成された自然堤防上に立地する大川市下林西田遺跡で前期の遺構と遺物が確認されており、同市酒見貝塚でも前期の土器片が採集されている。しかし、前期の痕跡を窺わせる遺跡は非常に限られており、低地の微高地上の集落の展開はこの段階では限定的なものかもしれない。その中で、旧大和町域の徳益八枝遺跡は、弥生時代前期から中期初頭にかけての集落の貴重な調査例である。柱が軟弱な地盤に沈み込まないように工夫された掘立柱建物跡や井戸が



- 1 蒲池遺跡群 2 東蒲池門前遺跡 3 西蒲池田遺跡 4 西蒲池源遺跡 5 東蒲池源遺跡  
 6 中村遺跡 7 三島神社遺跡 8 三丸東田口遺跡 9 宮ノ前遺跡 10 園田遺跡 11 叢井長水遺跡  
 12 西蒲池古塚遺跡 13 西蒲池特監坊遺跡 14 西蒲池古溝遺跡 15 犬ノ内遺跡 16 西蒲池下里遺跡  
 17 東蒲池大内堀遺跡 18 東蒲池櫻町遺跡 19 矢加部町屋敷遺跡 20 矢加部五反田遺跡  
 21 矢加部南屋敷遺跡 22 阿原町屋敷遺跡 23 東小路遺跡 24 磯鳥フケ遺跡 25 蒲船津江道遺跡  
 26 蒲船津水町遺跡 27 蒲船津西ノ内遺跡 28 蒲船津西古賀遺跡 29 今古賀城跡 30 志太郎遺跡  
 31 一本松遺跡 32 ヘータカサン遺跡 33 地獄堂遺跡 34 蒲船津城跡 35 逆井出遺跡  
 36 徳益八枝遺跡 37 柳川城跡 38 柳川城郷間連道路

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000・1/100,000)

検出された。弥生時代中期には、柳川市域でより遺跡が確認されるようになり、遺跡の分布が拡大する。特に本報告の対象となる柳川北部に位置する蒲池地区の三島神社貝塚を含む蒲池遺跡群は市北部の拠点的な集落と見られ、広域に散布地や貝塚が確認されている。その中で本村では、土器・石器等の集落での生活活動と関わる遺物や一部遺構が確認された。また、扇ノ内遺跡では壇棺墓が確認され、更に昔から耕作時に掘り当てるという巨石は、支石墓の上石とみられている。三島神社楼門前の石橋に使用されている一枚岩もこの巨石の1つと言われている。ただ、市域で最も濃密な弥生遺跡とみられるこの地点も、これまで本格的な調査がなかったため、詳細な実態は不明瞭なままであった。一方、市西部では磯鳥フケ遺跡、江鶴遺跡が挙げられる。市域で散布地等が多く詳細な実態の不明な弥生遺跡が多い中で、磯鳥フケ遺跡では本格的な調査によって弥生中期後半段階での低地の集落の様相が明らかとなり、徳益八枝遺跡と同様に掘立柱建物跡や井戸が検出された。先述の大川市下林西田遺跡でも中期初頭～前半を最盛期としている。後期になると一本松遺跡、礎盤の出土した正行西の頭遺跡、松の木塚遺跡、日渡遺跡など遺跡が増加する。特に旧三橋町域の蒲船津の二ッ川左岸では、かつてから弥生後期から古墳時代の土器が出土することが知られていた中で、近年の蒲船津江頭遺跡の調査によって、弥生時代終末から古墳時代初頭が主体の集落が広範囲に調査された。切り合いの激しい礎盤を伴う掘立柱建物跡や多様な土坑等が検出され、該期の低地集落の様相が詳細に把握されている。

古墳時代での詳細は不明であるが、蒲船津江頭遺跡では、遺構が不明瞭ながら中・後期の土器が出土している。西蒲池古塚遺跡、西蒲池下里遺跡では後期の遺物が出土しており、ヘータカサン遺跡や地蔵堂遺跡などの集落遺跡が更に増加するようである。海岸線の後退に伴う微高地・可耕地の増加が原因として考えられる。

律令制下では北部が三瀬郡、南・東部が山門郡に属していたと思われるが、郡界は不詳である。条里が敷かれ、土地改良事業が行われる以前はその跡をうかがわせるクリークも見られた。先述の蒲船津江頭遺跡やその近隣の蒲船津水町遺跡では、古代の遺構から墨書き土器が出土している。なお、「和名類聚抄」で筑後國下妻郡に「鹿待」郷が見え、これが「かまち」の初見であり、後には平安時代末期の三瀬郡域を中心とした三瀬庄の成立に伴い、鎌倉期から戦国期に見える「蒲池」村の一部となったとも考えられる。また、山門郡域を中心に瀬高庄が成立する中で、旧三橋町域は瀬高下庄に属したが、一部は瀬高横手庄であった可能性もある。西蒲池将監坊遺跡、西蒲池下里遺跡で奈良時代の遺物が認められ、平安時代では東蒲池櫻町遺跡で10世紀の遺構が多く見られ、西蒲池下里遺跡で溝が検出された。中世初頭では西蒲池古塚遺跡、東蒲池大内曲り遺跡、坂井長永遺跡、西蒲池下里遺跡で遺物が出土している。中世後期には矢加部南屋敷遺跡、矢加部五反田遺跡、蒲船津西ノ内遺跡で青花等の中国製陶磁器が多く見られ、有力豪族の蒲池氏との関連も想起させるものである。蒲池氏は、大和町鷹ノ尾付近の鷹尾城を本拠地とする田尻氏とともに、戦国時代の柳川市周辺を統治した。

本報告の調査地点の近隣にあって蒲池氏との関わりが深いのが、蒲池城と崇久寺である。蒲池城は南北朝の動乱期に初めて史料に見える中世の城館で、関連性を示す史料が少ないものの蒲池氏の居城とみられている。調査地点の100m程度北に「蒲池城跡之碑」が建てられているが、実際の詳細な位置は不明である。蒲池氏は戦国時代の半ば頃に二家に分かれ、下蒲池の系統となった鑑盛が居城を柳川城へと移した後も、蒲池城はその出城として役割を果たしたようである。なお、その際

に水の防壁として柳川城を難攻不落の堅城とした堀削が開発された。一方、崇久寺は臨済宗妙心寺派の寺で、もともと後醍醐天皇の勅願寺で長福寺と称していたが、南北朝動乱の兵火にかかり、足利尊氏により南山士雲を開山として暦慶2（1339）年再建されている。その後も兵火に遭う中、再度蒲池氏によって再び建立されたという（崇久寺略縁起）。「南筑明覧」では蒲池久恵の創建とする。「筑後地鑑」および「南筑明覧」には、かつては勅願寺として塔頭が八箇寺あったが失われていると記されている。境内に入る門の手前には、天文22（1553）年に蒲池鑑盛が施主であった大乘妙典の記念碑である「崇久寺大乘妙典供養碑」が立ち、本堂西側には複数の石塔の中に鑑盛の墓とみられる笠塔婆があって、蒲池氏との非常に強い結びつきを現在でも見ることができる。

天正9（1581）年、竜造寺隆信により蒲池鎮並が謀殺され、その後に柳川城が攻め落とされて蒲池氏は滅亡し、天正15（1587）年立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三瀬・下妻・山門の三郡を支配した。関ヶ原の戦いで西軍に与した立花氏は改易され、田中吉政が筑後国主となり、慶長6（1601）年に入国した。なお、先述の蒲池城は立花氏の下でも柳川城の北の支えとして機能していたようであるが、田中吉政の代に廃城となり、崇久寺は立花・田中氏の治下でも恩恵を受け、近世にも安定的に存続した。田中吉政は慶長本土居の建設、堀削の掘削や街道整備など多くの土木事業を進めた。柳川城と久留米城を結ぶ幹線道路としての久留米柳川往還の整備もその一つである。また、慶長本土居は現在道路として使用されており、整備の進んだ堀削は、今でも「水郷柳川」の景観を形成し、観光資源となっている。田中氏改易後、筑後国は柳河藩と久留米藩に分断され、柳河藩は立花氏が再び領有し、久留米藩は有馬氏が領有するに至った。なお、柳川市新外町に所在する国指定名勝立花氏庭園は、柳河藩三代藩主立花鑑虎の別邸として築造された「集景亭」（通称・御花）の庭園である。奥州の松島の景色を模して造園されている。

#### ＜参考文献＞

- 鏡山 猛 1956『九州考古学論叢』吉川弘文館  
筑後考古学研究会 1997『筑後考古』第9卷  
福岡県教育委員会 1998『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書第132集  
大和町史編纂実務委員会編 2001『大和町史 通史編 上巻』大和町  
柳川市 2002『新柳川明証図会』柳川市史特別編  
平凡社 2004『福岡県の地名』日本歴史地名大系第41卷  
福岡県教育委員会 2005『東蒲池櫻町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集  
福岡県教育委員会 2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集  
柳川市教育委員会 2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第1集  
福岡県教育委員会 2007『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集  
福岡県教育委員会 2008『坂井長永遺跡(1・2次) 西蒲池古塚遺跡(1～4次) 西蒲池将監坊遺跡(1・2次) 西蒲池古溝遺跡 西蒲池下里遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集

### III 調査の内容

#### 1 A 区の調査

##### (1) 調査区概要（基本層序を含む）

東蒲池門前遺跡 A 区は国道 385 号東蒲池交差点から北にバイパス状に枝分かれする地点である。現道下は調査対象から外したため、調査区は三角形に近い形状をなす。調査面積は 400 m<sup>2</sup> である。

調査前は水田であったが、耕作土のはば直下で硬質の灰色粘質土が確認され、その面に暗灰色を基本とする埋土の遺構が検出された。これを遺構



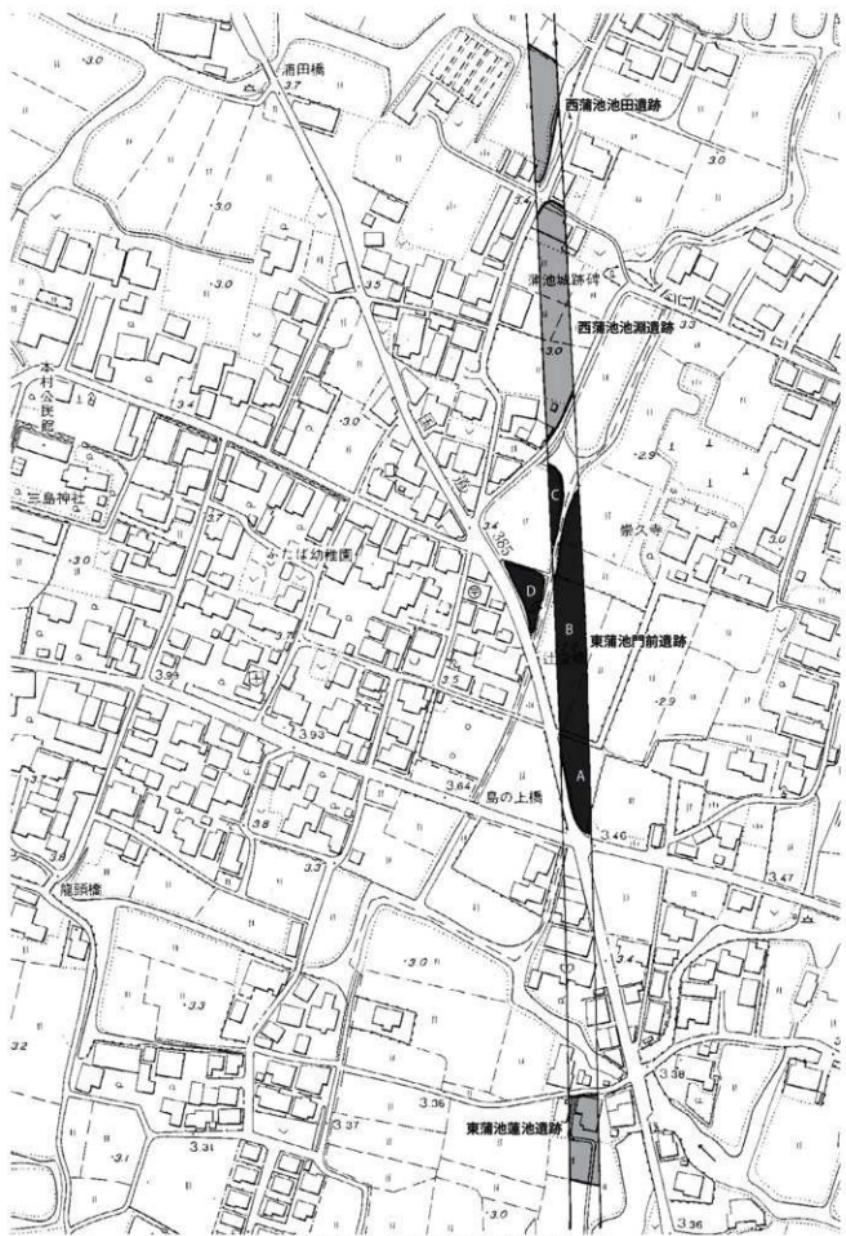
調査区から崇久寺を望む

面として調査を実施したが、弥生土器片がしばしば確認されることから下層に遺構が存在するものと想定された。そのため重機を用いて調査区北西部にトレーナーを設定して確認をしたところ、明晰な遺構面は確認できなかったものの比較的多くの弥生土器が出土した。

調査区の南半分は大溝が複雑に切りあっており、ピットや土坑といった遺構は検出されなかった。調査区北半分はピットや土坑が検出されたが、土坑は調査区中央に集中する傾向にある。溝も調

表 1 国道 385 号三橋大川バイパス関係発掘調査地点一覧・遺跡名対応表

報告時遺跡名称	調査時遺跡名称	所在地	試掘・確認調査日	発掘調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	
下木佐木安堂道路	既報告 236 集	—	大川市大字下木佐木	H20.11.26	H20.12.8 ~ H21.1.9	620
東蒲池瀬池道路		瀬池道路	鶴川市東蒲池	H16.7.8	H16.8.6 ~ H16.8.31	158
西蒲池池田道路		—	鶴川市西蒲池	H19.11.13~14	H21.6.8 ~ H21.7.17	996
西蒲池池瀬道路	池瀬道路 I 地点	鶴川市西蒲池	H19.11.13~14	H21.11.4 ~ H22.3.29 H22.10.12 ~ H23.3.15	970	
		鶴川市西蒲池	H19.11.13~14	H23.4.25 ~ H23.10.24	1200	
東蒲池門前遺跡	A 区	門前道路	鶴川市東蒲池	H18.4.17	H18.9.11 ~ H18.10.13	400
	B 区	西門前道路	鶴川市東蒲池	H19.11.13~14	H21.1.9 ~ H21.3.27	1300
	C 区	池瀬道路 III 地点	鶴川市西蒲池	H22.6.25	H22.7.23 ~ H22.9.28	760
	D 区	池瀬道路 IV 地点	鶴川市西蒲池	H22.6.25	H22.7.23 ~ H22.9.28	



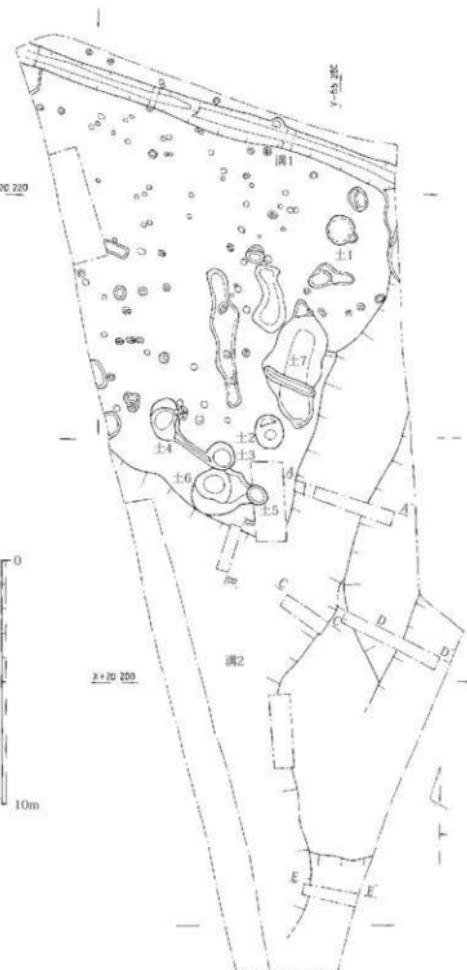
第3図 周辺地形および各調査区位置図 (1/2,500)

査区北辺に沿って検出された。ピットはいずれも径10cm程度の小形のものである。土坑はほぼ正円形のものと、不整形の落込み状のものとがあるが、後者については大形で遺物が多く含まれるもののみを報告する。

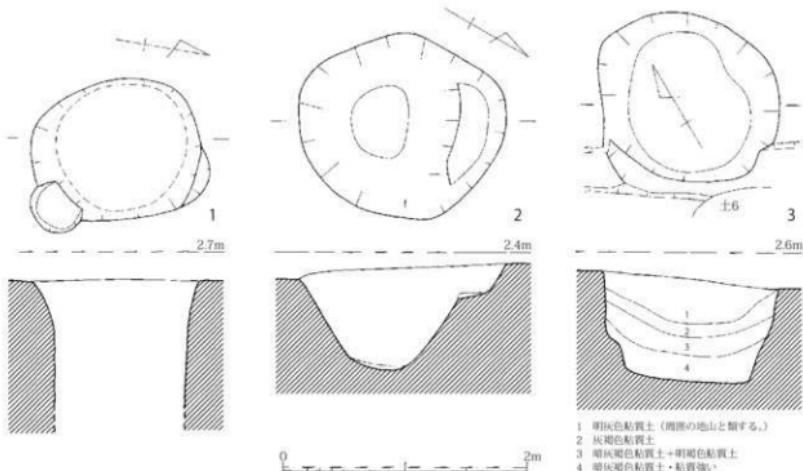
#### (2) 調査の経過

重機による表土除去作業は平成18年9月11日に開始した。重機はバケット容量0.4m<sup>3</sup>のバックホーを用いた。表土については、北側路線内は宮農のため置くことができず、東側の土地を借地することにより対応した。雨天による遅れもあったが、表土除去作業は3日間を要した。発掘作業員とともに9月14日より作業を開始することとなった。ユニットハウス等の建機は、東蒲池交差点を挟んだ位置の路線内に設営し、調査現場までは交通安全への配慮が必要となった。

柳川市内をはじめとして周辺地域は、地山が軟弱な粘質土で、水を含むと非常にぬかるみ、乾燥するとガチガチに固まり干割れするという環境にある。そのための対策が肝要となるため、作業は排水対策から開始した。調査区の南半分が大溝により求められていたため、調査区に沿って大溝内をトレーニング状に掘削し、排水溝とした。中世の遺構を検出・掘削したが、調査区北側を中心に弥生土器が散見さ



第4図 A区遺構配置図 (1/200)



第5図 1~3号土坑実測図 (1/40)

れたため、9月19日に中世遺構が検出されない箇所に重機を用いて下層の確認をした。遺構の判別は比較的容易であったため、手際よく掘削をすすめ、9月中に土坑・ピットの掘削を終え、10月に入りトレンチによる大溝（2号溝）の堆積状況の確認や1号溝の掘削を行った。10月6日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。図面類の作成を行い、10月10日に全ての作業を終了した。出土品はパンケース9箱となり、10月16日付けで柳川警察署に埋蔵物発見届を提出した。

### (3) 遺構と遺物

#### 土坑

##### 1号土坑（図版3、第5図）

調査区北東部に位置する円形土坑。平面形は南北14m、東西12mを測る円形で、南東側で小ピットと切り合う。深さ約12mまで掘削を行ったが、底が検出されず、湧水が著しいこともあり調査を中断した。土坑の壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形と深さから考えて井戸と考えられる。

##### 出土遺物（第6図1、第19図2）

出土遺物には瓦・土師器があり、混入品として弥生土器・石製品がある。

1は丸瓦で、軟質の瓦質。外面はナデ調整で、内面には布目痕を残す。

第19図2は硬質凝灰岩製の叩石で、混入品と判断される。平面楕円形で、平坦面の両側中央に敲打痕がみられ、側面にも不明瞭ながら敲打痕とみられる凹凸が観察される。

##### 2号土坑（図版3、第5図）

調査区のはば中央に位置する円形土坑。検出面における規模は南北17m、東西15mを測る。北

側に幅約20cmのテラスをもつ。壁の立ち上がりは約45度をなし、底面は径約50cmの円形となる。検出面からの深さは約80cmである。

#### 出土遺物（第6図2・3）

出土遺物は少なく、瓦および青磁がある。

2は平瓦。硬質で焼成されるが、淡橙色を呈する。厚さ約2.3cmを測り、重量感がある。外面ともにナデ調整である。3は青磁碗。厚手のつくりであり釉も厚くかかる。釉調は灰黄緑色である。

#### 3号土坑（図版3、第5図）

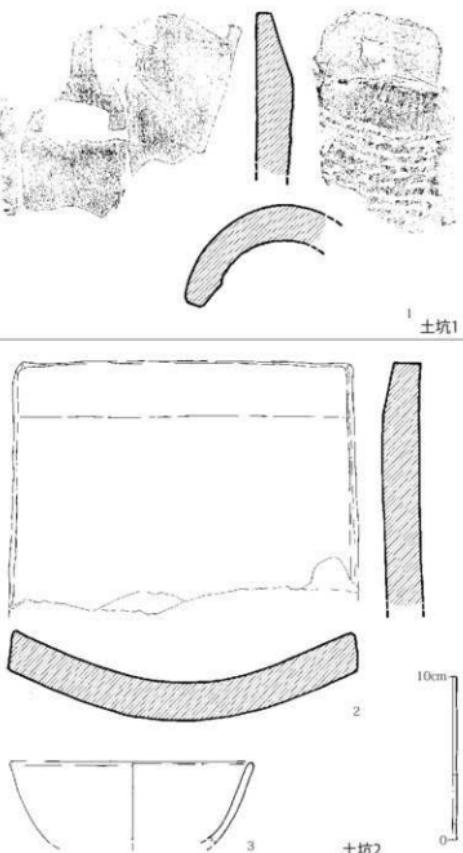
調査区のほぼ中央に位置する円形土坑。南側にある6号土坑を切る。西側に位置する4号土坑とは、細い溝状遺構で繋がるように検出されたが、切り合い関係は不明である。平面形は径約1.5mのほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がるものであるが、底部付近はやや緩やかとなる。検出面からの深さは約90cm。

#### 出土遺物（第8図1・2）

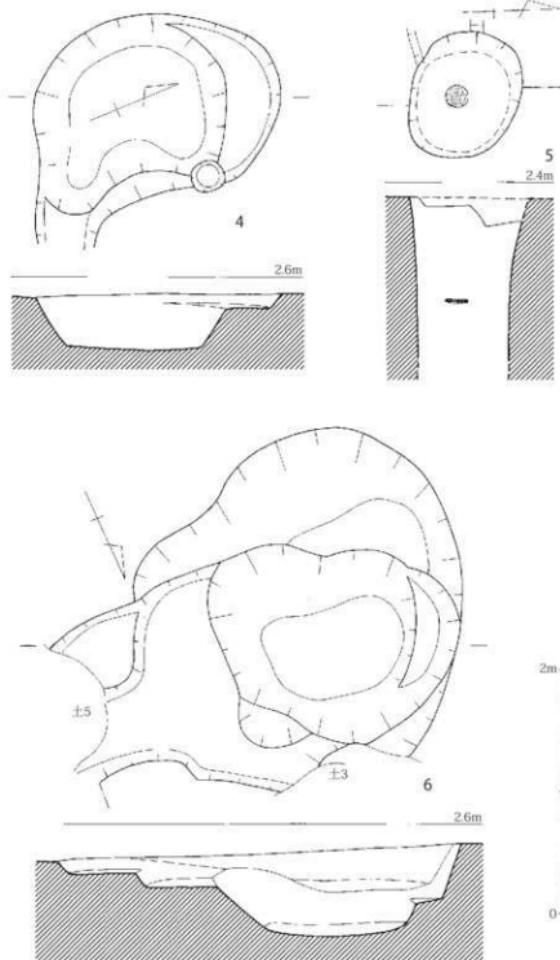
出土遺物には瓦および土師器があり、瓦のみ図示できた。1は軒平瓦で硬質な瓦質。中央部に宝珠を配し、その両側に唐草文をいれる。2は平瓦。硬質な瓦質で、調整は上面がナデ、下面はヘラナデであり一部ハケメ状に観察される。

#### 4号土坑（図版3、第7図）

調査区の中央より西側に位置する土坑。東側に位置する3号土坑と細い溝状遺構でつながるよう検出された。東側を小ピットに切られる。検出面では南北2.0m、東西1.5mの楕円形と判断したが、約10cm下げた時点で径1.5mの円形として検出された。深さは約50cmと浅い。底面は不整形な平坦面となる。



第6図 1・2号土坑出土土器類等実測図（1/3）



第7図 4~6号土坑実測図 (1/40)

東西 3.2m、南北 2.8m を測る。土坑の西側が平面梢円形に深くなり、深さは約 70 cm を測る。壁は約 45 度の傾斜で立ち上がる。

**出土遺物** (第8図3)

出土遺物については、瓦・土師器の小片があるのみで、図化できるものはなかった。

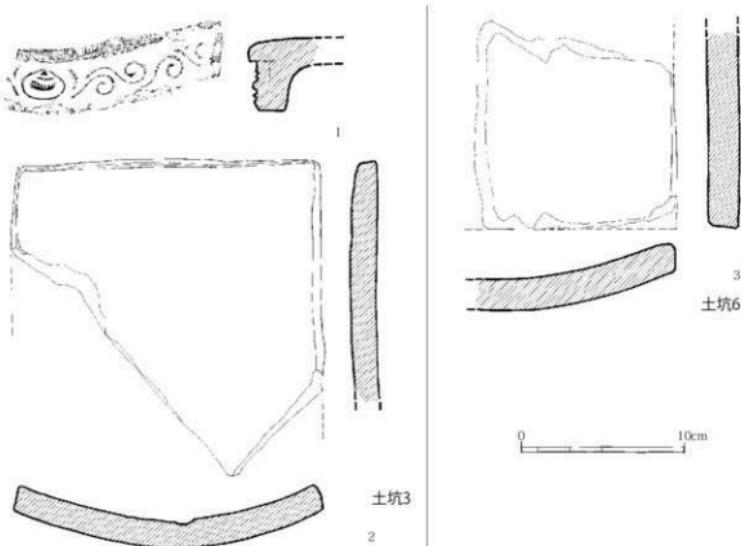
#### 5号土坑(図版5、第7図)

調査区のはば中央に位置する円形土坑。西側に位置する6号土坑の東端を切る。平面形は径約1mの円形をなすもので、壁はほぼ垂直に立ち上がる。約1.4m掘削した時点でも底面は検出されず、湧水が著しいこともあり調査を中断した。形状や深さから考えて井戸ではないかと思われる。

出土遺物については、薄い円盤状の木製品が底面から出土した。おそらく木製容器の底部と考えられる。破損が著しいため図化には耐えなかつたが、径13cm、厚み1cmを図る。これ以外のものについては土器小片があるのみである。

#### 6号土坑(図版5、第7図)

調査区のはば中央に位置する不整形な土坑。東端を5号土坑に切られ、北側の一部を3号土坑に切られる。東西に長く、



第8図 3・6号土坑出土土器類等実測図 (1/3)

出土遺物については瓦・土師器がある。3は平瓦。軟質の瓦質で、磨滅のため調整は観察しがたいが、ナデと思われる。

#### 7号土坑（第9図）

調査区の中央よりやや北寄りの、南北方向の2号溝に沿う形で検出された土坑。上層に東西に細長い溝状構造が切り込む。南北に長い不整形な長楕円形を呈し、南北長5.2m、東西長2.4mを測る。深さは30cm前後で浅い。

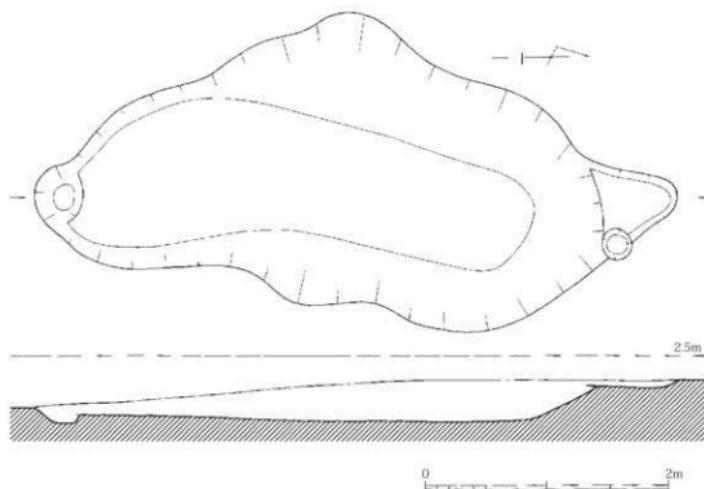
#### 出土遺物（第10図1～12）

出土遺物については瓦や土師器等がある。

1は瓦質の鉢で、硬質である。口径54.0cmを測る大品であり、口径に比して器高は低く9.2cmである。全面ハケメ調整で、底部内面は使用に伴うとみられる磨滅がある。外面は胴部中位以上が使用で煤が付着する。2は瓦質の擂鉢。焼成は良好で硬質。片口部の一部が残る。摺目間の間隔は約2cmを測る。3は土師質の火鉢。口縁部に2条の低い突帯を巡らせ、突帯間に文様帶として小さな梅花文の印刻文を施す。4は瓦質の火鉢で軟質である。口縁部に3条の突帯を巡らせ突帯間に文様帶とする。上段は幅広く、巴文の印刻文を連続させる。下段は縦方向の櫛描文を間隔をおいて施す。

5は陶器鉢で、焼き締めにより硬質。内湾する形状で、口縁端部を断面三角形に肥厚させる。口縁部上面は露胎で焦茶色を呈する。胴部は内外面とも施釉するが、発色しない。

6は青磁碗の底部。見込みに文様を刻むがモチーフは不明。



第9図 7号土坑実測図 (1/40)

7～9は瓦。7は隅巴瓦もしくは衾瓦。器壁全体をヘラ状工具で調整し、ミガキ状の工具痕が観察される。小口部に円形に鋭い刀子状工具で凹部をつくるが、大部分欠損し文様の有無は不明。8・9は平瓦。いずれも硬質に焼き締まる。上面はケズリにより、下面はヘラナデと考えられる。

10～12は混入品と判断できるもの。10は弥生土器器台で上下端部を欠損する。厚手のつくりで重量感がある。11は台付甕の脚台部と考えられる。甕底部との接合面が良好に残る。接合面が明瞭な屈曲をなしていることから、平底の甕に伴うものと判断できる。12は須恵器壺蓋。平坦な形状で口縁端部は短く下方に屈曲させるもの。天井部中央につまみがつくように観察される。

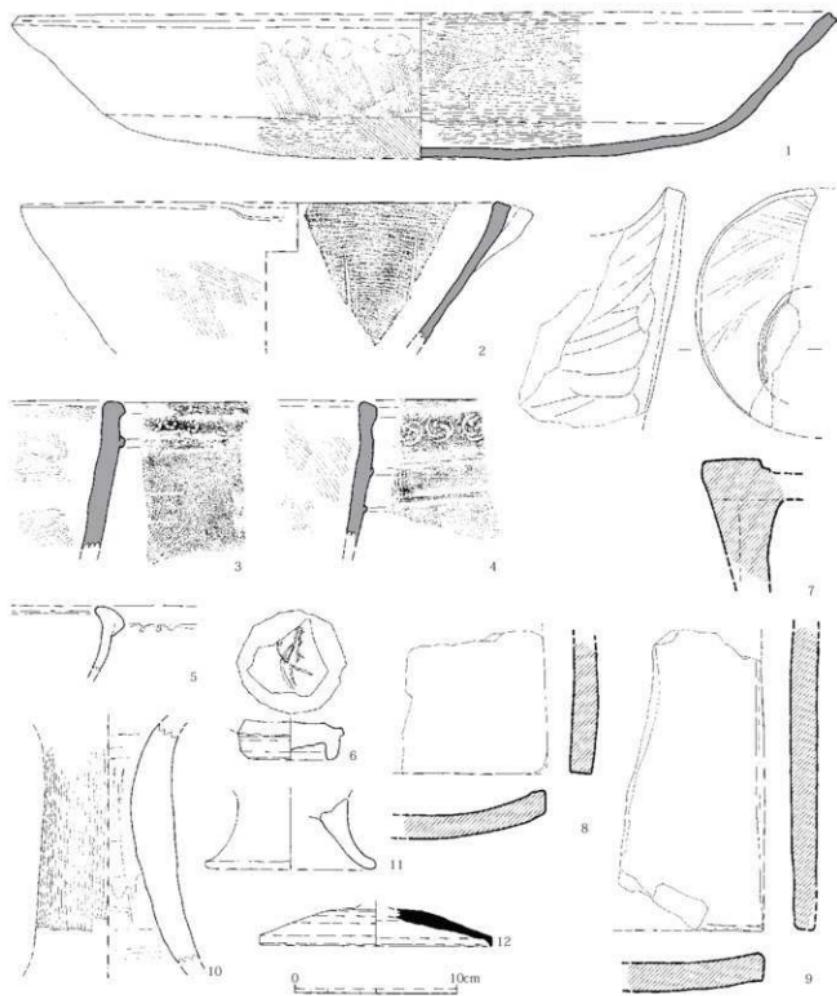
## 溝

### 1号溝

調査区の北辺に並行する溝。調査区は北側道路に併せて設定したものであるので、この道路と溝との方位に関連があるとみられる。調査区東端で南側に拡がり、クリークに接続するようにもみえるが、全体を検出できていないので判断が難しい。検出面での幅は1mではほぼ一定である。深さは約40cm。底面は西側に向かって徐々に深くなるため、西流していたものと判断できる。

### 出土遺物 (図版6、第11図1～13、第14図1)

1・2は土師器皿。法量は近似し、口径約10cmを測る。厚手のつくりで底部の厚さは約1.0cm。底面は磨減するが、糸切り痕がわずかに確認でき、1は板状圧痕を伴う。3は軟質な瓦質の茶釜口縁部。直立する口縁部から球形を描く肩部へ続く形態で、肩部には半円形の菊花文印刻文を施す。

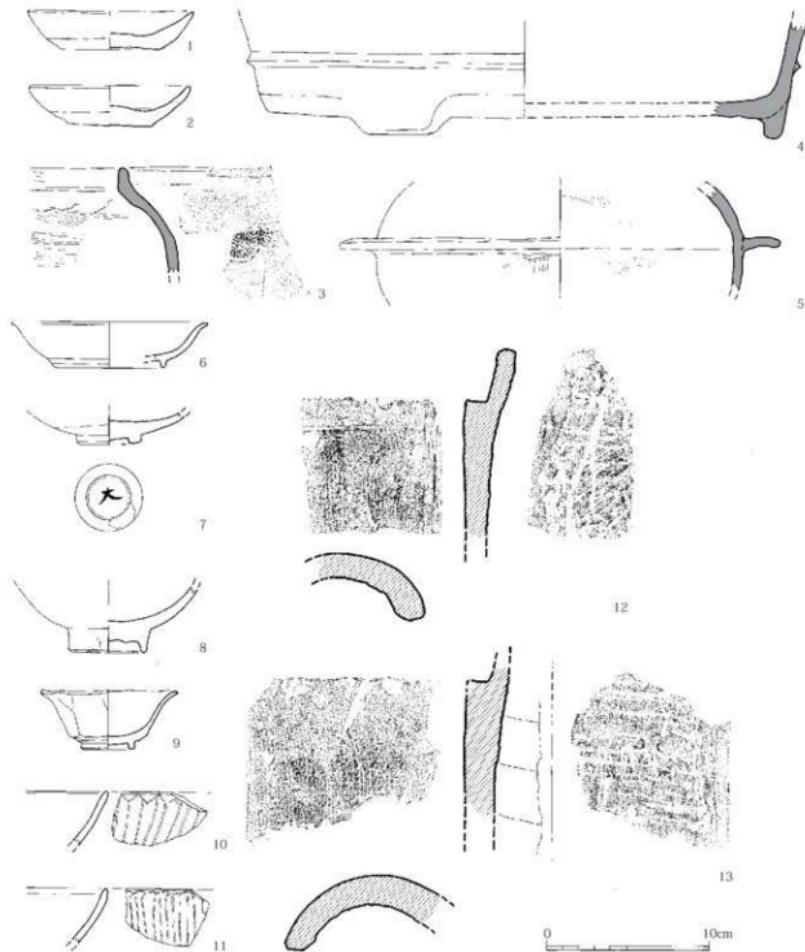


第10図 7号土坑出土土器類等実測図 (1/3)

4は瓦質の火鉢底部で軟質である。方形の脚がつく。底部付近外面に断面三角形の突帯を巡らせる。

5は瓦質の茶釜で鉗部を含む胴部で軟質。球形の形態となり、高さ23cmの鉗がつく。

6は白磁皿。口縁部は短く外反する器形である。軸は厚くかかり、内外面の隨所に別個体と付着した痕跡を残す。7は白磁皿の底部。高台とその周囲が露胎であり、高台内に墨書で「大」と描く。



第11図 1号溝出土土器類等実測図 (1/3)

8は陶器の碗。高台内から疊付にかけては露胎。釉は発色せずつやのない白色である。9は白磁八角鉢。釉の発色は良い。口径8.4cmの小ぶりの大きさ。口縁部は外反し、端部角はシャープに断面方形となる。

10・11は青磁碗の口縁部。細かいピッチの蓮弁文を描き、10はその上端が直線的な山形とし、11

は円弧とする。釉調は10が灰味を帯び暗く、11は黄味を帯び明るい。

12・13は丸瓦。硬質の瓦質だが、13はやや軟質で磨滅する。外面は繩目のタタキ痕、内面は布目痕を残す。

第14図1は宝篋印塔の笠部。上半を欠損し、二段からなる笠軒下の段型部である。石材は硬質の凝灰岩。

## 2号溝（第12図）

調査区の南半分は大溝と考えられる堆積が広がっており、調査区東部もまた同様の堆積状況がみられる。調査区の南側・東側は現在クリークが流れしており、これに先行するクリークが改修を重ねられてきたものではないかと考えられた。湧水等による困難さも想定されたため、堆積状況が判断できるような部分にトレンチを設定し、堆積状況・遺物の出土状況を確認することとした。トレンチは幅80cm、長さ2mを基本とし、状況に応じて拡張した。都合5ヶ所のトレンチを設定した。なお、大溝は複数の切り合いが存在するとみられるが、同一の溝の改修とも考えられ、また複数溝の識別が困難であったことから「2号溝」として一括して取り扱うこととした。

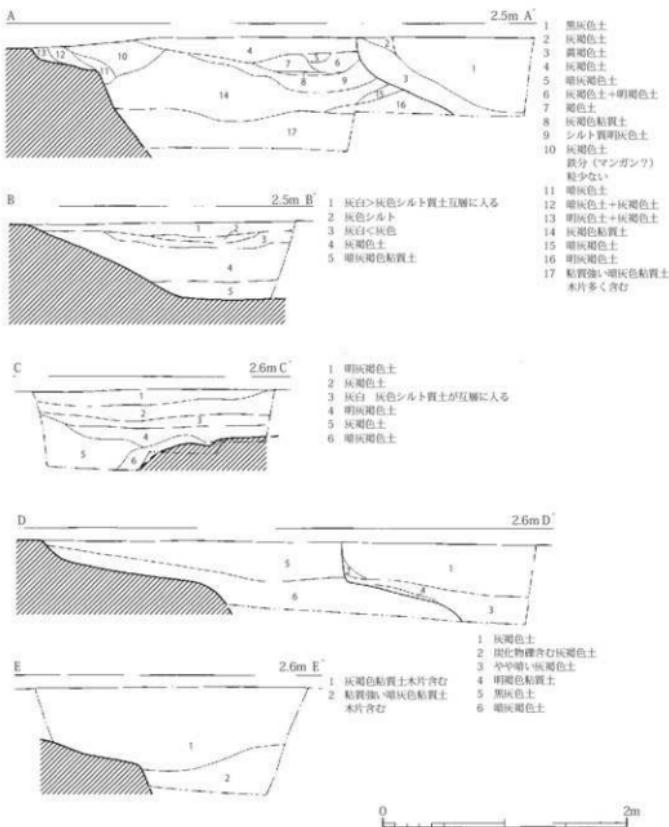
トレンチAは南北方向に流れる大溝に直行する形で、溝肩から4.5m延ばして設定した。溝肩から2.7mの地点で、ほぼ並行する形でラインが検出されていたが、断面観察から、東側に新たに掘削された溝が存在することがわかった。新しい溝は黒灰色土が単純に堆積するもので、形状に沿って下層に黄褐色土がみられる。古いほうの溝は灰褐色粘質土を基本とし、下層はより暗く粘質の強い堆積が存在する。下層では木片が多くみられるが、遺物はほとんど出土しなかった。

トレンチBは調査区のほぼ中央に、東西方向に伸びる溝の肩に設定した。トレンチAでみた溝とは直行するものであるが、切り合い関係が認められないため、東西方向と南北方向の溝が合流する地点と思われる。検出面から80cmの深さで底面が検出された。壁は約30度の傾斜をなす。灰褐色土を基本とする堆積で、南北方向の溝と堆積は同様と考えてよい。

トレンチCは大溝の中央部に設定したもの。トレンチの東端にあたる位置に埋土の違いを示すラインが南北に続いていたために、その性格を把握するために設定した。断面観察からは、検出面で確認したラインに対応するような溝の断面が検出されなかった。おそらく検出面で検出されたラインは遺構のラインではなく、埋土の違いを示すものではないかと判断された。深さは約40cmで平坦面に達するが、西側は深くなり、底面は検出できなかった。トレンチAで観察した南北方向の深い溝に対応するものと思われる。

トレンチDはトレンチAで確認した新しいほうの溝の南側にあたり、さらに東側に新しい溝があるものと判断されたため、新旧関係がわかるように長さ4.3mで設定した。東側の堆積もまた溝に伴うものであるが、その堆積を地山とみたてて西側のクリークの堆積を掘削した。断面観察により、東側に新しい堆積が確認され、灰褐色土を基本とする単純な堆積である。西側の堆積はトレンチAで確認した堆積と繋がるものと判断されたが、深さは検出面から30cmで約1.5m幅でテラスが検出され、そこから急激に深くなるもので、底面は検出できていない。

トレンチEは調査区南端で設定したものである。トレンチCで確認を試みた検出面でのラインであるが、このトレンチEでもそのラインをまたぐように調査区を設定した。しかし断面観察からは灰褐色土の単調な堆積が確認され、新旧トレンチが検出されるようなものではなく、埋土の違



第12図 2号溝土層実測図 (1/40)

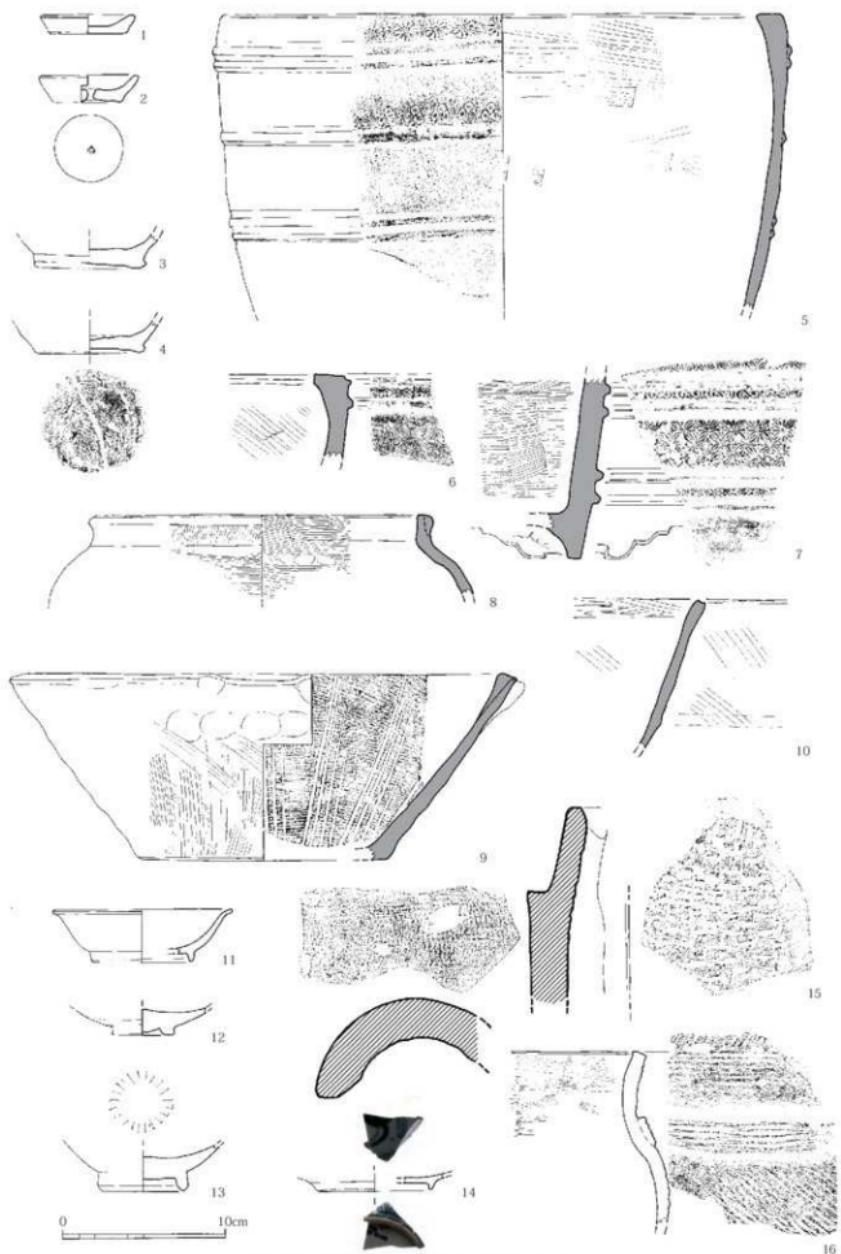
いがあらわれているものと判断された。検出面から約50cmでテラス状の面が検出され、東側はさらに深くなることがわかったが、80cm掘削したが底面は検出できなかった。

またトレンチEの北側では東西方向に直線的なラインが検出された。東西方向に別の溝が存在する可能性が考えられるが、検証には至らなかった。

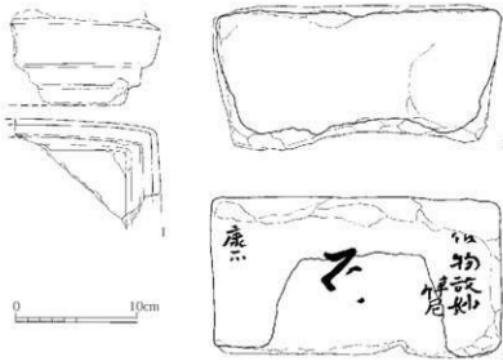
#### 出土遺物 (図版6、第13図1~16、第14図2・3、第19図1)

出土遺物の大半は調査区脇に設けたトレンチからの出土品。6はトレンチD、13はトレンチAからの出土品である。1~4は土師器皿。1・2はほぼ同法量の小形品で径約6cmを測る。2は底部中央付近に径3mmの小穿孔を施す。3・4はともに口縁部を欠損する。4の底面には糸切り痕を残す。

5~7は瓦質の火鉢。5は軟質で、緩やかに内湾する口縁部形状のもの。口縁部から1.5cm下がつ



第13図 2号溝出土土器類等実測図 (1/3)



第14図 出土石塔類実測図 (1/4)

を全面に施し、突帯間の狭い位置にも横S字文・菱形文の印刻文を巡らせる。8は瓦質の茶釜の口縁部で硬質である。球形をなす胴部に直立する口縁部が伴う。9は瓦質の摺鉢。硬質だが軽い仕上がり。口縁部はやや厚手につくり、片口を有する。摺目は4条からなり、摺目間の間隔は上端で約3cm。10は軟質な瓦質の口縁部で、大形の鉢となろうか。口縁部と体部の境の屈曲部に不明瞭な突帯状の高まりが観察される。使用に伴うとみられる磨滅が著しい。

11・12は白磁の皿。11は口縁部を短く外反させるもの。13はくすんだ釉調の碗底部。灰黄色緑色を呈するもので青磁に分類されようか。見込みに不明瞭な放射状に走る線刻がみられるが、工具痕の可能性も残す。

14は明の染付。見込みに文様を描くが小片のため具体像は不明。高台外面にも呉須で線を描く。

15は丸瓦。軟質の瓦質で、土師質に近い色調を呈する。外面は縦目のタタキ痕を残すがナデにより不鮮明となる。内面は布目痕を残す。

第14図2・3は五輪塔の地輪。2は硬質の凝灰岩製で、平面形は正方形で各辺はごくわずかに弧を描く。側面形は逆台形。上面及び側面は凹凸はみられるもののほぼ平坦であり、下面は凹凸が非常に多い。3は軟質の凝灰岩製。平面形は正方形で、側面形は長方形。各面を平滑に磨くが、表面の隨所が剥離する。内面は下から方形に削り込まれ、その天井面は凹凸が多い。一側面に墨書きで戒名等を記す。中央に梵字を記すが、地蔵を表す「**仏**(カ)」と考えられる。右は「□物故妙 □□禪尼」。左は「康正□□」と記される。後者は年号と考えられ、康正年間とは1455～1457年である。

16は混入品の弥生土器。大形の壺で、タタキ成形後にハケメ調整を行うが、タタキ痕を明瞭に残す。内面はハケメ。口縁部上面に斜め方向のキザミをいれる。

第19図1は黒曜石の横長剥片。下辺に調整剥離が施され、使用痕が下辺の随所にみられる。



第15図 ピット出土土器実測図 (1/3)



第16図 遺構面出土土器実測図 (1/3)

### ピット

ピットは小形のものを中心に多く検出されたが、その内で遺物が出土したものはごくわずかに限られている。

### 出土遺物 (第15図1~3)

1は調査区北西隅に所在するP23の出土品。須恵器环身で、外側にふんばる高台を有する。2は調査区西辺近くに所在するP21の出土品。須恵器环身で、低い断面方形の高台を有する。3は1号溝に近接して所在するP22の出土品。中央にシャープな穿孔のある径2.2cmの土製品。土師質で胎土は精良である。

### 遺構面出土遺物 (第16図1~4)

1は確認調査Bトレーナーから出土した土師器甕。緩やかに開く口縁部を有するもので内外面ともに丁寧なハケメ調整を行う。2は弥生土器広口壺の口縁部。鋤先口縁で、内面への突出度が高い。3は弥生土器甕の鋤先口縁。4は土師質の脚。小形の鉢に伴うものであろうか。胎土は精良で、中世に属するものかと思われる。

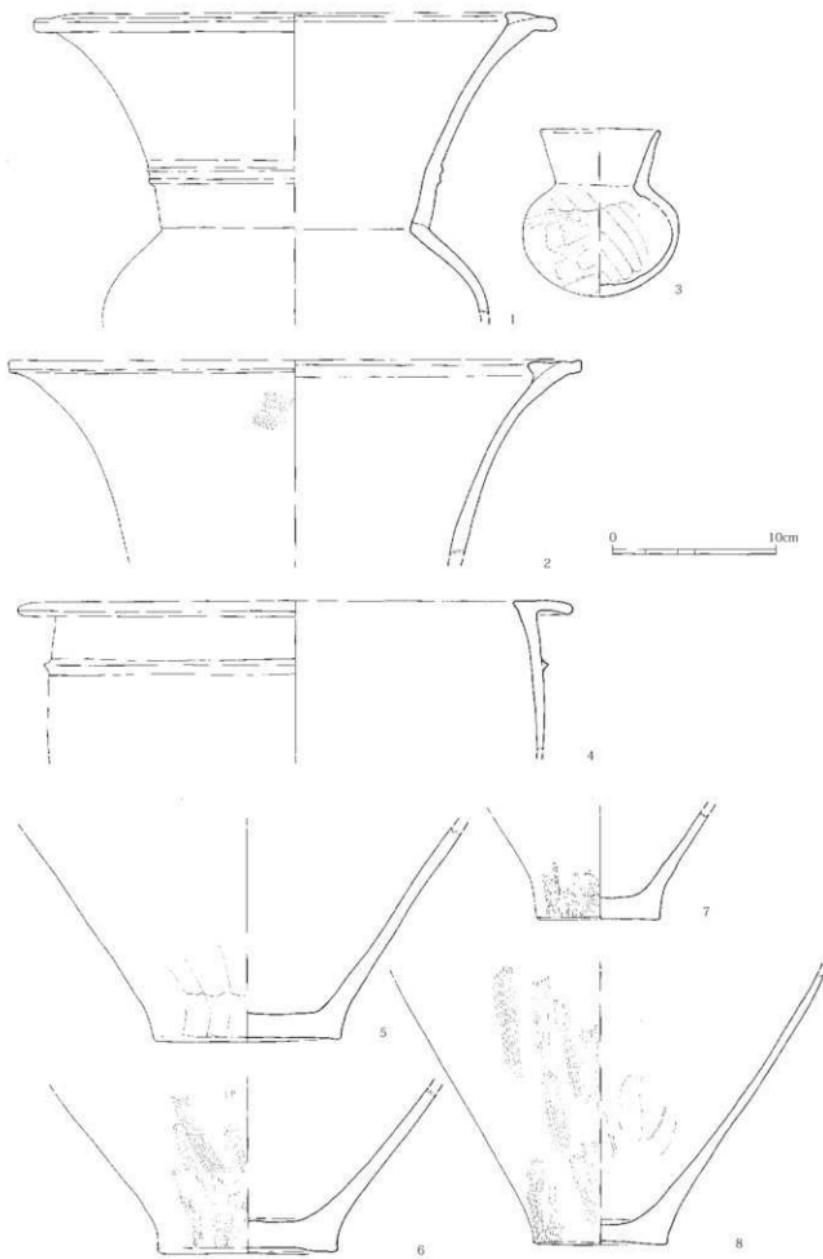
### 下層包含層

第16図にみられるように、確認調査時や中世の遺構面において弥生土器や土師器が散見されることから、下層に遺構が存在することが示唆された。そのため中世の遺構がなく弥生土器が採集される地点に重機を用いて掘削することとした。

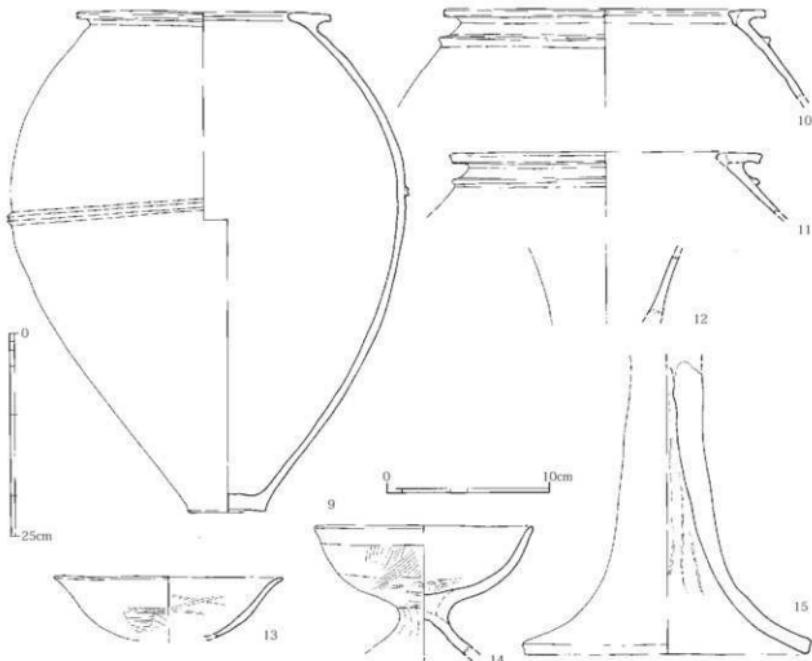
調査の結果、中世遺構面から約120cmまでは粘性の強い明灰色粘土が続き、その層には弥生土器等が含まれることが確認された。その下層は遺物の含まない灰色粘土となる。いずれの層も水分を多量に含むためか、非常にぬかるんだ粘土であり調査区内に立ち入ることができない状態であった。遺物は明灰色粘土中の特に下層に集中して出土した。第17・18図に示すように、比較的復元可能な遺物が含まれているが、出土状況は破片が点在する状況であり、その場で壊れたような状況ではなかった。遺構が検出されなかつたことで遺物包含層として扱ったが、当地の土壤は遺構検出が困難な場合も多く、遺構が存在した可能性は否定できない。

### 出土遺物 (図版6、第17・18図1~15、第19図3)

1・2は弥生土器広口壺。弧を描きながら外反する口縁部。鋤先口縁であり、内面は断面方形に貼り付けを行い口縁部上面を広くする。1は頸部より2.5cm上位に低い突帯を2条巡らせる。3は弥生時代終末ないし古墳時代初頭に位置づけられる小形壺。わずかに欠損するが、ほぼ完形品である。直線的に開く口縁部で胴部は球形。胴部内面は強いナデにより明瞭な稜が観察される。



第17図 下層包含層出土土器実測図① (1/3)



第18図 下層包含層出土土器実測図② (9~12は1/6、他は1/3)

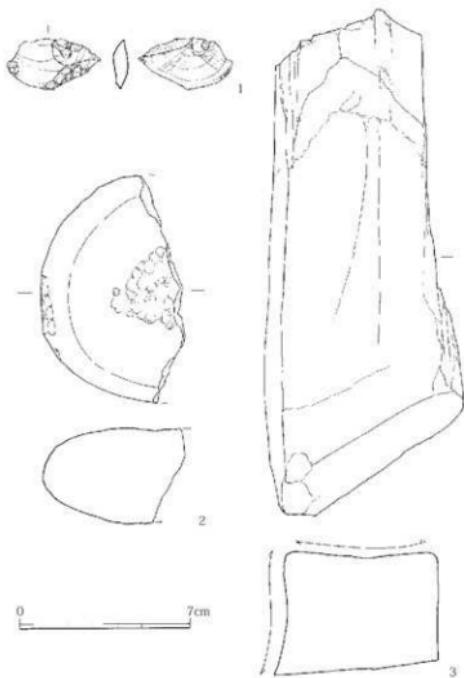
4~8は弥生土器壺。4は鋤先口縁となる口縁部。口縁部下2.5cmの位置の外面に断面三角形の突帯を巡らせる。5~8は底部のみが残存する。底面は平底で、わずかに上げ底となるものが多い。9~12は大形の壺。内湾する胴部上半に鋤先口縁が伴う。10・11は口縁部下の外面に断面三角形の突帯を巡らせる。9は胴部最大径付近に中央部を大きく寄せさせ2条に見せるような突帯を巡らせる。底部は平底である。

13・14は弥生時代終末ないし古墳時代初頭に位置づけられる高杯。口縁端部を短く外反させる形態で、脚部は弧を描きながら大きく外反させるものであろう。15は弥生土器高杯の脚部で筒形の高い脚柱部に大きく外反する底部が続く。内面にはシボリ痕が明瞭に残る。

第19図3は片岩製の砥石。2側面を使用する。1側面の中央は使用により溝状を呈する。

#### (4) 小結

今回の調査により検出された遺構は、土坑・ピット・溝である。土坑は平面形が円形のものが多く、井戸の形状をなすものであった。ピットについては小形のものが多く、建物を復元するには至らなかった。ピットからの出土遺物については7~8世紀に位置づけられるものがあり、周辺に当該期



第19図 出土石製品実測図（1/2）

の遺構が存在する可能性がある。溝については1条の比較的細い溝（1号）と大溝（2号）がある。大溝については、コーナー部ないし交差部と判断されるものであるが、対岸となる肩が検出されなかったため幅については不明である。複数の改修があったと思われ、堆積した後に新たに掘削するような状況が確認された。

遺跡の時期については、出土遺物から概ね15世紀から16世紀を中心としたものであるが、溝から出土した五輪塔地輪かと考えられる石塔に康正元年（1455～57）の年号がみられたことは遺跡の時期を考える上で貴重な示唆を与えた。

また当初の調査面の下層に弥生土器が含まれることが確認された。学史的にも、本遺跡の北西は西蒲池弥生遺跡として知られており、その広がりを考える上で重要な資料が提供できた。時期については弥生時代中期と弥生時代終末～古墳時代前期の2者にわかれれる。

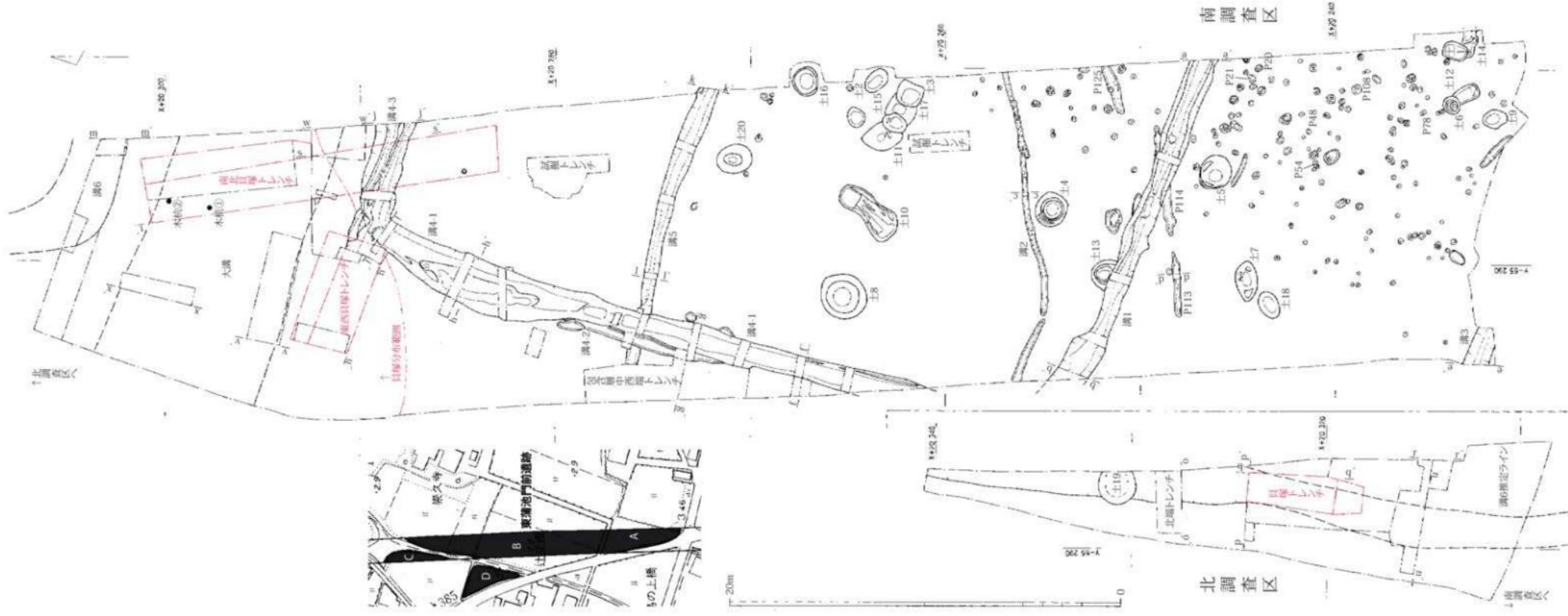
## 2 B区の調査

### （1）調査区の概要（基本土層含む）

平成20年度に調査を実施したB区は、平成19年度調査実施のA区の北側に隣接する。筑後川や矢部川水系の冲縄川の堆積作用と有明海の潮汐により形成された低平地上の立地で、調査面での標高は2.5m前後である。そのような地勢的要因から一帯の土質は、いわゆる有明粘土と言われる軟弱な粘質土が主体である。

調査区は田の区画を兼ねた農業用の用水路によって南北に分かれる。調査面積1300m<sup>2</sup>程度の内、北調査区は130m<sup>2</sup>程度と狭い。遺跡の内容は当初調査面である上層とその2m程度下位にあたる下層とで大きく異なる。調査区は全面的に田畠として利用されていたため、上層表土は耕作土・床土等からなる。調査区南側の東端部にあたる14号土坑土層（第25図）や調査区東壁1号溝土層（第29図a-a'）では、表土がほぼ20cm以下で、遺構面の標高が2.6～2.7m程度である。調査区南側の西端部にあたる調査区西壁3号溝土層（第29図e-e'）では表土の厚さが少なくとも25cm以上あり、遺構面の標高は2.5m前後である。また、調査区北側の東端部にあたる調査区東壁4号

第20図 B区遺構配置図(1/200)



溝土層（第29図j-j'）では表土下に包含層の堆積も見られ、遺構面の標高は2.3m程度となる。更に北側の南調査区北東端の6号溝土層（第34図m-m'）では、表土・包含層が厚く、遺構面の標高が2.2m程度となっている。また、西端の4号溝トレンチ南側土層（第34図g-g'）では、包含層の堆積下で基盤層が西側へ低くなっている様相が見てとれる。以上を総合すると、上層遺構に係る地形としては北・西側へ向けて低くなっている傾向が表れていると言える。

一方で、包含層中トレンチ土層（第36図u-u'）においても、上層遺構に係る地形の西側への落ち込みが表れている（11～13層の基盤層の傾斜とその上位の包含層の落ち込み方向）、その下位の14・15層の堆積では、西側面の堆積状況を併せ見ると北から南への落ち込み方向となっていた。

下層遺跡の貝層底面は、北調査区で標高0.3m主体（第34図q-q'）であるのに対し、南調査区では標高0.2m主体（第36図t-t'）とむしろこちらの方が低い傾向があり、貝層上面もほぼ同様である。しがって長期間にわたる地盤形成過程の中で、周辺地形は一様に高くなっていたわけではなく、その時節により高低の傾向に差があったことがうかがえる。

上層の遺跡は中世後期を主体とする。検出された主な遺構は土坑、溝と多数のピットである。計20基検出された土坑は平面円形、隅丸方形、不整形と多様で、大小も様々である。中には径1m以上、深さ2m以上で湧水もある程度見られることから井戸と目され、墓とみられるものが含まれるが、大半の性格は不明である。溝も大小多様で、計6条としたが、調査区外でつながる可能性がある。特に4号溝で規模が大きい部分があり、最大幅240cm程度、最深部140cm程度を測る。多くの溝が南北からやや北東—南西に振れた軸およびそれにはほぼ直行する向きに沿っており、何らかの区画を反映したものと考えられる。また、これらの軸と軸を一にして北西の方角へ向けてピット等が希薄になっている。なお、4号溝の西側および北側で北調査区に至るまで、遺構の切り合いや包含層の堆積ではほとんど基盤層が調査面で確認できなかった。トレンチや調査区壁等での土層の観察から、南調査区の該当範囲では包含層が広がる中で、4号溝と6号溝の間には幅8m程度、深さ140cm程度にも及ぶ大溝が確認された。この大溝は、その規模、埋土の特徴やほとんど遺物の出土がないことを併せ、他の溝とは性質を異にするとみられる。また、北調査区の主に3ヶ所のトレンチの土層からは、包含層の堆積に加え複雑に遺構が切り合う状況が確認された。個別的小遺構を平面的に把握するのはほとんど困難な状況であったが、溝が南北に通るのが確認された。この溝は南調査区の北東隅で一部検出された溝と連続するとみられる（6号溝）。

下層の遺跡は、当初の調査面から180cm程度下層にあたり、弥生時代中期初頭から終末にわたる貝塚が主体である。軟弱な粘質堆積層のため、大幅な範囲で深く掘削を行うと、著しい湧水も加わって壁の崩落が想定されるとともに、埋め戻し自体の難航やその後の地盤の更なる軟弱・泥質化が懸念された。そこで、トレンチ掘削にて限られた範囲内で貝層の堆積状況の確認や堆積物の取り上げを実施した。貝層の調査に係るトレンチは計3ヶ所に設定し、内2ヶ所は南調査区の北端近くにある。残り1ヶ所の北調査区内では、主体の貝層より上位で別のわずかな貝の堆積部分が認められた。なお、これらのトレンチは、先述にある上層での包含層の堆積や遺構の分布状況の確認の役割も兼ねている。また、これらのトレンチに加え、調査終了間際のバックホーによる下層確認の掘削で、貝層が途切れる範囲でも同様の標高で包含層とみられる層の広がりが認められた。その面では落ち込み状の遺構も確認でき、当時の地表がその標高で一定範囲に広がっていたと想定される。

出土遺物については、上層では土師器・須恵器・陶磁器類が主体で、包含層から石製五輪塔の一

部も出土している。下層では、貝層から取り上げた弥生土器に加えて大量の動物遺体が主体である。特殊遺物としては、鹿角製品、鉄製品や木製動等が出土している。

## (2) 調査の経過

東蒲池門前遺跡B区の調査は、同じく国道385号バイパス建設事業に係る別地点（大川市大字下木佐木所在下木佐木安堂遺跡〔福岡県文化財調査報告書第236集で報告〕）での調査後に引き続いで実施された。そのため、下木佐木安堂遺跡の調査撤収にあたって、発掘機材やユニットハウスをはじめとした建機類をそのまま移動する形で平成21年1月8日に搬入した。また、バックホーも同じく8日に表土掘削のために搬入した。廃土置場確保の点から、調査対象地全体を一括しての調査は実施できないため、反転することとした。調査区は用水路を挟んで南側と狹小な北側に分かれ、南調査区の北半を廃土置場とし、先に北調査区と南調査区の南半から作業を実施することとした。

作業員による人力の作業は1月9日より開始した。調査面は一旦乾燥したり、雨水にさらされて泥質化したりすると、再度の検出が著しく困難となる性質のため、バックホーでの表土の除去と並行して人力での遺構の検出作業を行った。1月13日から南調査区の土坑等の遺構の掘削を開始し、併せて図面の作成等を進めていき、2月には溝の掘削にも着手した。また、1月23日より作業を開始した北調査区では、包含層の広がる中で複雑に遺構が切り合い、遺構検出が著しく困難であった。北調査区は狭小であり、また低位部に貝層の存在が見込まれることから、トレチモ掘削して遺構の内容を確認しつつ、深部へ掘削する中で貝層の調査も実施した。2月9日からは調査区の清掃を行い、2月12日にラジコンヘリによる空中撮影を実施した。13日には掘削と図面の作成を終え、バックホーを搬入し、反転して南調査区の北半の調査へと移った。

反転後も、まず表土の除去と並行して人力による遺構の検出作業を進めた。その中で土坑と溝が検出され、3月6日まで掘削が続いた。また、主に西側を中心に包含層が広く堆積しており、西側へ落ちていく様相であったとみられ、下位の様相を確認するためにトレチモ掘削した。3月9・10日にわたって調査区の清掃を行い、10日には高所作業車による全景写真の撮影を行うとともに、残った図面の作成を終了した。

確認調査で南調査区北半付近の下層では貝層が検出されており、その調査のため、表土直下での調査後3月11日からバックホーを搬入した。軟弱な粘質堆積層のため、大幅な範囲で深く掘削を行うと、著しい湧水も加わって周辺への崩落の影響が想定されるとともに、埋め戻し自体の難航やその後の地盤の更なる軟弱・泥質化が懸念された。そこで、トレチモ掘削にて貝層の状況を確認することとした。当初調査面から貝層まで2m以上のあるとともに、その間の層はほとんど遺物を含まず、調査期間の制約もあったため、貝層直上までバックホーで掘削し、貝層自体を人力にて掘削した。なお、トレチモは南北軸および東西軸の2本を設定した。トレチモ壁面の崩落や湧水等に悩まされながらも、3月18日まで貝層の掘削やトレチモ壁面の観察を実施し、この際に調査面では確認できなかった大溝を把握している。また、併せて図面作成・写真撮影も終了した。

3月19日からはバックホーによる調査区埋め戻しを行った。南調査区南半については、以前の調査終了後の下層掘削で貝層が存在しないことを確認していたが、この際の再度の下層掘削ではわずかに遺物の包含があることを確認した。3月25日に機材や建機および出土遺物の撤収を行い、3月27日にバックホーによる埋め戻しを終了し、B区の調査を終了した。

### (3) 遺構と遺物

#### ①上層の調査

##### 土坑

###### 1号土坑（図版9、第21図）

南調査区の東南隅付近に位置し、14号土坑を切っている。平面は隅丸長方形に近く、長軸130cm程度、短軸は90cm程度である。人骨の痕跡と思しき部分がわずかに認められたが、採りあげ・分析には適わないような非常に悪い遺存状態であった。また、歯冠部分のみの歯が3本出土しており、このようなことからも墓であった可能性が高いと言える。わずかであるが、薄い木質が残っており、木組み等の構造を伴っていた可能性がある。ただ、深さは10cm未満と遺体を埋置するには非常に浅く、上部が大きく削平されているとみられる。壁の傾斜については非常にわずかに残った範囲では緩やかな部分が多く、埋土は灰褐色土で、明瞭な分層はみられなかった。土師器壺2点が出土している。

###### 出土遺物（図版24、第22図1・2）

1・2は土師器壺で、ともに小さい底部から直線的に延びる器形で、直口縁である。内底部には同心円状の粗い凹凸が廻る。胎土は精選され乳白色を呈する。1は底部と体部の境付近にはケズリにより調整される。2は外底部に板圧痕が見られる。1は口径13.1cm、底径4.6cm、器高3.3cm、2は口径13.0cm、底径4.7cm、器高3.5cmである。この種の土師器壺は、包含層を含め調査区内において他に出土していない。図示していないが、他に大きく欠損した丸瓦の小片で凹面側には布圧痕が見られるものが出土した。

###### 2号土坑（図版9、第21図）

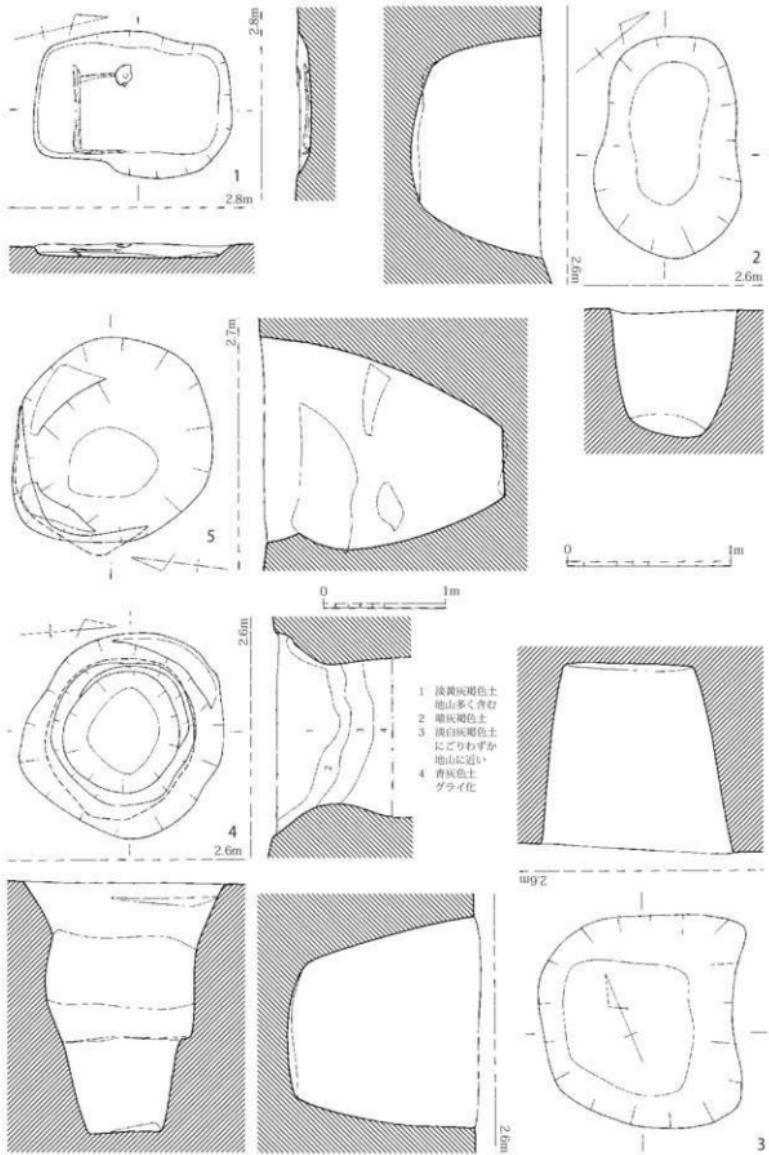
細長く延びる南調査区の南北間の中央付近で、その東隅の調査区際に位置し、3・17号土坑の北東側にある。平面形は楕円形に近いが、長軸側の中央付近がわずかに凹んでいたため、やや瓢箪形の傾向があるとも言える。長軸135cm程度、短軸90cm程度で深さは80cm程度である。埋土は、全体的に灰褐色土に地山に近似する淡黄灰褐色土が斑に混ざるものである。ただ、検出面から30cm程度の上層に比べ、その下層の方がやや明るくなるという点で2層に分かれる。出土遺物は陶器1点のみである。

###### 出土遺物（第22図3）

3は白色の厚い化粧土を施したと思しき器表の様相で、朝鮮産の粉引ともみられる小壺で、角状の小さな高台を伴う。胎土は淡茶褐色の陶質で、器表の磨減が著しく、釉の剥落が目立つ。内外面ともに文様のような痕跡がわずかに残り、その点からは粉引とはならない可能性がある。豊付のみ搔き取りにより露胎する。

###### 3号土坑（図版9、第21図）

細長く延びる南調査区の南北間の中央付近で、その東隅の調査区間に位置する。17号土坑を切っており、2号土坑の南側にある。平面形はやや不整な隅丸方形で、長さ・幅は130cm前後である。調査面からの深さは115cm前後で、壁の傾斜が全体的に急な中で、特に西側は急峻となっている。埋土は、深さ60cm程度までは灰褐色土で、その下位で地山が多く斑に混ざる厚さ15cm程度の淡黄灰褐色土層があり、それより下位ではグライ化して青灰色土層となる。陶磁器の小片のみが4点出



第21図 1~5号土坑実測図 (4・5は1/40、他は1/30)

土した。

#### 出土遺物（第22図4～7）

4は染付の折腰碗で、口縁部から腰部が残存し、腰部から口縁部へとほぼ直線的に上方へと延びる。内面には口縁部直下および見込に圓線があり、外面には上下に分割した菊花文や格子文等が見られる。5は染付碗の口縁部小片で、端部へと直上に延びており、折腰碗の可能性がある。外面には口縁部直下に圓線があり、柳とみられる文様が残る。6は染付皿の口縁部小片で、内面にわずかに文様が残る。7は武雄産とみられる陶器二彩唐津の平鉢の小片で、口縁部屈曲して短く開く。器表に白化粧土が施され、その上に内外面ともに鉄釉による文様が施される。

#### 4号土坑（図版10、第21図）

南調査区の南半部で2号溝のすぐ南側に位置し、東西間の中央付近にあたる。平面形は径約170cm程度の円形に近く、検出面からの深さは約2mを測る非常に深い土坑である。壁の傾斜は深さ40cm程度までは緩やかであるが、それ以下では急峻となり、オーバーハングする部分もある。また、その傾斜の急な変化でテラス状の部分も生じている。埋土については、レンズ状の堆積が見られる上層では地山に近似した層が主体で、調査面から80cm程度よりも下位ではグライ化して青灰色となる。その掘方や深さから井戸という可能性が考えられるが、下層の青灰色粘土中の遺構の埋土・掘形の認識が非常に困難で、遺物もほとんど出土していなかった。また、遺構の底面は標高40cm程度で、貝層に連続する下層遺跡の面と近似することから、ある程度の掘り過ぎも想定される。出土遺物はわずかである。

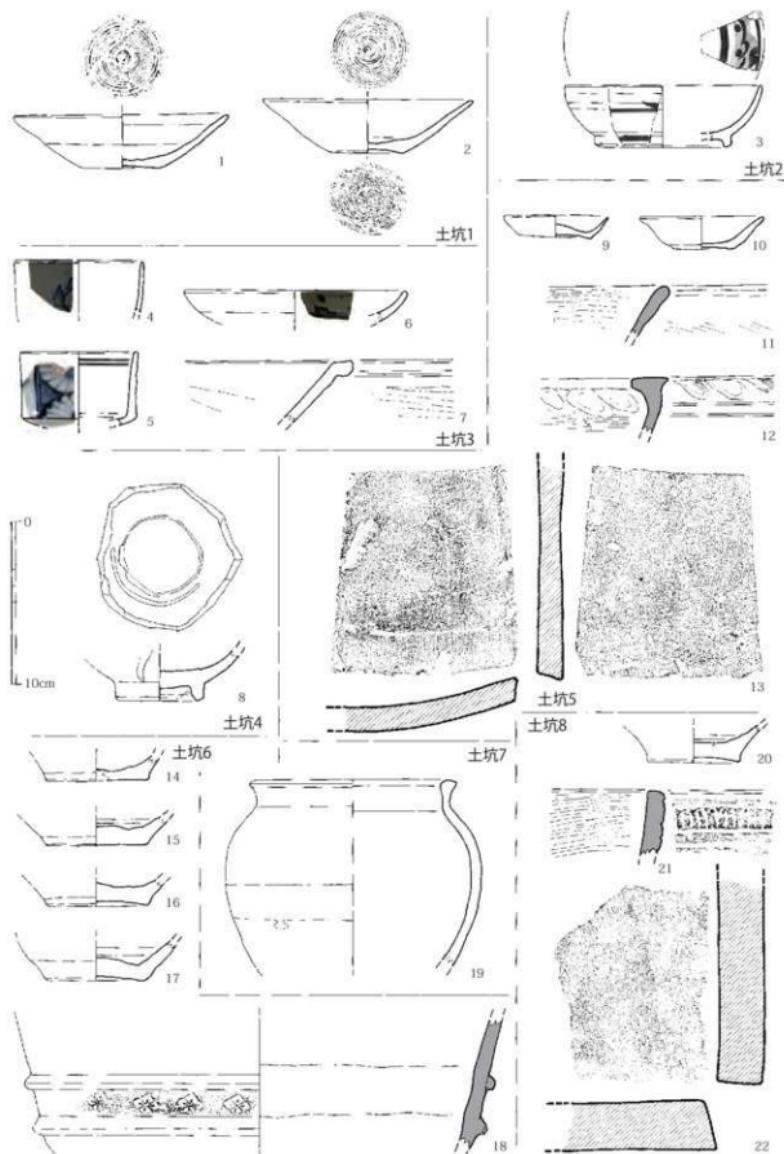
#### 出土遺物（第22図8）

8は龍泉窯系青磁碗で、やや高い角高台で、釉は高台内の途上まで施され、そこから内側は露胎する。見込には圓線がみられ、外面の残存する上端部の四方にヘラ彫りによる縱位の施文がわずかに残る。また図示していないが、他に凹面側には布圧痕が見られる大きく欠損した丸瓦や平瓦が出土した。

#### 5号土坑（図版10、第21図）

南調査区の南半部で1号溝のすぐ南側に位置し、東西間の中央付近にあたる。平面形は径160～170cm程度の不整円形で、検出面からの深さは約2mを測る非常に深い土坑である。壁の傾斜については、南半側は激しい変化はないが、北半側は変化が目立ち、オーバーハングやテラス状の部分が見られる。埋土が西側から流入した堆積状況となっており、深さ95cm程度まで4層に分層した中で暗灰・黒灰褐色土が主体で、上から2層目は地山に近似する淡黄灰褐色土のにこったものとなっている。その掘方や深さから井戸という可能性が考えられるが、下層の青灰色粘土中の遺構の埋土・掘方の認識が非常に困難で、遺物もほとんど出土していなかった。また、遺構の底面は標高40cm程度で、貝層に連続する下層遺跡の面と近似することから、ある程度の掘り過ぎも想定される。上層では五輪塔の石製部材（火輪・地輪）が6点まとめて投棄したような状況で出土した。下層では鹿角製品が出土したが、下層包含層中に帰属するものが上記のような掘り過ぎによって出土し、本来はこの遺構に伴わない可能性も考慮する必要がある。

#### 出土遺物（図版24、第22図9～13）



第22図 1~8号土坑出土土器類実測図 (1/3)

9・10は糸切りの底部である土師器小皿である。9は器壁が薄く、器高が低い。口径6.4cm、底径4.3cm、器高1.2cmである。10は径が小さく体部の立ち上がりは中途から変化して開く。口径7.7cm、底径3.4cm、器高2.0cmである。11は瓦質土器鍋の口縁部片で、端部は丸く収められる。下端部は薄くなり、屈曲部にあたるとみられる。ハケ調整が残る。12は瓦質土器火鉢の口縁部で、また端部は肥厚するとともに内側へ屈曲し、内へ狭い面、上方へ広い面をなす形状である。また、外端部がわずかに突出する。外面には2条の浅い沈線が残り、内面にはハケ調整が見られる。内面の屈曲部と外面の突出部下には指圧痕が残る。13は平瓦で残存する側縁・端面はヘラ切りされ非常に平坦な面となる部分が見られ、凹面側にはハケ目状の痕跡が残る。

#### 6号土坑（図版11、第23図）

南調査区の東南隅付近に位置し、12号土坑を切っている。平面形は長軸95cm程度、短軸75cm程度の楕円形で、深さ110cm程度である。壁の傾斜は全体的に急で、深さ40cm程度で全周的に変化し、下位でより急峻となる。また、底面よりやや上位で一定の広さのテラス状部分があり、底面は非常に狭くなっている。埋土については、レンズ状の堆積が見られ、淡黒灰褐色土や灰褐色土が主体で、上位から2層目では地山に近似する淡黄灰褐色土のにごったものとなっている。出土遺物はやや多いが、小片がほとんどで造構の時期を反映するものを判断しがたく、切り合いで先行する12号土坑から近世磁器の小片が出土し、それ以降の時期となる可能性がある。

#### 出土遺物（図版24、第22図14～18）

一定程度の土師器・須恵器等の破片が出土するが、時期を明瞭に示すと考えられる遺物はない。その中で、比較的の遺存度が高いものを図示する。14～17は土師器壺で、いずれも口縁部は欠失している。磨滅の目立つ15以外は、底部に糸切りが確認できる。14の内面には強い回転ナデによる明瞭な起伏が生じ、底径3.2cmである。15の底径は3.2cmである。16の内底部には回転ナデによる渦状の起伏が残り、底径3.0cmである。17の底部は厚く、底径6.0cmである。18は瓦質土器火鉢で、体部の一部のみが残存する。突帯が2条廻り、その間で四菱形の印刻文が廻る。

#### 7号土坑（図版11、第23図）

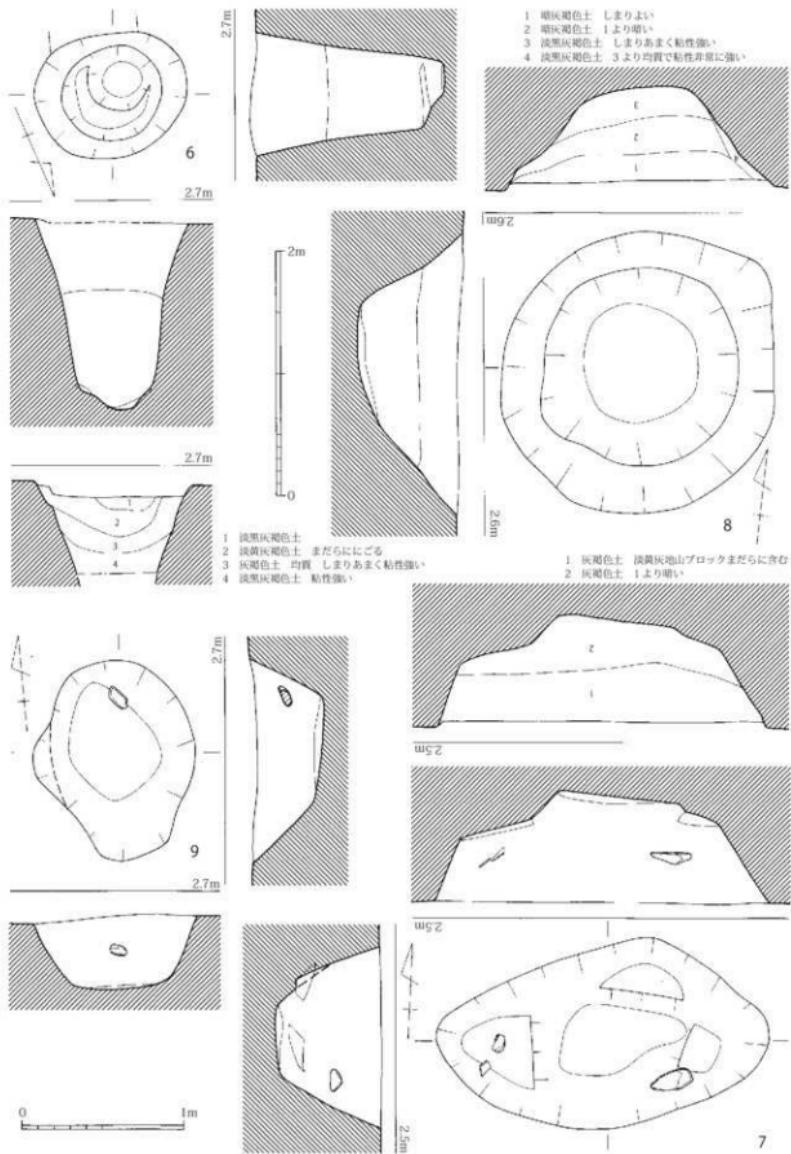
南調査区の南半部で、18号土坑の北東側に位置する。平面形については、長軸は2m超、短軸は110cm程度の不整楕円形で、深さは70cm程度である。壁の傾斜は全体的に緩やかで、テラス状の部分があるため底面は狭くなっている。ただ、北側のテラス状部分は掘り過ぎにより生じたとみられる。埋土は全体的に灰褐色土で、地山ブロックの含有状態や明るさにより上下の2層に分かれている。出土遺物は陶器1点である。また深さ30cm程度の位置で礫が出土している。

#### 出土遺物（図版24、第22図19）

19は陶器の短頸壺で、頸基部から直上に延びる口縁で、端部は外方へ突出気味に肥厚して上方へ面をなす形状である。胎土は暗橙茶褐色で、鉄軸が口縁から外面胴の最も張る部位のやや下位まで施される。口縁端面および内面の口頭部には非常に薄く軸が残る。

#### 8号土坑（図版11、第23図）

南調査区の中央付近で、10号土坑の西側に位置する。平面形は径220～230cm程度の非常に大



第23図 6~9号土坑実測図 (8は1/40、他は1/30)

型の不整円形で、深さは80～90cm程度である。壁の傾斜は緩やかで、深さ30cm程度で全周的に変化する。埋土は暗灰褐色土・淡黒灰褐色土の層からなる。出土遺物はわずかである。

#### 出土遺物（第22図20～22）

20は土師器壺とみられるが、突出気味の底部は厚く、小鉢等の器種の可能性もある。口縁部は欠失しており、器表は磨滅するがわずかに糸切り痕が残り、底径54cmである。底部には亀裂があり、焼成時に生じたとみられる。21は瓦質土器火鉢の口縁部小片で、端部に狭い面をなす直口である。外面に複数の横位の沈線および半円と縱位の直線を組み合わせて連続した印刻文が施され、内面にはハケ調整が施される。22は反りのない平らな瓦で厚さ3cm程度と非常に厚い。側縁は非常に平坦な面をしており、表面はナデで仕上げられる。図示していないが、他に大きく欠損し磨滅の著しい丸瓦も出土した。

#### 9号土坑（図版12、第23図）

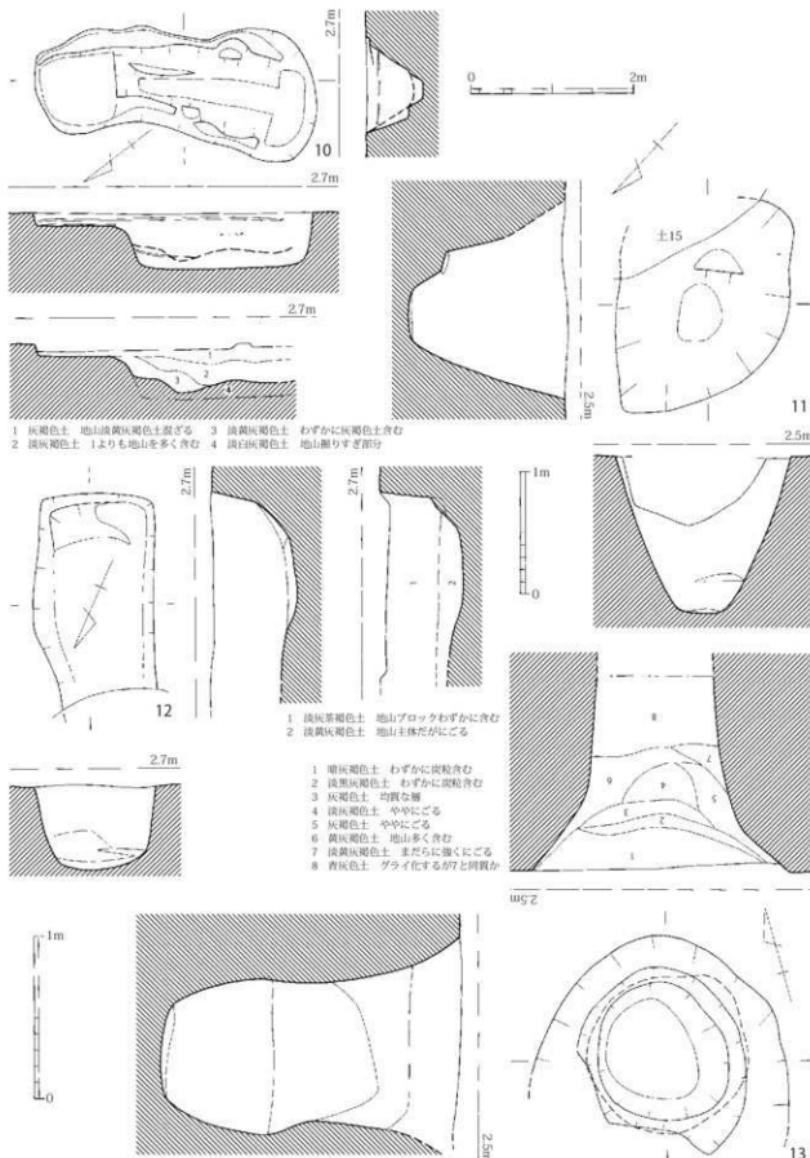
南調査区の南端部付近に位置し、6・12号土坑の南西側にあたる。平面形は長軸120cm程度、短軸100cm程度の橢円に近い形状で、深さ40cm程度である。壁の傾斜は全体的に緩やかな傾向にあり、北側が他所に比べわずかに急であるが、これはやや掘り過ぎたことが影響している。また、掘削時に西側下位で木質が露出して、それを追いかける形で掘削を広げた。しかし、結局木質の全体が表に出る前に、この木質はこの土坑掘削前から基盤層に含まれていたものと判断した。したがって、西側の上端が外へ張り出しているのは、本来の形状ではない。埋土は上層の灰褐色土、下層の淡灰褐色土に分かれるが、ともに地山に近似する淡黄灰褐色土が斑に含まれる。出土遺物は白磁1点のみである。また深さ20cm程度の位置で礫が出土している。

#### 出土遺物（第26図1）

1は白磁碗で胎土は非常に白く、釉も透明度が高いため白さの際立った外観である。釉は搔き取りされた疊付以外は全体に施されており、残存部で見る限り無文である。また、疊付には部分的に砂目の付着が見られる。

#### 10号土坑（図版12、第24図）

南調査区の中央付近で、8号土坑の東側に位置する。検出段階の当初、北側の不整方形と南側の不整円形の2基の遺構が切り合ったものと判断し、南側の遺構を北西-南東の軸で半裁したところ下位で非常に狭まる掘方と判明した。そこで複数の遺構の切り合いでは不自然とみなし、北東-南西の軸で全体を半裁したところ単一の遺構であることが確認できた。その結果、長軸340cm超、短軸160cm程度の非常に大型で、平面・断面ともに掘方の不整な遺構という結果になった。埋土は、灰褐色・淡灰褐色・淡黄灰褐色という地山と非常に峻別し難い層のみであったこともあり、特に下位では掘り過ぎが大きく、実際の底面はほとんど失われている。そのような状況であるため、テラス状の部分が隨所にあるが、掘り過ぎの影響により生じたものが多分にある。ただ、東側・北側の非常に浅いテラス状部分は掘方を反映したもので、また土層や掘削時の状況から深さは50～60cmと想定することができる。一定程度の土師器・須恵器の破片が出土するが、明瞭に遺構の時期を示すとみられる遺物はない。図示していないが、格子タタキを外面に施す瓦質の大形壺とみられる破片が出土している。



第24図 10~13号土坑実測図 (10は1/60、11は1/40、他は1/30)

### 11号土坑（図版12、第24図）

南調査区の中央付近で、10号土坑の東側に位置し、15号土坑に切られる先後関係である。17号土坑とも非常に近接しており、同時併存していたとは考えにくく、層位的には両者の先後関係は不明である。15号土坑からの擾乱により一部欠失しているが、平面形は隅丸方形もしくは隅丸菱形が不整で崩れたようなものとみられる。対向する辺同士の間隔は140～180cm程度である。深さは130cm程度と深く、壁の傾斜は全体的に緩やかな部分が多いため、それとともに底面は狭くなっている。また下位で一部テラス状の部分がみられるが、掘り過ぎによって生じた可能性もある。埋土については、深さ65cm程度までは灰褐色土混じりの淡黄灰褐色土であり、それより下位ではグライ化して青灰色である。

#### 出土遺物（第26図2）

2は青花皿の底部の小片で、見込文様は蚊龍とみられる。

### 12号土坑（図版13、第24図）

南調査区の東南隅付近に位置し、一部6号土坑に切られるが、長方形の平面形となるとみられる。長軸は残存部で130cm程度、短軸で75cm程度である。深さは50cm程度で、壁の傾斜は全体的に急である。底面の南端で壁に向かい徐々に高くなる部分があるが、その西半は掘り過ぎにより欠失している。埋土については、地山ブロックを含む淡灰茶褐色土の上層と地山主体であるがわずかにごる淡黄灰褐色土の下層からなる。出土遺物は土師器・瓦・陶磁器等が出土しているが、小片ばかりである。

#### 出土遺物（第26図3・4）

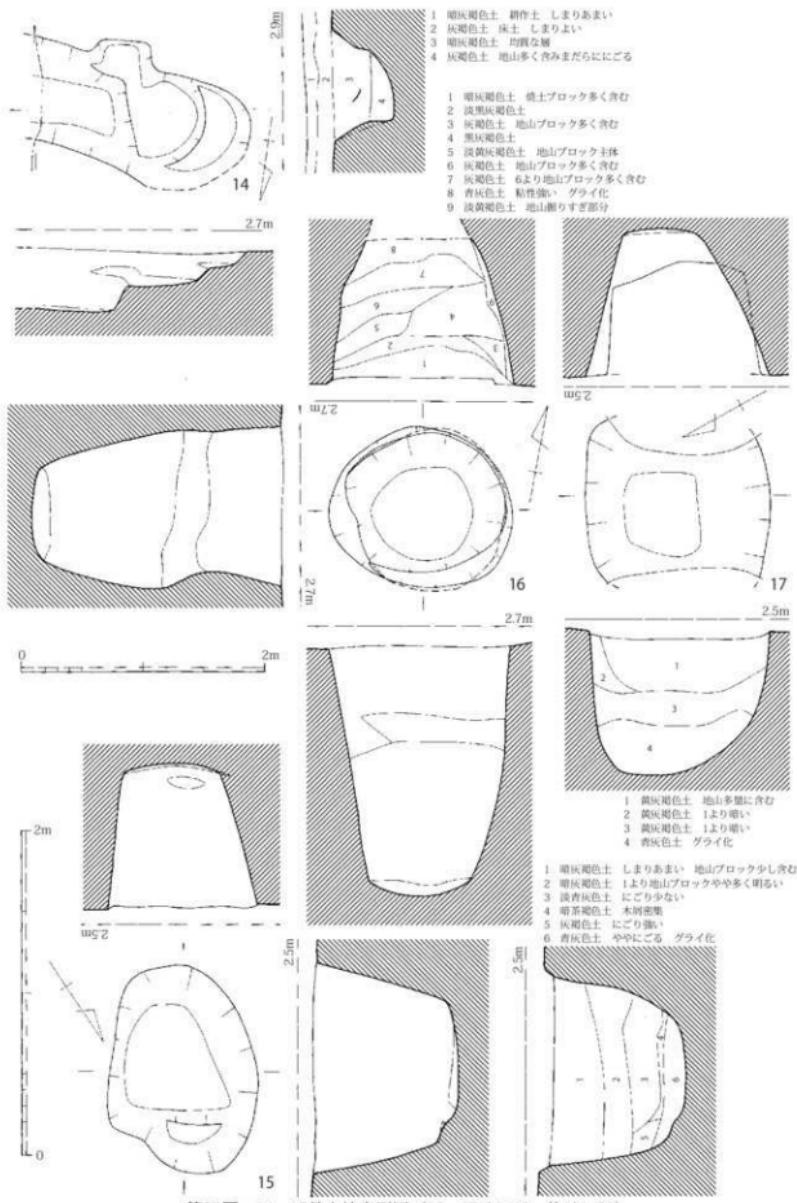
3は瓦質土器擂鉢の口縁部片で、端部は丸みがあって片口部がわずかに残る。外面はナデ調整により仕上げられ、内面には横ハケが施され、擂目は5本1単位とみられる。4は肥前産染付碗の口縁部小片で、やや外側上方へ直線的に延びる。外面には草葉文とみられる文様が残る。

### 13号土坑（図版13、第24図）

南調査区の南半部に位置し、南側の一定の範囲を1号溝に切られる。その擾乱により失われている部分もあるが、平面形は径150cm程度の円形に近いものと想定される。深さは180cm以上あり、壁の傾斜は30～40cm程度の深さまでは緩やかであるが、それより下位では全周的に急で、また変化して一定の深さでオーバーハングしている。埋土についてはレンズ状の堆積が見られ、上層では灰褐色系統の層が主体で、その下位に黄灰褐色系統の層が見られる。深さ70～80cm程度より下位では、グライ化した青灰色となっている。その掘方や深さから井戸という可能性が考えられる。図示できる出土遺物は1点のみである。

#### 出土遺物（第26図5）

5は土師器擂鉢の口縁部片で、片口の一部がわずかに残る。外面はナデで仕上げられるが、微かに横ハケが残り、一方内面の横ハケは明瞭で、粗い擂目も認められるが部分的な残存のため、擂目の単位等については確認できない。口縁端部は面をなす。



第25図 14~17号土坑実測図 (16・17は1/40、他は1/30)

#### 14号土坑（図版13、第25図）

南調査区の東南隅付近に位置し、1号土坑に切られているため一部を欠失しており、また東側は調査区外に及んでいる。確認し得る範囲内においても平面形は不整で、また、底面もテラス状部分が広く、段階的に深くなる様相である。最深部までの深さは40cm弱である。埋土は、全体的に均質な暗灰褐色の上層と、地山を多く含み斑ににごる灰褐色土の下層からなる。図示できる出土遺物は1点のみである。

#### 出土遺物（図版26図6）

6は瓦質土器擂鉢で、体部下位のみ残存し、下位は底部から剥落したように欠損する。器表は磨滅するが、外面にはハケ調整が残り、内面では特に磨滅の目立つものの、8条程度の単位とみられる擂目が確認できる。図示していないながら、丸瓦の小片で凸面側のナデ仕上げの中にわずかに縄目タタキの痕跡が残り、凹面側に布目痕が残るものが出土している。

#### 15号土坑（図版14、第25図）

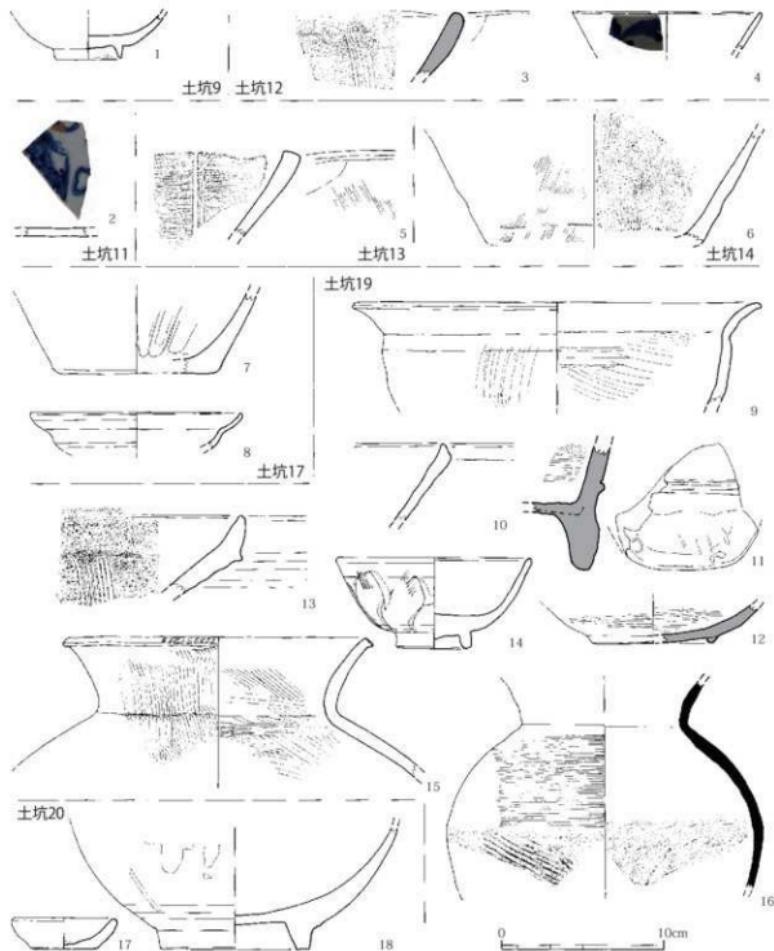
細長く伸びる南調査区の南北間の中央付近で、その東隅の調査区近くに位置し、11・17号土坑を切る。やや不整な楕円形状の平面で、長軸130cm弱、短軸90cm強を測る。北端部でやや張り出したような部分では、下位の対応する位置に小さなテラス状の部分も見られる。90cm程度の深さで、壁の傾斜は全体的に急な傾向がある。埋土については、上層で暗灰褐色土の層が主体で、下層ではグライ化の影響による青灰色系統の層が主体である。なお、最下層の上面には木屑が密集する暗茶褐色の層の広がっているのが特徴的である。弥生土器・土師器・須恵器等の小片が多数出土するが、図示できるものはなく、陶器擂鉢の細片が最も新しい遺物とみられ、時期判断の材料となる。

#### 16号土坑（図版14、第25図）

細長く伸びる南調査区の南北間の中央付近で、その東隅の調査区際に位置し、2号土坑の北側にあたる。平面形は長軸150cm程度、短軸130cm程度の楕円形で、深さは2m以上あり、壁の傾斜は非常に急峻で60～100cm程度の深さではオーバーハングしている。埋土の堆積層の単位はやや多く認められ、上層では暗灰褐色・黒灰褐色系の層が主体で、そのすぐ下位では地山ブロック主体の淡黄灰褐色土や灰褐色土の層からなり、これらは西側から流れ込んだとみられる堆積となっている。深さ100cm前後より下位ではグライ化して青灰色となっている。出土遺物は多様で量的にもまとまっている。その掘方や深さから井戸という可能性が考えられる。

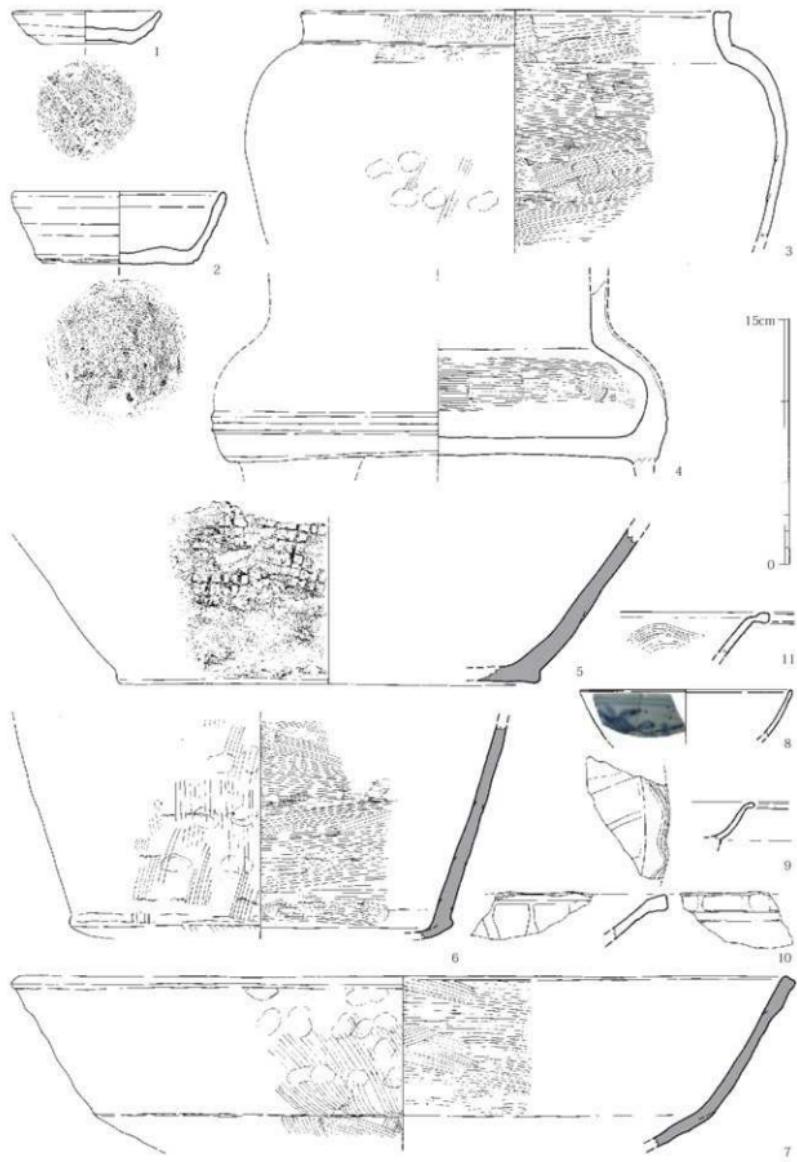
#### 出土遺物（図版24、第27図1～11）

1は糸切り痕のある土師器小皿で、ある程度の歪みがあり、体部外面の起伏がやや目立つ。口径9.2～9.5cm、底径5.1cm、器高20cmである。2は糸切り痕のある土師器壺で、やや歪みが目立つとともに、器壁が非常に厚手で、粗雑なつくりに見える。口径13.2cm、底径9.1cm、器高4.4cmである。3は土師器火鉢で、口縁部は短く屈曲して直上へ延び、端部は面をなす直口縁である。外面では、胴部はナデで仕上げられた部分にハケが残り、口縁部は密な縦ハケが並ぶ。内面では、密な横ハケが施され、胴部の細かいハケに対して口縁部のものはやや粗い。4は類例に乏しい器形の土師質の土器で、広い平底から体部が一旦上方へ立ち上がってから一度内傾して窄まり、口縁と思しき部分が屈曲して再度上方へ立ち上がるが、端部は残存していない。底部・体部の内面に細かいハケ調整



第26図 9、11~14、17・19・20号土坑出土土器類等実測図 (1/3)

が見られる。一方で、外面は風化・剥落が著しいが、欠失しているものの底部には脚を有したとみられる痕跡があり、脚は3ヶ所にあったと想定される。また、体部下位には2条の連なる突帯の残存する部位があり、これらの要素が火鉢に見られることから、火鉢の可能性が高いと判断する。5は瓦質の大形の甕で、下位部のみが残存する。体部外面には格子タタキが施され、内面には細かい剥落が目立つ。わずかに残る外底部には板状圧痕のようなものが残る。6は土師器鍋で、下位に強



第27図 16号土坑出土土器類等実測図 (1/3)

い屈曲部が見える。内面には密な横ハケが施され、一方外面では、わずかに残る屈曲部より下位では密なハケが見られ、そこから上位ではナデで仕上げられるが、縦ハケが一定程度残る。内外面ともに黒褐色呈し、外面は煤の付着によるものとみられる。7は瓦質土器鍋で、口縁端部は面をなし、下位には外面で強い稜のある屈曲部が見られ、そこから上位の外面には煤が密に付着する。外面は粗いハケが見られ、内面に密な横ハケが施される。8は青花碗の小片で、口縁部は明瞭な屈曲がなく直口に近いが、端部はごくわずかに外反気味に開く。内面には口縁直下に界線が廻り、外面には口縁下の2重の界線とともに唐草文が見られる。9は景德鎮窯系白磁皿で、口縁端部が外反して開く。下端では高台がわずかに残る。10龍泉窯系青磁盤で、口縁部は屈曲して開くとともに肥厚し、端部は稜花により波状である。胎土は淡茶褐色の陶質である。11は武雄産とみられる陶器二彩唐津の平鉢の小片で、口縁部は側方へ屈曲して端部は肥厚してやや丸みをもつ。器表に白化粧土を施しており、その後の鉄釉による波状の施文が残る。これら以外にも特に瓦をはじめとして、非常に多数の土師器・瓦質土器等の破片が出土した。

#### 17号土坑（図版14、第25図）

細長く延びる南調査区の南北間の中央付近で、その東隅の調査区近くに位置する。3・15号土坑に切られるため上端の半分を失っているが、平面形は一辺150cm程度の隅丸方形になると想定される。深さは130cm程度で、壁の傾斜は全体的にやや緩やかな部分が多い。埋土については、地山に近似する黄灰褐色土が主体で、深さ70～80cm前後から下位ではグライ化して青灰色となる。出土遺物はほぼ小片ばかりである。

#### 出土遺物（第26図7・8）

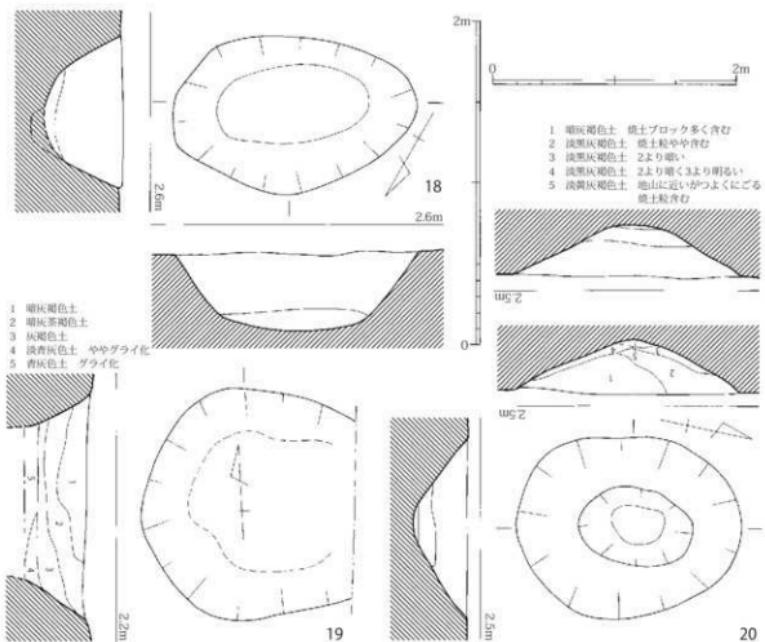
7は非常に硬質な土師器の底部片で、鉢の可能性が高い。8は肥前産青磁皿の小片で、胎土は陶質で橙茶褐色粒がわずかに含まれる。腰部から口縁部にかけて残存し、胴部でやや強く屈曲してから内湾しながら立ち上がる口縁部である。他にも土師器・須恵器・瓦等の小片が多数出土した。

#### 18号土坑（図版15、第28図）

南調査区の南半部で、7号土坑の南西側に位置する。平面形は長軸150cm弱、短軸100cm弱の楕円形に近い。深さは40～50cm程度で、壁の傾斜は全体的に緩やかである。半裁した際に掘削した北半側の底面の大部分を掘り過ぎてしまっている。埋土については、深さ30cm程度までの上層は地山主体の淡黄褐色土で、その下位ではにごりの強い淡灰褐色土の層となっている。図示できる遺物はなく、少数の土師器・須恵器片（外面：平行タタキ、内面：同心円当て具痕）が出土するが、遺構の時期を反映するものは不明である。

#### 19号土坑（図版15、第28図）

北調査区で唯一検出した土坑で、調査区全体の北端近くの位置にあたり、6号溝を切っている。一部が東側の調査区外に及んでいるが、平面形は径180cm以上のやや不整な大形の円形になるとみられる。西側に現在のクリークが隣接しているため、少しの掘削でも湧水が目立ったため、深さ60cmで掘削を留めている。この深さまでの壁の傾斜は緩やかで、これより下位で急峻な傾斜となつて深くなる場合は、4・13・16号土坑と類似して井戸としての機能が想定される。埋土については、



第28図 18~20号土坑実測図 (18は1/30、他は1/40)

上層で灰褐色・灰茶褐色系の層が見られ、上記のように湧水するような状況のためか、深さ 50 cm 程度より下位という他の土坑より高い位置からグライト化の影響で青灰色となっている。出土遺物は混入とみられるものを含み、多様である。

#### 出土遺物 (図版 24、第 26 図 9~16)

9 は土師器土鍋で、口縁部は屈曲してから外反して開き、端部は先細りで丸く收められる。胴部は外面に縦ハケ、内面に横ハケが残る。10 は土師器土鍋の口縁部片で、端部はやや肥厚して断面三角形である。外面に煤が付着し、特に口唇部付近に煤の濃い部分が帯状に廻る。11 は瓦質土器火鉢の底部付近の破片で、外底部には脚が付され、胴部外面には小さい突帯が残る。内面には細かいハケ調整が残る。12 は瓦器塊で非常に低い高台が貼付される。横位のミガキが施される。外面は煤が付着したような黒色を呈する。13 は備前焼擂鉢とみられ、焼き締められており、口縁部には幅広の縁帯をともなう。擂目は 1 ヶ所に残り、7 条の擂目が単位となるとみられる。14 は龍泉窯系青磁碗で、幅の広い蓮弁を片切彫りで表現し、蓮弁部に盛り上がりや鎬は生じていない。蓮弁の各上端部には縱もしくは斜位の擂書きが施される。豊付は搔き取りにより、高台内とともに無釉で露胎する。15・16 は明らかな混入品である。15 は弥生土器壺で口縁部から肩部にかけて残存する。頸基部で強く屈曲し、口頭部は外反気味に開いて延び、口縁端部は外方へわずかに突出してキザミ

が付される。頸基部には非常に小さな突帯が付されるがほとんど剥落している。16は須恵器壺で、頸基部で屈曲して口縁は外反して開くようであるが端部は欠失する。丸みのある肩部では、外面で広い範囲でカキ目が廻り、内面には強い回転ナデが施される。残存部の下端付近では、外面にカキ目の後に施した平行タタキと更にその後に施した細かいハケが見られ、内面では同心円の当て具痕をナデ消しているとみられる。

## 20号土坑（図版15、第28図）

南調査区の中央部よりやや北側で、5号溝の南側に位置する。南調査区は南北に分割・反転して調査しており、北半調査時で唯一検出した土坑である。平面形は長軸185cm程度、短軸150cm弱のやや大形の楕円形である。深さは40cm強で、壁の立ち上がりは非常に緩やかで、深さ30cm前後で全周的にわずかに変化する。そのような掘方のため、調査面で検出した大きさに対して底面は非常に狭い。埋土については、最上層では灰褐色で、その下位は淡黒灰褐色土主体、最下層で地山に近似する層がわずかに認められる。

## 出土遺物（図版24、第26図17・18）

17土師器小皿で、外底部には糸切り痕が見られる。口径6.4cm、底径3.9cm、器高1.9cmである。18は陶器鉢で下位部のみが残存する。ケズリ出しによる高台は非常にシャープな角状の断面をなし、高台内外の外底は、高台外に接する腰部よりも高い位置にある。図示していないが弥生土器高坏（中期）の脚部の混入品も出土している。

## 溝

### 1号溝（図版16、第29図）

北西-南東の軸で南調査区の南半部を直線的に横断する溝で、両端は東西それぞれの調査区外へ延びている。13号土坑やピット114を切る。幅は100cm以下～160cm前後と差があり、一方向へ広狭の変化をするのではなく、調査区西壁手前で一度最も狭くなつてそこから西へ激的に幅を広げる点が特徴的である。深さは50～70cm程度の部分が多く、東西間の中央付近で深さ80cm以上と部分的に底面の低くなる部分もある。底面の標高は、調査区東側土層（a-a'）で1.8m弱、調査区西側土層（b-b'）で2m弱であるように、東半に比べ西半で低い傾向は明瞭であるが、上記の東西間の中央が深く、西壁手前の狭小部が浅いなど、一様に西側へ低くなるわけではない。壁の立ち上がりについては、東側に比べ西側の傾斜が強く、また東半では上位より下位で傾斜がやや強くなるため、その転換部分が棱線状に続いている。また、13号土坑と切り合う付近では、テラス状の部分があるが、該当箇所のベルト土層から判断して他遺構との切り合い等で生じたものではないと判断できる。埋土については、最上層では東西端で淡黄灰褐色土・淡黒茶褐色土と大きく異なるが、これは西側が低位であり、周辺の様相からみて包含層が広く堆積する範囲に近いことが影響している可能性がある。中位以下では黒灰褐色系と灰褐色系の土層からなる点や、底面直上で淡灰褐色土層である点は概ね共通している。調査区東壁の土層では、上層で掘り返しもしくは別遺構と思しき層が見られるが、調査区西壁やその他のベルトの土層においては同様の痕跡が見られないため、いずれにしても部分的に掘削に止まるとみられる。出土遺物は多様多量である。

なお、4号溝が北端では直角に曲がっていることから、この1号溝と4号溝が屈曲して連続す

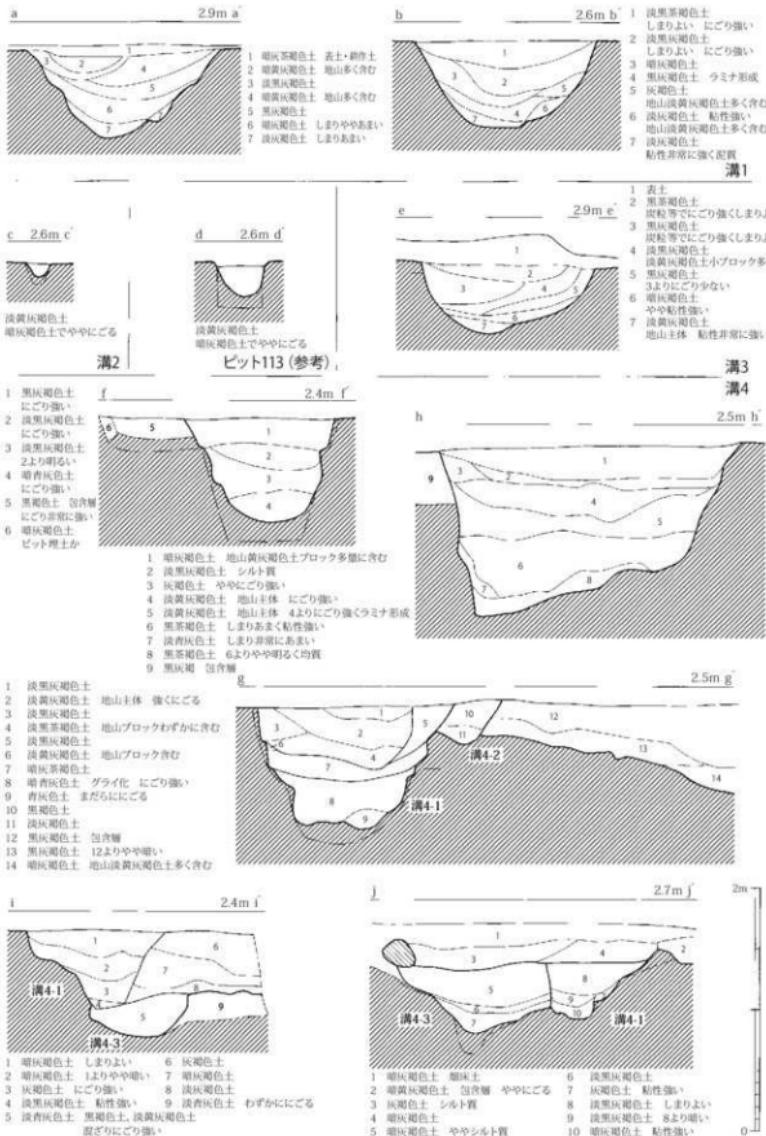
る可能性が考慮されるが、遺物の出土状況や内容からその連続性は疑わしいと考える。

#### 出土遺物（図版 25、第 30～32 図 1～59）

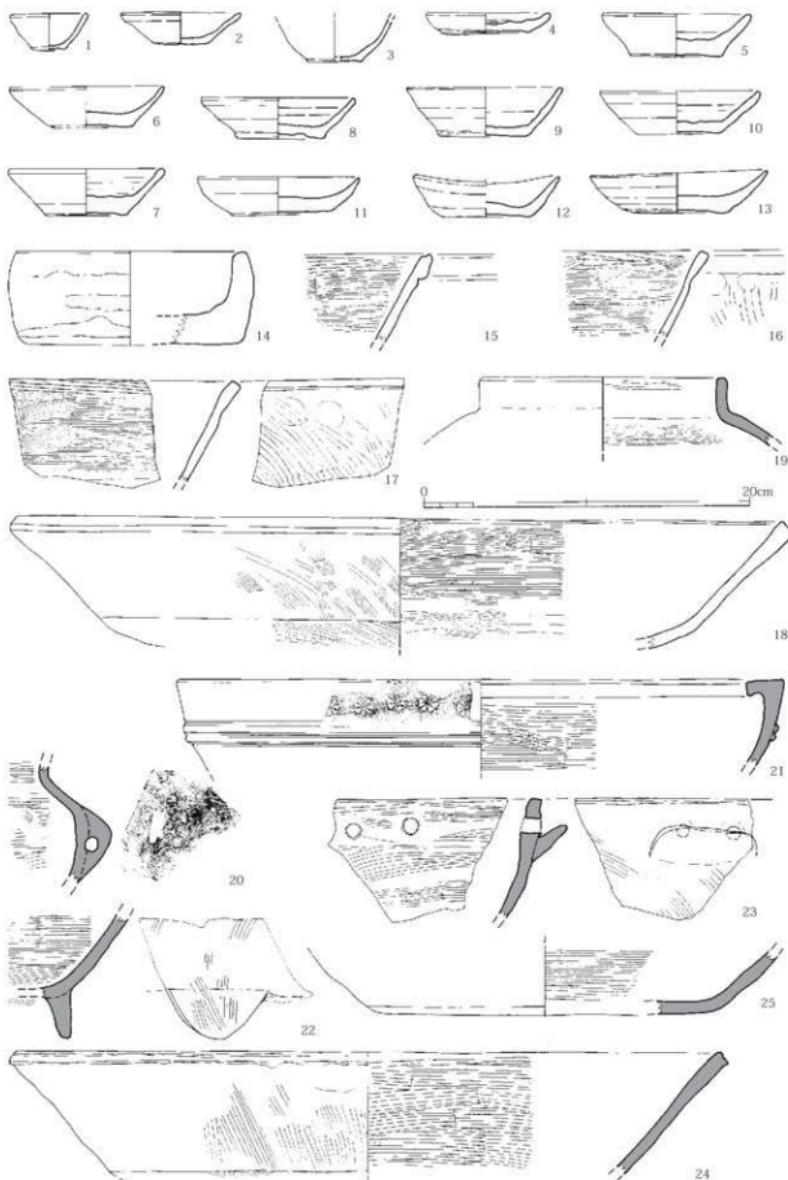
1～18 は土師器で、1～4 は小皿でいずれも底部に糸切り痕が見られる。1 の径は小さく立ち上がりの強い器形で口径 4.8 cm、底径 1.9 cm、器高 2.2 cm である。2 の底径はやや小さく、口縁部付近で立ち上がりが変化する。口径 7.2 cm、底径 3.3 cm、器高 1.9 cm である。3 は大きく欠損し口縁部は残存していない。胎土は灰白色で、外底部以外は白化粧土が施される。底径 3.3 cm である。4 は非常に浅い器形であるが、口縁部の残存がわずかで不明瞭なため、より上方へ延びる可能性がある。口径 7.5 cm、底径 5.4 cm、器高 1.2 cm である。5～13 は土師器坏で、いずれも底部に糸切り痕が見られる。5 の体部下位は外反気味に立ち上がり、上位では内湾気味に変化する。口径 9.2 cm、底径 5.7 cm、器高 2.7 cm である。6 の底部には微かに板状圧痕が残る。口径 9.6 cm、底径 5.2 cm、器高 2.5 cm である。7 の一部のみ残存する体部は緩やかな傾斜で直線的に延びて開く。口径 9.5 cm、底径 5.0 cm、器高 2.9 cm である。8 は土師器坏で、外底部突出気味で、板状圧痕と工具による傷が見られる。口径 9.5 cm、底径 5.3 cm、器高 2.5 cm である。9 の外底部には微かに板状圧痕が残る。底部内面には回転ナデによる渦状の起伏が生じている。口径 9.6 cm、底径 5.5 cm、器高 3.0 cm である。10 の体部は緩やかに立ち上がりやや大きく開き、底部には板状圧痕が見られる。口径 9.9 cm、底径 5.0 cm、器高 2.7 cm である。11 は土師器坏で、外底部は突出気味で厚い。口径 10.0 cm、底径 6.2 cm、器高 2.5 cm である。底部には微かに板状圧痕が残る。12 の底部には微かに板状圧痕が残る。外底部から体部は丸みがあつて緩やかに移行し、境は明瞭ではない。口径 9.0 cm、底径 4.0 cm、器高 2.5 cm である。13 の体部は内湾気味に立ち上がりやや大きく開く。口径 10.8 cm、底径 5.7 cm、器高 2.6 cm である。

14 はやや軟質の瓦と類似した焼成の鉢で、瓦質土器とするべきかもしれないが土師器としておく。やや大形の平底で器壁が厚く、希な例である。15～18 は土師器鍋である。15 は口縁部で、端部には外側に縁帶が貼付されて肥厚する。内面の口縁部付近には粗いハケ、それより下位では細かいハケが施され、外面はナデで仕上げられ煤が付着する。16 は小片で、口縁部はわずかに屈曲して外側へ開く。口唇部には浅く沈線状の窪みが生じる。内面には細かいハケが施され、口縁部付近ではミガキで仕上げられる。17 の口縁部はやや肥厚するとともにわずかに外方へ開く。外面には粗いハケが施されるとともに煤が付着し、内面では口縁付近に粗いハケが施され、他は細かいハケが施される。18 の器表は軟質な焼成により橙褐色を呈するが、瓦質土器の可能性もある。下位に緩やかな屈曲部が残り、そこから立ち上がりが強くなる。口縁部は自然に肥厚する。外面には著しく煤が付着するがハケ調整が確認できる。内面には密に横ハケが施される。

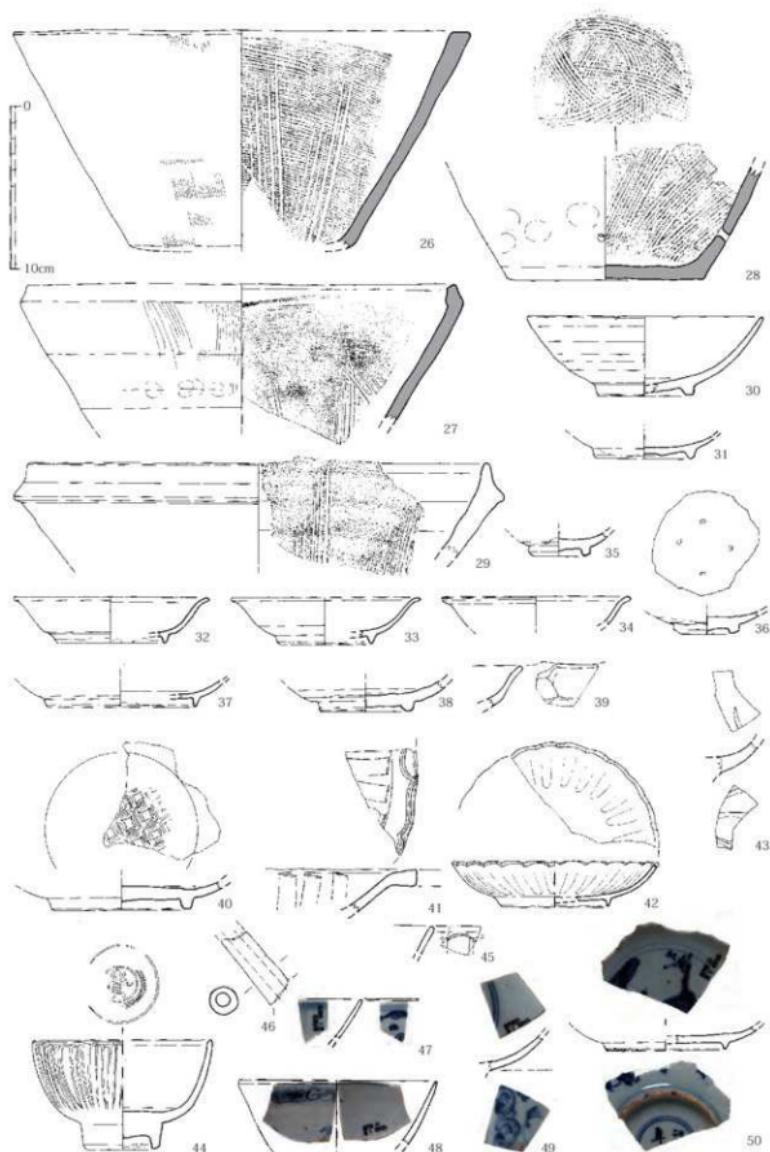
19～28 は瓦質土器である。19 は茶釜で短い口縁部が屈曲して直上へ延びる。肩部内面にはハケ調整が見られる。20 は茶釜の把手付近で、外面は欠損が目立ち判別し難いが印刻文が残り、内面には粗いハケが見られる。21 は火鉢で内傾して立ち上がる体部から、口縁部は屈曲して内側へ短く水平に延びるため、幅のある上面をなす。外面口縁下には菊花文の印刻が列び、その下位には 2 条 1 単位の突帯が廻る。この突帯 1 単位の上下端にヘラ先による浅く細い沈線を施して画している。内面には密なハケが施される。22 は火鉢の底部付近で、脚が貼付される。内面には密にハケが施される。23 は鍋で口縁部よりやや下位で上向きに貼り付けた外耳があり、その上部には内面から 2 個の孔が穿たれる。外面には粗いハケが見られ、煤が付着し、内面では口縁部付近に粗いハケ、その下位に細かいハケが施される。24 は鍋で上位部のみが残存し、やや外反気味であるがほぼ直線



第29図 1~4号溝上層実測図 (1/40)



第30図 1号溝出土土器類等実測図① (1/3)



第31図 1号溝出土土器類等実測図② (1/3)

的に立ち上がり、口縁部は自然に肥厚する。外面には著しく煤が付着するがハケ調整が確認できる。内面には密に横ハケが施される。25は鉢の底部付近で、内面には非常に密なハケが残る。残存部には擂目が認められない。26は硬質な擂鉢で、体部は直線的に延びて開き、口縁部付近は自然に肥厚して端部は明瞭な面をなす。口唇の面はハケ調整される。外面はナデで仕上げられるが部分的にハケ調整が残り、内面には密な横ハケの後に5本1単位の粗い擂目が施される。27は擂鉢で、口縁部は屈曲して短く上方へ立ち上がる。外面には部分的に継ハケが残り、内面は横位の強いナデで仕上げられ、わずかに擂目が残る。28は硬質の擂鉢で、底部を含む下位部分のみが残存する。内面には底部とともに8本1単位の擂目が密に施される。外面はナデで仕上げられ、指圧痕などの凹凸が目立つ。欠損部のすぐ横に径4mm程度の焼成後の穿孔があり、補修孔の可能性がある。

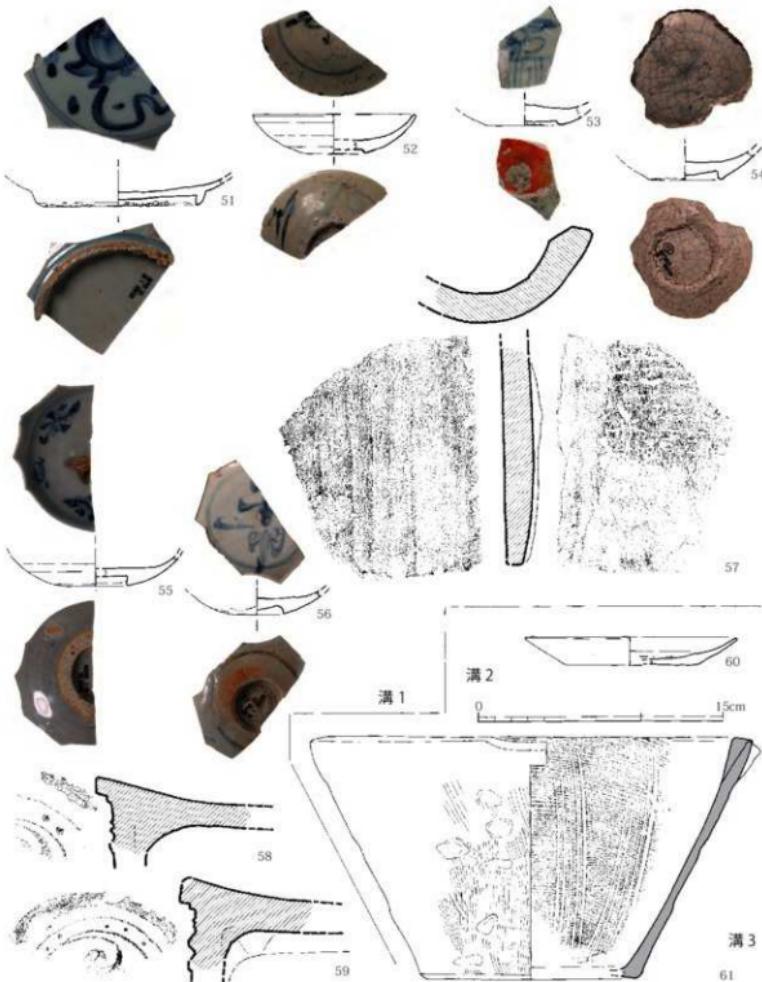
29～31は陶器である。29は備前焼擂鉢とみられ、焼き締められており、口縁部には幅広の縁帯をともなう。擂目は2ヶ所に残り、6～7条の擂目が単位となるとみられる。30・31は朝鮮産の陶器で粉引焼とみられる。30はわずかに淡茶褐色を帯びた灰白色の磁器に近い胎土で白化粧土が施され、その上から透明釉をかけている。施釉範囲は灰白色で、腰部での搔き取りによって下端部の高さがほぼ揃えられている。それより下位は高台内を含めて化粧土のみで、縮緬皺が見られる。また、外面口縁付近に灰被りとみられる部分があり、わずかに残存する口縁部は直口で、端部に小さな輪花とみられる部分がある。31は底部付近のみが残存し、胎土は軟質で淡黄茶褐色を呈し、高台内に残る回転ケズリの痕跡は非常に粗い。その上には多数の小孔の見られる白化粧土が施されるが、外面の範囲は不整で、高台内では部分的に止まる。なお、豊付の一部に当初化粧土が及んだとみられるが、搔き取られている。また、外底部以外に透明釉が施されるが、非常に薄くムラがあり不明瞭なものである。

32～39は白磁である。32～34は景德鎮窯系白磁皿で、口縁部が外反して短く聞く。32の高台の豊付部分は釉の搔き取りで露胎し、基本的に露胎とみられる高台内で、接合部付近には意図せず流れ込んだとみられる釉が付着する。また、高台のすぐ外側で細線状に釉が搔き取られており、接合の際に生じたとみられる。33は高台の豊付部分のみ釉の搔き取りで露胎し、非常にシャープな端部となる。35・36は白磁皿で、ケズリによって角張った高台は小さく低い。外面の施釉範囲は不整で、下端位置の高さの差が大きい。35は灰白色を呈する。36はやや黄色味をおび、見込には非常に小さな目跡が4ヶ所あり、重ね焼きの痕跡とみることができる。37は景德鎮窯系白磁皿の底部小片で高台の豊付部分のみ搔き取りにより露胎する。38は白磁碗の底部片で、高台は非常に低い。高台部分は露胎し、外面下位では搔き取りによって施釉下端の境をなしている。見込では輪状に釉が搔き取られる。39は白磁の六角杯とみられる小片で、やや黄色味をおび、外面腰の屈曲部付近より下位は露胎する。

40～46は青磁である。40は龍泉窯系青磁盤で、見込に格子状の印花が見られる。施釉は高台まで及び、高台内では釉は搔き取られる。41は龍泉窯系青磁盤で、口縁部は屈曲して聞くとともに肥厚し、端部は稜花によって波状である。内面には鏽文が施される。42は景德鎮窯系青磁菊皿で、高台は非常に低く、豊付のみ搔き取りにより露胎する。高台内には白釉が施される。43は龍泉窯系青磁碗の小片で、外面に蓮弁文が見られ、内面にはわずかに花文の可能性のある文様がわずかに残る。44は泉窯系青磁碗で、外面にはヘラ先による線描蓮弁文が施され、細線と刺頭との対応から蓮弁としての単位を意識したものとみることができる。釉は高台内の途上まで施され、そこから

内側は基本的に露胎であるが、点的に釉が残る。見込にはヘラ先による蓮花内に「貴」の字款を描く。45は龍泉窯系青磁碗の口縁部小片で、丸彫りによる蓮弁が見られ、鎬や盛り上がりなく、劍頭は丸みをもつ。46は水注の注口部の小片とみられる。

47～56は青花である。47は青花碗の口縁部小片で、端部は反らずにそのまま上方へ延びる。内外面ともに口縁下に2重の界線が廻り、外面にはわずかに唐草文とみられる文様が残る。48は青



第32図 1～3号溝出土土器類等実測図 (1/3)

花碗（D IV）の小片で、胴は直線的に少し開き、口縁は直口である。外面において、口縁下部に波濤文帯が廻り、胴部にはわずかにアラベスク文が残る。内面には口縁直下に界線が廻る。49は青花碗の腰部小片で、内面には見込を閉む2重の界線がわずかに残る。外面には如意雲と唐草文とみられる文様がみられる。50は青花皿（EXI）で、底部の一部のみが残存する。小さく断面三角形の高台を伴い、下端はわずかに露胎し、砂目の付着が見られる。胴部外面で植物、見込で山水図とみられる文様が残り、高台内には2重の界線内に「洪武年造」とみられる字款が部分的に残る。51は青花皿（B VII）で、断面三角形の高台の疊付は釉剥ぎにより露胎し、また砂目の付着が目立つ。見込には界線および玉取獅子の文様が見られる。52は青花皿（C III）で、疊付および基筒底状の底部内部は露胎し、外面には文字状の文様が残る。見込には界線とともにわずかに残る文様は「寿」の字款の可能性が高い。53は基筒底の青花皿（C）で、残存部はわずかであり、疊付には付着物が目立つ。露胎は高台内のみで橙茶褐色となっており、またその部分にも粗雑な釉の付着が残っている。見込に残存する文様は花文の可能性がある。54は基筒底の青花皿（C）で、全範囲に及ぶ釉はにごりが強くて陷入が著しく、胎土は陶質に近くて全体に非常に粗雑なつくりである。疊付部分は剥落が目立ち、焼成時に融着して引き剥がしたために生じたとみられ、残存部にも融着の痕跡が見られる。見込の界線内の文様は「寿」もしくは梵字とみられる。55は基筒底の青花皿（C IV）で、疊付部分のみ釉剥ぎにより露胎する。見込の2重の界線内は花鳥文とみられ、中央付近の欠損する文様は「鳥」と考えられる。この鳥の部分は施釉後にその上から胎土を貼付したもので、胎土部分が茶、そのまわりが緑色となっているが、意図した彩色なのかは不明である。56は基筒底の青花皿（C III）で、外面の下部および高台内が露胎し、その境は不整である。見込の界線内の文様は「寿」とみられ、外面にもわずかに文様の一部が残る。（各（）内の分類は『小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代』『貿易陶磁研究』No.2】に準拠。）

57は丸瓦で欠損が目立つが、玉縁と逆の端部が一部残存する。側端部とその凹面側隣接部はヘラで面取りされる。凸面側はヘラナデにより狭く継に長い面を多数なす。凹面側には布目痕が残る。58・59は軒丸瓦で大きく欠損しており、わずかに残る瓦当には左巻きの巴文と珠文が見られる。

## 2号溝（図版16、第29図）

概ね東西の軸で南調査区の南半部を通る溝で、切り合いや途切れがあつて厳密には東西と中央の3単位の遺構からなっている。ただ、掘方・埋土の類似性や方向軸の連続性から一連の遺構と捉えて問題ないと判断できる。中央部分は西側部分とは途切れ、東側部分を切っており、東西端はそれぞれ調査区外へ延びている。平面的にやや蛇行しており、幅が30cmを超える部分は少なく、深さは10cm程度と非常に小形である。埋土は暗灰褐色土でわずかににごるもの、地山に近似する淡黄灰褐色土である。溝という扱いにはしていないが、ピット113・114・125も細長く、近似した方向軸や埋土から相関性のある遺構と想定される。出土遺物はわずかに土師器皿1点のみである。

## 出土遺物（第32図60）

60は土師器坏で体部の立ち上がりが非常に緩やかで、非常に浅い器形であり、皿に類すべきかもしれない。わずかに残る外底部はケズリの痕跡が見られるとともにナデにより仕上げられる。口径13.0cm、底径8.0cm、器高2.2cmである。

### 3号溝（図版 17、第 29 図）

南調査区の南西隅でわずかな範囲のみ検出された溝で、その部分の幅は 120 cm 程度である。深さ 70 cm 程度で、調査区西壁の土層から最上層は黒茶褐色土で、その下位で黒灰褐色系、灰褐色系の土層が主体である点は 1 号溝の調査区西壁土層と類似する点である。わずかな検出範囲のみからの想定ではあるが、1 号溝とほぼ同様の北西 - 南東の軸で両端ともに調査区外へ延びている可能性が高いと想定される。A 区の 1 号溝と近いが、延長しても位置関係にややずれがあり、別遺構と考える。図示できる出土遺物は瓦質土器擂鉢 1 点のみである。

#### 出土遺物（第 32 図 61）

61 は瓦質土器擂鉢で、体部はやや内湾気味ながらほは直線的に口縁部へと延びるとともに併せて厚くなる。口縁端部は明瞭な面をなすとともに片口が一部残存し、また底部は外縁部のみわずかに残存する。外面には主に縱位のハケが施され、指圧痕も残り、口縁部付近はナデにより仕上げられる。内面は密な横位のハケ調整の後に 5 本単位の擂り目が施される。また口唇部にもハケ調整が見られる。

### 4号溝（図版 17～19、第 29 図）

南調査区の主に北半に位置する溝で 5 号溝を切り、ほぼ平行して切り合う複数の単位からなる。本来これらは別遺構とすべきかもしれないが、軸が近似するため完全に分けて掘削することも困難な部分が多いとともに、先後関係がありながらも相関性が考慮されることから一括して 4 号溝とするとした。その中でも最も後出のため調査区内で連続性があり大形のものを 4-1 号溝、5 号溝と切り合う付近で西側に平面的に確認でき、土層 ( $g - g'$ ) にも現れているものを 4-2 号溝、調査区東壁から屈曲部において切り合う中で北側の先行する側のものを 4-3 号溝とする。これらの溝から西もしくは北側の範囲の調査面では、基本的には全面に包含層が広がっていた。

4-1 号溝は、調査区内で連続性が認められ、調査区西半では北東 - 南西の軸で直線的に延び、その北端ではほぼ直角に近い形で屈曲し、調査区東半では北西 - 南東の軸に向きを変える。両端はそれぞれ東西の調査区外へ延びている。5 号溝との交差部周辺より南側では、幅は 120～160 cm、深さは 80～90 cm 程度で、底面はわずかに北側へ低くなる傾向もあるが、さほど明瞭な変化とは言えない。その付近の壁の立ち上がりは、全体的に急な部分が多いが、傾斜の転換部分やわずかにテラス状の面をなすところが随所に確認でき、土層 ( $f - f' - g - g'$ ) にも現れている。これらは、土層単位の境界と符合する場合が多く、掘り返しの痕跡とみられ、符合しない箇所も層の差異を認識できなかっただけかもしれない。埋土については、黒灰褐色土が主体で、部分的に地山に近似する淡黄灰褐色土層も見られ、下層ではグライ化して青灰色となっている。

4-1 号溝の 5 号溝との交差部周辺より北側から屈曲部にかけては、幅が最も広がる部分で、最大は ( $h - h'$ ) の土層付近で 240 cm 以上となる。底面についてはある程度の起伏がありながらも、徐々に ( $h - h'$ ) の土層付近へ向かい両側から深くなり、最深部では深さ 140 cm 前後、標高 1 m 以下となる。この部分の壁の立ち上がりは概ね急であるが、東側は一旦テラス状の平面をなしてから緩やかに落ち込んでおり、最終的な底面は非常に狭い。また、土層からは明瞭な掘り返し等の痕跡は見られず、以下の様相とは異なっている。埋土で特徴的なのは、地山に近似する淡黄灰褐色土層が 30～40 cm 程度の厚さで広がっており、意図的な埋め戻しが想定される。

屈曲部から東側にかけては、調査区東壁土層（j - j'）で確認できるように、先行する形で切り合う4 - 3号溝よりも幅・深さともに小形で、そこでの幅は90cm程度である。ただし、この土層は溝の方向軸とは直行しておらず、実際には更に狭い。また、深さは60cm強で、底面の標高は調査区東壁土層（j - j'）で1.7m程度であるのに対し、（i - i'）では1.6m程度とわずかに西側へ低くなっている。なお、屈曲部の外側では溝埋土と包含層との区分が不明瞭で、境界となる溝上端を把握できないまま西側への掘削を進めてしまったが、土層からそのラインは概ね把握が可能である。また、そのトレーナー状の包含層掘削部分の西側壁の土層には遺構と思しき痕跡は無く、この溝がそのまま西側へ直線的に分岐しているラインはないと確認している。壁の立ち上がりについては、（i - i' - j - j'）とともに屈曲部に対して外側よりも内側で傾斜が緩く、テラス状部分を伴う等の変化が見られる。これは先述の屈曲部南側の最深部付近とともに共通する構造である。埋土は、淡黒灰褐色系から灰褐色系のものが主体である。

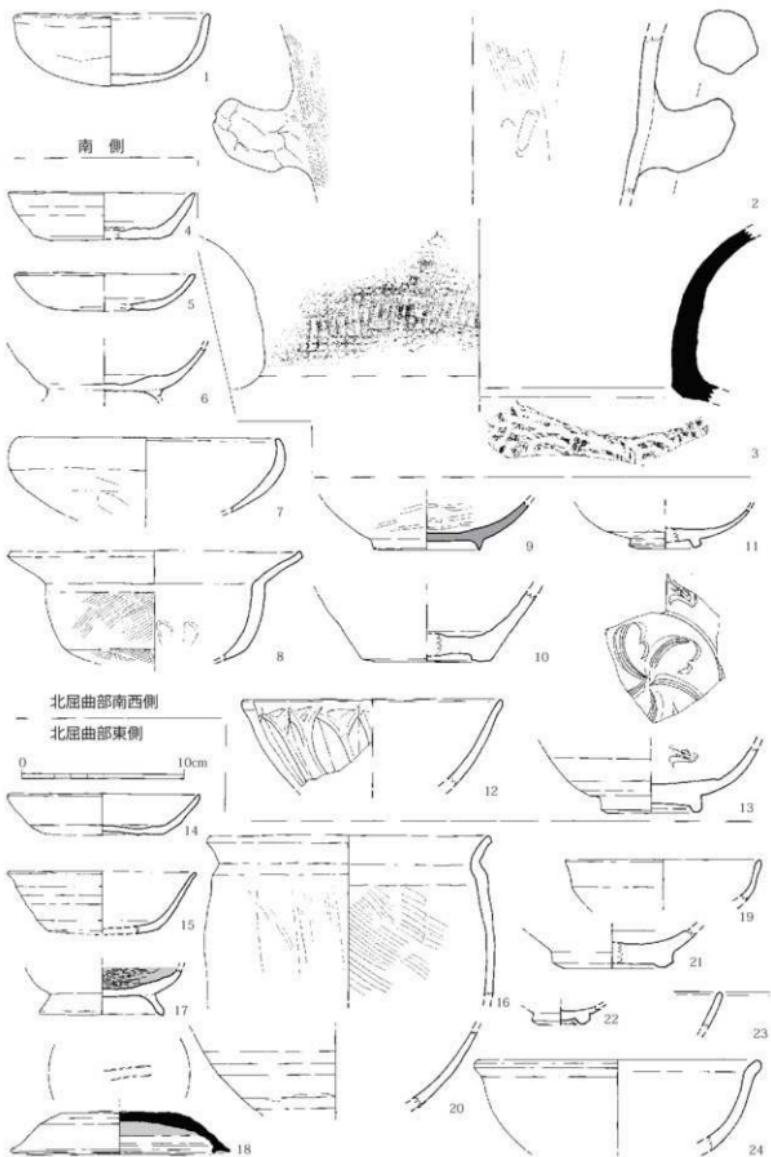
4 - 2号溝は5号溝との交差部周辺でしか確認できておらず、南北両側ともに4 - 1号溝に切られて消失している。幅は60 ~ 70cm前後とみられ、深さは40cm弱と小形である。4 - 2号溝も西側へ広がる包含層を明瞭に切っており、埋土は黒褐色の上層と淡灰褐色の下層が認められる。4 - 3号溝は調査区東壁（j - j'）では50cm以上の深さがあり、4 - 1号溝に切られている点とこの土層が溝の方向軸と直行していない点等を勘案すると幅150cm程度となるとみられ、底面は狭く壁の立ち上がりは非常に緩やかである。（i - i'）のベルト土層では、完全に4 - 1号溝や堆積包含層の下層にあたる位置で確認されている。底面の標高は、（j - j'）で1.6m以上であるのに対し、（i - i'）では1.4m以下と西側へと低くなっている。埋土については、（i - i'）ではグライ化しているものの、（j - j'）では黒灰褐色系・灰褐色系のものからなる。なお、（i - i'）のベルト裏側や周辺で延長している痕跡は把握できておらず、このベルト付近で南へ急激に深くなる4 - 1号溝により切られ消失したとみられる。4 - 2号溝と4 - 3号溝との関係性を直接示す痕跡は無く、包含層の堆積との先後関係も異なる両者であるが、それぞれと切り合いのある包含層間には質の違いが見られ、また包含層の下位面の標高が示すように4 - 3号溝付近は元來の地形が低かったと考えられ、相互の包含層の堆積時期が異なる可能性もある。そして、4 - 2号溝と4 - 3号溝の埋土は近似しており、両者が同時併存した可能性も捨てきれない。

非常に多量の土器類が出土しているが、大半は時期不詳の土器片である。また、混入品が多く、土器器・須恵器・陶磁器等の多様な構成である。自然遺物として複数の松ぼっくりや獸骨が出土している。

#### 出土遺物（図版26、第33図1~24）

3ヶ所の出土地点によって分けて出土土器類等を表示する。1 ~ 3は遺構南西側の（g - g'）付近より南側からの出土、4 ~ 13はその北側で（g - g'）付近から屈曲部にかけての出土、14 ~ 24は北端で屈曲部から東側（4 - 1・4 - 3号溝の切り合い部分）の出土である。

1 ~ 3は遺構南西側からの出土である。1は土器鉢で、口縁端部が非常に短くわずかに開く。器表の磨滅が激しいが、丸底の外底部にはケズリの痕跡がわずかに残る。古墳時代中期の所産とみられ、混入品と考えられる。2は胴部の一部のみが残り、牛角状の把手が付き、土器器皿と考えられる。外面には明瞭に縦ハケが見られるが、内面には微かに縦位のハケが残る。また、目印かもしれません把手の接合時の圧着のためか、把手の接合箇所の内面には強い圧痕が残る。1と同様に混入品



第33図 4号溝出土土器類等実測図 (1/3)

とみられる。3は須恵質の大甕とみられ、口縁部は屈曲して外反しながら開く。口縁部外面には格子タタキが施され、わずかに残る体部の内面には同心円の当て具痕が残る。この資料が遺構の時期を反映している可能性がある。

4～13は( $g - g'$ )付近から屈曲部にかけての遺構北側の出土で、最も幅が広く底が深い部分が含まれており、下層からの出土のものは特記する。4は土師器坏で下層の出土である。内底部はロクロの回転による明瞭な起伏があり、一方で体部にあまり起伏ではなく、外側上方へ直線的に延びてややシャープな端部の口縁である。外底部には糸切り痕とともに外縁に棒状の圧痕が見られる。口径11.5cm、底径8.4cm、器高2.9cmである。5は土師器坏で、口縁部がやや緩やかな立ち上がりの浅い器形である。わずかに残る外底部はナデにより仕上げられたとみられる。口径11.4cm、底径5.8cm、器高2.3cmである。6は土師器焼で、高台が貼付されるが、その下位部は欠失し、口縁部も全体的に欠失している。7は土師器鉢で、体部は上位でやや張る立ち上がりで、口縁部付近のやや内傾する器形となる。外面ともにナデで仕上げられる。古墳時代中期の所産の可能性があり、混入品とみられる。8は土師器鍋で下層出土である。体部外面では上位の立ち上がりは強くなるという明瞭な変化があり、また下位部はわずかしか残存していないが、著しく器壁が薄くなっている。体部外面のハケ調整はこの境の上下で連続していない。口縁部および体部内面は丁寧なナデで仕上げられる。口縁部は明瞭な稜を伴って屈曲し、外側上方へ直線的に延びる。9は瓦器焼で下位部のみが残存する。豊付の鋭い断面三角形の低い高台が貼付され、内面には横位のミガキが残る。10は渴釉陶器の底部破片で下層出土である。長胴の瓶もしくは耳壺と考えられる。低い高台を伴った基筒底状の底部で、体部外面には明瞭に回転ケズリ痕が見られる。内面の底には黒色の付着物が残り、漆等の可能性が考慮される。11は白磁皿の小片で、角状の高台は小さく低い。見込の平坦部分は高台の外側に及んでおり、内湾気味に胴部へと立ち上がる。残存部で見る限り外底部の施釉は高台よりも外側で、高台外の露胎する幅は一定せず、不整な施釉範囲となっている。12は龍泉窯系青磁碗で、外面の片切彫りによる蓮弁文は盛り上がり鎬を有する。13は龍泉窯系青磁碗で下層出土である。胴部内面の文様はわずかしか残存しておらず、見込には片切彫り・櫛目による花文が見られる。豊付や高台内の一帯に薄く釉が付着する。

14～24は遺構北側でも屈曲部から東側の出土である。14は土師器坏で、口縁部はわずかに外反気味であるものの直線的に端部へと至る。外底部は回転ヘラ切りの後にナデを施し、ハケ調整を加えたとみられる。口径11.8cm、底径7.2cm、器高2.5cmである。15は土師器坏で、外面には回転ナデによる起伏が生じており、口縁部へと直線的に立ち上がる。わずかに残る外底部は、回転ケズリの後にナデで仕上げられたとみられる。口径11.6cm、底径6.7cm、器高3.8cmである。16は土師器甕で非常に短い口縁がわずかに開き、その下位はあまりくびれない。口縁端部はわずかに広がって面をなす。外面には粗い板ナデ状の調整が施され、内面には斜位のハケが施される。17は内面が黒色の黒色土器焼で高台が貼付されるがわずかしか残存しておらず、口縁部も欠失する。18はかえりのある須恵器坏蓋で、つまみを伴わない。外天井部は平坦であり体部との境界は比較的明瞭で、残存範囲内に2条の平行する直線のヘラ記号がある。内面天井部の一定範囲が非常に平滑あるが、細かい粒子状の墨痕も確認することができず、転用硯となるかは不明である。19は鉄釉を施した天目碗の口縁部付近の小片である。口縁端部はわずかに外方へ開く。胎土はやや暗い灰褐色で、釉は内外面ともに端部付近は暗茶褐色で、下位で黒褐色を呈する。20は白磁碗の胴部とみられ、胎

土は灰白色で釉は灰色味をおびる。外面の下方は釉が途切れて露胎し、内面には途切れるものの非常に細い沈線があり、圍線として施された可能性がある。21は白磁碗の底部破片である。残存部の外面は全て露胎する。内面では見込とわずかに残存する体部との境に小さな段がある。22は白磁皿の底部付近のみの破片である。高台は非常に低く、また径も小さく、残存する外面は全体的に露胎する。黄色味のある類品もあるが、本例はそうではない。23は青磁碗の口縁部小片で、体部の立ち上がりのまま口縁端部に至る直口縁とみられる。胎土は淡灰褐色で青味の強い緑色釉が施される。24は青磁碗の破片で、口縁部がわずかに屈曲して開く。非常に厚手で、釉は淡緑色で器表には細かい凹凸が非常に目立つ特徴がある。

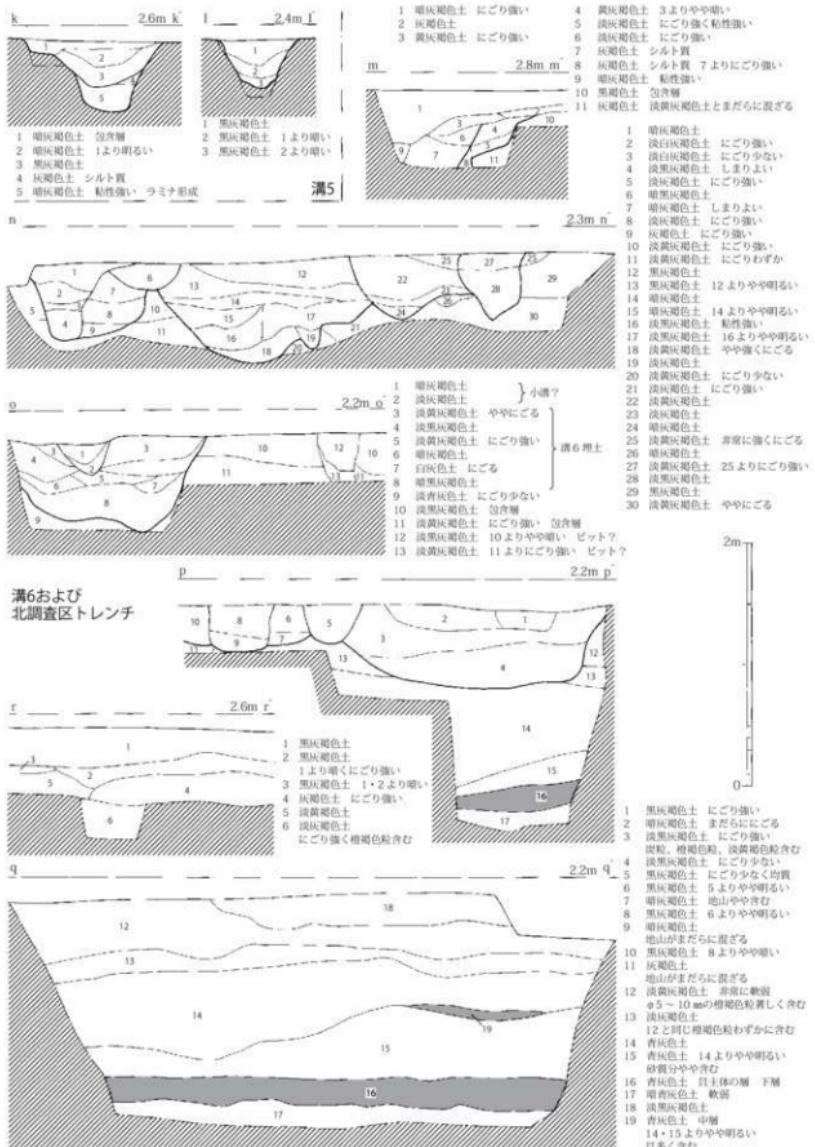
#### 5号溝（図版17・19、第34図）

南調査区の中央よりもやや北側で調査区を横断する溝で、方向軸は東西よりもやや北西-南東側へ振れており、またわずかに渕曲気味である。東側は調査区外へ延び、西側は調査区西端の包含層中に設けたトレチにより途切れており、その西側への延長部分を確認するために調査区西壁を兼ねるトレチ壁面を精査したが、包含層を切り込む溝の掘方は認められなかった。包含層堆積前の低位地形に至って溝の終点となっていた可能性がある。20号土坑のやや北側を通り、4号溝に切られる。調査区東壁（k-k'）では幅90cm程度、深さ50cm程度で底面の標高は1.9m前後である。一方西側の（l-l'）ベルト土層では、幅60cm強、深さ40cm程度と縮小していくが、底面の標高は1.9mよりわずかに低い程度とあまり大きな差は生じていない。壁の立ち上がりは概ね急な傾斜である。埋土については、調査区東壁（k-k'）では暗灰褐色と黒灰褐色が主体であるのに対し、（l-l'）では、黒灰褐色のみとなっている。出土遺物は多様である。

#### 出土遺物（図版26、第35図1~21）

1~6は土師器小皿で、器表の磨減が著しい3以外は外底部に糸切り痕が認められる。1の口縁部は短く立ち上がり、口径8.6cm、底径6.0cm、器高1.6cmである。2の口縁部の立ち上がりは緩やかで低い器形である。外底部の糸切り痕は粗い。口径7.9cm、底径5.1cm、器高2.5cmである。3の口縁部は短く立ち上がる。口径9.0cm、底径5.8cm、器高2.3cmである。4はほぼ完形で、体部は中途で立ち上がりが強くなる。口径9.1cm、底径6.2cm、器高2.0cmである。5は底部のみが残存し、底径4.1cmである。6の見込には回転ナデにより渕状の起伏があり、底径4.9cmである。7は土師器壊で、体部は直線的に延び、ロクロ挽きのためか内面で起伏が目立つのにに対し、外面ではほとんど起伏がない。器表の磨減が激しいが、外底部には微かに糸切り痕が残る。口径9.2cm、底径5.8cmで器高3.0cmである。8は土師器壊で底部付近のみが残存する。見込みには回転ナデによる渕状の起伏が連続し、外底部には糸切り痕が見られる。底径5.8cmである。

9は瓦質土器擂鉢の口縁部付近で、端部は明瞭な面をなし片口が部分的に残る。外面はナデによる仕上げ、煤の付着や磨減によりハケは部分的にしか確認できない。一方内面は、非常に密にハケ調整され、擂り目もわずかながら残存する。10は堅緻な焼成の瓦質土器擂鉢で、上半部とほとんどの底部は残存しない。外面は細かい起伏が目立ち、ナデで仕上げられるようであるが、部分的にハケが残る。内面は9本1単位程度の擂り目が密に施されるが、体部の下端から3cm程度までの擂り目の磨耗が著しい。11は瓦質土器茶釜で、非常に短い口縁部は屈曲して上方へ延び、端部は明瞭な面をなす。吊り下げ用の穿孔のある把手が1ヶ所に残り、口縁部内面に細かいハケが残る。12



第34図 5・6号溝および北調査区内トレンチ土層実測図 (1/40)

は瓦質土器火鉢の底部付近で、脚が1ヶ所に残り、計3ヶ所に復元されるとみられる。全体に粗いハケによる調整が目立つが、底部内面や体部下端にわずかに細かいハケ調整が見られる。13は瓦質土器鍋で口縁部および上位部分のみ残存する。体部は直線的に延びて口縁部へ至る。外面は部分的にハケが見られ、煤の付着が著しく、内面は非常に密に横位のハケが施される。残存部位の下端付近は、上位部分より急に器壁が薄くなる。

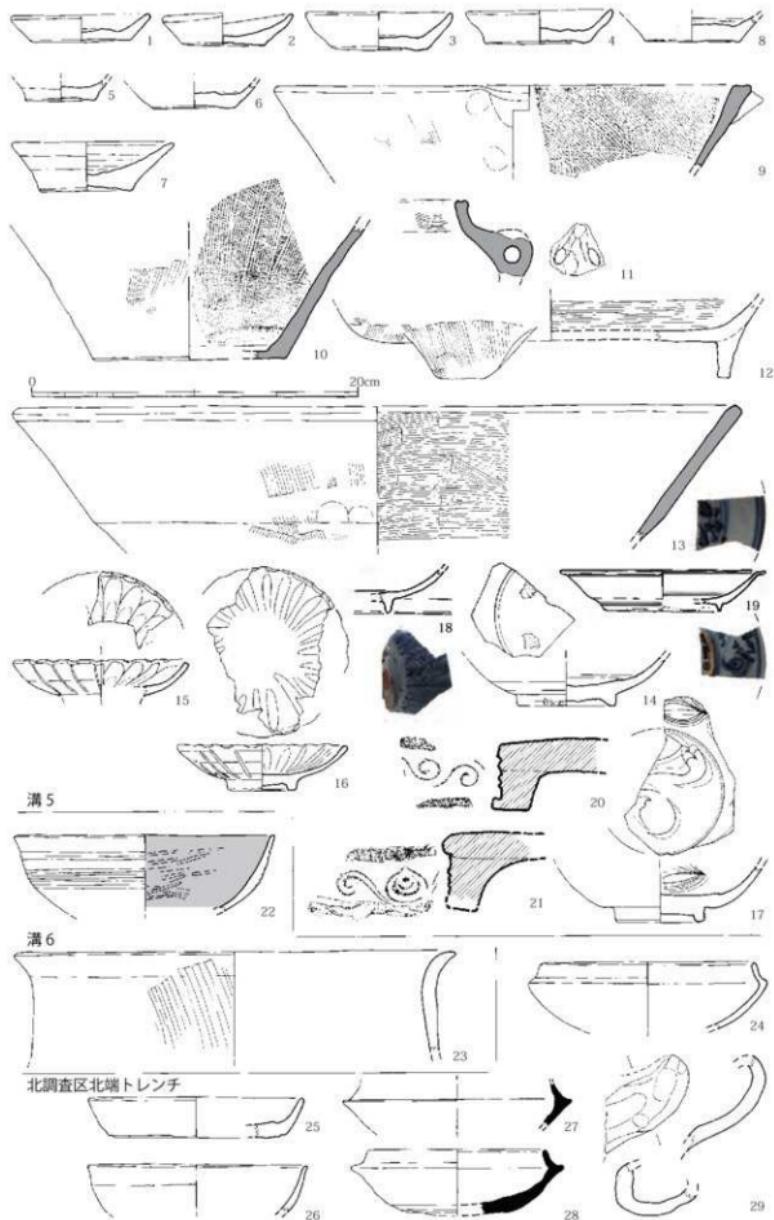
14は朝鮮産の粉引とみられ、見込から体部へは明瞭な棱のある段を経て移行する。胎土はやや緑色味をおびた淡灰褐色で、釉は淡黄緑色を呈する。高台内を含め、残存部は全面に施釉され、見込および疊付に砂目の痕跡が明瞭に残る。15・16は（青）白磁の菊皿とみられ、ともに胎土は陶質である。16はやや黄色味をおびた釉であるのに対し、15は淡緑色の釉色である。花弁を表現するにあたり、15では内面の窪みが幅広、外面では細かい沈線であるのに対し、16は15よりも内面の窪みは狭く、外面の沈線は幅広である。なお、それらの個々の施文について、15では花弁をなす波状の口唇部の各単位と対応しているのに対し、16では花弁の各単位と対応していない。よって16の方が粗雑なつくりと言える。16の疊付と高台内は基本的に露胎するが、疊付には重ね焼きで融着したとみられる釉が残る。白磁の菊皿の類例は少ないとみられるが、博多遺跡群124次調査SK236から類似資料が出土している。ただ、この博多出土例は疊付が尖り気味であるのに対し、16の疊付は平坦面をなす。17は龍泉窯系青磁碗で、疊付や高台内の一端には薄く付着した釉が残る。わずかに残る体部の内面には櫛目の文様が見られ、見込には片切彫りによる文様が残る。18は青花碗（C I）で、外面胴部には芭蕉葉文が見られ、見込にはわずかに文様が残るが判別できない。疊付部分のみ釉剥ぎにより露胎し、尖った形状となる。19は青花皿（B VII）で、口縁部は短く外反して開く。疊付のみ釉剥ぎにより露胎する。外面には口縁部下と高台部分に界線が廻り、その間を占める文様は唐草文とみられる。内面には口縁部と見込に界線が廻り、見込にわずかに残る文様は玉取獅子の可能性がある。

20・21は軒平瓦で、20が淡灰褐色で硬質であるのに対し、21は淡黄茶褐色でやや軟質である。瓦当文については、20には小型均整唐草文が残り、21には中央の宝珠文と小型均整唐草文が残る。それぞれ文様の突出は小さい。

## 6号溝（図版20、第34図）

南調査区の北東端の隅において、トレンチおよび調査区壁の土層（m - m'）から溝の片側の落ち込みが認められた。この溝を検出作業によって平面的に確認したところ、調査区北壁の中央付近で途切れていた。なお、この土層では、掘り返しが想定される堆積状況が認められる。

一方で、北調査区は小さな上に調査面で地山と考えられる部分がほとんど無く、土質の差異の境界は検出作業で確認できる部分はあるものの、どちらが上層にあたるかも判断しかねる状況であった。そのため、この調査区内では掘削したトレンチの土層から遺構や包含層の分布や相関を把握することとした。その結果、当初の想定以上に多数の遺構とみられる掘方と包含層が複雑に切り合う様相が認められた。個別の遺構を平面的に把握するのは困難で、3ヶ所のトレンチの土層（n - n'・o - o'・p - p'）の間の相関性も多くの場合は認められなかった。その中で、土層中の掘方の位置・大きさ・形状と平面的に検出した土質の差異のラインから総合的に相関性を見出せるものとして、1条の溝の存在と連続性についてはほぼ間違ないと判断した。



第35図 5・6号溝および北調査区北端トレンチ出土土器類等実測図 (1/3)

北調査区で把握した溝は、南北からやや北東-南西側に振れた軸で調査区内を縦貫しており、両端はそれぞれ南北の調査区外へ延びているとみられる。その南側を軸上に延長すると、先述の南調査区北端部の溝の途切れる位置とほぼ対応しているため、南調査区北端の溝は屈曲して北調査区内の溝へと連続している可能性が高い。これらの南北調査区にまたがる溝を一括して6号溝とする。北調査区では、トレンチの土層から部分的ながら溝の幅を170~200cm以上と想定できる。一方、南調査区では片側の上端しか検出していないため幅の想定は難しいが、土層(m-m')で最深部から片側の上端間の幅を反転して倍と捉え、溝の方向軸と直行する幅で補正すると300cm程度とみることもできる。深さは70~80cm程度で、底面の標高は南調査区の確認できる範囲で1.5m弱、北調査区の3ヶ所のトレンチでは1.2~1.3mとなっている。埋土については、黒灰褐色系、暗灰褐色系のものが主体で、地山に近似する黄灰褐色系や灰褐色の明色系の層も見られる。

南調査区内からの出土遺物は非常にわずかで、掘削部分多くがこの遺構にかかる北調査区北端トレンチの出土遺物も併せて図示する。

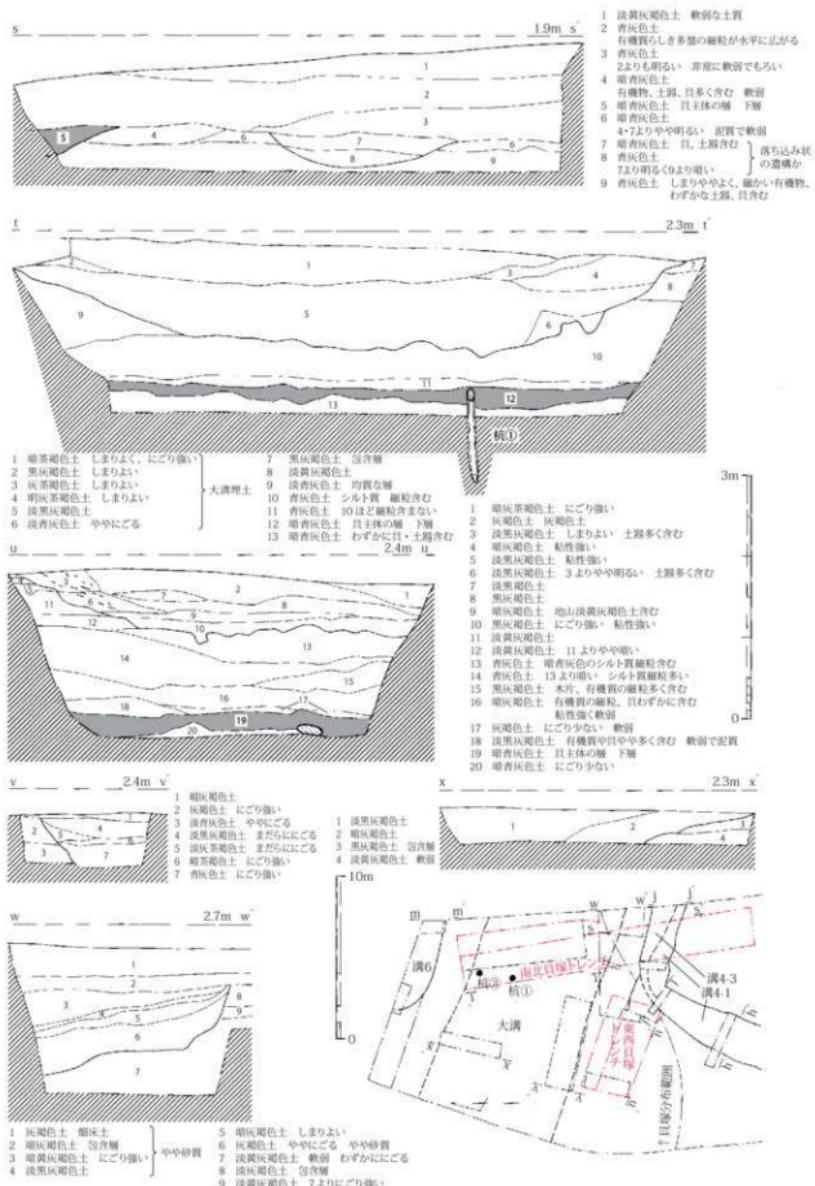
#### 出土土器類等(図版26、第26図22~29)

22・23は南調査区中のわずかな遺構の範囲内から出土したものである。22は黒色土器塊で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はごくわずかに外反気味に変化して開く。内面に加え外面も口縁部付近は黒色であるが、基本的に「内黒」の範疇のものである。23は土師器壺で上位部分のみ残存し、屈曲して短い口縁部はわずかに開く。外面には粗いハケ調整が残る一方、内面はナデによる調整とみられる。胎土には長石を主に多量の砂粒が含まれる。

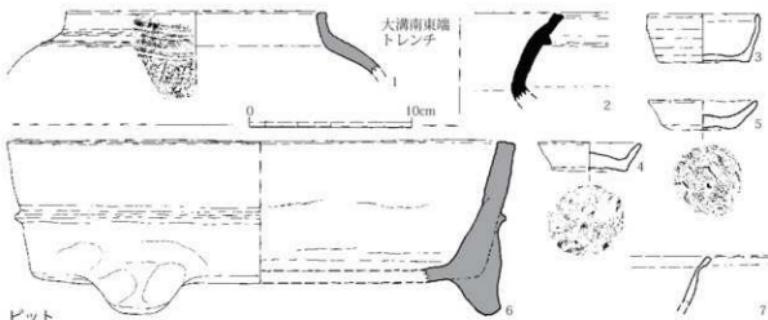
24~29は、北調査区の北端のトレンチからの出土遺物で、遺構外の包含層から出土したものも含まれる。24は須恵器を模倣した土師器壺で、蓋受けの突出がしっかりしている。器表の磨滅が著しいが、部分的に漆塗りによるみられる黒色化の影響がわずかに残る。25は土師器壺の小片で、体部は短く立ち上がる。わずかに残存する外底部には糸切り痕が見られる。口径13.2cm、底径10.1cm、器高24cmである。26は土師器鉢の口縁部で、端部は非常に薄く、また非常にわずかに外反気味に仕上げられる。27は須恵器壺身で、口縁の立ち上がりはやや短く端部は残存していない。蓋受け部は短く端部は丸くおさめられる。28は須恵器壺身で、回転ケズリの範囲はわずかで、底部が非常に狭くナデで仕上げられる。口縁部は短く、端部は丸みをもって仕上げられ、蓋受け部はほとんど窪まない。29の外形は土師器の瓶把手に似た形状であるが、その半分の状態に欠損しており、また中空である。開口部には剥離の痕跡があり、何らかの本体部分へ貼り付けていたとみられる。

#### 大溝(図版21、第36図)

南調査区北半では、4号溝を境にその北および西側の調査面で基盤層が確認できず、ほぼ全面的に包含層が堆積していると想定された。そこで、調査区東壁際の4号溝よりやや北側の位置でトレンチ状に掘削したところ、掘り込んだ可能性のある急激な落ち込みが確認された(w-w')。また、下層の貝塚調査のため掘削したトレンチの土層(t-t')でも確認したところ、南北両側で立ち上がる溝状の断面が確認された。この落ち込みの西側へ連続する方向を捉えるためトレンチを掘削し、(v-v')・(x-x')の土層中の落ち込みから、それぞれ南北の上端とみられる部分を確認した。(t-t')・(v-v')・(w-w')・(x-x')の各土層から得られた上端の位置を総合すると、その方向軸は北西-南東に近く、1・4号溝の一部、5号溝ともほぼ共通するものとなっている。



第36図 南調査区北部の略図およびトレンチ土層実測図（略図：1/300、土層：1/60）



第37図 大溝およびピット出土土器類等実測図 (1/3)

( $t - t'$ ) の土層は、この溝の方向軸と直交に近くではなく、実際よりもやや幅広で壁の傾斜もやや緩やかとなっている。先述した全体の方向軸に合わせて捉えると、幅は 8 ~ 8.5m 程度、深さは 120 cm 程度で、底面の標高は 0.8 ~ 1m 前後となっている。壁の立ち上がりは、( $v - v'$ )・( $w - w'$ ) の上端で急な傾斜部分が残っている。埋土については、暗茶褐色系、灰褐色系、灰茶褐色系、淡黒灰褐色系を主体として多様で、土層を確認したトレンチ位置によってその傾向も異なっている。非常に幅広なため谷状に落ち込む自然地形とも考えられたが、包含層を切る掘方から人為的な掘削を伴うのは明瞭である。また、部分的な掘削とは言え、これだけの規模の溝にもかかわらず底面をはじめ帰属遺物がほとんどないのは特異であり、溝浚い等が行われた可能性がある。多くの小形の溝とは、方向軸がほぼ同一もしくは直交に近いため、遺物による同時期性の証左はないものの、相關性が見込まれる。調査区内のこの遺構の南東隅にあたり、調査区東側壁と接する南端の位置にあるトレンチから瓦質土器が 1 点出土しているが、遺構の時期を反映するものかは不明である。

#### 出土土器類等 (第37図1)

1 は瓦質土器茶釜の小片で、口縁部は屈曲して短く上方へ延び端部は面をなす。肩部外面には浅い沈線状の凹みが廻るようであるが、工具痕として部分的に残った可能性もある。その下位には印刻によるとみられる文様が残る。

#### ピット出土の土器類等 (図版27、第37図2~7)

2 はピット 125 出土で須恵器壺の口縁部である。外面には断面三角形の突帯が廻り、開いていく口縁部の立ち上がりは、この突帯部分からやや変化する。端部は明瞭な面をなし、わずかに窪む。3 はピット 48 出土の土師器小鉢である。体部はさほど開かずに立ち上がり、外面には回転ナデによる起伏が目立つ。底部には糸切り痕が見られる。口径 6.8 cm、底径 5.5 cm、器高 3.0 cm である。4 はピット 20 出土の土師器小皿で、見込中央部が厚くやや厚く突出する。外底部には、糸切り痕が残るとともに外縁の対称位置 2ヶ所に小さな圧痕が見られる。口径 6.3 cm、底径 4.7 cm、器高 1.7 cm である。5 はピット 108 出土の土師器小皿で、糸切り痕とともに外底部に見られる棒状の強い圧痕のために歪む。口径 6.5 cm、底径 4.0 cm、器高 1.6 cm である。6 はピット 21 出土の瓦質土器火鉢で、体部はやや外側の上方へほぼ直線的に延び、直口縁である。底部に付された脚が残っており、計 3ヶ

所に付されるものと復原される。外面は器表の剥落が著しく、文様や調整を確認することできず、中位に細い突帯が廻る。内面は非常に平滑で、ナデが丁寧に施された可能性があり、また煤の付着とみられる黒色部分があるが、断面にも黒色範囲が及んでいるため、火鉢としての使用の影響かは検討をする。7はピット54出土の龍泉窯系青磁碗の口縁部である。口縁端部は玉縁状にやや外方へ肥厚するとともに、屈曲してやや開く。灰白色の胎土は堅緻で不純物をほとんど含まず、淡緑色の釉がやや厚く施される。

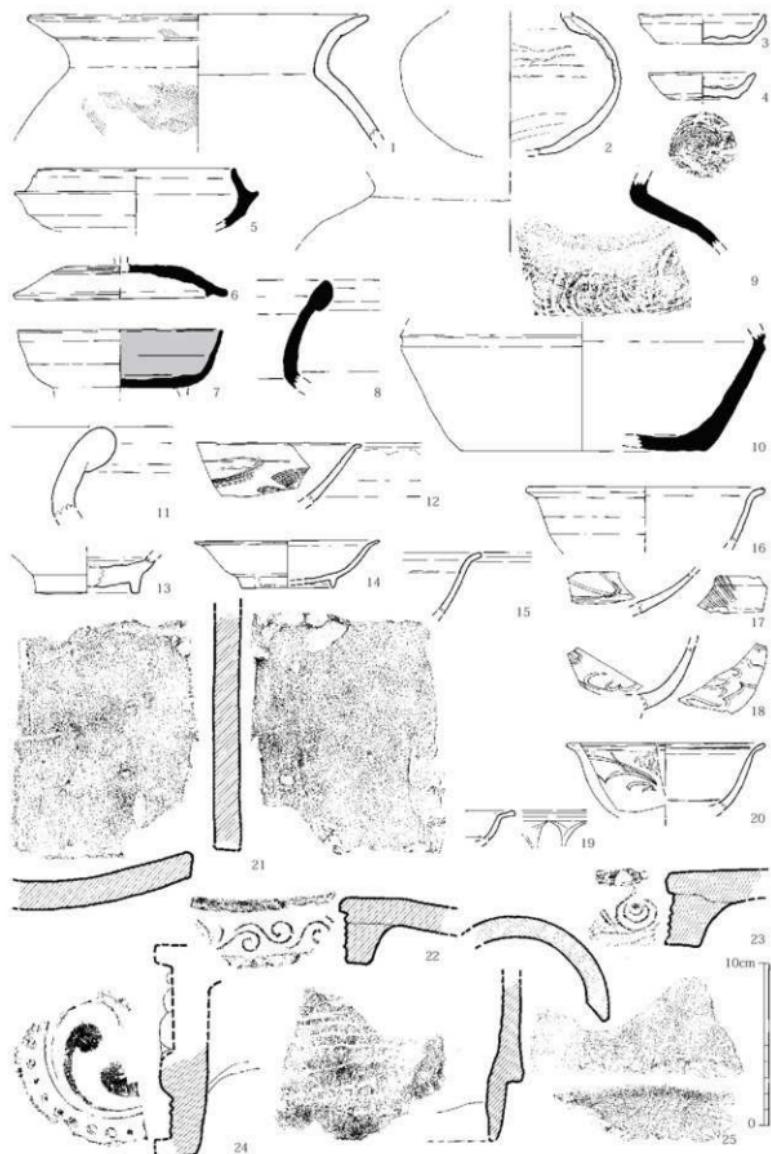
#### 上層南調査区包含層出土の土器類等（図版27、第38・39図1～27）

南調査区の4号溝の北および西側には包含層が広がるが、そこから出土した土器類を列記する。なお、包含層を切り込んで掘削されたものの、調査で検出できなかった遺構からの出土遺物や、大溝の推定ライン内のトレンチからの出土で大溝の帰属となる遺物が含まれる可能性があることを考慮しなければならない。

1は土師器壺で、下半は残存していない。頸基部の屈曲は強く、口縁はやや強く外反して開き、端部は丸みをもって收められる。口縁部は内外ともに横ナデで仕上げられ、胴部の外面にはハケ、内面にはケズリが施される。2は土師器壺とみられ、偏球形の体部で、頸基部の接合部はわずかに残るが口頭部は欠失し、直口の長頸になる可能性がある。内面には強いナデや肩部の接合痕が確認できる。一方で、外面の磨滅・剥落が著しく、粘土粒が付着する部分があるものの有意なものは不明で、また橙褐色や黒褐色の部分があるが、2次的な被熱、煤の付着、顔料の塗布等の判断はし難い。3・4はともに土師器小皿で、底部には糸切り痕が見られる。3は口縁部付近で立ち上がりが変化し、口径7.8cm、底径5.3cm、器高1.9cmである。4はやや突出気味の底部で、その外面には棒状の圧痕が残る。口径6.5cm、底径4.0cm、器高1.6cmである。

5は須恵器壺身で、口縁部はやや長いとともに厚手で、あまり内傾せずに立ち上がる。残存部が蓋受け部より下位でわずかながら、底部の回転ケズリが認められ、広い範囲で施されたとみられる。6は須恵器壺蓋で、欠失した法珠つまみの付された痕跡が残存部の端にある。口縁部はやや厚く丸みもって收められており、小さなかえりが付される。天井部は強い回転ナデによる調整が施される。7は須恵器壺身で、高台を有していたが、完全に剥落しており、接合痕のみ残る。この外底部には灰被りする。体部はさほど開かず上方へ延び、口縁端部も変化せずほぼ上方へ開く。内面は黒色で、中心付近が平滑で観として用いられた可能性がある。8は須恵器壺の口縁部で、外反気味に開くとともに端部は玉縁状に肥厚する。外外面ともにナデ調整のみが認められる。9は須恵器壺の肩部で、外面は厚い灰被りで灰白色を呈し、内面には同心円の当て具痕が見られる。10は平底の須恵器鉢で上位は失われており、底部と体部の境に明瞭な稜を伴う。外面は丁寧なナデで仕上げられる。残存する上端には、外面の太い沈線状の痕跡と器形が屈曲する様相が認められる。

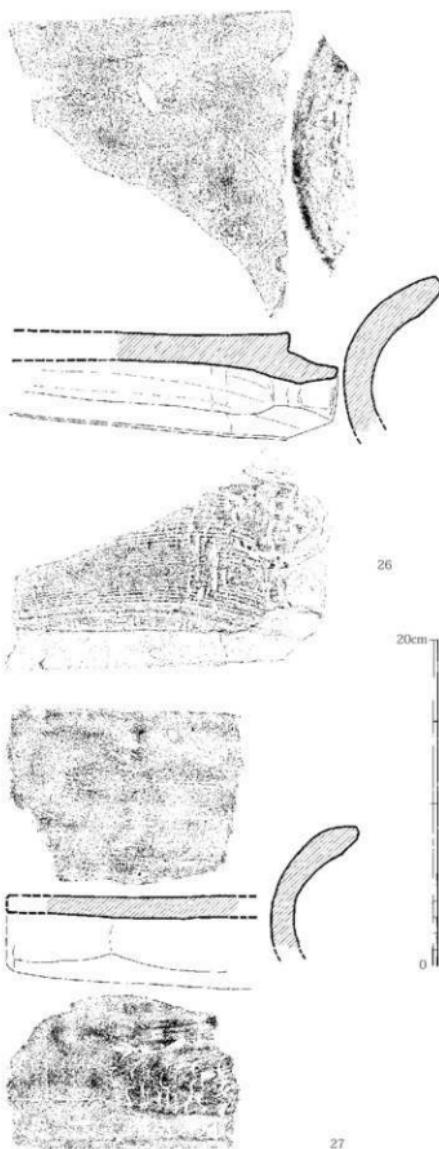
11は陶器大甕の口縁部で、外反気味に開くとともに端部は玉縁状に肥厚する。備前焼とみられる。12は白磁碗で上半の一部のみが残存する。口縁端部は屈折して短く外側方へ延び、内面には柳目文が施される。13は白磁碗の底部付近のみ破片で、残存部の外面は露胎しており、内面見込においては釉が環状に搔き取られている。14は景德鎮窯系白磁皿で、口縁部は外反して開き、高台は小さく疊付は釉剥ぎにより露胎する。釉は透明度が低く白濁しており、光沢度が低い特徴があり、粗悪品と考えられる。15は龍泉窯系青磁碗で、口縁部は外反して開き、内面にはわずかに界線が残る。16



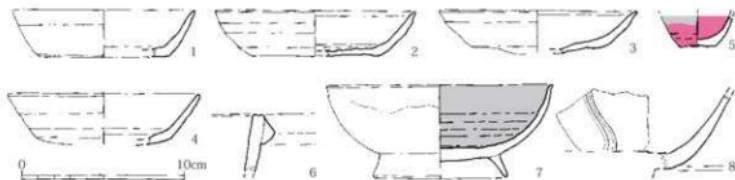
第38図 南調査区包含層出土土器類等実測図① (1/3)

は青磁碗の上位部の破片で、口縁部は外反して開く。非常に厚手で、残存部に文様は見られない。17は同安窯系青磁碗の小片で、外面の下端に露胎部が残る。外面に綫の櫛目文、内面にヘラ状工具による施文が残る。18は龍泉窯系青磁大鉢の小片とみられ、外面に花文が見られ、内面にもわずかに文様が残る。19は龍泉窯系青磁皿の小片で、強く屈曲して外反する口折れ口縁である。外面には、ヘラ彫りによる蓮弁文が残る。20は青磁染付碗で、口縁部は外反して開く。青磁の外面には草花状の文様が見られ、染付の内面にはやや不明瞭な界線が見られる。

21は大溝の想定範囲中のトレーナーからの出土である。平瓦で大きく欠損し、片側の側縁と広端面がわずかに残る。広端面はヘラにより面取りされ、側縁はヘラ切り後ナデにより仕上げられる。凸面側はハナレ砂の痕跡が目立ち、ヘラナデや綫目タタキの痕跡もわずかに見られる。凹面側はナデにより仕上げられるとみられる。22は軒平瓦の小片で瓦当文に小型均整唐草文が見られ、宝珠文もわずかながら残る。瓦当の上面部はヘラにより面取りされ、平瓦部の凹面側には板ナデで調整される。凸面側には瓦当接続のためヘラナデが見られる。23は軒平瓦の小片で瓦当文に宝珠文が見られる。24は軒丸瓦で大きく欠損するが、左巻き三ツ巴文と珠文の瓦当文が認められる。巴文の尾部は長く伸び、巴文と珠文の間には突線により区画される。25は丸瓦で大きく欠損するが、玉縁部分が残存する。凸面側はナデ調整され、凹面側には布目痕が見られる。26は大溝の想定範囲中のトレーナーからの出土である。丸瓦で側端部とその凹面側隣接部、玉縁の凹面・



第39図 南調査区包含層出土土器類等実測図② (1/3)



第40図 南調査区包含層中西端トレンチ出土土器類等実測図（1/3）

各側面および玉縁の接合される丸瓦部端部は、それぞれヘラにより面取りされる。凸面側はヘラナデされ、わずかに縄目タタキが残る。凹面側には粗いハケ調整が施される中わずかに布目痕が残る。27は丸瓦で側端部とその凹面側隣接部はヘラにより面取りされる。凸面側はヘラナデされ、わずかに縄目タタキが残る。凹面側には部分的に布目痕が残るが、ヘラナデにより消える部分が多い。

#### 南調査区包含層中西端トレンチ出土の土器類等（図版27、第40図1～8）

南調査区の包含層中でも、南側の4号溝の西隣の調査区壁際に設けたトレンチからの出土土器類等を列記する。

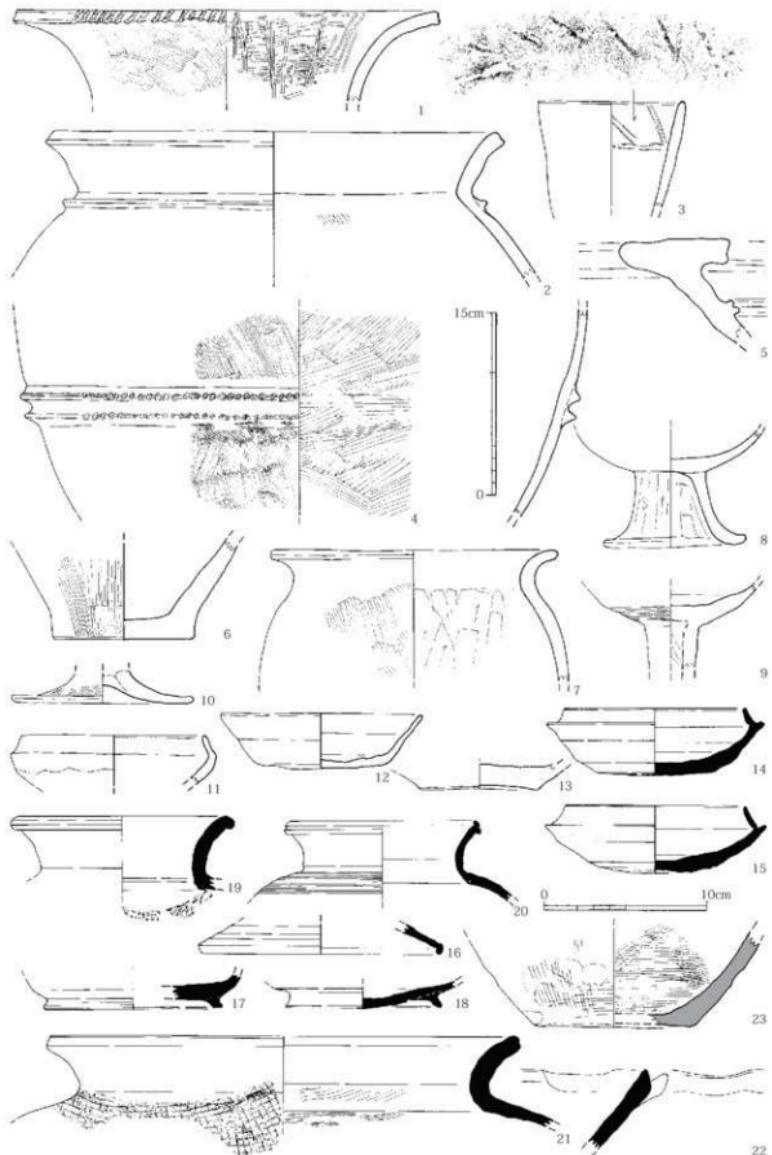
1～4は土師器坏で、底部調整の不明な4以外は全て糸切り痕が見られる。1の体部はわずかに内清気味であるがほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は非常に薄く仕上げられる。口径11.2cm、底径8.0cm、器高2.9cmである。2の口縁端部は薄く鋭く仕上げられる。見込にはロクロ回転により明瞭な起伏が生じる。口径12.3cm、底径8.0cm、器高2.8cmである。3の口縁端部は薄く鋭く仕上げられる。外底部には糸切り痕とともに板状圧痕が見られる。口径12.1cm、底径8.0cm、器高2.5cmである。4の体部は直線的に斜め上方へ延びる。外面は回転ナデによる器壁の起伏が見られる。口径11.9cm、底径6.6cm、器高3.1cmである。5は非常に小形の土師器小壺で、上位部は欠失する。外底部には糸切り痕が見られる。内面には赤褐色、外面では下半に茶褐色、上半に黒褐色とそれぞれ顔料の付着がみられる。蛍光X線による分析の結果、内面にはFeの反応は際立つもの他箇所でも同様のため胎土に起因するとみられる。一方でHgの反応とともに、顕微鏡による観察で水銀朱と確認され、紅を内包した容器と考えられる。6は土師器鍋の口縁部小片で、端部外面には断面三角形状の突帯が貼付される。突帯頂部から下位において煤の付着が顕著である。7は黒色土器塊で、黒色部分が外面の口縁端部付近にも及ぶものの、「内黒」の範疇である。口唇部は残存しないが、端部はわずかに外反して開く。貼付される高台は直線的に下位外方へ延びる。高台内には板状圧痕が見られる。8は龍泉窯系青磁碗で、内面に雲文がわずかに残る。

#### 北調査区包含層出土の土器類等（図版27、第41図1～23）

1は弥生土器壺もしくは方形の透かし孔を伴う器台の口縁部付近である。口縁部は外反しながら開き、端部にはハケ工具の端部によるとみられる粗いキザミが施される。外面にはハケ調整が施され、内面には細かい横位のハケの後に放射状に暗文が施される。2は弥生土器壺で、頭基部の屈曲は強く、内面では明瞭な稜が廻る。口縁部はわずかに外反気味に外側上方へ延び端部は明瞭な面をなす。頭基部のやや断面三角形の突帯が廻る。残存部の器表にはナデ調整が見られる。3は弥生土

器の長頸壺の口頸部で、あまり広がらず上方へ延びる直口縁である。器表の磨減が著しいが、内面の口縁部下に左上がりに斜行する突帶がほぼ等間隔に並ぶ。文様か工具痕かは判然としない。4は弥生土器の大型壺の胴部下位の破片である。2条の突帶には、ハケ工具の端部によるとみられるキザミが密に付される。内面には粗い横位のハケが目立ち、その後の調整単位と認められる右上方へのハケ調整が、残存部の上端付近に残る。なお、突帶下位付近のハケは一部突帶にも及んでおり、貼付後にも調整を施していると認識できる。5は弥生土器の壺棺に用いる大型壺の口縁部で、端部は内外両側に延びて上面は広い幅を有する。内向きの端部は丸く取められるのに対し、外向きの端部は強いナデによってやや窪んだ面をなす。口縁下の外面には断面M字状の小さな突帶が廻る。6はやや大形の弥生土器壺で、底部付近のみが残存する。平底で中期の所産である。外面は密にハケ調整され、内面は炭化物の付着により全体的に黒褐色となっている。7は古代の土師器壺で、なで肩の器形で口縁部は強く外反して開く。胴部外面には継位のハケ、内部には継位のケズリが施される。8は古墳時代の土師器高坏で、脚部はやや低く、特に坏部の欠損が大きい。脚柱部外面には継位で連続して面取りされ、脚柱部内面には横位のケズリが施され、その下端では明瞭な棱を伴い、裾部へと屈曲して広がる。9は土師器高坏で、この時期同様の形状の須恵器も存在し、焼成に問題のあった須恵器の可能性も残る。接合部付近に残る脚部は細く、坏部外面にはカキ目が廻る。10は弥生土器の高坏の非常に低い脚部で、坏部との接合部から剥離しており、接合時に輪状であったところに下方から粘土を充填しているとみられる。外面にはわずかに細かい継位のハケが残り、裾部はわずかに上方へ反り返る。11は須恵器を模倣した土師器蓋坏の坏身で、蓋受の名残である底部から口縁部への外面の屈曲が非常に丸みを帯びている。口縁部は内傾して立ち上がり、器表の磨減が激しい。12は土師器坏で、体部は中位でわずかに屈曲して広がり口縁部へと至る。外底部には回転ケズリが施され、外縁付近はその後ナデ調整される。口径12.4cm、底径7.6cm、器高33cmである。

14は須恵器坏身で、口縁部・蓋受け部とともに短く端部は丸みが強い。口縁部は外反しながら延び、端部はほぼ直上を向く。外底部は回転ケズリの後にナデ調整され、一定の安定した平坦性がある。15は須恵器坏身で、口縁部と蓋受け部はともにやや丸みのある端部である。底部付近にのみ回転ケズリが施される。16は小片で全体形は判然としないが、径や形状から須恵器蓋の口縁部の可能性が高い。直線的に外方へ延びてから端部は非常に短く屈曲し、丸みをもって収まる。17は須恵器坏身の底部片で、内面は灰茶褐色を呈し、外面は表面の剥落が多い中で自然釉の付着が目立つ。高台は外底部の外縁に貼付され、端部が外方へやや突出する。18は須恵器坏身の底部片で、高台が貼付される。底部は内外面ともに中心部が最も低く、外方へ徐々に高くなる器形で、また高台内には回転ケズリ痕が明瞭に残る。19は須恵器壺の口頸部で、屈曲の強い頸基部から外反しながら開いて口縁部へと至る。口縁端部は外方へやや突出するように收められ、強い丸みをもつとともに突出部の下端には狭い隙間が生じている。狭ながら残存する肩部内面には、わずかに当て具痕が認められる。20は須恵器壺であり、カキ目の廻る肩の張った器形である。強く屈曲する頸基部から口縁部へとわずかに外反して開く。口縁端部は外側へと肥厚した部分に沈線が廻り、内面は上端近くで上方へ屈曲して口唇部は尖り気味である。広い範囲で橙褐色を呈しており、2次的に被熱した可能性がある。21は須恵器のやや大型の壺で口縁部から肩部にかけて残存する。頸基部では強く屈曲し、短い口縁部が外反して開き、端部は面をなして収まる。胴部の外面には格子タタキが施され、内面には頸基部から下位でハケが施される。22は東播系須恵器の片口の鉢の片口・口縁部



第41図 北調査区包含層出土土器類等実測図 (4は1/4、他は1/3)

付近である。口縁端部は断面三角形状に肥厚して、外側へ向け面をなす。残存部にみられる調整はナデである。23は瓦質土器鉢で、底部と体部下部付近のみが残存する。内面に非常に密にハケが施され、外面にはナデが施される中で縦ハケが部分的に残存し、下端部には横ハケが廻る。一定程度の幅をもって残存するものの描目がないため、捏鉢とみられる。

## ②下層の調査

### 貝塚調査の概要

南調査区では確認調査時に3ヶ所のトレンチが南北に列なって掘削された中で、北側のトレンチの低位部において貝塚の存在が確認されていた。そのため、本調査の実施にあたり、上層の遺構の調査後に下層の貝塚の調査を実施することとした。ただ、調査期間の制約とともに、軟弱粘質土中の低位でしかも近接してクリークが通っていることもあり、湧水と壁の崩落が著しく、トレンチ状の掘削による限られた範囲での調査に留めざるを得ず、湧水をポンプアップしながらの作業であった。

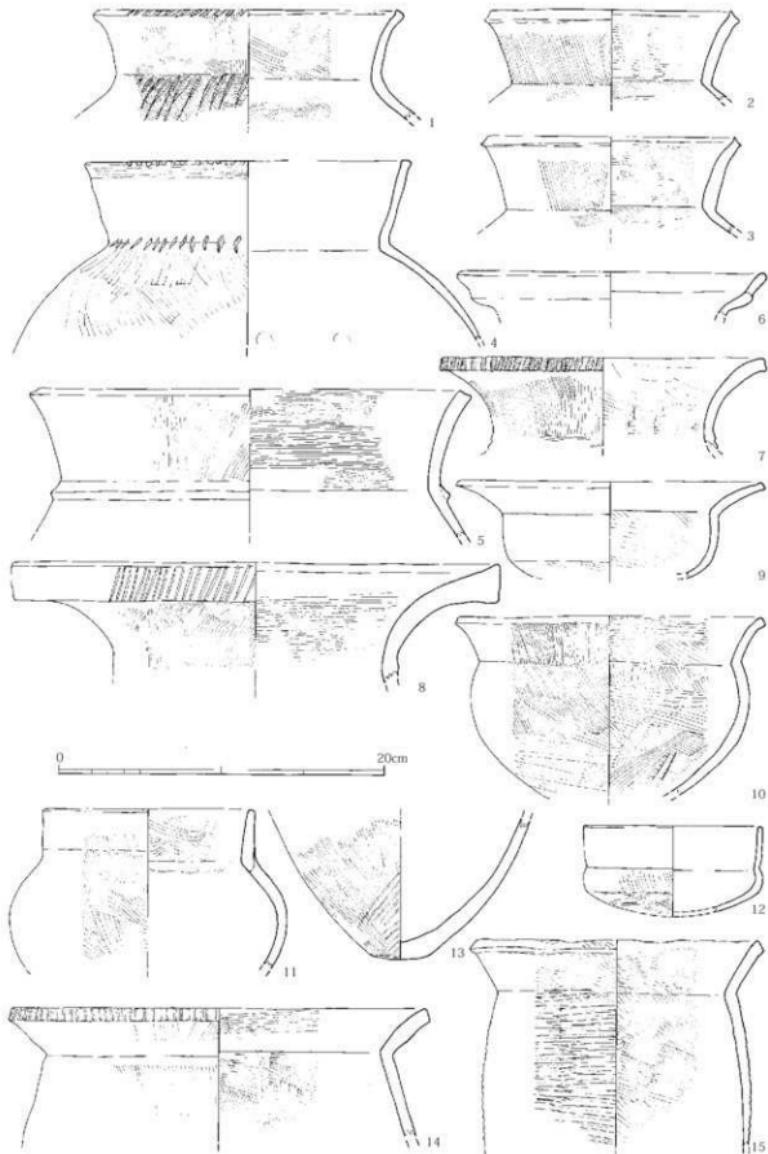
貝塚の調査で掘削したトレンチは3ヶ所あり、北調査区の1ヶ所を北調査区貝塚トレンチと呼称し、南調査区北半の2ヶ所のうち東側の南北に長いものを南北貝塚トレンチ、西側のやや東西に長いトレンチを東西貝塚トレンチと呼称する。これらのトレンチは深く、また軟弱土質のため、滲水の影響による壁面崩落の防止や作業スペース確保の必要性から、壁面の傾斜をある程度緩やかにしたり、段掘りたりした結果、トレンチの上端に対して実際の下層掘削範囲は限られた。そのため、トレンチ上端は、北調査区貝塚トレンチで約5m×18m程度、南北貝塚トレンチで約18m×23m程度、東西貝塚トレンチで約6m×3m程度であるのに対し、実際の貝塚の掘削範囲は、北調査区トレンチで3.7m程度、南北トレンチで9m程度、東西トレンチで4.5mである。なお、南北貝塚トレンチでは、貝塚の途切れる南側の境が確認された。

また、この主要貝塚（以下、下層貝塚とする）とは別に、北調査区貝塚トレンチの掘削時に、より高い位置で範囲・厚さともわずかな貝の散布（以下、中層貝塚とする）が検出された。

### 下層貝塚（図版21・22、第34・36図）

下層の調査において、トレンチ土層で貝の包含が量的に乏しい層もあるが、貝類の堆積で主体をなす貝層は、3ヶ所の貝塚トレンチ中での厚さは概ね10~30cm程度で、各トレンチ間で目立った差はない。貝層の下位面の標高は北調査区貝塚トレンチの0.3mに対し、南北・東西貝塚トレンチでは0.2m前後と目立った差異ではない。また、一定の方向性や傾向を表すような高低差のある貝層の堆積状況はほとんどないが、北調査区貝塚トレンチの(p-p')で東から西へ向けて低く、薄く堆積する様相が見られる。ただ、観察土層の幅が狭いため、部分的な変化という可能性もある。なお、この下層貝層中自体の分層を認識することはできなかった。

確認調査時に北端のトレンチのみで貝層が検出されていたため、そこから南側への広がりには限りがあると見込まれていた中で、南北トレンチの土層(s-s')で貝塚の南限の目安を確認することができた。ただ、東西貝塚トレンチ(u-u')はそこから更に南側の範囲にも及んでいるにもかかわらず、その全面に貝塚が広がっていたため、貝塚の南限は西側にいくにつれ下がっていると想定できる。ただ、調査終了間際に下層確認のため、土層(u-u')付近の4号溝の西側周辺でトレンチを掘削した際には貝塚は検出されず、そこまで南には至らないと判断できる。北限は、北



第42図 南調査区貝塚出土土器実測図① (1/3)

調査区貝塚トレンチよりも更に北側であることは明白であるが、その土層 ( $p - p'$ ) で西側へと貝層が薄くなりつつあるため、西とともに北側へも大幅には広がらないと見込まれる。東限・西限とともにこの調査地点内の成果からでは判断できなかったが、西に隣接する C・D 区では検出されていないため、さほど西側には延びないとみられる。

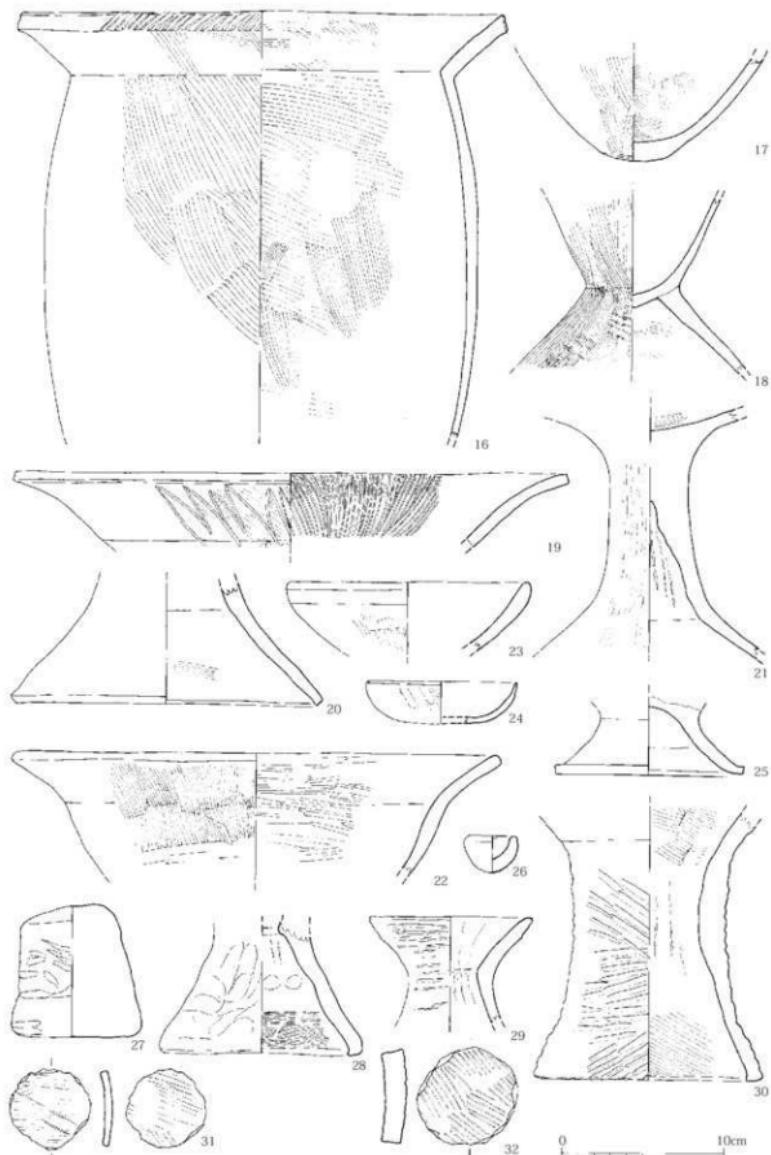
南北貝塚トレンチ内の底付近では打ち込まれた 2 本の杭（図版 23）を検出した。1 本は土層 ( $t - t'$ ) にかかる部分 (①)、もう 1 本は北端部 (②) にあたる。土層 ( $t - t'$ ) 部分の杭の頭はバッタクホーでの掘削時に削ってしまった。そのため、杭上端の高さおよびそれと土層との関係性を正確には把握できず、大溝の底面からの打ち込みとしても齟齬はないと言えた。ただ、トレンチ北端部の杭の頭は残存するとともに上層へ大きく突出しておらず、大溝の掘方と位置関係から判断して、杭と大溝との相関性はないと言判断してよい。また、貝層とその上下の層以外に、杭の打ち込み面として人為的な活動と結び付けるのに妥当なものは認めがたい。なお、杭の下端は貝層の下 80 ~ 100 cm 程度、標高にして -0.8m 程度に達している。この杭打ちの効用としては、軟弱な地盤の補強や目印等が考えられるが、検出が非常に限られた範囲内に止まっており、具体的に論拠を積み重ねるのは困難である。近隣遺跡の類例として、柳川市三橋町蒲船津に所在する蒲船津江頭遺跡 II 区（『蒲船津江頭遺跡 I』 有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 6 集 2009 福岡県教育委員会）でも低位地点に複数の杭を打ち込んだ弥生時代終末期の例が挙げられる。

3ヶ所のトレンチ中の貝層から出土したものは、土器のみならず貝類等も持ち帰り、土器はパンケース 20 箱、貝類をはじめとした自然遺物は 20 箱の量となった。その他に木器、骨角器、鉄器が出土した。貝類に混ざって動物骨が多数出土しており、また貝塚中の土器類や貝類の洗浄の際に溜まった泥を洗い、乾燥してふるいにかけた結果多数の微細な獸骨・魚骨類を抽出することができた。これらについては、種同定を主とした分析委託をしており、IV (124 頁) を参照されたい。土器類は弥生時代中期初頭から見られるが、中期のものは非常に少なく、弥生時代後期のものが主体である。注目されるのは、中期の平底の甕の底部で牡蠣殻が付着したもの（遺物洗浄時に確認していたが整理段階で所在不明）で、後期以降の土器ではこのようなものは確認できなかった。したがって、中期時点では牡蠣が生息するような環境で、そこに貝塚が形成されていたが、やがて牡蠣の生息するような環境ではなくなったと想定できる。

#### 南調査区貝塚出土遺物（図版 28、第 42・43 図 1 ~ 32）

東西貝塚トレンチの出土土器で図示できたのは 14・26・27 のみで、大部分が南北貝塚トレンチからの出土である。基本的には全て弥生土器とするが、土師器の範疇となる可能性のあるものが含まれる。

1 ~ 13 は壺である。1 は広口壺で、頸基部の屈曲は強くなく、緩やかに外傾へと変化し口縁部は外反しながら開く。外面ともにハケ調整され、口縁端部および頭基部にハケの原体によるとみられるキザミが廻る。2・3 は広口壺で、口縁部は強く屈曲する頭基部から外反気味にやや開く。ともに端部は内外ともにわずかに張り出すため明瞭な面をなす。外面ともにハケ調整される。4 は広口壺もしくは直口壺という器形である。頭基部から上方へ延びつつわずかに開く口縁部で、直口壺の範疇になるとみられる。肩が張るため胴部径は大きくなるようである。口唇部にキザミが付されるとともに、頸基部に刺突文が廻る。胴部外面がハケ調整され、他はナデにより仕上げられる。5 はやや大形の広口壺で、頭基部の屈曲はさほど強くなく、口縁部は外反気味に開く。器表の磨

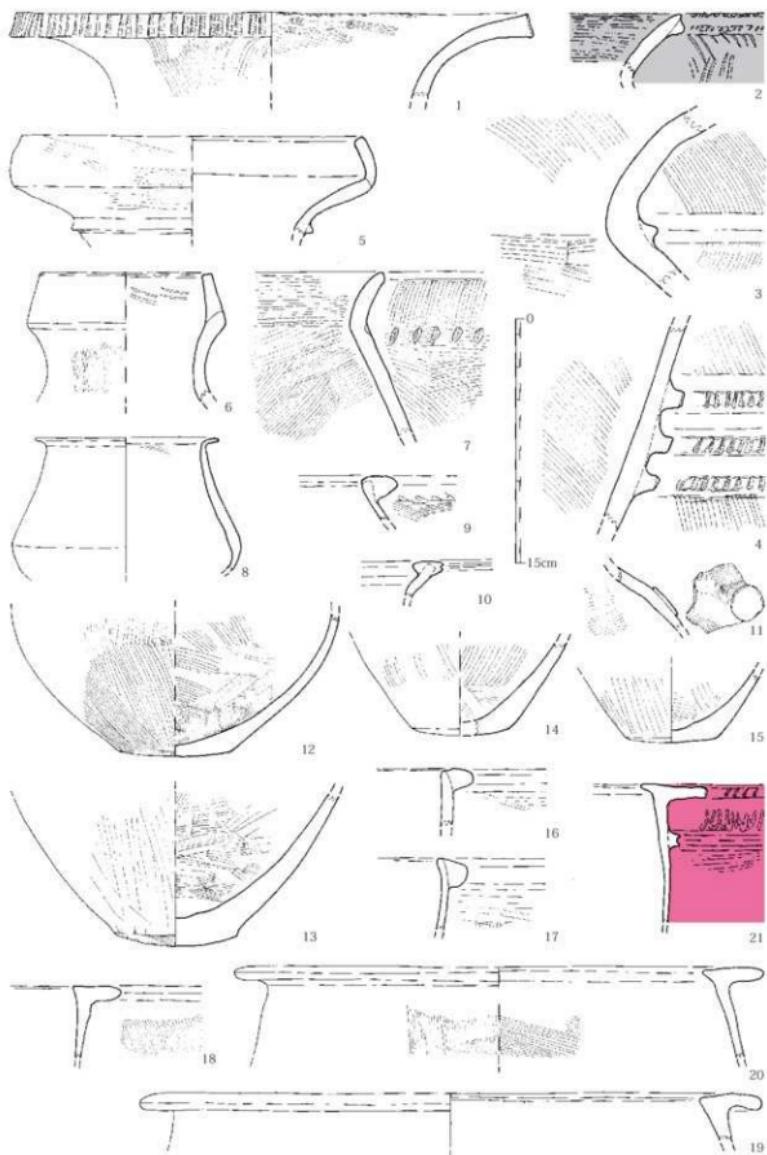


第43図 南調査区貝塚出土土器実測図② (1/3)

減が激しく、胴部の調整は不明であるが、口縁部には内外面ともにハケ調整が残る。頭基部に低い断面三角形の突帯が廻るがキザミの付された可能性があるが、磨滅のため不明である。6は在地系複合口縁壺の口縁部である。上下部の口縁とともに短く、上部側は外反気味にやや開く。壺ではあるが外面には著しく煤の付着が見られる。7は口縁部が強く外反して開く広口壺で、端部にはハケの原体による刻みが密に付される。内外面ともにハケ調整される。8は大形の壺で口頭部のみが残存する。強く外反して開く口縁部で、端部は徐々に肥厚していく中で広い面をなし刻みが密に付される。内外面ともにハケ調整される。9は広口壺で、頭基部があまり縮まらずに太く、口縁部はわずかに外反気味でありつつも、ほぼ直線的に外側上方へと延びる。胴部外面には稜を伴って立ち上がりの変化する部分がある。器表の磨滅が著しく、胎土には角閃石が目立つ。10は太い頭基部からやや短い口縁部がやや外反気味に開く広口壺である。胴部はやや低い器形とみられ最大径が頭基部のやや下、胴部上位にある。内外面ともにハケ調整がされるが、外面では細かいハケの後に下位のみ粗いハケが施され、内面では密な横ハケの後に一部縱ハケが施される。11は短頭壺で、頭基部の屈曲はさほど強くなく、口縁部はやや外側に延びて開く。胴部は小さく張る。口縁部外面および胴部はナデにより仕上げられ、口縁部内面、胴部外面にはハケ調整が見られる。12は直口壺で、ほとんど縮まらない太い頭基部から、ほぼ直上へ口縁部が延びる。胴部は低く扁平で、張り出し部から上位とその下位ではハケ調整の原体や方向性などが異なる。13は底部を含む下位部のみが残存し、狭いレンズ状の底部である。外面にはハケ調整で下端付近に粗いハケがわずかに見られ、内面はナデにより仕上げられる。

14～18は甕である。14は口縁部付近のみが残存する。口縁部は屈曲して外反気味に延びて開き、端部は明瞭な面をなしてハケとともに刻みが密に付される。内外面ともにハケ調整され、外面の煤の付着が目立つ。15はやや長胴の在地系甕である。口縁部は屈曲して直線的にやや外方へ延び、端部は外方へ幅を広げて面をなす。胴部外面には密にタタキが施され、他はハケ調整される。外面には煤が付着する。16はやや大形で長胴の甕で、口縁部、胴部の2片の部位が残り、接合はしないが同一個体とみられる。口縁の屈曲は強く、特に内面では明瞭な稜を伴い、外側上方へ直線的に延びて端部へ至る。口縁端部はわずかに下方へ突出して明瞭な面をなし、そこには密に刻みが廻る。外面には口縁部に至るまで煤が密に付着して黒色となる。内外面ともにハケ調整され、胴部内面において上位では右上がりのやや粗いハケが見られるのに対し、下位ではそれを切る細かい縱位のハケが見られる。17は底部で、狭いレンズ状をなす底面には、その上位の胴部程密には煤が付着していない。内外面ともにハケ調整される。18は脚付の甕である。体部の大半と脚部の下位部が欠失する。脚の外面にはタタキがわずかに残り、その上からハケ調整され、内面には部分的にわずかなハケが見られる。体部の外面には脚部からのハケ調整が連続し、煤の付着でやや黒色化し、内面は炭化物の付着により黒色である。

19～22は高坏である。19は坏部の上位部のみ残存する。外反しながら口縁端部へと開き、内面は密なハケ調整の後に縱位のミガキが施され、外面はハケ調整の後に波状の暗文を施す。20は弥生土器高坏の脚部で、脚柱部は欠失しており下位部のみ残存する。裾端部へと直線的に延びており、端部はわずかに面をなす。21は坏部の上部と脚部の裾部付近を欠失する。長い脚部で、外面には縦位のミガキが施され、細い脚柱部の内面にはシボリ痕が認められる。また、残存部では穿孔が認められず、その有無や数は不明である。坏部では内面にミガキが施される。22は坏部のみが残存し、



第44図 北調査区貝塚出土土器実測図① (1/3)

器壁はやや厚い。下位部は内湾して立ち上がり、口縁部は屈曲してわずかに外反しながら開く。外面はハケ調整された後に下位部ではケズリが施され、内面は密に横位のミガキが施される。

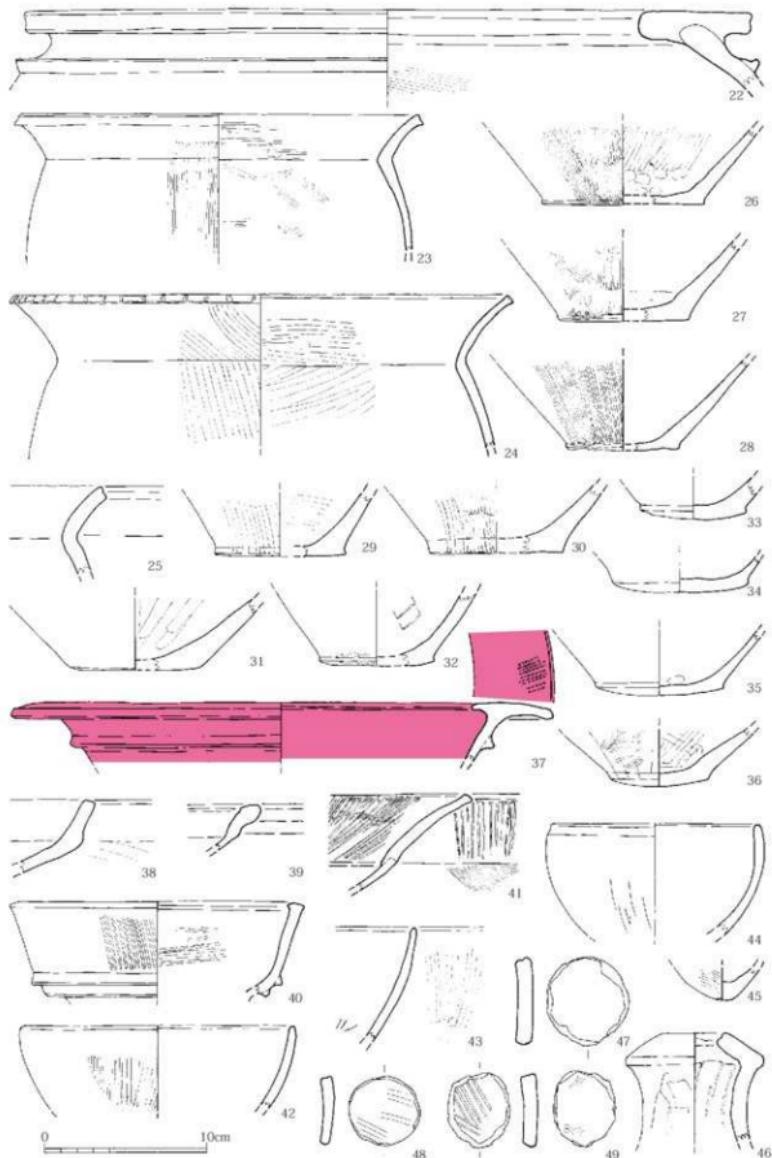
23は鉢の口縁部で内湾気味に立ち上がり、口唇部はほぼ直上を向いて開く。端部付近はやや肥厚し、外面には継ハケが見られる。24は手づくねによる鉢状の器形の弥生土器である。口縁端部は非常に薄く尖り気味で、外面には指圧痕が目立つ。25は低脚の高坏もしくは脚付の鉢で、脚部のみが残存する。内外面ともに強い横ナデが施され、裾端部は面をなす。26は鉢形のミニチュア土器である。非常に小形ながら整った器形であるとともに内面は平滑である。手づくねではなく、小石や木製品を内型にして生地を貼り付けて整形したと想定される。27は支脚で、完全な中実で下端の裾の一部が欠損する。多量のスサを含んでいたとみられ、細長い筋状の窪みが多数見られる。28は支脚で、上部を中心半分以上が欠失する。頂部にはわずかに穿孔の痕跡があり、また嘴状の突起を有した可能性があるが、残存部からは判断できない。外面はナデ調整で、内面では下位にハケを施し、中位付近に指圧痕が列ぶ。29は器台で、括れ部より上位のみが残存する。口縁部付近に密なタタキが明瞭に残るが、その下位のタタキはややナデ消される。30は器台で、口縁部付近は残存していない。外面には粗いタタキが密に施され、中位より上下でタタキの方向が異なる。内面には上下端にハケが施される。

31・32は土製円板である。31は径5cm前後で厚さ0.4～0.5cmで、内外面ともにハケ調整される。32は径6cm前後で厚さ1.3cmと非常に厚く、大型の壺もしくは甕の一部であったとみられる。外面にハケ調整が見られ、内面は判然としない。

#### 北調査区貝塚出土遺物（図版29、第44図1～32）

基本的に全て弥生土器とするが、土器師の範疇となる可能性のあるものが含まれる。

1～15は壺である。1大型の広口壺の口縁部で、強く外反して大きく開くとともに、徐々に自然な肥厚を見せる。端部はやや広い面をなしてハケの原体によるとみられる刻みが施される。内外面ともにハケ調整される。2は広口壺の口縁部とみられる。端部は肥厚し、口唇部の突出する上下端には細かい刻みが付される。内外面ともに粗いミガキのような調整が見られるとともに、黒色顔料が塗布されたとみられる。3・4は同一個体の大型の広口壺とみられる。3は口頭部で頸基部には断面三角形の突帯が付される。内外面ともにハケ調整される。4は胴部片で内外面ともにハケ調整され、外面には断面方形の突帯が3条付され、その端部にはハケの原体によるとみられる刻みが密に付される。5是在地系複合口縁壺で口頭部のみ残存する。下位口縁は外傾、上位口縁はその上部より内傾して立ち上がる。わずかに残存する頸部には断面三角形の低い突帯が廻ることがわかる。外面にはハケ調整の残る部分がある。6是在地系複合口縁壺である。下部の口縁は外反して開き、屈曲して上部へ移行し、やや内傾気味で直線的に延びて端部へと至る。内面では上下部の境は明瞭ではない。外面下位に細かいハケが残り、その上位ではやや強い横ナデにより仕上げられる。7は壺としたか甕の可能性もあり、上位部のみが残存する。口縁部の屈曲は稜のある強いものではなく、緩やかに開く。内外面ともにハケ調整され、外面には煤が付着するとともに屈曲部のやや下位に刺突文が廻る。8はやや小形で下彫れの器形の壺である。非常に薄く短い口縁部は強く屈曲して外方へ開く。外面に黒色顔料を塗布した痕跡が微かに見られる。9は短頭壺の口縁部小片で、厚く肥厚した端部となる。外面には横位のハケが見られる。10は広口壺の口縁部である。外反して開き、端部は肥厚して幅のある上面をなし、外端部には沈線が廻る。11は器種や部位は判然としない小



第45図 北調査区貝塚出土土器実測図② (1/3)

片だが、壺の肩部とみなす。円形の浮文が残る。12は鉢の可能性もあるが、上半部は残存していない。底部は平底に近いながら不安定で、ややレンズ状傾向となる。内外面ともにハケ調整され、黒斑が見られる。13は大型の壺で底部付近の下位のみ残存する。外面の体部とレンズ状の底部の境には明瞭な稜がある。外面は底部にハケが見られ、体部の調整は、ハケ、板ナデ、ナデの順に施される。内面はハケ調整され、底部はナデにより仕上げられる。14は壺の底部でレンズ状を呈する。内面はハケ調整され、外面はハケの後に板ナデが施される。15は壺の底部で、平底に近いがやや突出気味の不安定な形状である。

16～36は壺である。16・17は壺の口縁部片で、厚い突帯状の肥厚部が付される亀甲系である。17の外面には横位のハケが残る。18・19は壺の口縁部付近で、逆「L」字状を呈し、口縁上面は非常に幅広で外端部は丸みをもって収められる。20は壺の口縁部付近である。鋤先状口縁を呈し、幅の広い上面があり、内側へわずかに突出し、外端部は丸みをもって収められる。胴部外面はハケ調整される。21は丹塗り土器の壺である。口縁部は鋤先状で上面は幅があり、内方への突出はわずかで、外方の端部は面をなし、刻みが付される。外面の口縁下には断面M字状の突帯が廻る。器表の剥落が目立ち、外面に施された赤色顔料の遺存も限られ、ミガキ等も明瞭ではないが、M字突帯と口縁の間の暗文は比較的良好に見られる。22は壺棺に用いられる大型壺の口縁部である。内外ともに突出して、外端部は強い横ナデにより窪む。外面の口縁下には断面三角形の突帯が廻る。23は壺で、上位部分のみ残存する。口縁部は屈曲してやや外反気味に開き端部は明瞭な面をなす。外面には縦位のハケ、内面には横位のハケが施される。外面には煤の付着が著しい。24は壺で、口縁部は屈曲して外反気味に開く。屈曲部の内面には明瞭な稜をともなう。口縁端部は狭いながら面をなし、浅い刻みが施される。内外面ともにハケ調整され、外面は煤の付着で黒褐色である。25は壺の口縁部で、屈曲してやや外反気味に開き、器壁は厚く端部は明瞭な面をなす。26～30は弥生土器壺の底部片で、平底で外面はハケ調整される。28の外底部には粘土を充填して成形したとみられる接合痕がある。また、胎土に含まれる雲母片が目立っている。31大形の壺の底部で不安定な平底もしくはややレンズ状という形状である。内面には板状の工具によるナデの調整が見られる。32～36は壺の底部で、突出気味でレンズ状を呈し、外面には煤が付着する。

37～41は高坏である。37は丹塗り土器の高坏であり、坏部の上位のみ残存する。鋤先状の口縁で、口縁下の外面に断面三角形の突帯が廻る。内面および口縁部の上面は赤色顔料がほとんど剥落するが、外面には非常によく残存する。また、口縁上面でごくわずかに細かい暗文が残存する。38は高坏の口縁部である。下位の緩やかな立ち上がりから屈曲して、わずかに外方へ開いて短く延びて端部へと至り、端部は面をなす。39は中部九州系の高坏の口縁部で、2段階で屈曲して端部は丸みをもって肥厚する。内面では小さな段を生じて上面に至る。40は立ち上がりの強い坏部上位で、残存部の下端に屈曲部が残り、その下位では非常に緩やかな立ち上がりであったと想定される。口縁端部はわずかに内外両側へ突出して明瞭な面をなし、上記の屈曲部には断面三角形の突帯が2条廻る。外面に縦位のミガキ、内面に横位のミガキが非常に微かに残存する。41は坏部の上半部である。屈曲部があり、その下部では薄くて内湾、上部では厚くて外反と立ち上がりが変化し、また上部では内外面で暗文が施されるに対し、下部外面はハケ調整される。

42～45は鉢である。42は口縁部片で、内湾して立ち上がる直口縁の端部は丸く収められる。外面にハケ調整が施される。43の体部は内湾気味に立ち上がりながら、口縁部はほぼ直上へ開く。

外面にはハケ調整が施され、内外面ともに黒色顔料が塗布された可能性がある。44は口縁部で、内溝して立ち上がり、端部はほぼ上方を向いて開く。器表はナデで仕上げられるが、外面にはケズリがわずかに残る。45は小形の鉢で、やや長胴の器形になるとみられる。底部は一見尖底に近いが、非常に狭い平底部がある。

46は支脚で、上部のみ残存する。一旦括れる立ち上がりで、再度広がって天井部へ移行する。天井部の中央に穿孔の痕跡が残る。47～49は土製円板である。47は厚さ10mmとやや厚みがあり、両面ともにナデによる調整とみられ、外面には煤が付着する。48は厚さ7mmで外側には微妙にハケの痕跡があり、内面はやや黒褐色化して炭化物が付着している可能性がある。破断面は個々の破面の単位がない程に磨滅しており、研磨されているとみられる。49は厚さ9mmで、外面に煤が付着しており、壺の一部であったようである。

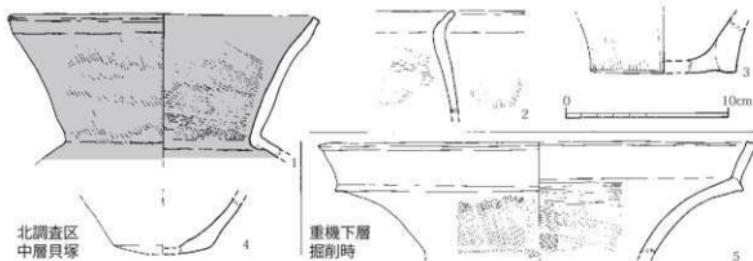
#### 中層貝塚（図版22、第34図）

北調査区貝塚トレンチの土層（ $q - q'$ ）で層（19）として確認でき、厚さは10cm程度で下層貝塚ほど密な貝類の堆積とはなっていない。下層貝塚の50cm程上位で認められ、標高は1.0～1.2mの間にあたる。土層から把握できるように南北幅120cm程度で、トレンチ中を東西に横断するよう広がっていた。掘削範囲や厚さがわずかなこともあります。限られた堆積貝類を効率よくサンプル用に持ち帰るために層の土ごと採取し、その土を洗浄して土器だけでなく小さな貝類等も抽出した。また、その過程で下層貝塚と同様に、微細な獸骨・魚骨類を抽出することができた。これらは、下層貝塚出土のものと同様に種同定を主とした分析委託をしており、IV（124頁）を参照されたい。出土土器はわずかで、仔細な時期の把握は難しいが、最も新しいものは弥生時代後期の範疇である。

なお、この貝層は2次堆積による可能性があるが、それに拘らず人為的な影響によるものであるとしたら、堆積時期はともかく、この面が人間活動の生活面として対応する時期が存在したこととなる。しかし、多くのトレンチにおいて該当するレベルで明瞭にそれを示すような遺構や包含層を確認できていはない。ただ、東西貝塚トレンチ土層（ $u - u'$ ）で、下位のグライ化した青灰色土層中に挟まれた木質を含んだ黒灰褐色土層（15）は、ほとんど見られない特異な堆積状況を示している。この層は掘削範囲内で出土遺物がないものの、中層貝塚と堆積のほぼ同時性を示す可能性があるとみられる。

#### 出土遺物（図版29、第46図1～4）

1は弥生土器広口壺で、口頭部のみが残存する。頭基部の屈曲が強く、やや外反気味に延びて開く。口縁端部の面には、横ナデ状の端部調整を施した際の非常に浅い窪みが廻る。外面は最終調整の横ナデのために、縦ハケは微妙に残る見られ、内面特に下位で密に横ハケが残る。内面のほぼ全体と、外面の口縁付近の一部が黒褐色で、黒色顔料が塗布されていたとみられる。2は弥生土器で、鉢の可能性もあるが、外面に煤が付着することから小形の在地系壺で、おそらく底部には脚を付すと考えられる。短い口縁部は屈曲して開く。内外面ともに、口縁部は横ナデ、胴部はハケ調整される。3は弥生土器壺の底部小片で、外底部に窪みの廻りがあり、充填して成形された平底の底部で中期の所産である。外面はハケ調整される。4は弥生土器壺の底部片でレンズ状の突出を見せる。外面は煤の付着により黒褐色である。



第46図 北調査区中層貝塚およびその他の下層出土土器実測図（1/3）

#### 下層遺構と包含層（図版21、第36図）

下層貝塚の下位でも部分によってはわずかに貝・土器を含んでいたが、軟弱地質であるために沈み込んだものという可能性が高い。南北貝塚トレンチ土層（ $s - s'$ ）で確認できるように、上面が貝層と連続する層（4-6）から明らかに切り込まれた土坑もしくは落ち込み状の遺構の土層断面（7-8）が確認できる。したがって、その高さが一定期間活動面となっており、それは更に南側に広がっていたと想定できる。この面直下の層（6）において、トレンチ中で明瞭に遺物の包含を確認できず、また確認調査のトレンチ中の低位でも明瞭な遺構や包含層を検出していない。ただし、当時の生活面を意識した低位部確認のため、調査終了間際に8・10号土坑よりやや北側周辺をバックホーでトレンチ状に掘削した際には、この層（6）と同様に青灰色でも暗くなるレベルがあり、ほぼその位置から1点のみながら下記土器が出土した。よって、遺物量は非常にわずかながら包含層とみて差し支えないと言えよう。

多様な制約により、部分的な掘削に止まった貝層と同様に、下層面において個別遺構の把握など面的な調査ができなかったのは、非常に残念である。

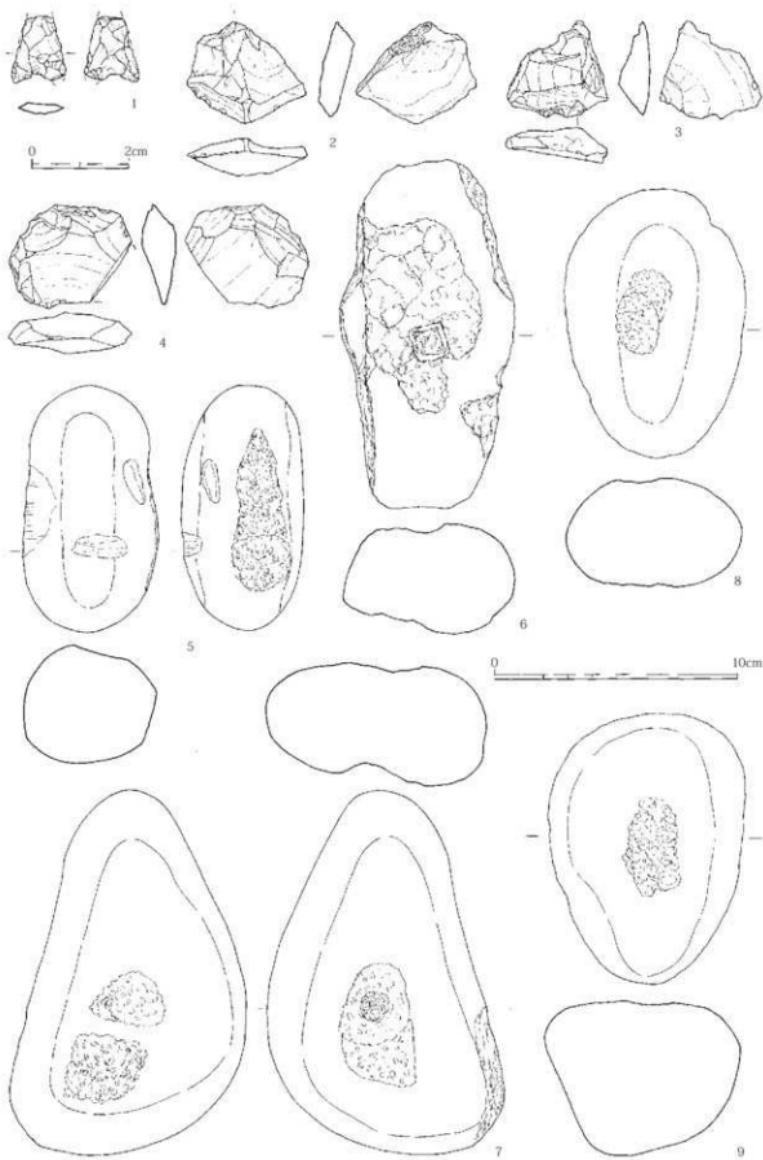
#### 出土遺物（図版29、第46図5）

5は在地系複合口縁壺で、口縁部のみの破片である。下位口縁は強く外反して開き、上位口縁は外反気味に開きながら上部へ延びる。口縁端部および上下口縁の接合部は、ともに外方へわずかに突出気味となる。下位口縁の内外面でハケ調整される。

#### ③他の出土遺物

##### 石製品（図版30、第47・48図1～23）

1～4は打削・剥離で整形され刃部のある小形の打製石器である。1は貝層出土遺物の洗浄土のふるいから拾い出された黒曜石製の石礫で、四角の基部である。先端、下端の片側、側縁の一部が欠損している。非常に小形で、長さ1.4cm、幅1.1cm、厚さ0.2～0.3cmで、重さ0.4gある。なお、貝塚より黒曜石の剥片は一定程度出土しているが、製品はこの1点のみである。2～4はサスカイト製のスクレイパーである。2は東西貝塚トレンチ出土の片面の主要剥離面に打点が認められ、その側縁に原縁面が残る。刃部には微細剥離が見られる。長さ4.2cm、幅4.9cm、厚さ1.1cmで重さ18.5gである。3は北調査区包含層出土で、片面は主要剥離面で打点付近が残り、そこに明瞭な段

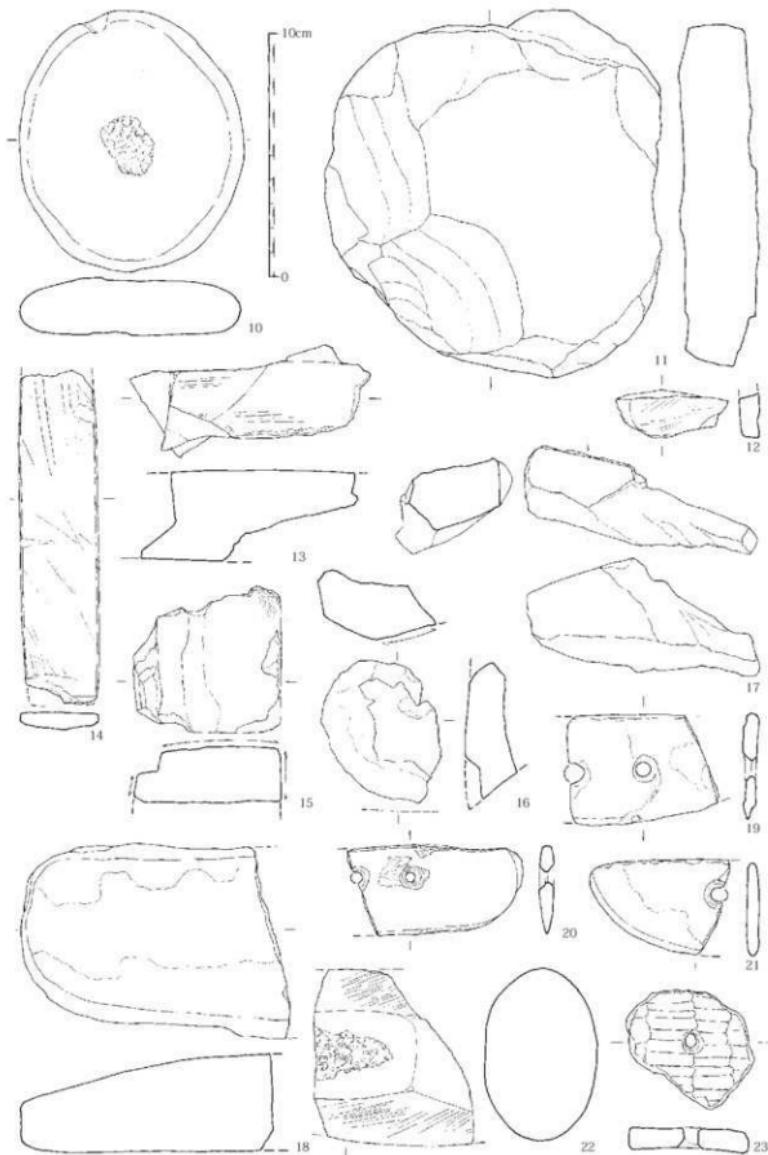


第47図 出土石製品実測図① (1は1/1、他は1/2)

が生じている。微細剥離の集中する部位がある。長さ4.0cm、幅4.2cm、厚さ1.3cmで重さ15.8gである。4は東西貝塚トレンチ出土で、調整剥離により全体的にやや丁寧に整形されているが、やや目立つ欠損がある。使用部位とみられる箇所に微細剥離が見られる。長さ4.2cm、幅5.0cm、厚さ1.3cmで重さ30.7gである。

5～11は原礫を用いた砾石器等のやや大形の石器類である。5は1号溝出土で、長軸方向の片側側縁を主に叩石として使用しており、使用痕の集中する部分が2つの面をなしている。反対側の側縁と上面の一部が磨石として使用されている。長さ10.1cm、幅5.4cm、厚さ4.8cm、重さ438.5gで玄武岩製である。6は東西貝塚トレンチ出土で、側縁およびの上面の広い範囲を叩石として著しく使用しており、凹凸が激しく原礫からある程度変形しているようである。上面にやや大きな窪みがあるが、凹石として使用したものか、もしくは原礫の当初の形状によるものかは不明である。表面の広い範囲で鉄分が沈着している。長さ14.3cm、幅7.2cm、厚さ4.5cm、重さ612.0gで花崗岩製である。7は北調査区貝塚トレンチ出土で、側縁の一部が叩石として使用される。また、両面が凹石として明瞭に使用されており、片面では使用の集中する部位が2点に分かれる。長さ15.0cm、幅9.8cm、厚さ5.1cm、重さ1017.1gで玄武岩製である。8は南北貝塚トレンチ出土の凹石で、両面の中央部付近が使用される。全体に鉄分の沈着が見られる。長さ11.0cm、幅8.5cm、厚さ4.4cmで重さ399.2gである。9は北調査区貝塚トレンチ出土で、1ヶ所のみに凹石の痕跡があり、またさほど顕著に使用されていない。長さ10.2cm、幅8.1cm、厚さ6.3cmと厚みの目立つ原材を用いており、重さ784.6gで玄武岩製である。10は南北貝塚トレンチ出土の凹石で、両面の中央部が使用されるが、その痕跡はさほど明瞭なものではない。長さ10.7cm、幅9.2cm、厚さ2.3cmと偏平な原材を用いており、重さ322.3gで花崗岩製である。11は東西貝塚トレンチ出土で、打削によって整形されないとみられ、台石の可能性がある。片面のみ鉄分の沈着が見られる。長さ13.8cm、幅15.0cm、厚さ3.2cmでホルンフェルス製である。

12～18は砥石もしくはその可能性のある石器である。12は北調査区貝塚トレンチの中層貝塚から出土した砥石の小片である。上下面と側縁の一部は遺存しているが、大部分は欠失しているとみられる。長さ4.6cm、幅1.9cm、厚さ0.9cmと非常に薄く、重さ11.7gで粘板岩製である。13は北調査区貝塚トレンチ出土の砥石で、欠損が著しく砥面は2面残るが片面の遺存は特にわずかである。長さ9.9cm、幅4.6cm、厚さ3.8cm、重さ144.2gで砂岩製である。14は1号溝出土で、細長く偏平な形状である。両端で欠損しているが、その片側では稜線から厚みを減じる部分がわずかに残っており、実際の端部に近い部分と考えられる。上面は非常に丁寧な研磨により著しく平坦・平滑で、研磨によって両側縁が平行した整った形状に整形されている。下面は研磨されているものの、剥離の段差等の凹凸が多く残り、上面とは大きく異なっている。砥石とも考えられるが、非常に丁寧に整形されている点から、他の用途を想定する必要もある。長さ13.6cm、幅3.2cm、厚さ0.8cm、重さ58.7gで粘板岩製である。15は北調査区検出時出土で、上面と側縁が平坦で、両端と下面が欠失し、下面是節理面から剥離した状態である。長さ6.0cm、幅6.0cm、厚さ2.3cmで重さ137.7gを量り、片岩製で砥石としてはさほど多くない。16は17号土坑出土の砥石小片で、欠損が著しく、砥面は2ヶ所で残るのみである。表面は全体的に風化が著しく、灰白色を呈する。長さ5.9cm、幅4.9cm、厚さ2.9cm、重さ65.3gで砂岩製である。17は南調査区北の包含層出土の砥石片で、欠損が著しく砥面はわずかな範囲で1面残るのみである。その砥面の残存部は非常に平坦かつ平滑である。長さ



第48図 出土石製品実測図② (1/2)

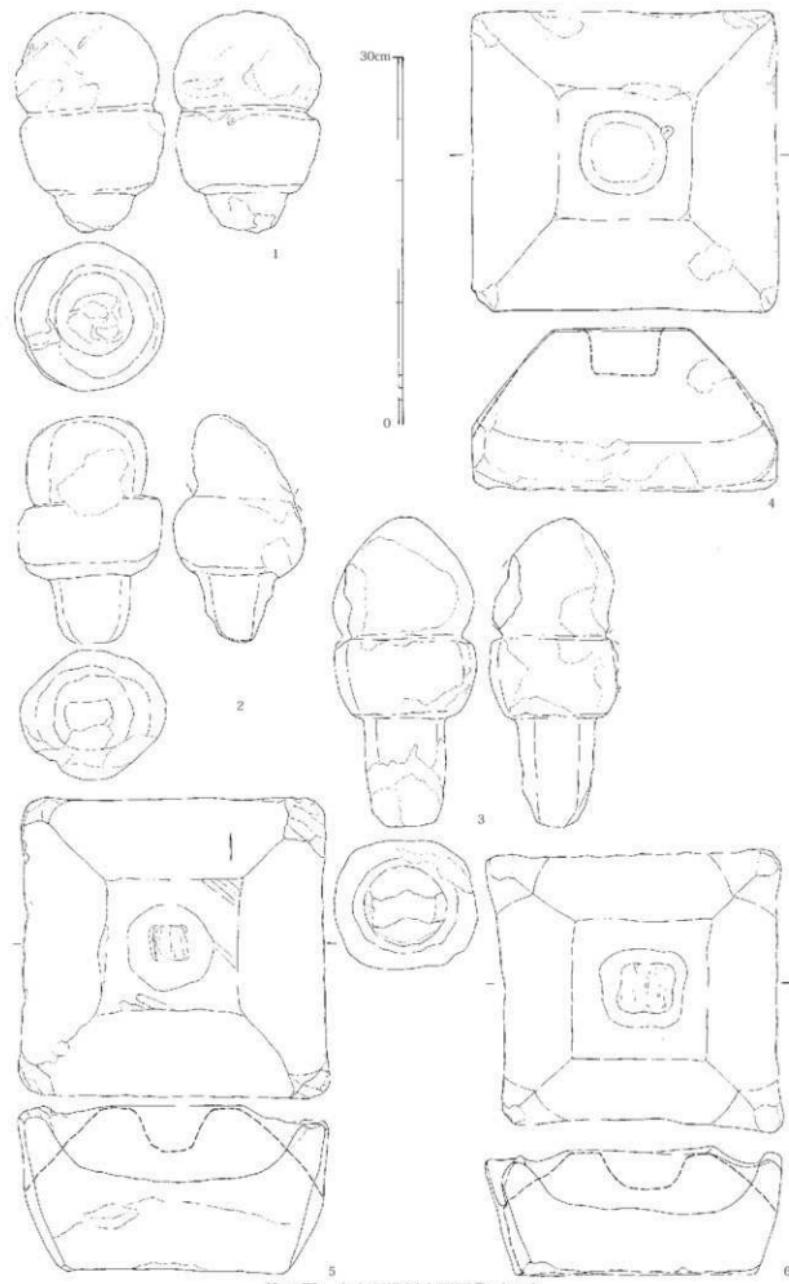
9.6 cm、幅 3.2 cm、厚さ 4.5 cm、重さ 99.8g で砂岩製である。18 は北調査区貝塚トレンチ出土で、大きく長軸に沿って中途から欠損する。片面上の長軸に沿った中央部分で平滑となった範囲がある。砥石というよりは磨石とみる方が適当である。

19～23 は磨製石器等の研磨を施して成形された石製品である。19～21 は石包丁である。19 は東西貝塚トレンチ出土で、大きく欠損し、刃部はほとんど遺存していない。表面は平滑な部分とともに、剥落したような範囲が目立つが、そこにも若干の研磨が見られる。当初からそのようなつくりであったならば粗雑な製品であり、また使用に際して剥落等が生じたのであれば、再加工を施していることになる。やや厚みがあり、穿孔は両面から施される。長さ 6.2 cm、幅 4.5 cm、厚さ 0.6 cm、孔径 0.6 cm、重さ 31.7g で赤紫色頁岩製である。20 は南北貝塚トレンチ出土で、孔の 1 つの部分で欠損してそこから外側が失われている。ほとんどの表面で平滑に研磨されているが、平坦ではなくわずかに反った形状である。一部でわずかに敲打痕が残り、穿孔は両面から施される。長さ 7.1 cm、幅 3.6 cm、厚さ 0.6 cm、孔径 0.4 cm、重さ 27.4g で片岩製である。21 は東西貝塚トレンチ出土で、片側の孔とそこから外側の部分のみ残存する。欠損後の再加工のため刃部は丸みが強く、ほとんど銳利さがない。また、廃棄後の剥離か当初のものかは判然としないが、表面でわずかに窪んで研磨されていない部分も目立つ。孔は両面から施される。長さ 5.8 cm、幅 3.9 cm、厚さ 0.5 cm、孔径 0.5 cm、重さ 16.1 cm で片岩製である。22 は南北貝塚トレンチ出土の石斧片で、著しく欠損しており、身部から刃部へと幅を減していく付近のみが残る。表面は研磨により非常に平滑な範囲が多いが、一部でまとまって敲打痕が残る。長さ 6.5 cm、幅 7.2 cm、厚さ 4.6 cm、重さ 354.2g で玄武岩製である。23 は 19 号土坑出土で、滑石製石鍋片の転用品である。元来石鍋であった特徴として、当初の外面には細かい単位でのケズリの調整痕が並ぶとともに、煤の付着によって薄く黒色化している。内面は丁寧に磨かれており、石鍋であった時点での横位の擦痕が残る。欠損後の再加工として、破断面が部分的に研磨されるとともに、内面側から穿孔が施される。用途は不明である。長さ 4.8 cm、幅 5.3 cm、厚さ 0.8 cm、孔径 0.6 cm で重さ 37.2g である。

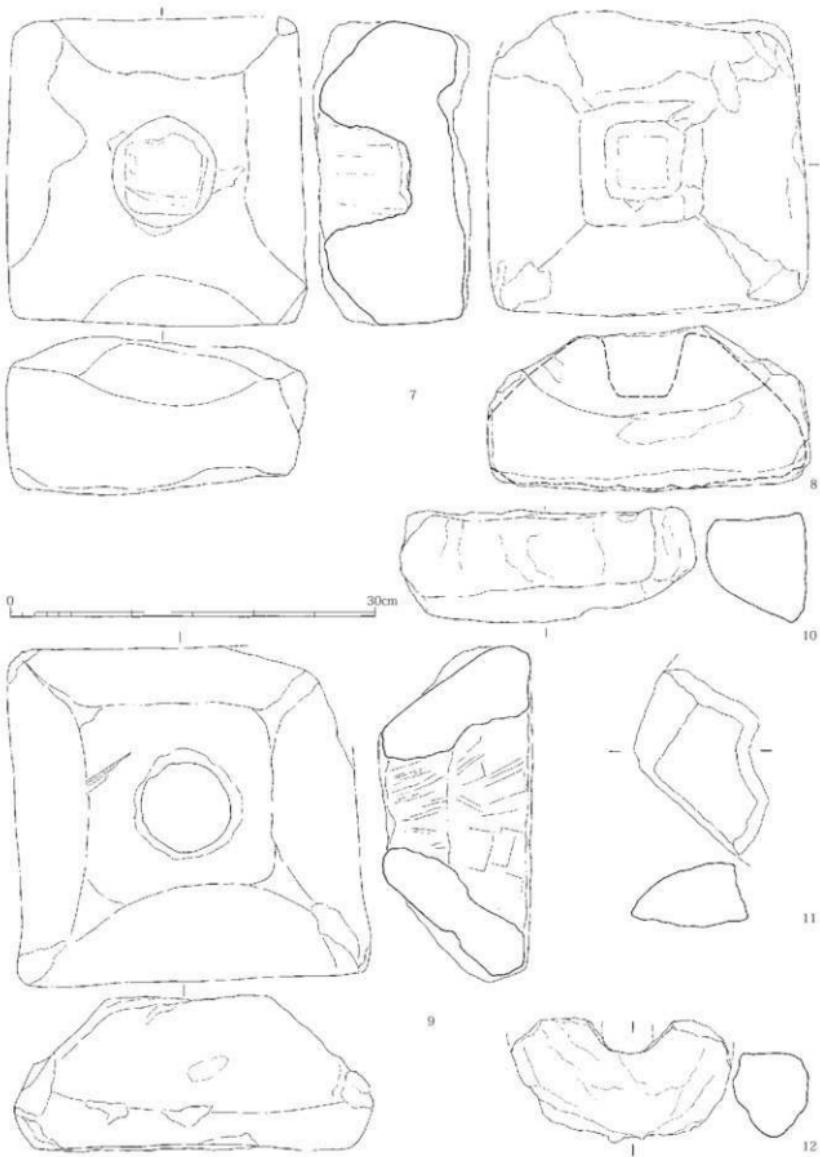
#### 石塔類（図版 31・32、第 49～52 図 1～18）

1～18 は五輪塔石で、1～3 は空風輪である。1 は南調査区北側包含層中の出土で、わずかな欠損があるものはほぼ原形を留めるとみられる。全体に丸みのやや強く、中心軸を基準に対称に近い形状である。下方の火輪と連結する茎部は短く、風輪との境は凝灰岩製のものほど明瞭な屈曲となっていない。径約 12.0 cm 程度、高さ 18.0 cm で花崗岩製である。2 は南調査区包含層中西端トレンチ出土で、空輪部分の欠損や表面の風化が目立ち、上端部もわずかに残存していない。中心軸を基準に全体が対称となっておらず、幅と厚さの大きさに差があり、横断面は楕円形や隅丸長方形形状となる。下方に火輪と連結する茎部を持ち、下位になるにつれ幅・厚さが小さくなる。幅 11.8 cm、厚さ 10.8 cm、高さ 18.6 cm で軟質の凝灰岩製である。3 は南調査区北側包含層中のトレンチ出土で、特に空輪部分の欠損が目立つ。下方の火輪と連結する茎部はやや長い。中心軸を基準に全体が対称となっておらず、幅と厚さの大きさにやや差がみられ、風輪や茎の断面は隅丸形状に近い。最大径 11.6 cm 程度、高さ 25.4 cm で軟質の凝灰岩製である。

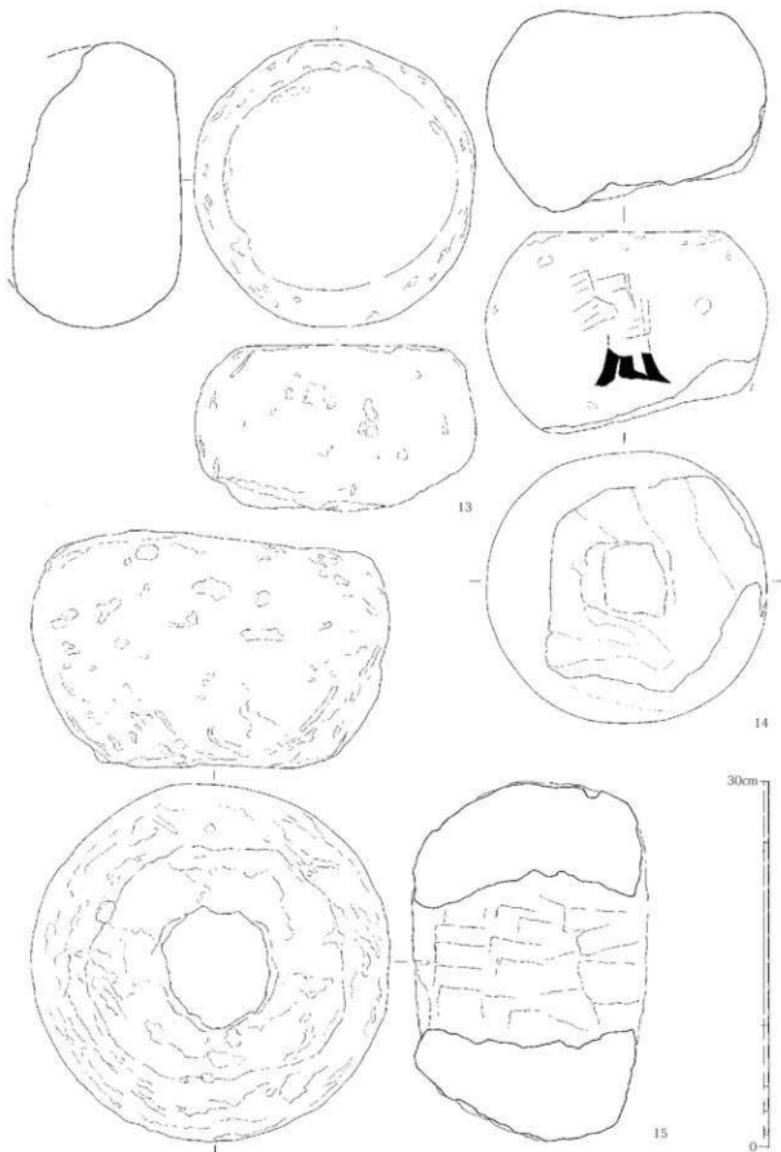
4～12 は火輪である。4 は 5 号土坑出土で、目立った欠損がなくほぼ完形である。表面は全体的に丁寧に研磨されており、上下面や側面に曲面ではなく平坦に近い面で構成される。内傾で立ち



第49図 出土石塔類実測図① (1/4)



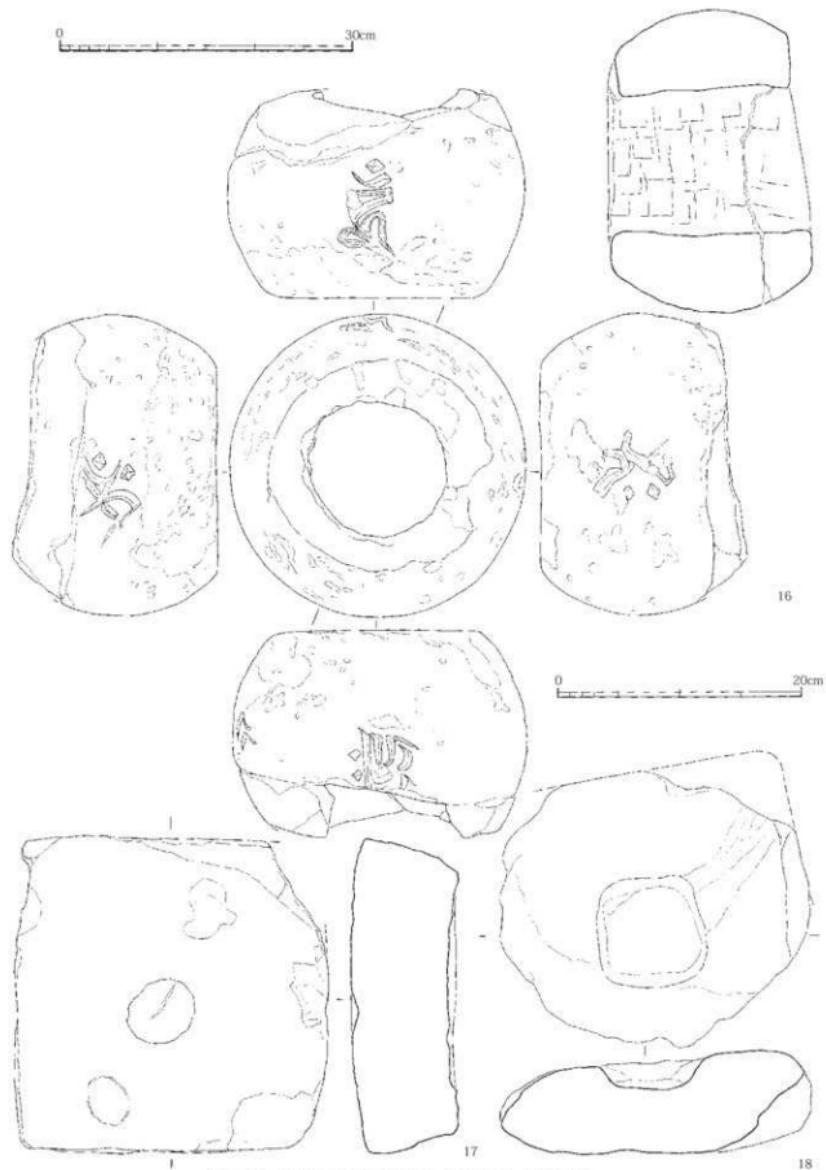
第50図 出土石塔類実測図② (1/4)



第51図 出土石塔類実測図③ (1/4)

上がる上位に比べ下位の側面は非常に低く、または垂直に近い立ち上がりである。上面の空風輪との連結用の割りは、整った平面円形で内部も丁寧に整形される。一辺 24.5 ~ 25 cm、高さ 13.3 cm で花崗岩製である。5 は 5 号土坑出土で四隅は上外方へと突起状にせり出しているが、内 1ヶ所は欠損が目立つ。上面には空風輪との連結用の円形の割りがある。表面は全体的に丁寧に研磨され平滑な部分が多い。側面の特徴として、外傾する下位部分の全高の中で占める割合が高く、またこの下位側面は、平坦ではなく中央が張り出す形状のため、全体に丸みの強い形態として捉えられる。幅 24.5 cm 前後、高さ 13.5 cm で花崗岩製である。6 は南調査区北側包含層中の出土で、四隅は上外方へと突起状にせり出る特徴がある。全体的にやや低く、特に上位の内傾で立ち上がる部分の高さがあまりないため、上面と四隅の突起部の高さがほとんど変わらない形状となっている。上面の空風輪との連結用の円形の割りは浅い。表面にはあまり研磨が施されておらず、全体的にケズリ痕や敲打痕が目立つ。なお、下位側面は 5 とは異なり、中央へ張り出さず平坦である。幅 22 cm 前後、高さ 10.4 cm で花崗岩製である。7 は南調査区北側包含層出土で、非常によく残存しているが、下面で剥離した欠損が見られ、また表面の風化が目立つ。空風輪との連結用の割りは平面的に円形に近く、内部にはケズリの単位が確認できる。軟質の凝灰岩製で 1 辺約 24 ~ 25 cm 程度、高さ 13.0 cm である。8 は 5 号土坑出土で、非常によく残存しているが、下位の片側側面が欠損する。空風輪との連結用の割りは平面方形で、内部にはケズリの単位が確認できる。約 25 ~ 26 cm 程度、高さ 12.8 cm で軟質の凝灰岩製である。9 は 5 号土坑出土で、非常によく残存しているが、四隅の角の内の 1ヶ所が欠損する。凝灰岩製のものとしては、表面の風化は他のものよりも目立たず、研磨による平滑さが残る。斜行して立ち上がる上半に対し、それより下位の異なる立ち上がり部分が非常に低いという特徴がある。上位の空風輪および下位の水輪との連結用の割りが繋がって、上下で貫通している。割りは平面的に円形で、下方へ急に広がる屈曲のある断面で、内部にはケズリの単位が確認できる。一辺約 28 ~ 29 cm で高さ 12.6 cm である。10 は 5 号土坑出土で、欠損が著しく上部の片側面部分に沿って残存する。外側面は研磨で平坦に仕上げられる。幅 24.3 cm、高さ 8.2 cm で軟質の凝灰岩製である。11 は 16 号土坑出土で、欠損が著しく角部分の小片とみられる。2 側面が残存しているが、両者の傾斜が異なっている。幅 9.4 cm、高さ 5.0 cm で軟質の凝灰岩製である。12 は 5 号溝出土の小片で、欠損が著しく原形をあまり留めておらず、表面の風化も著しい。弧状に残存する内側の側面は垂直で、空風輪との連結用の割りの痕跡とみられ、平面的には隅丸方形であったとみられる。幅 18.1 cm、高さ 6.2 cm で、軟質の凝灰岩製である。

13 ~ 16 は水輪で、15 の「壺形」以外は全て「球型」の形状である。13 は南調査区北側包含層出土で、上下の判別が困難で、片側の端面側が大きく欠損し、残存する端面はごくわずかに中央が張り出するものの、非常に平坦である。径 23.0 ~ 23.4 cm の比較的シメトリーな形状で、残存高 13.8 cm である。軟質の凝灰岩製で表面の風化が目立つ。14 は南調査区北側包含層出土で、1ヶ所に梵字とみられる墨書が部分的に確認でき、「キリーケ」の下端部が残ったものである可能性が高い。なお、他箇所にも墨書の可能性のあるやや黒ずんだ部分があるものの判然としない。「キリーケ」とした墨書による天地に基づけば、上面は平坦に近いが中央へ向けやや窪む。下面は大きな欠損で残存していない中で、欠損部の中央に方形の窪みともとれる部分があり、地輪との連結用の割りの可能性も考慮される。ただし、水輪下面に割りを施す例は乏しく、欠損時に生じた形状である可能性が高い。径 22 ~ 23 cm 程度、高さ 17.6 cm で軟質の凝灰岩製である。15 は南調査区北側包含層出土で、表面の



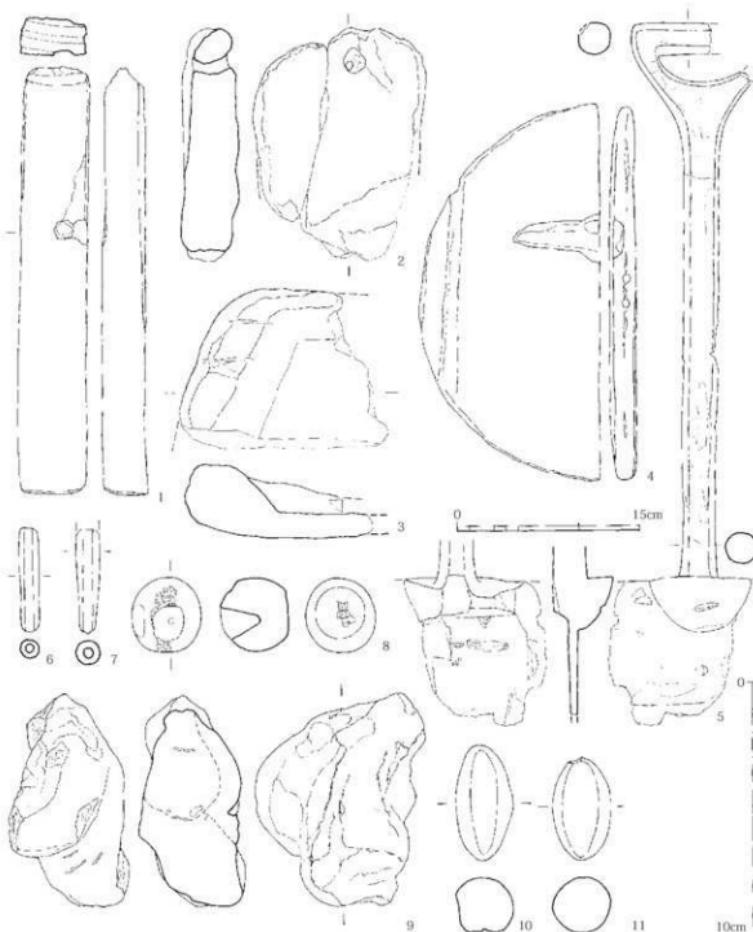
第52図 出土石塔類実測図④ (16は1/5、他は1/4)

風化は目立つものの、ほぼ完形で残存し、最大径がやや上位にある「壺型」の形状である。最大径からみると、全周的に部分による差がわずかで、非常にシメトリーなつくりである。一方、上下端で径や面となる部分の幅・大きさの差が明瞭で、中央を上下に大きな孔が貫通する。この孔は上下端付近よりも中位部分で最も広がり、径14cm以上になる。また孔の表面には工具によって施した多数のケズリの単位が認められる。径29.4cm、高さ19.2cm軟質の凝灰岩製である。16は南調査区北側包含層出土で、上部の欠損が目立ち、破片となった部分や失われた部分がある。最大径からみると、ほぼ全体的に31cm前後と非常にシメトリーなつくりである。大きな孔が中央を上下に貫通し、その径は14~15cm程度で、孔の表面には工具によって施した多数のケズリの単位が認められる。側方の4ヶ所に梵字が刻書され、その内側に部分的に墨書きが残る点が認められる。刻書された梵字は「キリーカ」、「タラーク」、「ウーン」、「バク」とみられる。高さ21.2cmで軟質の凝灰岩製である。

17・18は地輪である。17は5号土坑出土で、平面方形の四隅のうちの1ヶ所に目立った欠損が見られる。上面は下面よりやや広い分わずかに外方へせり出しているため、側面はわずかに外側へ広がって立ち上がる。また、下面是わずかに中央へと窪み、上面は中央へと張り出して側方から見た断面は反った形状である。表面には全体に敲打痕が目立つが、上面は研磨である程度平滑となるのに対し、下面では凹凸が際立つ。一辺25.5~26cm、高さ8.5cm（中央部の厚さ8cm）で花崗岩製である。18は南調査区北側包含層出土で、欠損が著しいが、わずかに側面とみられる箇所が残存し、方形の地輪と考えられる。また常に粉状にわずかずつ崩れていくほど表面の風化が著しく、被熱した可能性も考えられる。上面と考えられる片側に水輪との連続用とみられる隅丸方形で浅い削りが残る。軟質の凝灰岩製で、残存部位で幅25.6cm、高さ8.2cmを測り、上面の削りを中心と想定して残存する側縁までの長さを反転して捉えると一辺26~27cm程度になると言える。

#### 木製品（図版33、第53図1~5）

1は4号溝下層出土の断面方形の棒状の木製品である。片側の端部が上下面から徐々に薄くなるように削られ、側面から見て中央へ突出した形状となるが、端部は削り残しがあるため尖ってはない。それ以外の面は概ね平坦に仕上げられているが、1ヶ所のみ窪みが穿たれている。用途は不明である。長さ17.5cm、幅2.7cm、厚さ1.8cmである。2は東西貝塚トレンチ出土で、欠損しており全体形や用途は不明で、遺存部分も2片に分かれ。上下面、側縁ともに粗雑に仕上げられ、端整な形状ではなく、穿孔から人為的な痕跡が判断できるのみである。長さ9.5cm、幅7.0cm、厚さ2.3cmでクリ材を用いている。3は南北貝塚トレンチ出土で、大きく欠損しているが容器状の形状がやや残ることから、盤と想定される。側辺の屈曲部が残るが、直角に近くはなくやや鈍角の変化である。また、2辺残る側壁の厚さには大きな差がある。長さ8.6cm、幅6.5cm、高さ3.0cmでクリ材を用いている。4は5号土坑出土の半月形の板状木製品で桶底板であろうか。両面ともにはほぼ平坦に仕上げられており、側縁も概ね整った仕上げとなっている。直線的な側縁の中央付近には穿孔があり、心棒も一部残る。そのすぐ横の片面側に施された凹部とともに、他の部材と連絡するための構造であり、組み合わせで円形となつたと想定される。長さ15.5cm、幅7.4cm、厚さ0.9cmでスギ材を用いている。5は北調査区貝塚トレンチ出土の一木鉤で、柄の端部の一部と身の多くを欠失し、3片に分離している。柄の断面はほとんどが円形に近いが、端部は表裏面側をわずかに平坦に仕上げている。なお、柄の上面側の表面には、残念ながら掘削時に与えてしまった欠損が目立っている。身は先端側から



第53図 出土木製品および土製品実測図 (5は1/4、他は1/2)

柄へ移行する付近で表裏ともに肥厚する。表面側は柄と連続する高さまで段状に変化し、裏面は半円錐状に突出してから柄へ段状に変化する。残存長 57.6 cm、柄長 45.4 cm、柄端部は 11.2 cm 程度に復元され、身の最も厚い部分で 4.8 cm を測る。アカガシ亜属の原材から製作されている。

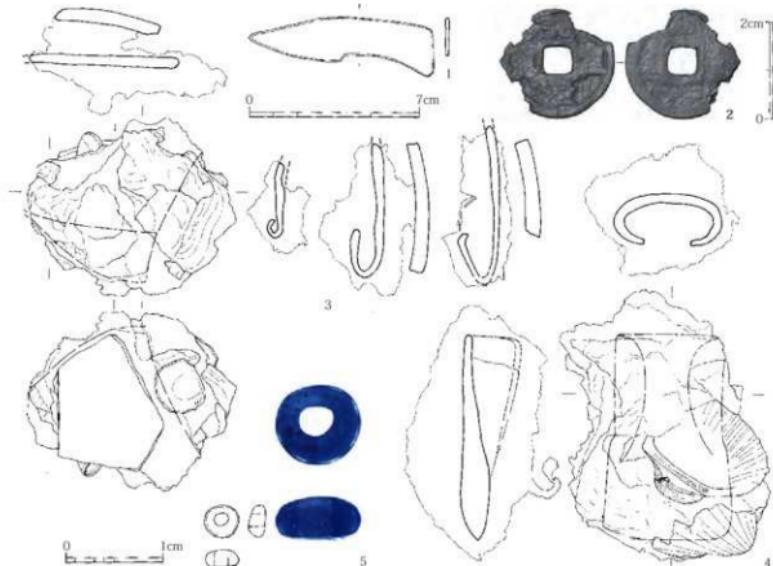
#### 土製品 (図版 33、第 53 図 6 ~ 11)

6・7 は管状の土錐である。6 は北調査区検出時の出土で、全体的には均一な径で、灰白褐色で

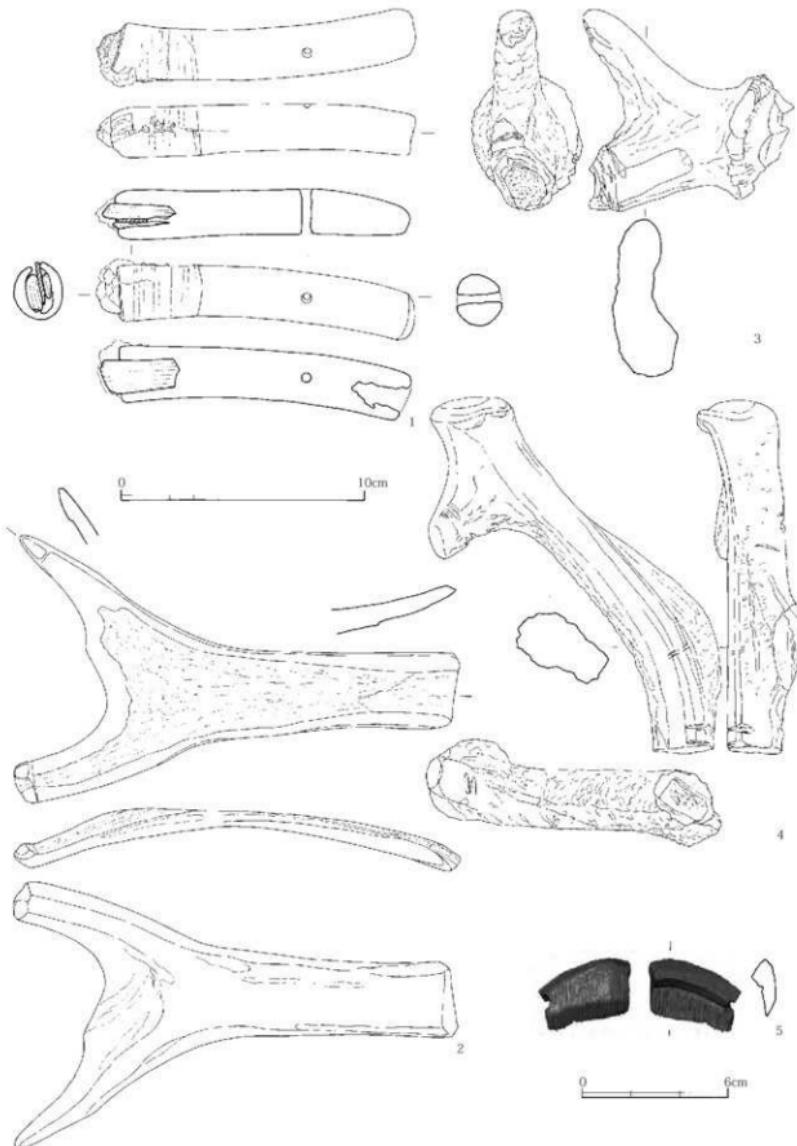
ある。6は北調査区検出時の出土で、全体的にはほぼ均一な径で、灰白褐色である。長さ4.3cm、径0.8cm、孔径0.3cm、重さ23gである。7は5号土坑出土で、片側の端部が欠失しており、残存部から中央部の径が大きく、端部にいくにつれ細くなる形状とみられる。淡灰茶褐色で長さ4.3cm、最大径1.0cm、孔径0.4cm、重さ35gである。8は北調査区貝塚トレンチ出土で、全体に丸い形状であるが、底は稜を伴って変化して面をなす。また、押圧により欠損したかのような小さな窪みがある。上部には下方へと大きく孔が穿たれている。表面は平滑で細かい擦痕が目立ち、ミガキを施した可能性がある。上部には気泡状の小孔が目立ち2次的に被熱したとみられ、表面が黒色である点もその影響の可能性がある。9は16号土坑出土で、不整な形状の焼き粘土塊である。欠損が著しく原形を推し量ることは難しい。胎土は堅緻で、還元炎焼成によるためか、淡青灰色を呈する。表面はナデ調整され、わずかに工具痕がみられる。破面に連続した空隙が見られることや、X線CTの画像より複数の粘土塊を寄せ集めて作られていることがわかる。10・11はラグビーボール状の形態の投弾である。10は東西貝塚トレンチ出土で、表面の半分は丁寧に仕上げられているが、残りは起伏が目立ち、断面は整った円形とはなっていない。長さ4.7cm、径2.4cm、重さ24.7gである。11は北調査区北端トレンチ出土で、表面は丁寧に仕上げられている。長さ4.2cm、最大径2.4cm、重さ22.6gである。

#### 金属製品およびガラス小玉 (図版34、第54図1~5)

1はピット78出土で、完形であるが用途不明である。外形は緩い弧状をなす部分がほとんどで、直線的な部分はわずかである。厚さは全体に均一で、側縁は非常薄いながら面をなしており、刃等の加工は施されていない。表層のみわずかに錆化しており、あまりに安定した状態であるため、か



第54図 出土金属製品およびガラス小玉実測図 (2は1/1、5は2/1、他は1/2)



第55図 出土骨角製品実測図 (5は1/1、他は1/2)

なり新しい時代の所産である可能性が高く、ビット78も相応の時期となると考えられる。長さ7.5cm、幅2.0cm、厚さ0.15cm程度である。2は1号溝出土の銅錢で、欠損が大きく、残存部表面も劣化が著しいため、銭貨の種類の判別は非常に困難である。ただ、上部の一文字目が「天」もしくは「元」で、特に篆書体の「天」の可能性が高く、天聖元宝（初鋤1023年）とみられる。「元」の場合は、「元豐通宝」、「元祐通宝」、「元符通宝」が考えられ、いずれにしても11世紀後半の初鋤である。裏面に文字ではなく、径2.4cm程度とみられる。

3・4はともに下層貝塚から出土した鉄滓状の塊で、X線CTによる解析の結果、鉄製品が内包されていることがわかった。著しく錆彫れしているのは、塩分を多量に含んだ貝塚中に埋没していたことが大きな要因として考えられる。3は南北貝塚トレンチ出土で、表面には土器片・貝殻が付着する。内部の製品部分は鉄板状で、欠損が大きく全体形を把握し難いが、一部で残存する端辺では折り返されているのが確認できる。その折り返しは、片側へ向け徐々に小さくなっている。器種は判然としないが、鎌先等の可能性が考えられる。4は北調査区貝塚トレンチ出土で、表面には貝殻等が付着する。内部では、片側へと厚くなっているが、その端辺が刃部とみられるとともに、薄い方は断面C字状の基部とみられるため、袋状鉄斧と考えられる。なお、袋部では片側の端部付近で一部が欠損しているのが確認できた。長さ8.5cm程度、幅5.3cm程度、高さ2.4cm程度である。

5は貝層出土遺物の洗浄土のふるいから拾い出されたガラス小玉である。青緑色に類される色調で、孔と同方向へ列ぶ気泡がわずかに認められることから、引き延ばし法による製作と想定される。また、非常に細かい気泡が集中して広がる部分が見られる。径は3.3～3.5mm、孔径1.6mmを計り、厚さは1.3～1.7mmと部分により差が大きい形状である。

#### 骨角製品（図版35、第55図1～5）

1は南北貝塚トレンチから出土した刀子の鹿角製柄である。わずかに反りがあり、中央よりやや柄尻側に穿孔が施されている。この穿孔は基尻を留めるための目釘等の役割かと思われたが、着装部の柄口から穿孔部までは中実のため異なる。柄尻部分が大きくなることと併せると、柄尻に装飾物を固定する機能である可能性が想定される。柄口の内部では、X線CTにより複数の物体が確認できる。柄口付近に付着する錆彫れの隙間から一部見える内容物は木質とみられ、X線CTの断面映像から鉄の基尻を木質物で挟んで差し込むことにより固定しているようである。また、この付近の外表は一定の幅で黒光りして劣化が少ない。この範囲にはわずかに蔓状の植物の残片があり、またその1単位の幅での巻き付け痕が多数残っていることから、緊縛して固定したものと想定される。長さ13.0cm、径2cm前後である。

2は5号土坑出土の鹿角製品で、表面を薄く切り出しており、長い部分から短く二又に分かれる平面Y字状で、側方から見ると反った形態である。二又の短い側の端部は、ともに切り出し面側に厚くなっている。一方、長い側の端部は、切り出し面の内側がわずかに窪んで周りよりも薄くなっている。5号土坑自体は中世後期の所産であるが、遺構の掘方の判別が非常に困難な下位部から出土し、近似した標高の下層の時期である弥生時代の所産という可能性は捨てきれない。なお、その場合は、本来同様の形態の対となる部材があって、両者を合わせて刀子を挟み込む形の柄という可能性が挙げられる。二又部分の段差は合わせた両者のずれを防ぎ、長い部分の窪みは基尻が入る隙間で、外表から緊縛して固定したとの見方ができる。ただ、想定の域を出ない仮説

ではある。長さ 18.4 cm、幅 12.0 cm である。

3・4 はともに南北貝塚トレンチ出土の鹿角の根元部分を伴う加工材もしくは未成品である。3 は根元に鋭い鉄器によるとみられる切痕があり、頭骨から切り離されている。上方へ延びる主幹部分は、二又に分かれた上方で切り離されている。多様な角度から何度も刃を入れているため、複雑な切痕となっている。短く分岐する先端部にも小さな切痕が見られる。4 の根元には丸みがあつて磨滅したような状態で、切痕は見られない。鹿が存命中の生え替わりの際に自然に頭骨から遊離したものと考えられる。上方へ延びる主幹部分は、二又に分かれた部分から 11 cm 程度余して切り離されている。その切離面は、数度別の角度から刃を入れた痕跡を残すものの、延長軸に対してほぼ垂直なものとなっている。この主幹部分から側方に短く延びる部位もあったようであるが切除した切痕が残る。また、主幹部にも根元で短く分岐する側にも外側に細かい切痕が残る。

5 は貝層出土遺物の洗浄土のふるいから拾い出されたエイの歯板である（127 頁 表 4 サンプル No. 55）。櫛歯の根元にも似た細かい凹凸が特徴的で、逆側は一定の幅のある面をなしている。欠損しているものの、破面の片側に穿孔の痕跡が見られる。同類のエイの歯は他にもふるいから多数検出されているが、人為的な加工が認められるのはこの個体のみである。装飾品として用いたものであろうか。長さ 1.2 cm、幅 1.9 cm で端部の面は広い部分で 0.5 cm 程度である。

#### (4) 小結

##### ① 上層の中世主体の遺構等

上層の遺構の各個別の時期については、表 2 に整理する。遺構の性格の想定可能な土坑は少なく、土壙墓（1 号土坑）・井戸（4・5・13・16 号土坑）に限られる。また、3・11・15・17 号土坑については、その性格は不明瞭ながら、形状、法量や埋土の堆積状況で類似性が非常に高い。これらが同一地点に切り合いながら、繰り返し掘削される点に有意性があると言えよう。また、8・20 号土坑についても、近接地点にあって、大型であるとともに壁の立ち上がりが非常に緩やかで、共通した性格であったと想定される。土坑の時期としては、15 世紀から近世（～17 世紀？）の範囲の中にある、近世と思しきものが半数近くとなる。

一方で、溝では明らかに近世に存続したとみられるものはない。2 号溝は、1 点のみの出土遺物の時期が不明瞭で、遺構の時期も把握し難い。また、6 号溝については、掘削が部分的かつ包含層中に及ぶため出土土器が遺構の時期を反映するか確実ではないが、主な遺物は 10～11 世紀で古代の範疇である。ただし、後述する 4 号溝との類似性から 15～16 世紀となる可能性がある。それ以外の 1・3～5 号溝は 15～16 世紀の中に納まるとみられる。1・5 号溝は、出土遺物の内容が類似するとともに方向軸も概ね共通し、相関する可能性が高いと考えられる。

4 号溝は部分によって深さや幅に大きな差があり、底面の一部が急に深くなる箇所も存在する。掘り返しと思しき痕跡や平行して切り合う部分も見られる。このように複雑な構造となっているが、別遺構を包括してしまっている部分のある可能性も捨てきれない。北端では屈曲すると捉えており、当初更に 1 号溝と 4 号溝は西側の調査区外で繋がって方形状の区画をなした可能性を想起したが、両者の遺物の出土のあり方や内容が異なっている。また、1 号溝との相関性の見込まれる 5 号溝は 4 号溝に切られることもあり、併存せず 1 号溝より後出と想定される。掘り返し等により少なくとも 2 時期に分かれ、最終掘削時期は 1・5 号溝よりも後出との判断から 16 世紀でも特に新しい時期

表2 B区遺構一覧表

遺構名	切り合い	主な出土遺物	遺物の時期	備考
土坑1（土壤基）	土14より新	土師器壺2点	16世紀（前半）	
土坑2		朝鮮産粉引か	15～16世紀？	粉引でない可能性も多い。
土坑3	土17より新	染付3点、陶器1点	近世	
土坑4（井戸）		青磁碗	15世紀？	青磁碗の残存が悪く、時期不詳。
土坑5（井戸）		瓦質土器火鉢・鍋、土師器壺	15世紀	一括性高いか、他に五輪塔部材や鹿角製品が出士。
土坑6	土12より新	土師器壺・小皿	近世か	一定量の土器片が出土するものの、時期を示す資料は不明瞭。切り合い関係から近世か。
土坑7		陶器短頸瓶	近世か	
土坑8		瓦質土器火鉢、瓦	16世紀	
土坑9		白磁碗	近世か	
土坑10		瓦質大型甕	15～16世紀？	遺物は小片のみで図示できず。
土坑11	土15より古	青花皿（E型）	16世紀	
土坑12	土6より古	染付片	近世	
土坑13（井戸）	溝1より古	土師器壺鉢	15世紀（前半）	溝1に先行のため15世紀前半か。
土坑14	土1より古	瓦質土器壺鉢	15（～16）世紀	
土坑15	土11～17より新	陶器壺鉢小片	近世	遺物は小片のみで図示できず。
土坑16（井戸）		青磁皿、瓦質土器、土師器、近世陶器1点	16（～17世紀）	遺物の主体は16世紀。井戸で存続期間が長いために近世陶器片が出土か。もしくは混入か。
土坑17	土3～15より古	青磁皿	近世	
土坑18		出土遺物なし		
土坑19	溝6より新	青磁碗、土師器鍋、瓦質土器火鉢	15世紀	瓦器碗は混入か。
土坑20		土師器小皿、陶器鉢	近世	
溝1	土13より新	青花、青磁、白磁、土師器、瓦質土器	15～16世紀	15世紀後半～16世紀前半が主体。15世紀前半、16世紀後半も含む。
溝2		土師器皿1点		
溝3		瓦質土器壺鉢	15世紀	
溝4-1（南側）	溝5より新	須恵器大甕	15～16世紀？	土層から掘り返し等あり。
溝4-1（北側）		白磁碗、青磁碗	15～16世紀（下層遺物には12世紀後半～13世紀もあり）	土層自体では明瞭な掘り返しが確認できず、中世前後の遺物は混入と考える。
溝4-3		白磁皿、土師器壺、黒色土器、天目碗	15世紀前半主体（7-10世紀もあり）	切り合があるが、遺物の時期差が非常に大きく、古代の遺物は混入と考える。
溝5	溝4より古	青花、青磁、白磁、土師器、瓦質土器	15世紀後半～16世紀前半	
溝6	土19より古	土師器壺、黒色土器、須恵器壺	10～11世紀（6世紀も含む）	遺構内出土資料に加え、北側調査区の北端トレント出土資料を対象。
大溝		瓦質土器茶釜	16～17世紀	出土遺物が少なく、遺構の時期は不詳。

と想定される。なお、この4号溝と先述の6号溝とは屈曲や方向軸での共通性や位置関係から同時的な区画機能を担ったとみることもできる。先述では6号溝の出土遺物は古代主体である点に触れたが、4号溝でも古い時期の混入遺物が目立つ点が挙げられ、遺物のみの判断では時期が不明瞭なため、両溝の埋没の状況が共通していたと仮定すると、近似した時期となる可能性が十分にある。

大溝については、伴う出土遺物が著しく少なく、B区内で言及できる点は限られている。A区の大溝（2号溝）と繋がると想定され、これについては、「V 考察」で言及する。

なお、包含層出土や遺構出土の混入品ながら良好な残存状態の遺物が、古墳時代後期以降で継続的かつ多量である。この調査区内のみでも、近隣に集落等の遺構がまとまっていると想定できる。

## ②貝塚

上層の調査面から約 180 cm 程度の低い位置の貝塚を計 3 トレンチにて掘削した。弥生時代中期初頭の城ノ越期から弥生時代終末にわたる土器が出土し、特に後期から終末期が主体である。近隣調査地点の西蒲池池淵遺跡等から畿内五様式系等の外來系土器が出土していることを考慮すると、掘削範囲が限られているものの、今回提示した貝塚出土土器の中にそれらが含まれていない点は時期的な指標になると見える。したがって、今回の調査範囲内においては、貝塚の形成は基本的に古墳時代まで至っていないと判断した。北調査区貝塚トレンチではやや中期の土器が目立つものの、不掲載のものを含めて各トレンチ間の出土土器に時期等の有意な差は認められなかった。

全トレンチで検出した貝塚の標高よりも上位において、3 トレンチの中で北調査区貝塚トレンチのみで堆積の厚み・幅のわずかな貝層を検出し「中層貝塚」とした。層位的には下層の貝塚と明瞭に堆積の先後関係をなすものの、出土土器はわずかながら弥生時代中・後期ともに含み、相互の貝層で時期的な差を見出しづらい結果となった。また、更に上位の包含層および遺構の密集範囲からの出土土器の時期は、古墳時代後期が最も古いとみられるため、それ以前に部分的な地形の上昇が生じ、以降でも依然露出していた下層貝塚が何らかの理由で 2 次的な堆積をした可能性が高いと考える。トレンチ内の限られた範囲では、弥生土器しか出土していないが、C・D 区の須恵器等も出土した土器貝殻層につながる可能性がある。

なお、貝塚分布範囲外での下層からの土器の出土や土層での遺構確認から、貝塚とはほぼ同レベルでの低位部が一定範囲に広がっていると言える。

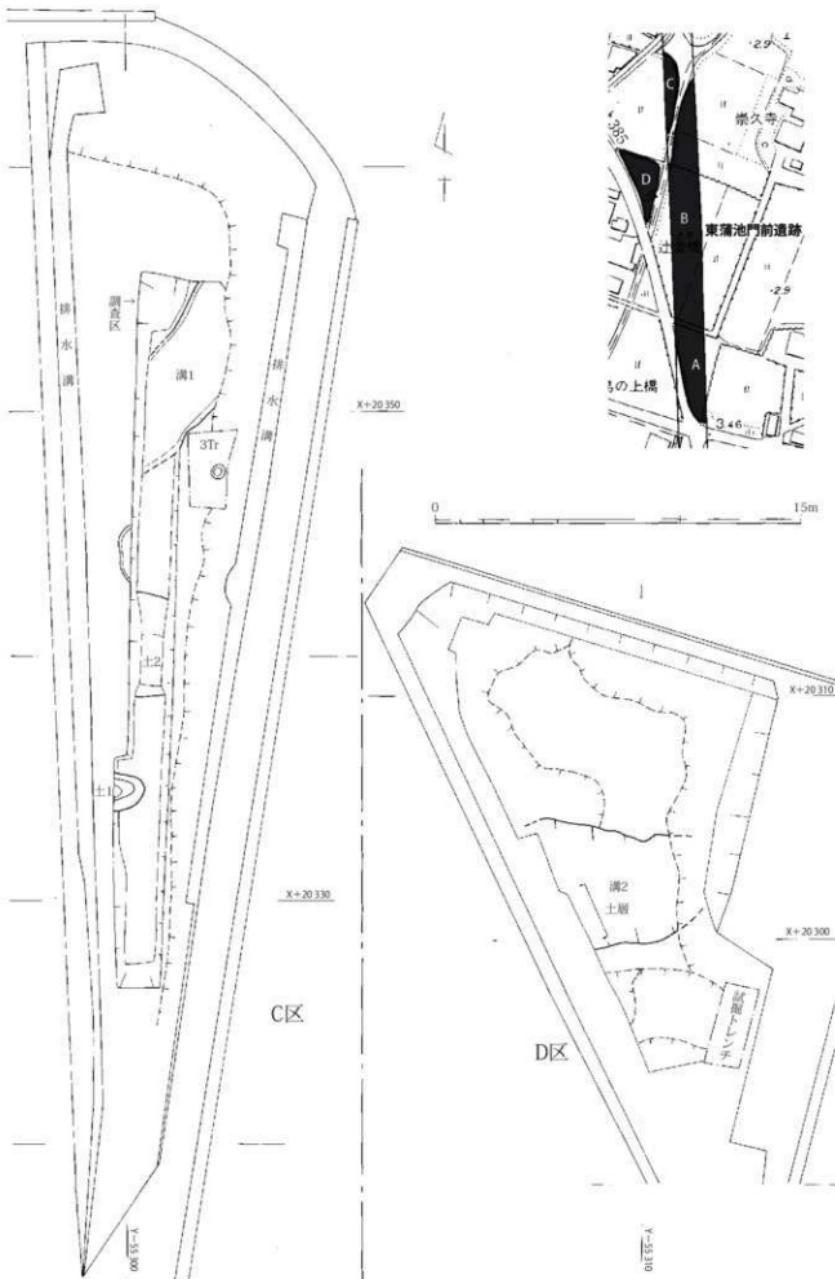
## 3 C・D 区の調査

### (1) 遺跡の概要

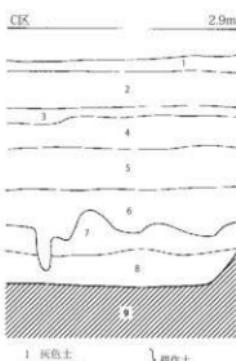
調査区は、国道 385 号バイパスと有明沿岸道路が交わる柳川西 IC 交差点交差点から北側へ 500 m 程度の地点である。C 区は当初から調査が予定されていた本線道路建設地で、D 区は急遽要調査となった現国道 385 号からの進入道路建設地で、両区の調査面積は合わせて 760 m<sup>2</sup> である。

本調査区については、北接する西蒲池池淵遺跡 II 地点の遺構が広がると想定されたことから本調査を予定していた。このため、調査当時の当該調査区の名称は「池淵遺跡」であり、「池淵遺跡 III・IV 地点」の調査として実施した。また、東接する B 区において、貝塚及び幅 5m の大溝が調査されており、その延長が存在することも想定されていた中、調査の結果として、北接する池淵遺跡と性格が全く異なり、南接する門前遺跡の延長である可能性が高いことがわかった。また、遺跡の名称について柳川市が全面的に見直すこととなり、遺跡範囲と遺跡名称を協議の上で整理され、本調査地は「東蒲池門前遺跡」の一部となった。なお、発掘調査にかかる書類上の手続きや調査中の注記等の遺跡の名称などは、すべて「池淵遺跡 III・IV 地点」となっている（7 頁 表 1 参照）。

調査地は筑後川の堆積作用と有明海の潮汐により形成された粘土質地盤の低平地上で、調査前の田畠の地表高は標高 27 m 程度、隣接する道路の標高は 32 m 程度である。調査区内の堆積層は、基本的に軟弱な粘質土が主体で、C 区は調査区北・東・南にクリークが隣接し、西は水田に隣接す

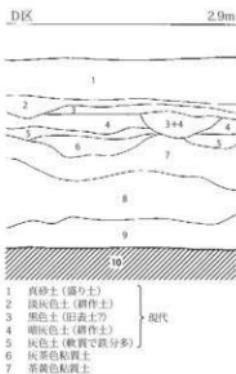


第56図 C・D区造構配置図 (1/300)



- 1 黄色土  
2 淡灰色土  
3 黒色土(旧表土)  
4 茶色土  
5 淡黄灰色粘土  
6 黑色土  
7 淡黄灰色粘土(苔青層)  
8 淡青灰色粘土(自然木色)  
9 青灰色粘土(地山)

} 稲作土  
} 旧表土  
} 稲作土



- 1 真砂土(盛り土)  
2 淡灰土(耕作土)  
3 黒色土(旧表土)  
4 剛灰色土(耕作土)  
5 黄色土(苔青分多)  
6 茶灰色粘質土  
7 茶灰色粘土  
8 淡黄灰色粘土(C区と同)  
9 淡青灰色粘土( " )  
10 青灰色粘土(地山)

} 現代

第57図 C・D区基本層序  
模式図(1/30)

る。D区は北・東がクリークに隣接し、西が現国道385号に接する。

C区は用地の約1/2が旧クリークによって削平されており、検出した遺構は土坑2基と溝2条、整地に使用されたと考えられる土器・貝殻層である。基盤層は北に向かって低くなり、土器・貝殻層が調査区全面に認められ、土坑や溝の一部がこの層を切る。土坑や溝の埋土は暗灰色系の粘土や地山の青灰色粘土の混在土が中心で、部分的に炭が含有される事もあった。土器・貝殻層は北側を現代のクリーク等に削平されるため北に向かって薄くなり、南側は基盤土レベルが高くなるため、上面を削平されて消滅する。土器・貝殻層の下には淡黄灰色粘土の薄い包含層が全面的に存在し、この下に溝1条を検出した。

D区は上層に旧クリークや現代の複数の落ち込み、流路、堰などが切り合い、様々な土が複雑に入り組んでいた。このため調査区内にはほとんど遺構は確認できなかったが、隣接するB区から延長すると考えられる大溝の一部を確認した。また、C区と同じ土器・貝殻層が確認できたが、その下に遺構は無く、地山の青灰色粘土層に達した。

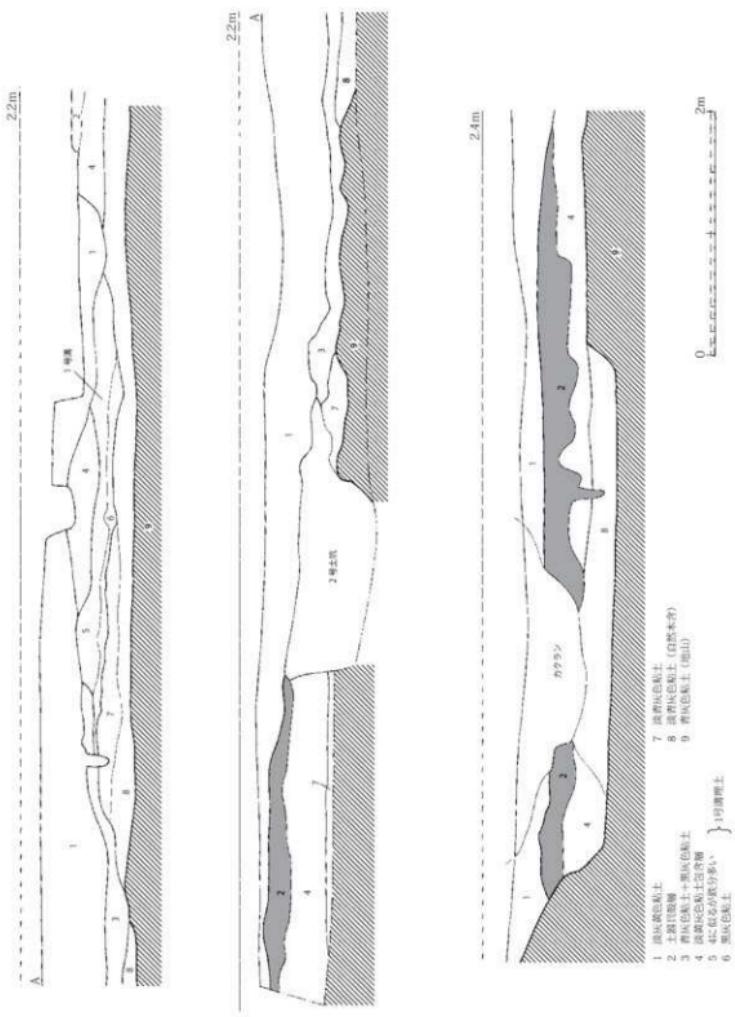
なお、B区で確認された弥生時代の貝塚の延長については、C・D両地区において地表下3.5mほどまで部分掘削を行ったが、確認されなかった。

## (2) 基本層序 (第57図)

本調査地は、調査前はC区では水田耕作が行われ、D区は畠地として使用されていた。このため基本的に耕作土が上層を覆っている。各区の基本層序を第57図に掲げている。

C区は最上面に現代の耕作土が厚く堆積する(1・2層)。その下には10cm前後の旧表土(3層)が存在し、一時耕作がなされていないことがわかる。これを挟んで下に堆積する茶灰色土(4層)は1・2層とは同質であり、水平堆積することから同じく耕作土と考えられる。この下に堆積する淡灰色粘土(5層)は土器の小片が若干含まれるもの、正確な時期は不明である。今回検出したすべての遺構を覆うもので、底のレベルは標高1.7~1.9mと調査区内にはほぼ均一に広がる。これより下が遺構面となり、調査区のはば全域

を土器・貝殻層が覆う。多数の土器や貝殻が黒灰色粘土とともに埋められ、厚さは下位の層上面の形状に合わせて変化する。この層から湧水が激しくなり、調査中は常に湧水との戦いであった。土器・貝殻層を切る形で、土坑・溝が存在する。その下には若干の遺物を含むし、20cm前後の厚さを持つ軟質の淡黄灰色粘土が堆積し、1条の溝を覆う。これ以下は基盤層と見られるが、ややグライ化した軟質の淡青灰色粘土の中には自然木や種子が含まれ、特に北側に多い。その下の基盤層である青



第58図 C区西壁土層実測図 (1/40)

灰色粘土が南に傾斜することから、流れ込みかもしれない。最下層の青灰色粘土も軟質で漏水が激しく、これらは土器や植物質を包含しない。

D 区は畑地であったが、表土下は真砂土が約 20 ~ 30 cm 厚く堆積していた。その下位に耕作土や旧表土が薄く堆積している（2 ~ 4 層）ことから、水田から畑地に変換する折に盛り土を行っているようであった。下位の耕作土等の下は標高 22 ~ 24 m に平坦面があり、これらの層の下位は、ほぼ全面が現代の水路や落ち込みによって削平を受けているため、層序は箇所によって異なる。この面で B 区から延長すると思われる溝の一部を検出している。図示した基本土層は、調査区西側壁面の溝埋土の東側の比較的安定した部分を選んで作成した。溝の下層にある 7 層は C 区の遺構面を覆う淡灰黄色粘土と同じもので、その下にも同様の淡黃灰色粘土が堆積する。本来この間にある貝殻土器層は、削平を受けて調査区の数箇所に散見するのみであった。削平が激しいためこれ以下は部分的な検出であるが、標高 1.5 ~ 1.7 m ほどがグラウイ化した青灰色粘土の基礎層であり、C 区とは異なり、これらには土器や自然木などは包含されていなかった。

### （3）調査の経過

C・D 地区の調査は、平成 22 年 7 月 23 日から平成 22 年 9 月 28 日にわたって実施した。重機を 7 月 23 日に搬入したが、各調査区はクリークに囲まれており、いずれの調査区にも重機の進入口が無かった事から、まずは鉄板などによりクリークを越える橋を設置する事からはじめた。設置後は、C 区の北側から表土を剥ぎ始めた。淡灰黄色粘土の面では、調査区北および東側に鉄分と真砂土を多く含む茶灰色土の落ちが確認されたが、一部を掘削し、隣接するクリークの護岸前の肩であると判断した。この面では、調査区中央から須恵器や糸切り底の土器器小片などが出土したことから、遺構面の可能性を考えて面的に広げた。しかし遺構ではなく、遺物は時期の混在する小片が少量出土するのみであったことから、これらも客土と判断した。さらに下層を部分的に掘削したところ、約 70 cm 下に淡黃灰色粘土の面が確認できた。この面では土器や貝殻を多量に包含する部分がいくつも見て取れ、これを遺構面と捉えて全体を面的に広げたいところであった。しかし前述の旧クリークが狭小な調査区の東半部を占めており、掘削による軟弱地盤の崩壊から現クリークの護岸が崩落する危険性があることから、調査区東半部及び北側一部の掘削を断念せざるを得なかった。また、表土剥ぎ中に西接する水田から水が漏れ出し、更に深く掘削する事で畔が崩落する危険性と、田植え時期に水田から漏水して水田に悪影響を与える危険性を指摘された事から、調査区西側の掘削も困難な状況になった。このことから、調査区中央に幅約 2m のトレーニングを設定して、部分的に調査を行うという方法を取る事になった。

C 区の表土剥ぎ及び廃土の移動を行なながら、7 月 26 日から作業員を投入し、C 区の遺構検出を行った。調査区内のはば全面の各所に、遺物や貝殻を多量に含む層が堆積しており、それを切る形で土坑や溝のプランを確認した。土器・貝殻層については当初遺構の可能性も考えて面的に広く露出させたところ、調査区全面に広がる遺物包含層であること確認した。さらに、包含される遺物には弥生中期の土器から糸切り底の土器器まで混在することから、中世以降の堆積または客土と判断した。土坑・溝の調査後は、トレーニング内の土器・貝殻層の遺物を取り上げ、その後に下層の調査を行った。広さに制限のある遺構検出ではあったが、結果土坑 2 基と溝 1 条を確認した。また、土器・貝殻層については、可能な限りトレーニングを広げて遺物を取り上げた。

C 区の調査を進めながら、D 区の表土剥ぎに移った。D 区は C 区とは様相が大きく異なり、C 区の旧クリーク埋土と同様の、鉄分を多く含む様々な色の埋土が入り組む状況であった。8月 19 日から D 区にも作業員を投入して遺構検出を行ったが、旧クリークやこれに伴う堰の掘り込み、その他多数の落ち込みなどが切りあう状況で、遺構面は大きく削平を受けていた。現代のカクランを除去した後、調査区西側において僅かに残存する溝と数箇所に土器・貝殻層を確認した。

D 区の調査を行いながら、9月に入って掘削のほぼ終了した C 区トレント面の図化及び写真撮影と、全体図の作成を行い、D 区の調査終了後の 9 月 16 日に空中写真を撮影した。重機の進入不可能な部分を人力で埋め戻しながら、危険のない範囲で C 区の土坑周辺部分をトレントを若干拡張して掘削し、土器・貝殻層も遺物採集を行った。最後には地山と思われる箇所に重機でトレントを入れ、下層に遺構がないことを確認した。埋土・基盤層が軟弱地盤であるため、遺構掘削終了と同時に壁面が崩壊する事もあり、土層図の図化や写真撮影が不可能な箇所もあった。

9 月 22 日から重機を投入しての埋め戻しを行い、9 月 28 日に県土整備事務所の確認を得て、調査を終了した。日々湧水と滯水と暑さに悩まされ、わずかな遺構で 2 ヶ月の調査期間を要した。遺構は少なかったが、遺物量はパンケース 80 箱にも及んだ。

また、今回の調査では土器・貝殻層などから貝殻を中心とした動植物遺体が出土したが、自然化学分析に至っていない。これらについてはほとんどが客土中からの出土であり、その出自が不確定な資料であることから、隣接する西蒲池池淵遺跡の出土資料と併せて後日分析・報告を行うこととする。

#### (4) 遺構と遺物

##### 土坑

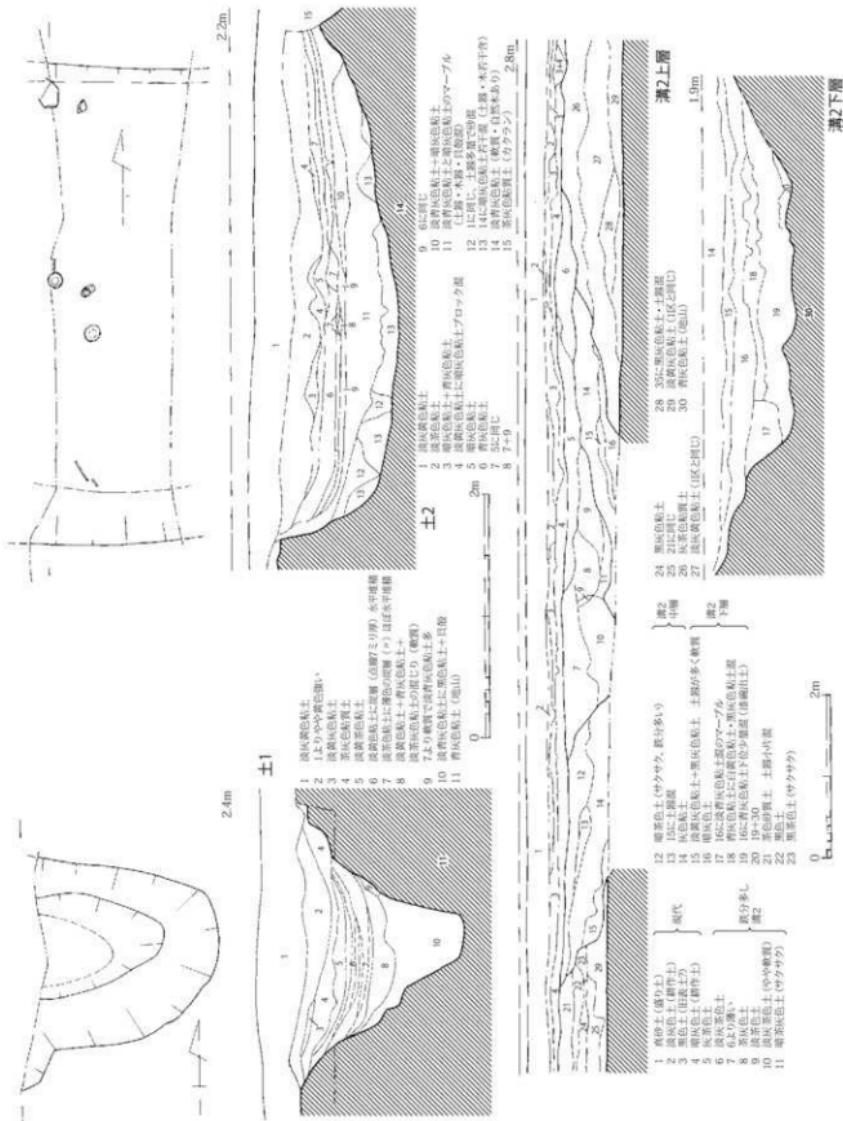
###### 1号土坑（図版 37、第 59 図）

C 区南側、2 号土坑の南に位置する土坑で、約 1/2 が調査不可能であったが、東西 130 cm 以上、南北約 80 cm の楕円形を呈すると思われる。壁の形状は上位は緩やかに立ち上がり、中位に段を有し、下位はやや急な傾斜で立ち上がる。底は不整形で全体にレンズ状になる。埋土は大きく 3 つに分かれる。上層には調査区を覆う淡灰黄色粘土や耕作土が入り、後世の上部からの転圧によって混入したと思われる。中層は淡い黄色・茶色系の軟質粘土がほぼ水平堆積し、各層の中に 7mm 程の炭層が数層水平堆積する。焼土の混入や土壤自体に被熱の痕跡は認められなかった。その下は中層粘土と地山粘土のブロックが混在する軟質粘土層で、最下層には地山粘土と黒色粘土の混在土中に貝殻が廃棄されていた。土坑内は中層あたりから湧水し、最下層は極めて激しかった。

###### 出土遺物（図版 41・45、第 60 図 1～4、72 図 7、第 73 図 2～4）

第 60 図 1～3 は土師器坏。すべて糸切り底で板状压痕は認められない。器形や法量に相違があるため時期差があると思われる。1 は口径に比して底径の割合が大きく平底になる。内外面に油煙が付着し、灯明皿に使用されたものか。2 は底径が小さくやや上底で、口縁が大きく開く。内外面ともナデによる凹凸が著しい。3 も口縁が大きく開くが底部は器壁が厚く、やや上底状になる。内面口縁端部に油煙が付着し、灯明皿に使用されたものか。

4 は青磁碗で、内面白口縁部付近にやや崩れた雷文を巡らせる。内面には貫入が多く、釉はやや緑色味を帯びる。



第59図 1・2号土坑および2号溝土層実測図 (2号溝は1/60、他は1/40)

第72図7は土錘である。中央からやや右にずれた位置に径1.1cmの孔を穿つ。焼成は良好で、黄灰色を呈する。

第73図2～4は木製品である。2・3は草履である。2は紐を通すための孔が1ヶ所に残る。3は側縁のみが遺存しており、出土遺構が同じことから2と同一個体である可能性もある。4は不明木製品である。2ヶ所にくびれを作りだし、先端は丸く仕上げる。弓の先端等に似るが、緊縛痕跡や擦過痕は認められない。

## 2号土坑（図版38、第59図）

C区中央で検出した土坑である。部分的な検出であるため溝の可能性もあるが、空中写真撮影後に西側を拡張したところ、プランがやや湾曲する形状を確認した事から、ここでは土坑として報告する。確認できたプランは南北4.0cm、東西1.2cmの半梢円形で、全体は梢円形を呈すると思われる。深さは最深で90cm弱で北側の壁は緩やかに立ち上がり、南側はやや急な傾斜を持ち、東側は旧クリークに切られる。底は南北方向はレンズ状を呈し、東西方向はやや平坦となる。埋土は大きく3つに分かれる。上層は上部からの転圧により混入したと考えられる茶灰色粘土が入り、中層は暗灰色粘土と地山の青灰色粘土が薄く互層に水平堆積する。下層は軟質の暗灰色粘土と地山の青灰色粘土の混合土に土器や木質が多量に含有されていた。1号土坑と同じく下層の湧水が激しかったが、貝層は存在しなかった。

## 出土遺物（第60図5）

5は瓦器塊の底部片で、復元底径7.6cmで、内外面ともミガキを施す。

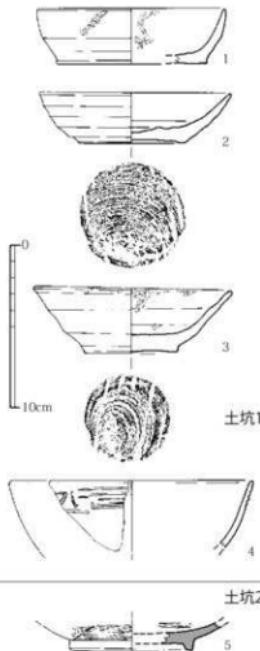
## 溝

### 1号溝（図版38、第59図）

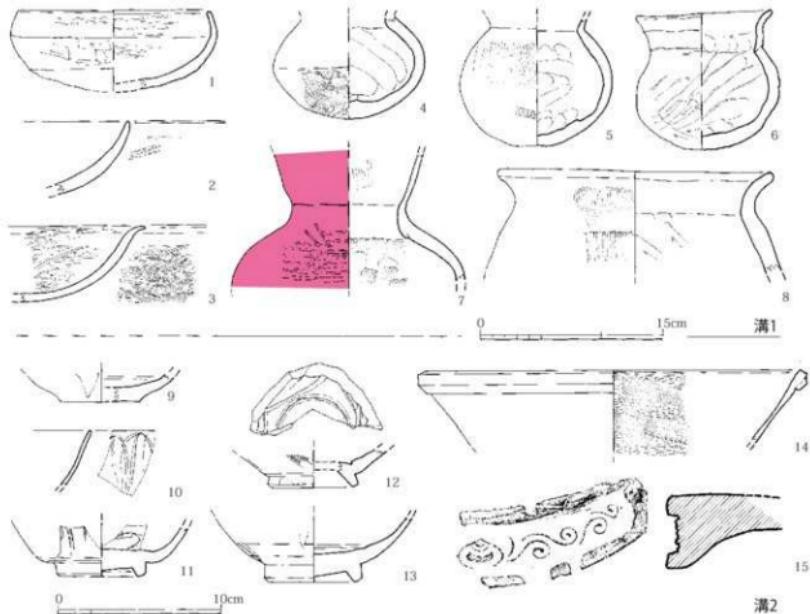
C区最北に位置する北東～南西溝である。唯一土器・貝殻層の下層で検出されたが、大きく削平されており、底近くのプランを検出したのみであった。確認した規模は、幅約3.5m、延長約5mである。深さは最も残りの良い場所で約25cm、上層には後世の埋土が被るため本来の埋土は10cm程度しか残存していない。埋土は軟質の黒灰色粘土で、土器や木製品、自然木を含有していた。溜り状の遺構の一部である可能性も考えられるが、直線的なプランを検出したこと、南端には杭の痕跡があることから、溝として報告する。

## 出土遺物（図版41、第61図1～8、第72図5）

全て土師器。1～3は壺で、1・2は塊型、3は鉢とも捉えられる。1は口縁部が内湾するもので、内面はミガキ後一部ナデ調整、外面は上位のみミガキで下位はケズリを施す。2は口縁部が直立し、



第60図 1・2号土坑出土土器類等実測図（1/3）



第61図 1・2号溝出土土器類等実測図 (14は1/4、他は1/3)

器壁が厚い。外面の一部にミガキが認められる。3は口縁が開き端部は強く外反する。内外面とも細かいミガキで調整するが、外面には一部ハケメが残る。4～7は壺。4～6は小型品で、器形から壺と捉えたが甕の可能性もある。4は口縁部を欠き、外面は細かいハケ調整後上位のみをナデ調整する。内面は縱位の強いナデツケによって仕上げる。5は口縁部を欠くが外反すると思われる。胴部は球形だが底は平底になる。外面上位はタテハケ調整、下位はわずかにヨコハケが残り、その後ナデ調整する。内面は粗いナデ調整で、指圧痕が顕著である。6は手捏ね土器で、内外面とも強く粗い斜位のナデツケで調整し、外底部のみケズリを施す。頭部には粘土接合痕が顕著である。口縁部は一部黒変する。7は口縁端部と体部下位を欠くが、口縁は若干内湾しながら立ち上がると思われる。内面はハケ調整し、外面はハケ調整後に丹塗りして粗いミガキを施す。8は甕。器壁が厚く頭部の屈曲が緩やかで、外面はタテハケ調整、内面はケズリを施す。

第72図5は石製紡錘車である。中央よりややずれた位置に孔が穿たれ、孔径0.6cm。片岩製。

## 2号溝 (図版39、第59図)

D区中央西側で検出した東西溝で、隣接するB区の大溝の延長と考えられるが、調査区西際部を除いてほとんどが削平を受けるため推定である。西側壁面で確認できる上端幅は斜断面で約86mを測り、平面的に確認できた下層最上位の幅は約52m、下端幅は約30mである。深さは最深で約14

mで、埋土は大きく3つに分かれる。上層は中央から北には近現代の落ち込みまたは溝等に削平されている。中層は深さ約1mまで灰色系の粘質土を中心に、地山土の青灰色粘土、黄灰色土など様々な土壤が混在してレンズ状に堆積する。ここまでいる層は、上層を切る溝などの埋土や周辺の土壤と区別がつきにくい。下層の40~50cm程は軟質の暗灰色粘土と地山の青灰色粘土が混在する層で、その層の上面で東西方向のプランを検出した。この中に土器や木質、漆塗などの遺物が含まれていた。下層各層の底面は凹凸が激しく、底の一部には杭が残存していた。

#### 出土遺物（図版44、第61図9~15、第73図1・5）

9~13は磁器。9は白磁の皿底部で、平底の外底部と体部外面の一部が露胎となる10~13は青磁碗。10は外面に蓮弁を配し、釉は厚くかかる。内面は貫入が多く、釉は灰色味を帯びる。11は龍泉窯系の碗で、内面に片彫りの花文を配する。豊付から外底部にかけては露胎で、釉は青味を帯びる。12は見込みに片彫りの花文を配し、段を持つ。外面には櫛目文を配する。豊付から外底部は露胎で、釉は灰色味を帯びる。13は底部の器壁が厚く高台がやや低い。釉は豊付まで施し、外底部のみが露胎。釉は黄色味を帯びる。

14は土師器の鍋。口縁端部を玉縁状に作り、外面はナデ、内面は細かいハケで調整する。

15は軒平瓦で、中心飾に宝珠文を配し、唐草を4回反転させる。

第73図1・5は木製品。1は漆塗で、口縁部破片が遺存し、表面に朱色の漆が塗布される。口唇部はわずかにくぼみ、割れ口から高台が付された可能性がある。5は下駄である。歯が2本付き、下段の歯は幅全体には達していない。歯はともに2cmほどの高さで、上部の歯は斜めに擦り減る。

#### 淡黄灰色粘土包含層（第58図）

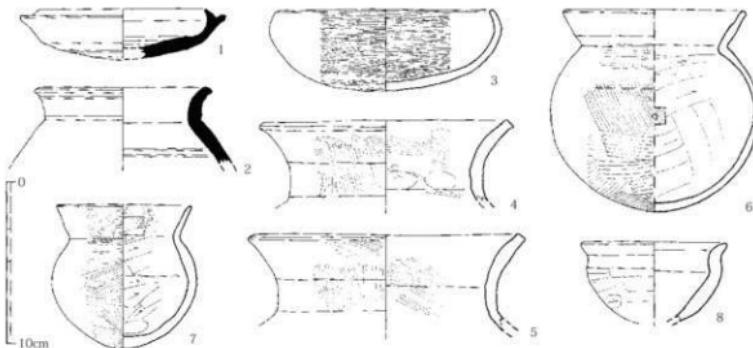
調査区全体に広がる粘土層で、1号溝のみを切る。僅かではあるが遺物を包含するため出土遺物のみ報告する。

#### 出土遺物（図版41・45、第62図、第72図3・15）

第62図1・2は須恵器。1はかえりを有する壺で、口縁は短く強く内傾する。全体に器壁が厚い。2は小型の壺で、頸部に沈線状の段が付き、肩部内面に2条の沈線が廻る。内外面とも回転ナデで、外面に自然釉がかかる。

3~8は土師器。3は壺型の壺で、口縁が強く内湾する。内外面とも細かいミガキで、底部のみミガキ前のケズりが認められる。4~7は甕。4・5はやや長い口縁が緩やかに外湾しながら立ち上がり、端部は断面四角に作る。内外面ともハケ調整で、4の頸部内面には指圧痕が認められる。6は布留系の甕で、口縁が大きく開きながら内湾する。外面はハケ調整後に胴部上位にミガキ状の工具ナデを施す。内面はケズりで一部をナデ調整する。体部中位に直径3mmほどの穿孔があり、外面には一部煤のような黒色物が付着する。7は小型品で、外面は斜位のハケ後タテハケで調整する。内面はケズりで、底部付近には指圧痕が残る。8は鉢の小型品で、器壁が厚く口縁端部をナデにより強く屈曲させる。外底部はケズりで、上位は工具によるヨコナデ、内面はヨコナデ調整する。

第72図3は土製投弾である。指ナデにより成形し、紡錘形を呈する。焼成は良好で、灰白色を呈する。15は上面のみが遺存し砥面とする。不明瞭だが、金属製刃器の研磨痕と考えられる痕跡が4条認められる。砂岩製である。石質と大きさから置き砥の仕上げ砥と考えられる。



第62図 淡黄灰色土包含層出土土器類等実測図 (1/3)

#### 土器・貝殻層 (図版39・40、第58図)

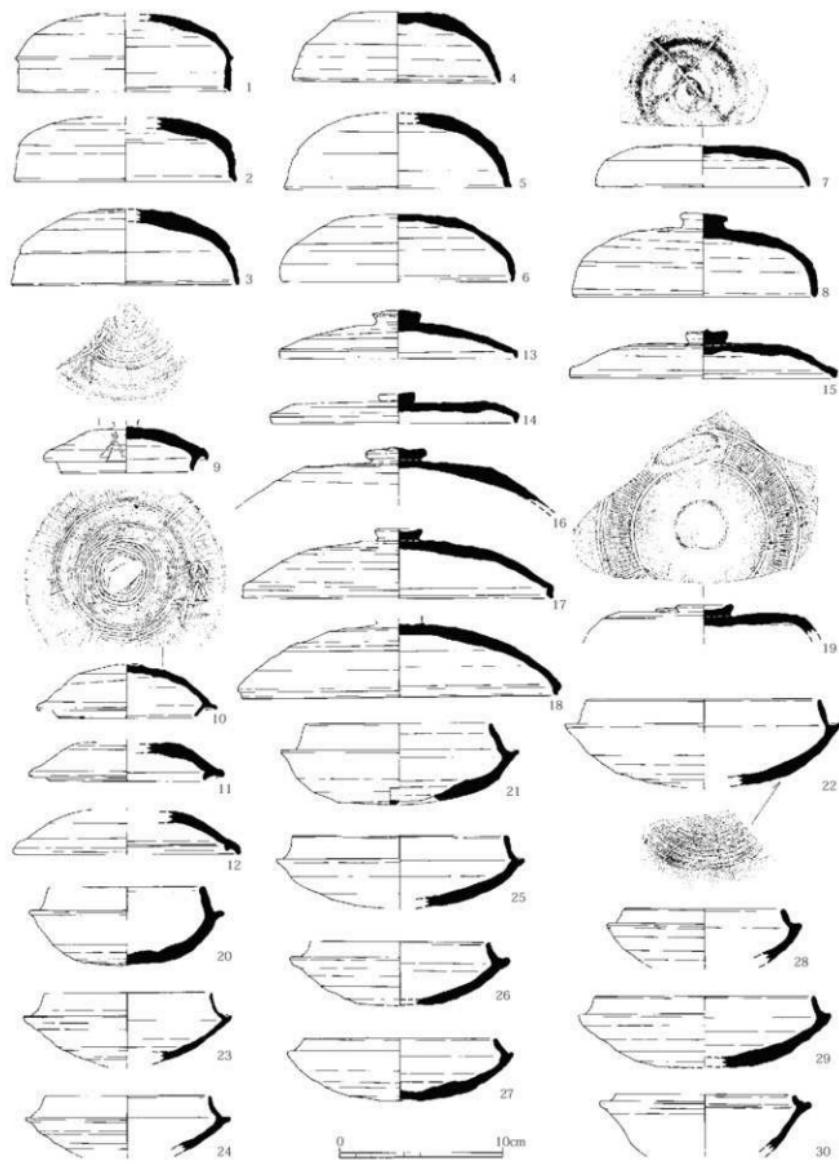
C区のほぼ全面とD区の一部に堆積する層で、大量の土器片と貝殻を包含する。C区では、削平を受ける箇所以外では厚さは15~30cm程度堆積していた。厚さの相違は下層粘質土層の上面形状によるもので、沈下部分や軟弱粘土部分に厚く堆積する。上面はほぼ水平で、その上に現代の耕作土と思われる淡灰黄色粘土が堆積していた。包含される土器は弥生時代中期から15~16世紀頃までと幅があり、貝殻は牡蠣類やハイガイを中心で、わずかに巻貝も混入していた。これらは地山の淡青灰色粘土と黒色粘土の混在する軟質の粘土の中に混在しており、土師質のものはローリングを受けている。この層は堅く締まり、また下位の粘質土層にある僅かな亀裂にも入り込むことから、堆積後に上部からの転圧を受けた事も考えられる。

包含される土器の時期差が広い事、貝殻の量が尋常ではないことから、ある時期の客土と考えられる。さらに、土器・貝殻層の下位層は水分を含む軟弱粘土地盤であり、生活面とするとには不安定であるが、土器貝殻層の上面は硬く締まっており、一定の平坦面を確保している。これらのことから、この層は現代のバラスのように整地時の地盤強化のための基礎として人為的に敷設され、上部から転圧された可能性を考えたい。

#### 土器・貝殻層他出土遺物 (図版41~45、第63~71図、第72図1・2・4~6・8~14・16)

この層からは弥生時代中期~中世の遺物が多量に出土したが、客土の可能性があることから遺構の時期を決定するものではないと考える。また、調査区内の中世の溝や土坑、表土からも混入と思われる遺物が多量に出土しており、これらの遺物を同質のものとして取り扱い、ここで合わせて掲載する。但し、出土量が大量であるため、代表的な器形のもののみを掲載する。

第63・64図1~60は須恵器。第63図1~19は蓋で1~8はかえりを持たない。1~3は屈曲部に段または沈線を有し、1は外面に自然軸がかかる。復元口径13.0~14.0cm。4~5は半球形を呈し、復元口径12.8~14.0cm。6~7はやや扁平な形状で、外面は口縁部付近を残しケズリ調整する。7は天井部に「×」のヘラ記号を有する。復元口径14.2~13.2cm。8はやや扁平なつまみを有する高壺の蓋で、復元口径15.0cm。9~18はかえりを有するもの。9は小型でつまみを有するが欠損する。



第63図 土器貝殻層出土土器実測図① (1/3)

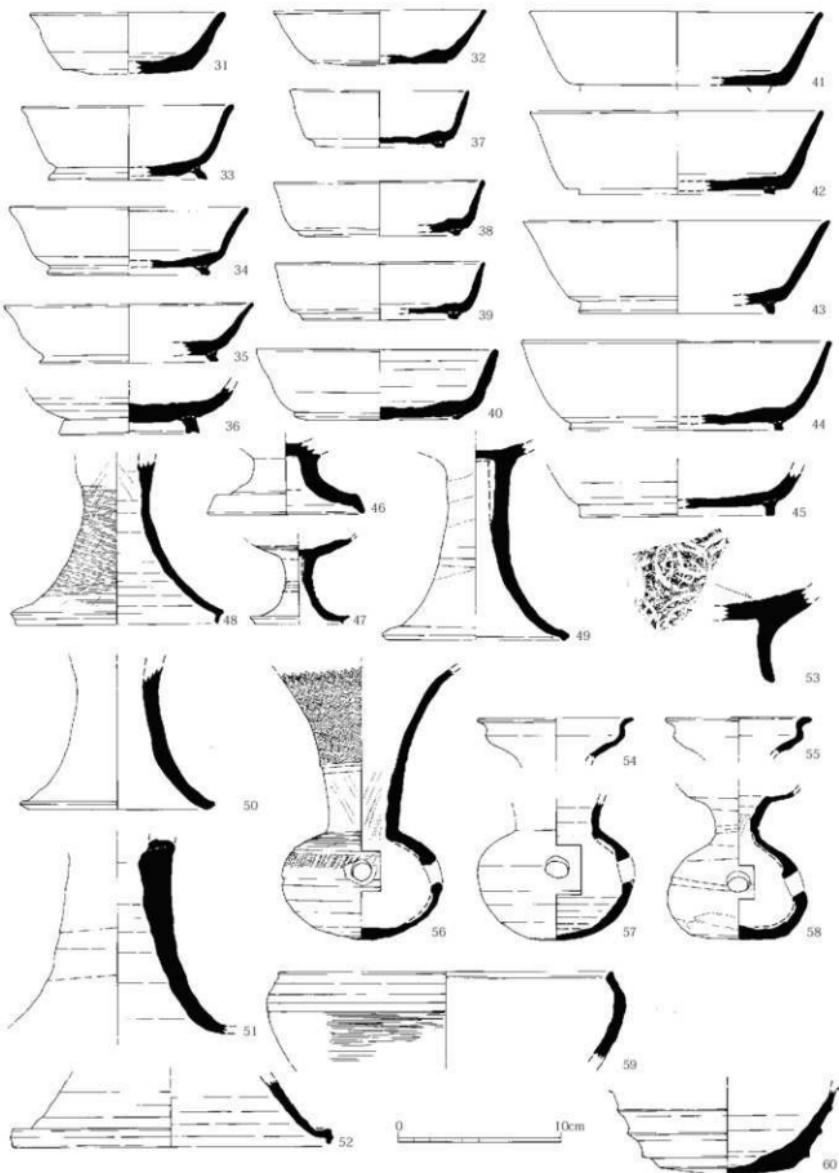
かえりは長く直立し、天井頂部のみケズリで「木」のヘラ記号を有する。復元口径 8.1 cm。10 も小型でかえりが短く強く内傾し、器壁が薄い。天井部にはつまみの痕跡があり、カキメが廻る。また天井部には 3 単位に見えるヘラ描きが認められる。通常のヘラ記号の様ではなく、文字にも見えるが解読不可である。復元口径 8.5 cm。11・12 は頂部を欠くためつまみの有無は不明である。11 は天井部が磨滅するがケズリか。12 はかえりが小さく外面に自然軸がかかり、口縁端部に重ね焼きの痕跡が認められる。復元口径 9.6・12.2 cm。13～18 は短いかえりとつまみを有するものである。すべて天井部は回転ケズリで他は回転ナデ調整。15 は外面口縁端部に、18 は内面と外面口縁端部に自然軸がかかる。口径 14.2～19.2 cm。19 は扁平なつまみを有し、端部は直線的に垂下するもので、短頸壺の蓋と思われる。器壁は薄く、天井部には 2 条の沈線とその間に綫のキザミが廻る。キザミ部分には重ね焼きの痕跡が残る。

20～45 は壺。20～30 は受部を有するものである。20 は完形品で、器壁が厚く器高が高く、体部は丸みを持って底部径は小さい。口径 9.6 cm、器高 4.8 cm を測る。21・22 は口縁が長く直立気味に立ち上がり、体部はやや丸みを持ち、中位までケズリを施す。21 は底部に穿孔を有し、22 は外底部に「木」のヘラ記号が認められる。復元口径 11.2・12.8 cm。23～25 は口縁が長いがやや内傾気味で、器壁が薄くなる。体部の丸みが緩やかになり深さもやや浅い。23・25 は外面に自然軸がかかる。復元口径 10.0～13.2 cm。26・27 は口縁がやや短くなり、さらに内傾する。体部も直線的になり、深さは浅く、底部の器壁が厚い。復元口径 11.0・12.0 cm。28 は小型で全体的にシャープさがなく端部が丸みを持つ。口縁が短く内傾し、体部も直線的で、外面に自然軸がかかる。復元口径 9.6 cm。29 は口縁の屈曲が緩やかで、受け部が浅く丸みを持つ。復元口径 13.4 cm。30 は小型で口縁が極めて短く強く内傾し、器壁が薄い。体部は直線的に垂下し、下位で強く屈曲して底部にいたる。口径 11.0 cm。

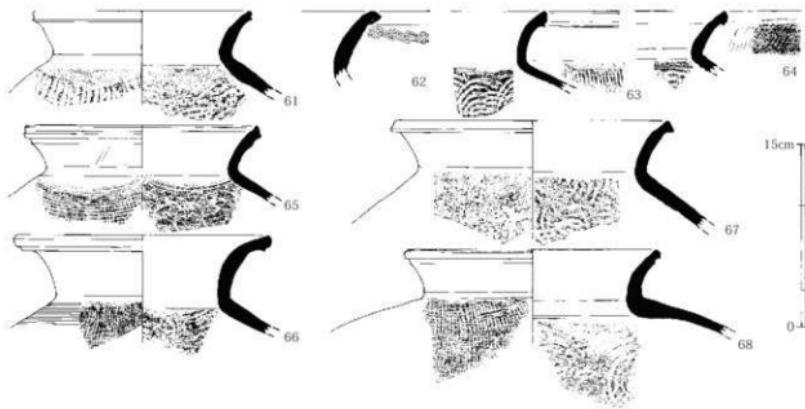
第 64 図 31～45 は古代の平底もしくは高台を有する壺である。31～32 は高台を有さず平底で、全てヘラ切り離し後回転ナデ調整する。31 は小型で器壁が厚く、口縁は外湾しながら広がる。外面体部下位までケズリ調整を施す。復元口径 12.0～15.1 cm。33～45 は高台を有する壺。33～35 は高台が外に踏ん張るもので、体部はやや外湾気味に立ち上がり、体部と底部の境は丸みを持つ。復元口径 13.0～15.2 cm。36 は底部と体部の境が不明瞭で、高台は高く内湾する。壺になる可能性がある。37～45 は高台が低い逆台形を呈し、外に踏ん張らないものである。体部から口縁はほぼ直線的に開き、体部と底部の境は明瞭である。直径 11 cm 前後の小型品（37）と、直径 13～14 cm 前後の中型品（38～40）、直径 18 cm 前後の大型品（41～44）に分けられる。45 は体部下位が丸みを持つ大型品で、壺になる可能性がある。

第 64 図 46～53 は高壺。46・47 は小型品で、46 は器壁が厚く器高が低い。脚端部は内側に強く屈曲する。47 は器壁が薄く、脚の下位が外側に強く屈曲し、端部を凸端状に下方に引き出す。底部外面にはカキメが廻り、脚部中央には 2 条の沈線が廻る。壺内底部には自然軸がかかる。48 の器壁は薄く脚部外面に細かいカキメが廻り、内面はわずかに絞り痕が認められる。脚端部は内側に強く屈曲する。49 は脚部端部をわずかに内側に屈曲させる。50・51 は脚部下位のみを強く屈曲させる。51 の外面はカキメ状のナデの後、回転ナデを施す。52 は大型の脚部で、器壁が薄く裾部は外に強く屈曲して、端部が下方に強く屈曲して接地する。53 も脚部のみの破片である。体部内底部に同心円のあて具痕が認められ、脚付きの壺になるか。

54～58 は甌。54・55 は口縁部のみの破片で、口縁端部を強く屈曲させる。56 は口縁部以外は



第64図 土器具殻層出土土器実測図② (1/3)



第65図 土器貝殻層出土土器実測図③ (1/4)

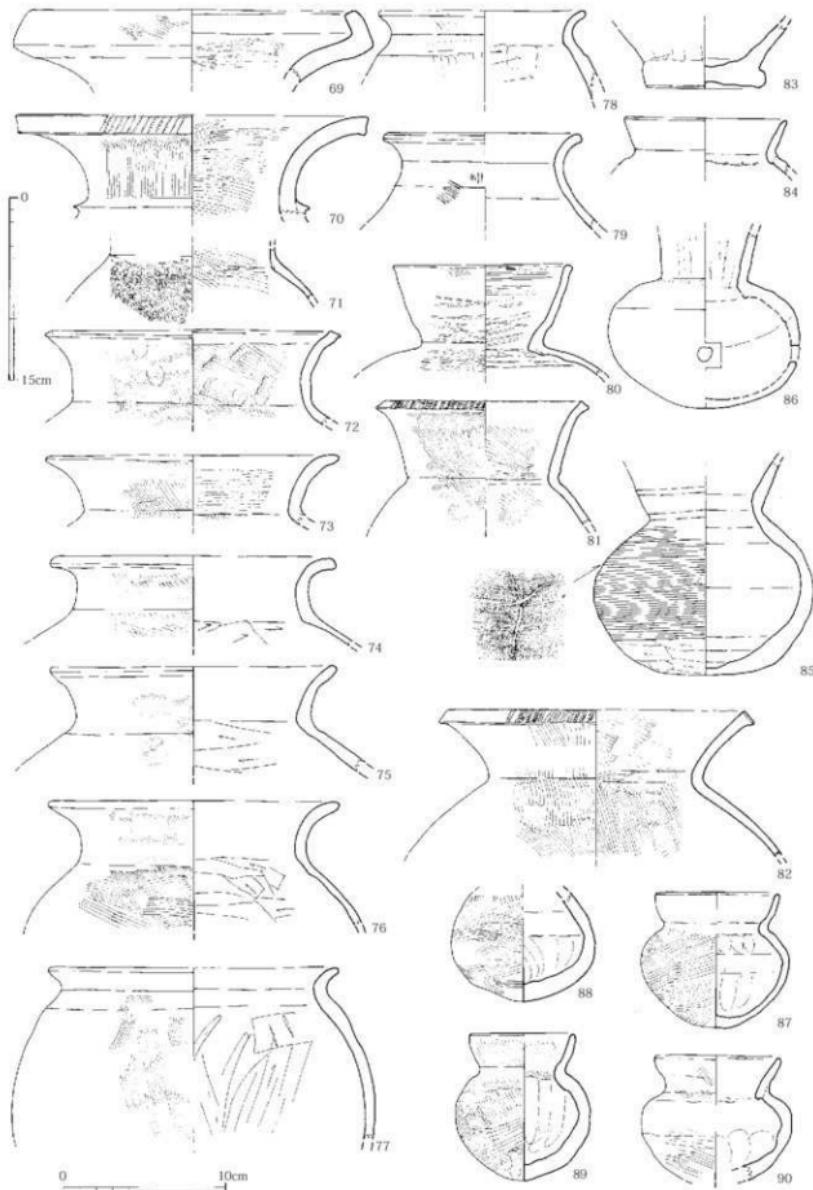
ほぼ完存する。上位に細かい波状文を廻らせ、扁球形の体部最上位にはカキメ、中位には刺突文を廻らせる。文様のない部分には内外面ともに絞り痕が認められ、体部下位は回転ケズリ調整する。胎土・焼成とも精緻である。57は体部のやや上位に最大径を有するもので、頸部のくびれはやや太く、体部下位は回転ケズリを施す。58は底部が平底気味で、器壁が厚い。頸部と穿孔部分付近に粗い沈線を廻らせる。体部下位は回転ケズリ調整する。

59は鉢で、口縁付近が強く内弯するが、端部はわずかに外反して上方に摘み上げる。屈曲部以下の外面にはカキメが廻る。

60は不明品で、上下左右も不明であるため底部として実測・掲載したが、横瓶などの可能性もある。やや内湾しながら立ち上がる器形で、底部と体部の境が最も器壁が厚く、図上方と底部中央の器壁が薄い。体部外面には断面半円形の凸線が3条廻るが、上方には更にもう1条凸線があったと思われる。底部はレンズ状で、回転ケズリで調整した後に角を面取りする。内面は回転ナデ調整であるが凹凸があり、底部中央は仕上げナデを行わないため螺旋状の凹凸がヘソ状に残る。断面は小豆色を呈し、胎土・焼成・色調とも古相を呈するが、本遺跡内では他に類を見ない。

第65図61～68は甕。いずれも口縁を強く外湾させ、内面には同心円の當て具痕が認められる。61・63・64・66は口縁端部直下に小さな凸線を有し、61は外面が格子タタキで自然釉がかかる。63は外面に平行タタキを施し、64は口縁部に斜位のカキメを廻らせる。66は格子タタキ後に細かいカキメが廻る。62は口縁端部を折り曲げて玉環状につくり、直下に波状文を廻らせる。65は口縁端部直下に緩い凸線があり、格子タタキ後にカキメが廻る。67は口縁端部を外に摘み出し、外面は格子タタキを施す。68は口縁端部直下に沈線が廻り、外面は細かい格子タタキを施す。

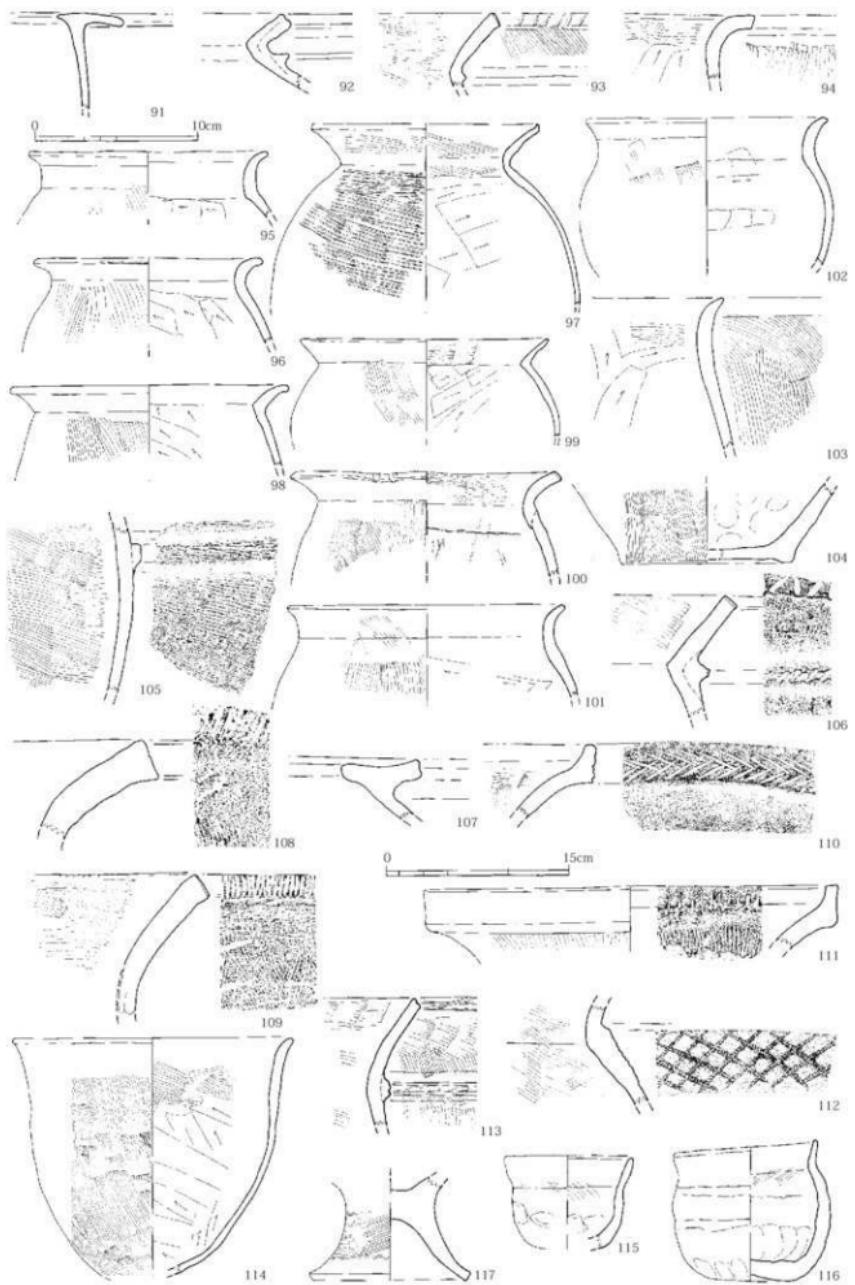
第66図69～199は弥生土器及び土師器。69～90は壺と判断したもの掲載した。69は弥生土器の袋状口縁壺口縁部で、内外面ともハケ調整、外面下位はナデ調整する。70は在地系の広口壺で、口縁端部にキザミを廻らせ、頭部に凸線を廻らせる。内外面ともハケ調整。71は頭部のみの小片だが、器壁が薄く外面に刺突文を廻らせる。内面には粘土の接合痕が認められ、内外面ともハケ調整。72・



第66図 土器貝殻層出土土器実測図④ (70・71・77・81は1/4、他は1/3)

73 も内外面ともハケ調整で口縁の屈曲は緩やかである。74 は口縁端部がきわめて強く屈曲し、体部内面はケズリ調整で頸部に明瞭な稜が付く。75 も内面ケズリであるが、頸部の稜は緩やかで、外面がやや黒変する。76 も内面ケズリ調整、口縁は大きく外湾し、端部を肥厚させる。外面はハケ調整。胎土は精良で、焼成もきわめて良好である。77 は短頸壺で、外面はハケ後ナデ調整、内面はケズリ後に工具によってタテナデ調整する。78 はやや小型品で口縁を緩やかに外湾させるが、ケズリによる頸部内面の稜はやや強い。外面はハケ調整。79 はなで肩で、体部外面には斜位のタタキ痕が認められ、その他はナデ調整を施す。80 は口縁が内湾する直口壺。体部を欠損するが、扁球形を呈すると思われる。口縁部内外面と胴部外面は細かい横位のミガキで調整し、内面頸部付近に指圧痕が認められる。胎土は精良で、色調は明赤橙色と他の出土土器とやや様相が異なる。81 は直口壺で、口縁端部がやや外傾し、頸部は縮まらない。内外面斜位のハケ調整で、口縁端部にキザミを廻らせる。82 は頸部が縮まり、口縁端部が肥厚してキザミを廻らせる。外面はタテハケ調整で、後に頸部はヨコナデを施す。内面はヨコハケ後に体部をタテハケ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。83 は底部片であるが、壺と思われる。外面は磨減が激しく調整不明、底部は器壁が極めて厚い。84 は小型品で、壺の可能性もあるがここでは壺として分類した。口縁はやや直線的に開き、頸部内面に粘土接合痕が認められる。85・86 は須恵器を模したものと考えられる。85 は口縁が直線的に広がり、底部は平底気味、胴部中位に最大径を持つ。胴部外面にはカキメ状の条痕が細かく廻り、底部付近は手持ちケズリを施す。86 は甌を模したものか。口縁は直線的に立ち上がり、胴部は扁球形で大きく張り、頸部内面の稜は明瞭である。胴部の中央に穿孔がある。磨減が激しいが、外面はタテハケ後に全体的にミガキを施していると考えられる。頸部内面は横位のケズリで工具痕が認められる。87～90 は小型品である。形状から壺に分類したが、壺の可能性もある。口縁の残るものは、やや内湾しながら立ち上がる。いずれも外面ハケ調整であるが、90 は胴部上位をナデ調整する。内面は 87 が肩部に押し出しの指圧痕があり、下位はタテナデ調整。88 は上位がヨコ、下位がタテのナデ調整で指痕が顕著である。89 はややランダムなナデ調整で、90 は上位がヨコ、下位がタテナデツケ調整で、頸部には粘土接合痕が認められる。

第 67 図 91～117 は甌である。91～94 は口縁部小片。91 は須玖式の T 字口縁で、端部は外傾する。92 は強く屈曲し、全体ナデ調整で頸部下に断面三角の凸線を廻らせる。93 は頸部に凸線が廻り、内外面ともハケ調整で口縁端部にキザミを施す。94 は口縁が短く緩やかに外湾し、上面が水平になる。外面はハケ、内面はケズリ調整。95～104 は内面の調整はすべてケズリ調整。95 は口縁が緩やかに外湾し、頸部内面の稜が明瞭である。96 は口縁が短く強く外湾し、外面はハケ調整。98 は口縁端部を屈曲させ、体部は直線的で外面はハケ調整。97 は布留系の甌で、口縁は強く外反し、端部を上方に摘み上げる。外面は横位のタタキが明瞭で、器壁が薄く作られる。99 も口縁が強く外反する。100 は口縁端部を断面方形に作り、部分的にキザミを廻らせる。外面はタテハケ調整。101・102 は緩い S 字の口縁で、外面には僅かに継位・斜位のハケメが残るが、煤が付着するため不明瞭である。特に 101 は内外面に煤が付着する。103 は甌の可能性もあるが、ここでは甌とした。口縁と胴部の境は不明瞭で、端部がわずかに外反する。外面は斜位及び継位のハケ調整、内面はケズリで煤の付着などはない。胎土が精良で焼成も良好、橙灰色を呈する。104 は壺の可能性もあるが甌とした。平底でやや上底気味、外面は細かいタテハケ調整で内面には指圧痕が残る。105～113 は大甌、もしくは甌棺の破片。105 は球形の胴部片で中位になると思われる。外面に断面台形の低い凸帯が廻る。外面は凸



第67図 土器具殻層出土土器実測図⑤ (105~113は1/4、他は1/3)

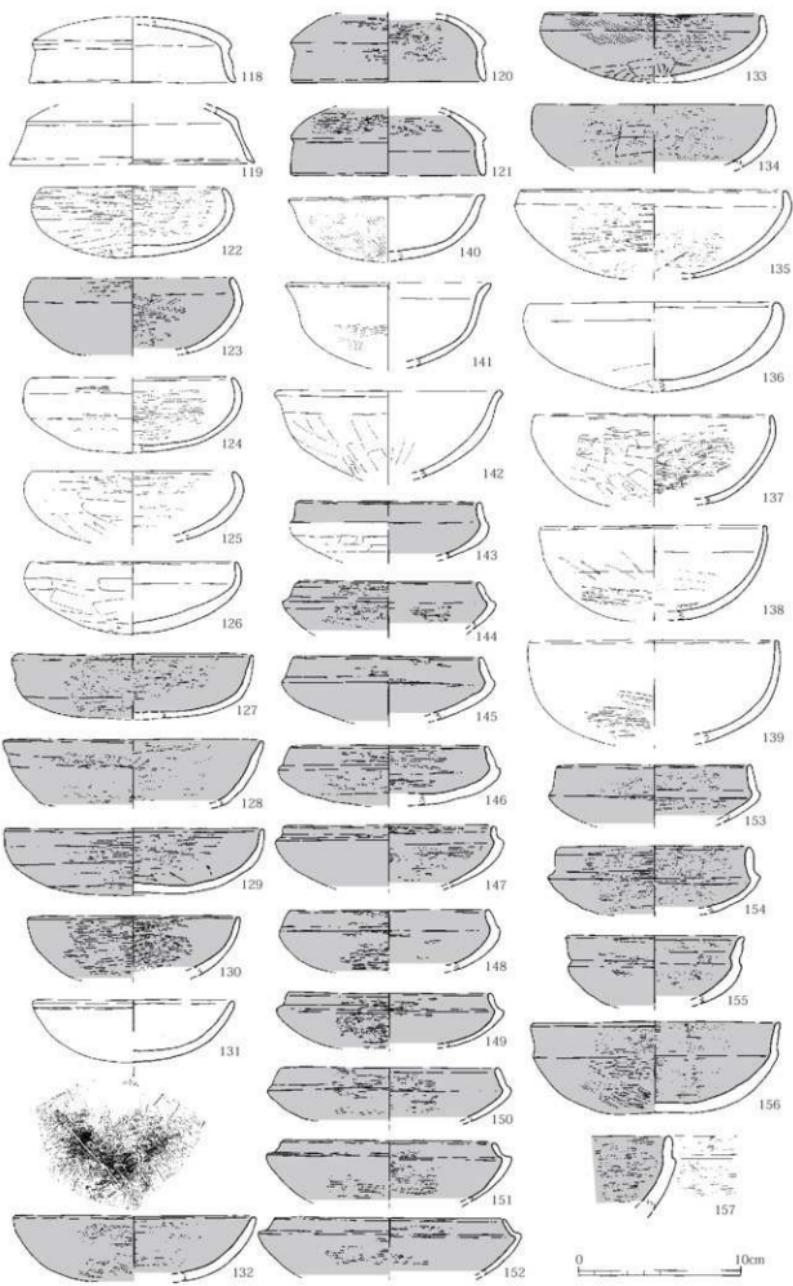
帶表面も含めてタタキ後にヨコハケ調整し、内面は細かいヨコハケを施す。106は強く屈曲する口縁で、端部断面は方形を呈し、頭部に断面M字の凸帯が廻る。口縁と凸帯の端部にはキザミを廻らせる。107はT字口縁で端部は内傾する。108・109は端部断面が方形で、外面はハケ調整、端部にキザミを廻らせる。109は内面ヨコハケ調整。110・111は口縁端部を上方に引き上げるもので、内外面ともハケ調整、端部に綾杉状または継位のキザミを廻らせる。112は肩部小片で、外面には木片の小口によって格子文を施す低い凸帯を廻らせる。113は口縁が外反する小片で、頭部に凸帯を廻らせ列点状に粗いキザミを入れる。外面口縁部はヨコハケ、体部はタテハケで調整し、内面はヨコハケ調整するが付着物により明確でない。114は瓶様の壺で底部を欠損する。外面はタテハケ調整、内面は斜位のケズリで、胎土は極めて精良、焼成も良好である。115・116は小型品。115は鉢状の形状を呈し、手捏ねで粘土接合痕が明瞭である。内面は強い斜位のナデ調整で凹凸が多く、外面は底部付近を粗いケズリで調整する。116も手捏ねで、粘土の巻き上げ痕が著しい。内外面ともナデ調整で、内底部は強いナデにより凹凸が激しい。外底部は未調整である。117は台付壺の脚部。外面ヨコハケ調整、内面はナデ調整で、内面から外面脚端部までが黒変する。

第68図118～121は須恵器の模倣品と考えられる土師器の坏蓋で、天井部と体部の境に屈曲部を有する。118・119は内外面ともにナデ調整、120・121は黒塗りを施してミガキ調整する。

122～170は土師器の坏。123～139は塊型の坏で、一部鉢と呼称すべきものもあるが、ここでは坏とする。122～126は体部から口縁が内湾するもので、122～124は内外面をミガキ調整し、125・126は外面をケズリ調整する。123は内外面に黒塗りを施す。127～129は口縁が直立またはやや開き、底部が平底状になるもの。内外面とも黒塗りを施してミガキ調整する。130～132は口縁がやや開いて底部が丸くなるもの。130・132は内外面黒塗りを施してミガキ調整、131はナデ調整する。132の内底部には「×」の線刻がある。133～135は口縁が屈曲して稜をなし、底部が丸くなるもの。133～136の体部は内外面ミガキで133・134は黒塗りを施す。底部は133がケズリ調整、135はミガキ前のハケ目が認められる。136は屈曲部が肥厚し、内外面ともナデ調整で、外面底付近には煤が付着する。137～139は鉢とも言うべき器形で、器高が高く口縁は直立する。137は外面ヨコケズリ後に粗いミガキを施し、内面はミガキ後に波状の暗文を施す。138は外面がハケ後ナデ調整、内面は工具によるナデ調整で器壁の凹凸がある。139は外面底部付近に横位のタタキかハケ目の痕跡があり、内面はナデ調整で焼成後の傷が多い。140～142は口縁端部が屈曲するもの。142は外面底部付近を手持ちケズリで調整する。143～157は口縁部にかえりを有する模倣坏である。143・146・149・154の底部外面にケズリが認められる他は、全てミガキ調整。143～156は内外面に黒塗りを施し、157は内面のみ黒塗りが残る。156は蓋の可能性もある。

第69図158～160はヘラ切り底の皿である。158は小型で丸みを持つもので、内外面ともナデ調整。159・160は口縁が大きく聞く浅いもので、底部外面はヘラ切り未調整、その他は回転ナデ調整で、160は底部外面に「×」の線刻がある。161～166は坏で、161～163は平底で回転ケズリを施し、162の体部下位はやや丸みを持って器高が高い。164～166は底部が丸みを持つ。底部外面はヘラ切り未調整でその他は回転ナデ調整。167は高台がつくもので、全体をナデ調整する。

168～170は糸切り底の皿と坏。168の皿は底部外面が2次被熱により赤変する。169は底部が小さく口縁が大きく聞く、上底になる。外面はナデによる凹凸が顕著である。170の坏は外底部が細かい回転ナデによる沈線状の凹凸がつく。



第68図 土器貝殻層出土土器実測図⑥ (1/3)

171～186は高坏。171は口縁が直線的に大きく広がり、坏部の粘土接合部に段を有する。内外面ハケ後外面のみナデ調整。172は体部が緩やかに外反し、口縁端部を上に摘み上げる。坏部外底部はケズリで、口縁付近の内外が黒変する。173は坏部が塊型で、器壁が厚い。坏部内面と外面全体に細かいミガキを施し、脚部内面はヨコケズリする。174～176は坏部のみの破片である。174はやや内湾する坏部片で、口縁端部を薄く作り、内底部にはナデツケ痕が残る。175は坏部に強い稜を持って二重口縁状になり、端部を強く外反させる。内面には斜位の指ナデ痕が認められる。176は口縁が大きく開き端部をさらに外反させる、体部中央の器壁の肥厚は屈曲の名残か。外面ともミガキ調整で、一部ハケ目が残る。177～186は脚部のみの破片で、高坏以外の器種である可能性もある。177は小型品で外面を細かいミガキで仕上げ、黒塗りを施す。178～183は脚端部が屈曲するもの。178はスリムで長い脚で、磨滅の為調整が不明瞭だがハケ後にミガキ調整か。また坏部内底に歯車状に並ぶ工具痕が認められる。179は坏底部に焼成後の穿孔がある。180～182はやや器高が低めで端部が緩やかに屈曲する。外面はタテケズリ後にタテまたはヨコミガキを施す。内面は180・181がヨコケズリ、182は内外面とも丹塗りで外面にミガキを施す。183は端部の屈曲が明瞭で、外面はタテケズリ調整で端部付近は工具によるケズリ、内面はヨコケズリ調整。184・185は端部が緩やかに広がり断面が四角になる。184は外面上位がケズリ後タテミガキ、他はハケ調整。185は坏内底部と脚部は外面ハケ後細かいタテミガキで、屈曲部に穿孔が2個縱に並ぶ。186は大型品で外面、坏部ともにナデ調整、坏内底部に穿孔がある。

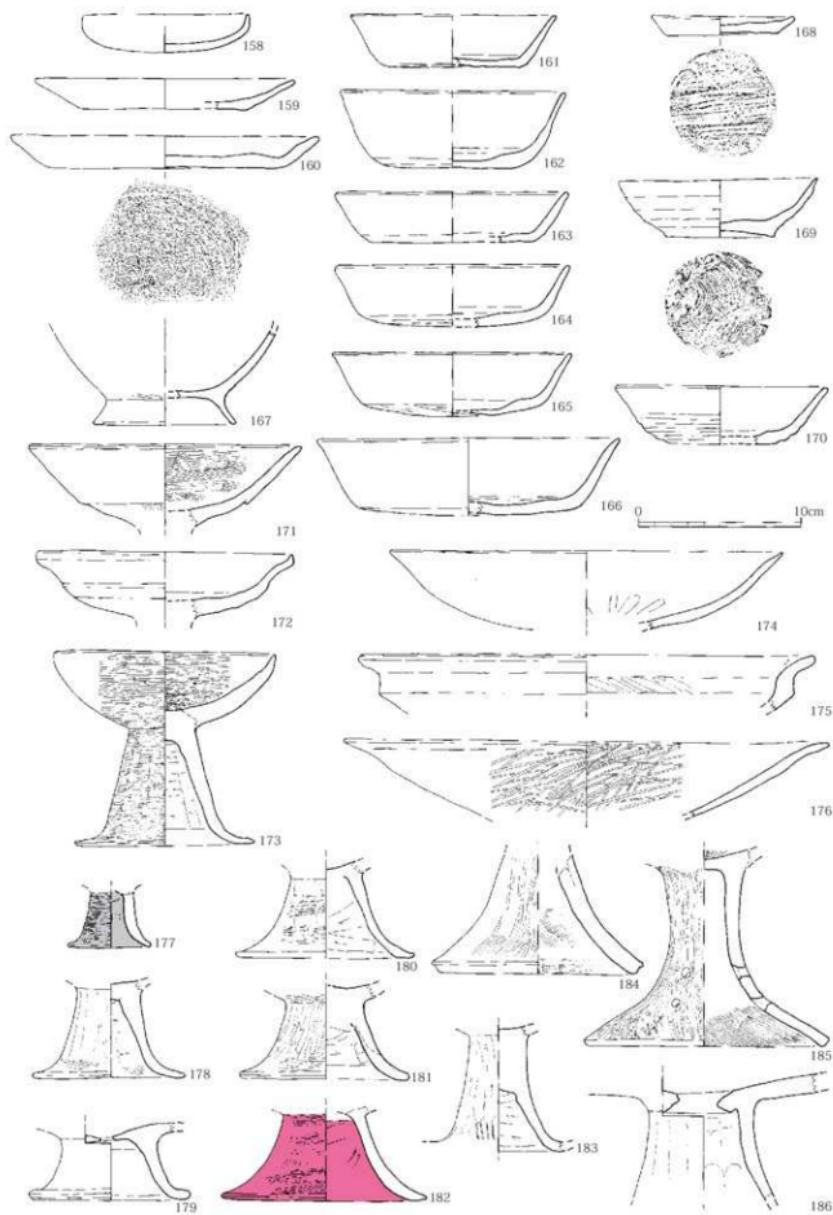
第70図187～192は鉢。187・188は単純口縁で体部から口縁が大きく聞くものである。187は平底の小型品で、底部やや上が窄まる。外面にはタタキが認められ、その他はナデ調整。188は底部を欠くが平底で、外面にはタテハケが認められ、その他はナデ調整。189～192は屈曲口縁のものである。189・190はやや深めで189はナデ調整、190は上位がタテ及びヨコハケ調整、下位はタタキが認められ、内面は強いタテナデツケの単位が認められる。191は浅いもので外面ともハケ調整。192は口縁が広がり気味に直立し、体部が浅い。磨滅が激しいが、口縁外面にハケ目と内面のタテナデ調整が認められる。

193～196は瓶。193は口縁部片で、口縁がやや外反する。外面はタテハケ調整で口縁部内外を後ナデ調整、内面はケズリ後に部分的にナデ調整を施す。194は取手のみで体部外面はハケ、内面はケズリで調整する。195は体部下位で底部を欠く。外面はタテハケ、内面はタテケズリ調整。196は瓶ではないかもしれない。体部は直立し、口縁端部がわずかに外反する。外面はタテハケ、内面はヨコケズリ調整で、器壁の凹凸が激しい。

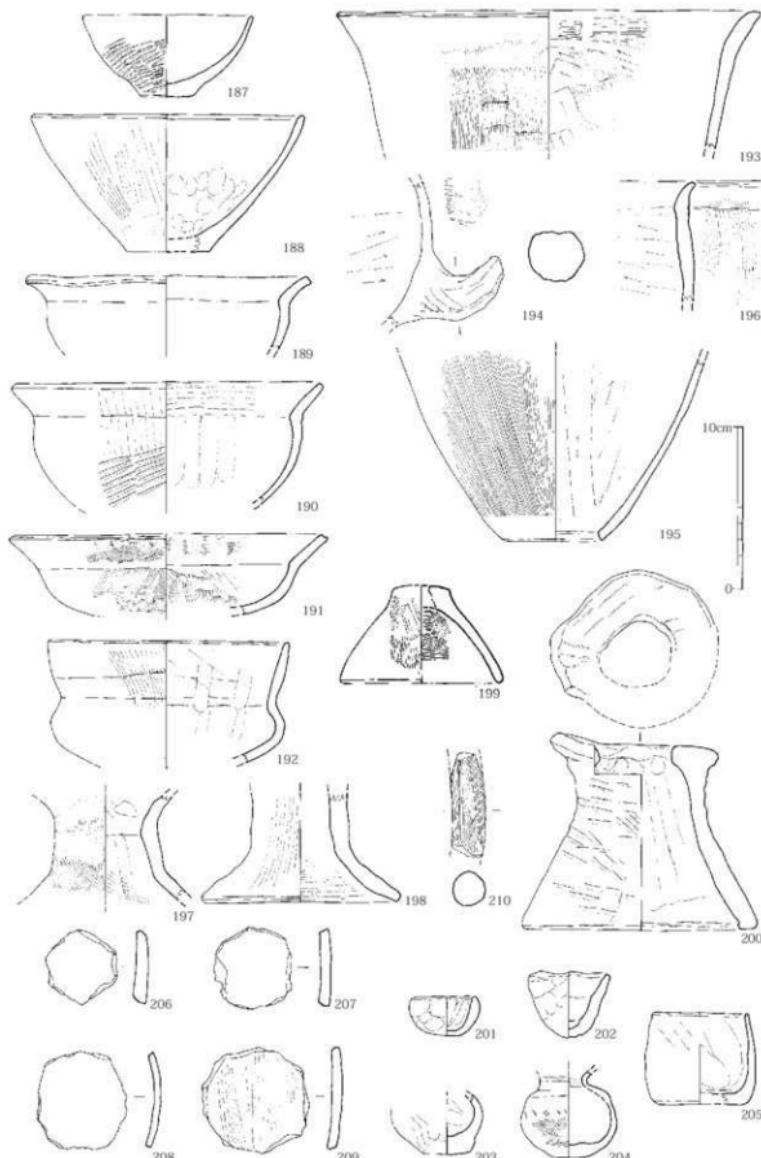
197・198は器台と思われる。197は上端・下端を欠くが、残存部の上位と下位の両方が強く外側へ屈曲する。外面はハケ、内面は上位～中位が強いナデ調整で、指圧痕が残る。下位はハケ調整。198は下位が大きく外側へ屈曲し、体部は直立する。鼓状になるか。外面タテハケ、内面は体部がナデで裾はヨコハケ調整する。

199・200は支脚。199は小形品で、上面はタタキ、脚の内外面はともハケ調整する。200は上面が傾斜して中央に穿孔するもので、高位側には嘴状の突出部を設ける。外面にはタタキが認められ、内面は天井板接合部に指圧痕が残る。

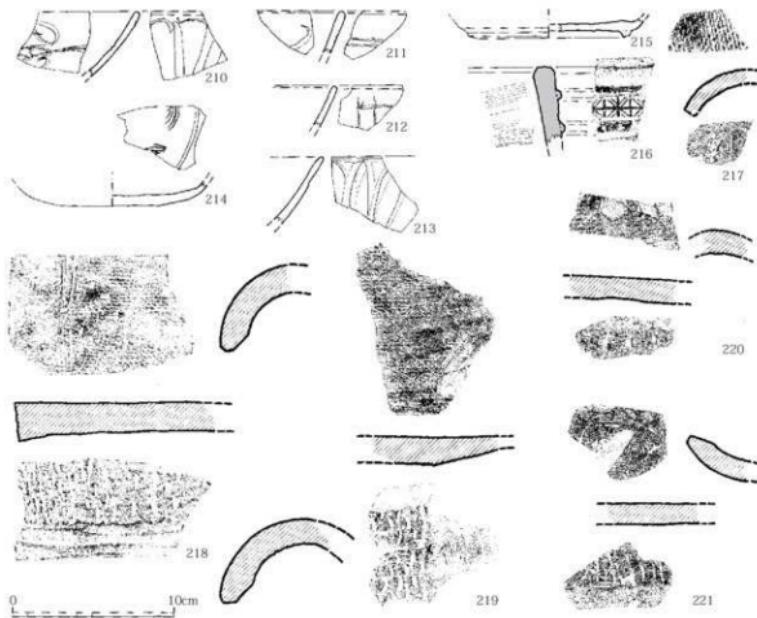
201～205はミニチュア品。201・202は鉢状で、手捏ねのため器壁の凹凸が激しい。203・204は壺状で、203はナデで形を整え、204は外面がハケ、内面はナデで丁寧に整形する。また胴部中央やや上に刺



第69図 土器具殻層出土土器実測図⑦ (1/3)



第70図 土器貝殻層出土土器実測図⑧ (1/3)



第71図 土器貝殻層出土土器類等実測図 (217~221は1/4、他は1/3)

突文を巡らせる。205は火鉢状の器形で、内外面とも強いナデで丁寧に整形する。

206~209は土師器を再利用した土製円板で、直径約4.5~6.5cmを測る。

第71図210~214は青磁片。210・213は外面に片彫りの輪花を描き、内面は花文を配する。釉はやや黄色味を帯びる。211・212も内外面に片彫りの文様が見えるが形状は不明。釉はやや灰色味を帯びる。214は平底で、見込みに圓線と短い花文の櫛目文を配する。

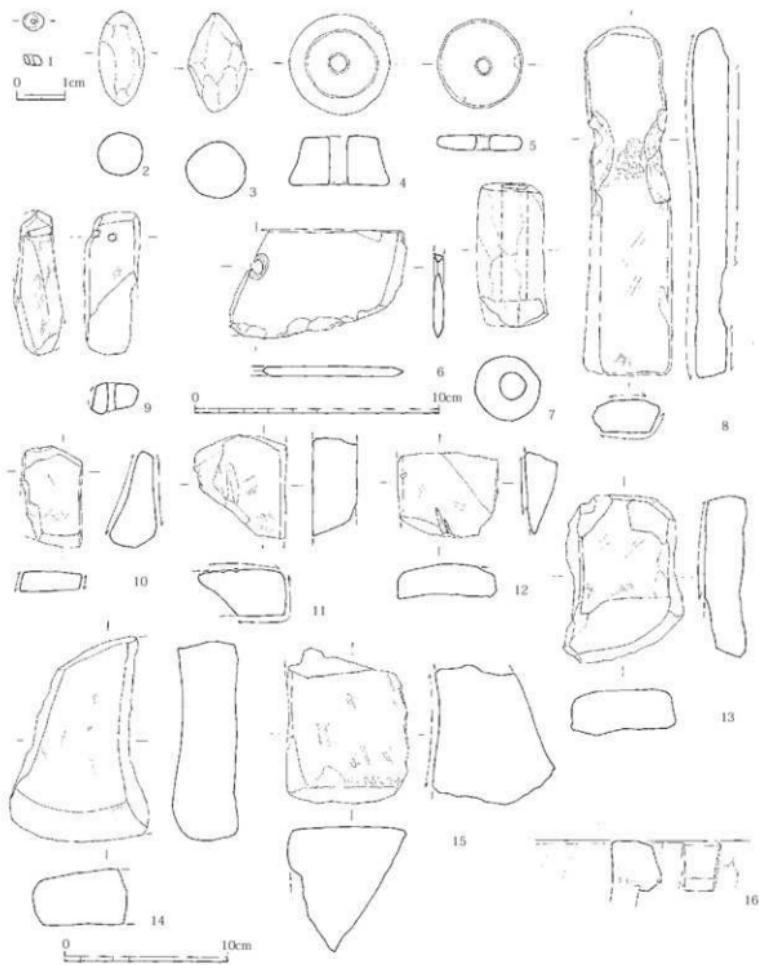
215・216は瓦質土器で、215は瓦器塊の底部。216は火鉢の口縁部片で、2条の太い凸線の間に卍文の印刻文を巡らせる。

217~221は瓦で、217~220は丸瓦、221は平瓦。全て凹面に席痕が認められる。凸面は217~219が繩タタキで、220・221はナデのため不明。219は端部を大きく面取りする。

第72図1はガラス玉である。中央部に径0.1cmの孔が斜めに入る。橙色を呈する。

2は土製投弾である。指ナデにより成形し、やや細い紡錘形を呈する。焼成は良好で、黄灰色を呈する。4は土製紡錘車である。断面台形で、上部径が3cm、下部径が4.1cmを測る。中央部に径0.7cmの孔を穿つ。焼成は良好で、灰白色を呈する。

6は石庖丁である。背部は直線をなし、外湾刃半月形を呈する。1孔のみ遺存しており、外孔1.05cm、内孔0.6cm、背孔1.5cmを測る。8は不明石製品である。長方形を呈しており、両面および右側面に研磨を施す。砥石もしくは研磨による面取りと考えられる。両面ともに一部分のみが敲打に



第72図 出土ガラス小玉、土製品および石製品実測図 (1は1/1、2~8は1/2、他は1/3)

より凹んでおり、上面の両側には剥離により抉りが形成される。手に持って使用した敲石、錘、砥石等の用途が考えられる。粘板岩製である。9~14は砥石である。9は表面が大きく欠損しているが、両面および左右側面を砥面とすると考えられる。上部には径 0.5 cm の孔が穿たれ、その左側にも途中まで穿孔した痕跡が見られる。紐をかけて携帯用に使ったものか。頁岩製である。石質と大きさから持ち砥の仕上げ砥と考えられる。10は両面を砥面とし、左右側面は研磨による面取りを

行う。頁岩製である。石質と大きさから持ち紙の仕上げ紙と考えられる。11は上面を砥面とし、下面および右側面は研磨による面取りを行う。凝灰岩製である。石質から仕上げ紙と考えられる。12は上面のみが遺存し紙面とする。金属製刀器の研磨痕が2条認められる。砂岩製である。石質から仕上げ紙と考えられる。13は上面のみが遺存し紙面とする。砂岩製である。石質と大きさから置き紙の仕上げ紙と考えられる。14は両面を砥面とする。砂岩製である。石質と大きさから置き紙の仕上げ紙と考えられる。15は滑石製の石鍋である。口縁部に3×

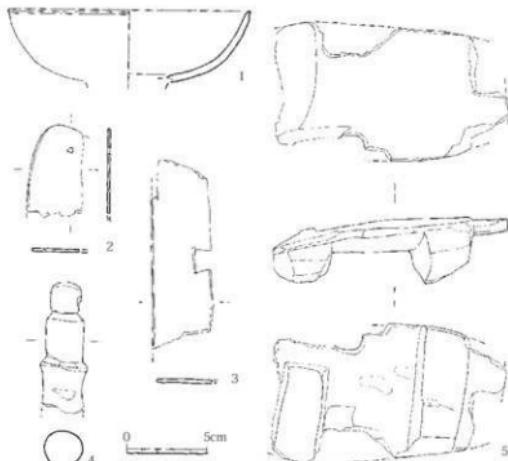
2.3cmの方形の耳がつく。割れているものの、割れ口の一部に研磨痕が認められ、何らかのものに再利用したものと考えられる。

#### (5) 小結

今回の調査では、C区については調査区の立地により狭小な範囲での遺構検出となり、D区については調査区内のほとんどが現代の削平を受けていたため調査成果は少ないが、溝、土坑、土器・貝殻層を検出することができた。遺構の時期は、その切り合い関係から1号溝→淡黄灰色粘土包含層→土器・貝殻層→2号溝・1・2号土坑の順に推移したと考えられる。

1号溝については、調査区短軸方向に流れる溝であり、上面を大きく削平されるため僅かな部分しか確認できなかったが、一定の出土遺物が含まれていたため、古墳時代後期という年代を得ることができた。本遺跡周辺では当該時期の遺構の検出は多くはないため、ここで遺跡としての評価を述べることはできないが、北に位置する西蒲池池淵遺跡では当該時期の遺構を確認しており、その報告において合わせて検討することとする。淡黄灰色粘土包含層についても、1号溝と時期差はほとんど認められない。

土器・貝殻層については遺構として評価できる確証はなく、調査区内の全域に広がるであろうことが言えるのみであるが、一定の厚さを持って堆積していること、様々な時期の遺物が含まれていることから、ある時期の客土であることは想定できよう。また、この層の下は水分の多い軟弱な粘質土層の堆積で上面に起伏が多い反面、この層は掘削が困難であるほど固く締まり、上位からの転圧を受けた痕跡があったことから、何らかの理由でこの軟弱地盤を整地する折に、水分を遮断し、かつ一定範囲の硬化面を確保するために、現代のバラストと同様に使用されたのではないかと考え



第73図 出土木製品実測図 (1/3)

えられる。出土遺物が弥生時代～中世に至るため整地の時期は決定しがたいが、包含される糸切り底の土器師の時期や、後出する土坑の時期が15～16世紀であることから、13～16世紀の間に整地が行われたものと考えられる。この時期、蒲池地区は蒲池氏の支配下にあり、文献に見える蒲池城の築城をはじめとする土地整備が行われたことが想定できる。北接する西蒲池池淵遺跡においても大々的な整地が行われている。2遺跡の整地が同時期である確証はないが、蒲池氏による一大事業の一環である可能性は想定でき、蒲池氏支配下における当該時期の土地利用及び整地方法について、参考となる成果であると思われる。また、出土遺物については客土内と考えられるため遺跡の性格に関連するものではないが、さほど遠方から運ばれていないと考えると、本地域の土器編年を考える上での参考資料になるのではないだろうか。

土坑及び2号溝については、出土遺物から15～16世紀の時期と考えられ、B区で検出された土坑や溝と共通するものである。特に2号溝についてはB区大溝の延長になる可能性が考えられるが、切り合いがない上に2号溝の残存状況が悪いことから、確証はないため、可能性だけを提示したい。

表3 C・D区特殊遺物計測表

探査	番号	図版番号	出土遺構	種類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	残存
72	1		表土	ガラス製品	玉	0.40		0.20	0.04	完形
72	2	45	C区 土器貝殻層	土製品	投擲	3.80	1.80		11.16	完形
72	3	45	C区 淡灰褐色粘土包含層	土製品	投擲	4.05	2.40		14.19	完形
72	4	45	C区 土器貝殻層	土製品	筋跡車	4.10		2.00	31.42	完形
72	5		1号溝	石製品	筋跡車	3.60		0.60	13.40	完形
72	6	45	C区 土器貝殻層	石製品	石庖丁	4.45	(7.20)	0.40	(2344)	5割
72	7	45	1号土坑	土製品	土鍤	5.90	2.80		38.52	9割
72	8		C区 土器貝殻層	石製品	不明品	14.30	3.60	1.50	127.66	ほぼ完形
72	9	45	C区 土器貝殻層	石製品	砥石	8.80	3.40	3.00	89.42	8割
72	10	45	C区 土器貝殻層	石製品	砥石	6.20	3.75	2.90	(70.95)	8割
72	11	45	C区 カクラン	石製品	砥石	6.30	(5.70)	2.85	(75.52)	2割
72	12		C区 淡灰褐色粘土層	石製品	砥石	(5.20)	(6.20)	(2.25)	(80.83)	2割
72	13	45	D区 カクラン	石製品	砥石	10.30	7.20	2.70	299.00	ほぼ完形
72	14	45	C区 土器貝殻層	石製品	砥石	12.35	(8.50)	4.00	(505.00)	5割
72	15	45	C区 淡灰褐色粘土包含層	石製品	砥石	(9.60)	(7.40)	(8.00)	(625.00)	2割
72	16		C区 土器貝殻層	石製品	石鶴					1割
73	1	44	2号溝 最下層	木製品	漆塗	14.80		(4.40)		2割
73	2		1号土坑	木製品	草履	(5.50)	(3.40)	0.20		2割
73	3		1号土坑	木製品	草履	(11.50)	(3.70)	0.18		3割
73	4	45	1号土坑	木製品	不明品	8.00	2.80			1割
73	5		2号溝 下層	木製品	下歎	(14.30)	(8.50)	(4.10)		5割

( ) は残存値

## IV 自然科学分析

### 1 出土人骨について

高椋浩史<sup>1)</sup>・舟橋京子<sup>2)</sup>・田中良之<sup>3)</sup>

1) 九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

2) 九州大学総合研究博物館

3) 九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

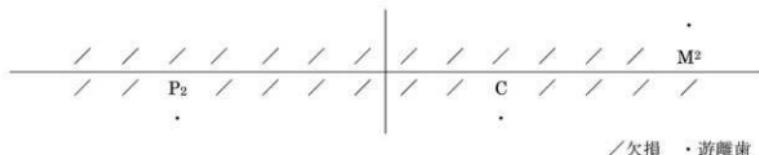
#### (1) はじめに

福岡県柳川市東蒲池門前遺跡において中世に該当する墓壙（B区1号土坑）から人骨が出土し、調査を担当した福岡県教育委員会が現地で取り上げを行い、九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座へ人骨が搬入され、同講座において整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

#### (2) 人骨所見

##### 【保存状態】

出土した人骨の保存状態は不良で、歯牙3点のみ出土している。残存歯牙は以下の通りである。



下顎左犬歯、下顎右第2小白歯、上顎左第2大臼歯の咬耗度はいずれも、柄原(1957)の1° bである。

##### 【年齢・性別】

歯牙の咬耗度から推定される年齢は成年（20 - 40歳）である。性別は、性判定に有効な部位が残存していないため不明である。

##### 【特記事項】

下顎の左側の大歯の下側2分の1にエナメル質減形成が認められた。

#### (3) まとめ

以上、出土人骨についての記載・報告を行った。本遺跡出土人骨は保存不良で、計測に耐えうる人骨はなく、形質的特徴を把握することができなかった。

ただし、残存歯牙の咬耗の程度から成年（20 - 40歳）と推定された。また、下顎左犬歯にエナメル質減形成が認められた。エナメル質減形成は歯冠表面に見られる溝や凹凸で、歯冠の形成時に

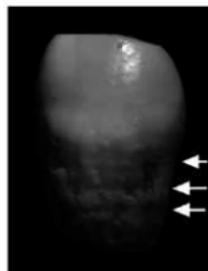
何らかのストレスを受け、歯冠が十分に形成されないために生じる。そのため、被葬者は成長期に栄養不良や病気などの何らかのストレスにさらされていましたことが推察される。

#### 参考文献

柄原博 (1957) 日本人歯牙の咬耗に関する研究. 熊本医学会雑誌. 31 : 607-656.



残存歯牙(左下頸小白歯、右上頸第2大臼歯、右下頸犬歯)



下頸犬歯のエナメル質減形成

## 2 動物遺体の同定

中村賢太郎 (パレオ・ラボ)

### (1)はじめに

東蒲池門前遺跡は、筑後川や矢部川水系の沖端川の堆積作用と有明海の潮汐により形成された低地に立地する。東蒲池門前遺跡のB区の発掘調査では、弥生時代後期を中心とする時期および中世後期に属する遺構から魚骨、獸骨、貝が出土した。ここでは出土した動物遺体の同定結果を報告する。なお、現生標本の閲覧にあたっては、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生と早稲田大学の樋泉岳二先生にご協力をいただいた。また、西本先生にはイノシシ類についてコメントをいただいた。

### (2) 試料と方法

試料は、発掘調査現場（B区）での目視あるいは水洗により採取された動物遺体である。

試料の出土位置は、弥生時代後期を中心とする時に属する北調査区貝塚トレンチ（下層）、南調査区東西貝塚トレンチ、南調査区南北貝塚トレンチ、貝塚トレンチ（個別位置不明）、北調査区中層貝塚、トレンチ貝塚ふるい中（個別位置不明）、4号溝下層（遺物は中世前期だが堆積は中世後期か）、中世後期に属する4号溝、おそらく中世後期に属する5号土坑、南調査区北側包含層である。

同定は、肉眼および実体顕微鏡下で現生標本との比較により行った。試料は、九州歴史資料館に保管されている。

表4 東蒲池西門前遺跡出土貝類

分類群	箱No.1 北調査区貝塚 トレレンチ中層				箱No.2 北調査区貝塚 トレレンチ下層				箱No.3 北調査区貝塚 トレレンチ下層				箱No.7 南調査区東西 貝塚トレレンチ				箱No.8 南調査区東西 貝塚トレレンチ				箱No.16 南調査区南北 貝塚トレレンチ			
	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻		
アゲマキ	17	22	4	5	2	2	7	3	0	0	0	0	3	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
ハナモギリ	4	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
イケショウシラトリ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
シオフキ	2	2	0	3	2	2	3	3	12	6	1	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
マツカゼ	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
チョウセンハマグリ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ハマグリ	3	2	14	5	11	8	2	2	9	6	21	18	11	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
オキシジミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
マガキ	37	42	55	66	87	66	59	58	185	92	15	10	133	68	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
※スミノエガキの可能性あり	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
イタヤガイ	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
シナイタヤ?	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ナミマガシワ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	
サルボウ	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	
ハイガイ	24	17	35	18	35	26	107	115	106	99	0	0	33	29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
オカミミガイ	4	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
オニニシ	1	3	1	0	0	0	0	2	0	0	2	7	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
アカニシ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
レイシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ツメタガイ	1	0	4	0	0	0	0	3	0	0	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ゴマフダマ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
マガキガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ウミニナ科	22	0	0	0	0	0	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ウミニナ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
カワアイ	2	0	0	0	0	0	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
シマヘタリ or クロヘナタリ	11	1	0	0	4	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ヒロクチカノコ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
スガイ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
イボキサゴ	9	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

## (3) 結果と考察

同定された動物遺体の一覧を表4と5に示す（表4の貝類員数は総箱数20中の7箱分の数量）。

## ①貝類

貝類では、アゲマキ、ハナモギリ、イケショウシラトリ、シオフキ、マツカゼ、チョウセンハマグリ、ハマグリ、オキシジミ、マガキ（スミノエガキの可能性あり）、イタヤガイ、シナイタヤ？、ナミマガシワ、サルボウ、ハイガイ、オカミミガイ、オニニシ、アカニシ、レイシ、ツメタガイ、ゴマフダマ、マガキガイ、ウミニナ科、ウミニナ、カワアイ、シマヘナタリあるいはクロヘナタリ、ヒロクチカノコ、スガイ、イボキサゴが同定された。マガキ（スミノエガキの可能性あり）とハイガイが多く、次いでハマグリが比較的多い。マガキ（スミノエガキの可能性あり）、ハイガイ、ハマグリは内湾に生息し、主に内湾で貝類が採集されたことを示している。

## ②甲殻類

甲殻類ではカニ類が見られた。

## ③棘皮動物

ウニ綱の棘が見られた。

## ④魚類

魚類では、淡水で捕獲されたと考えられる分類群としてナマズ、淡水で捕獲された可能性のあるものとしてアユ?、ウナギ?、コイ科?、河口付近で捕獲されたと考えられる分類群としてボラ科、海で捕獲されたと考えられる分類群としてアカエイ、トビエイ科、フグ科、スズキ属、クロダイ属、タイ科、ヒラ、ウシノシタ類?、ニベ科?、ハゼ科?などが見られた。

## ⑤爬虫類

爬虫類では、ウミガメ科とヘビ類が見られた。

## ⑥ 哺乳類

哺乳類では、イヌ、イノシシ（ブタの可能性あり）、ニホンジカ、ネズミ類など陸獣のほか、海獣のアシカが見られた。イノシシは、下顎骨が多く、頭蓋骨は少なかった。イノシシの下顎は、吻部が短いこと、下顎連合部の角度が急であること、下顎体が太いことなどからブタの可能性が考えられる。

中世の試料にはウシが見られた。

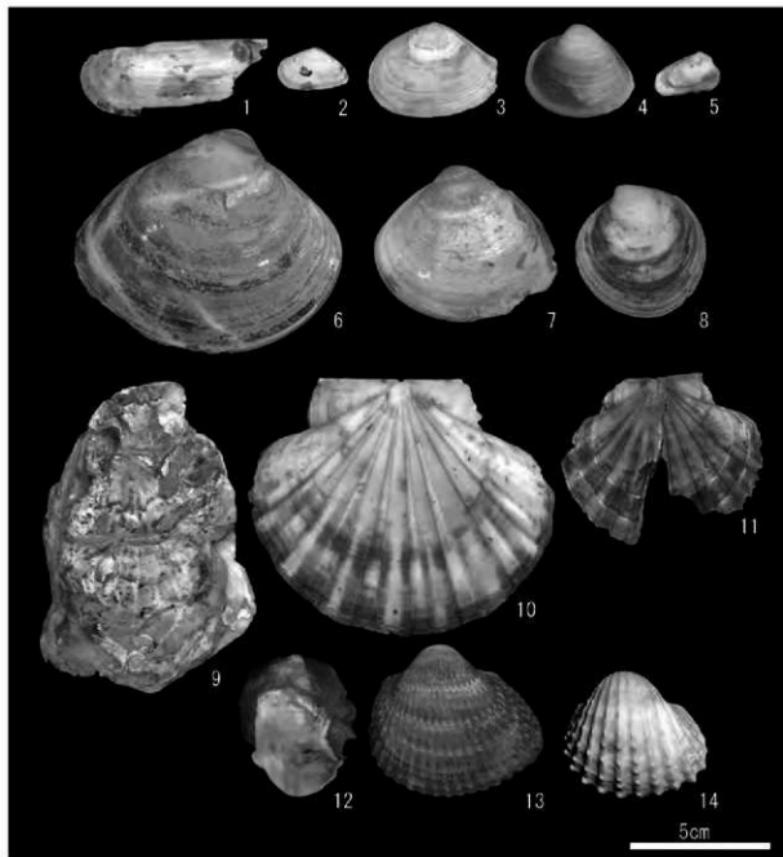
## ⑦ 鳥類

鳥類では、アオサギ属、カモ科？ や種不明の鳥類が見られた。

表5 東蒲池西門前遺跡出土動物遺体（貝類以外）

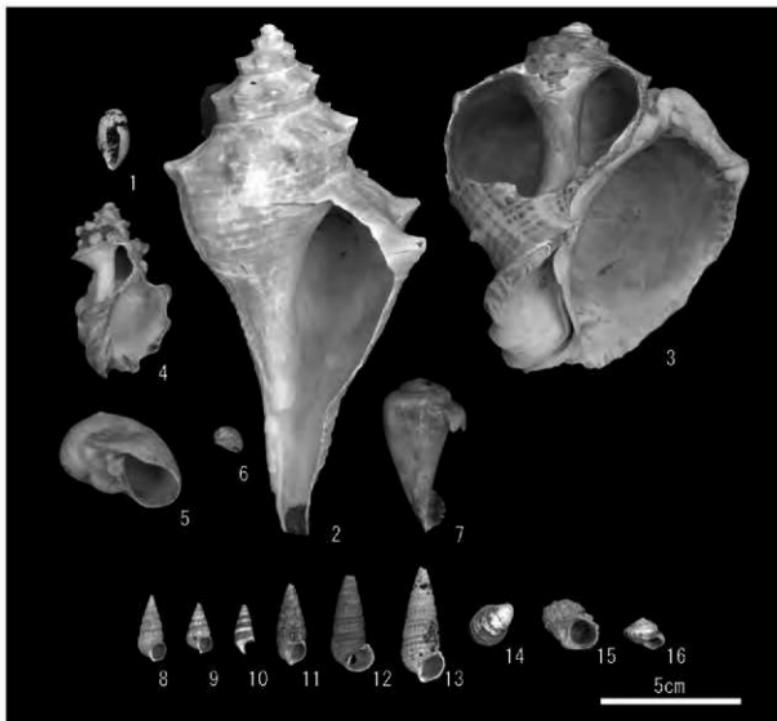
整理番号	出土状況	分類群	部位	左右	通り/個體	数量	備考
1	北浦池西門前遺跡トランше(下顎)	イノシシ	上顎骨	左	右側面	1	日本本州域
2	北浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	上顎骨	左	右側面	1	大型
3	北浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	頭骨	—	日本本州	1	
4	北浦池西門前遺跡トランše	硬骨魚類	下顎	右側	右側面	1	
5	北浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	頭骨	左側	頭骨	1	
6	西浦池西門前遺跡トランše	猪の歯	頭骨	右側	右側面	1	大型
7	西浦池西門前遺跡トランše	猪の歯	頭骨	右側	右側面	1	小型
8	西浦池西門前遺跡トランše	猪の歯	頭骨	左側	右側面	1	大型
9	西浦池西門前遺跡トランše	猪の歯	頭骨	左側	右側面	1	大型
10	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	上顎骨	左	右側面	1	大型
11	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	下顎骨	右	—	1	頭蓋や下顎
12	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	頭骨	右	複数個/一部骨	1	
13	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	上顎骨	右	複数個/一部骨	1	
14	西浦池西門前遺跡トランše	カモメ科?	頭骨	左側	右側面	1	
15	西浦池西門前遺跡トランše	カモメ科?	頭骨	右側	右側面	1	
16	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	下顎骨	左	右側面	1	頭蓋
17	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	頭骨	左側	右側面	1	複数個
18	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	下顎骨	右	右側面	1	—
19	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	上顎骨	右	右側面	1	頭蓋
20	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	下顎骨	左右	右側面	1	—
21	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	下顎骨	左右	左右	1	—
22	西浦池西門前遺跡トランše	アヒル	上顎骨	右	複数個	1	30~50枚
23	西浦池西門前遺跡トランše	ガモサギ属	上顎骨	左	複数	1	最大127mm
24	西浦池西門前遺跡トランše	イヌ	下顎	左	複数	1	最大103mm
25	西浦池西門前遺跡トランše	鹿骨	頭骨	—	—	1	
26	西浦池西門前遺跡トランše	スズジコロ	頭骨	左	複数	1	複数個/頭蓋、頭骨
27	西浦池西門前遺跡トランše	スズジコロ	角	右	複数	1	複数個/頭蓋、頭骨
28	西浦池西門前遺跡トランše	猪の歯	頭骨	右側	頭骨	1	日本本州域
29	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	上顎骨	左	複数	1	M2未測定
30	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	下顎骨	右側	頭骨	1	
31	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	上顎骨	左側	複数	1	複数個/頭蓋
32	西浦池西門前遺跡トランše	ゴロゴロ属	上顎骨	右	複数	1	
33	西浦池西門前遺跡トランše	猪の歯	頭骨	左側	複数	1	大型
34	西浦池西門前遺跡トランše	ゴロゴロ属	頭骨	左側	複数	1	頭蓋
35	西浦池西門前遺跡トランše	イノシシ	頭骨	右	半欠	1	頭蓋
36	西浦池西門前遺跡トランše	アヒル	上顎骨	左	複数	1	32~34枚
37	西浦池西門前遺跡トランše	アヒル?	頭骨	—	—	1	大型
38	西浦池西門前遺跡トランše	アヒル?	頭骨	—	—	1	複数個
39	西浦池西門前遺跡トランše	アヒル?	頭骨	—	—	1	複数個
40	西浦池西門前遺跡トランše	スズジコロ	角	右	複数	1	複数個/頭蓋
41	丹波吉原城跡遺跡トランše	イノシシ	下顎骨	右	複数	1	複数
42	北浦池西門前遺跡フリイ田	鳥脚	頭骨	右側	複数	1	複数
43	北浦池西門前遺跡フリイ田	硬骨魚類	頭骨	—	—	1	
44	北浦池西門前遺跡フリイ田	硬骨魚類	頭骨	—	—	1	
45	北浦池西門前遺跡フリイ田	カモ?	頭骨	左	複数	4	複数
46	北浦池西門前遺跡フリイ田	カモ?	頭骨	左	複数	2	複数
47	北浦池西門前遺跡フリイ田	カモ?	頭骨	左	複数	1	複数
48	北浦池西門前遺跡フリイ田	不明	不確	不明	不明	1	複数
49	北浦池西門前遺跡フリイ田	硬骨魚類	頭骨	左側	複数	1	
50	北浦池西門前遺跡フリイ田	硬骨魚類	頭骨	左	複数	4	複数
51	北浦池西門前遺跡フリイ田	カモ?	頭骨	左	複数	2	複数
52	北浦池西門前遺跡フリイ田	カモ?	頭骨	左	複数	1	複数
53	北浦池西門前遺跡フリイ田	カモ?	頭骨	左	複数	1	複数
54	北浦池西門前遺跡フリイ田	カモ?	頭骨	左	複数	1	複数
55	北浦池西門前遺跡フリイ田	カモ?	頭骨	左	複数	1	複数

14	北側面(左)横目屈筋ルート	ドリフト板	筋板	不明	端面	1	加工面(半周)
55	北側面(中)横目屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	不明	端面	2	
		ドリフト 板	筋板	不明	端面	3	
		研磨板	筋板	左	端面	4	
		研磨板	筋板	右	端面	5	
56	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	不明	端面	6	
57	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	不明	端面	7	
58	トレンチア側面屈筋ルート	研磨板	筋板	左	端面	8	端 面
		研磨板	筋板	右	端面	9	端 面
		研磨板	筋板	右	端面	10	端 面
59	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	右	端面	11	
60	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	右	端面	12	
61	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	13	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	14	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	15	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	16	
62	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	17	
63	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	右	端面	18	
64	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	右	端面	19	
		ドリフト 板	筋板	右	端面	20	
		ドリフト 板	筋板	右	端面	21	
65	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	右	端面	22	
66	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	23	
67	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	24	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	25	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	26	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	27	
68	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	28	
69	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	29	
70	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	30	
71	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	31	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	32	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	33	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	34	
72	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	35	
73	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	36	
74	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	37	
75	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	38	
76	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	39	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	40	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	41	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	42	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	43	
77	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	44	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	45	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	46	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	47	
78	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	48	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	49	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	50	
		ドリフト 板	筋板	左	端面	51	
79	トレンチア側面屈筋ルート	ドリフト 板	筋板	左	端面	52	
80	第1	ドリフト 板	筋板	—	端面	53	
81	表面削り(北半球)切削	ドリフト 板	筋板	左	端面	54	表面削り 面
82	溝削り(下層)	ドリフト 板	筋板	右	端面	55	溝削り面



図版1 東蒲池門前遺跡から出土した二枚貝

- 1.アゲマキ（箱No.1） 2.ハナモリ（箱No.1） 3.イチョウシラトリ（箱No.3）
- 4.シオフキ（箱No.8） 5.マツカゼ（箱No.1） 6.チョウセンハマグリ（箱No.8）
- 7.ハマグリ（箱No.8） 8.オキシジミ（箱No.8） 9.マガキ（スミノエガキ?）（箱No.1）
- 10.イタヤガイ（箱No.2） 11.シナイタヤ?（箱No.2.3） 12.ナミマガシワ（箱No.17）
- 13.サルボウ（箱No.16） 14.ハイガイ（箱No.17）



図版2 東蒲池門前遺跡から出土した巻貝

- 1.オカミミガイ（箱No.1） 2.オニニシ（箱No.17） 3.アカニシ（箱No.16）
- 4.レイシ（箱No.16） 5.ツメタガイ（箱No.3） 6.ゴマフダマ（箱No.7）
- 7.マガキガイ（箱No.8） 8.9.シマヘナタリorクロヘナタリ（箱No.7.1） 10.ウミニナ（箱No.1）
- 11.ウミニナ科（箱No.1） 12.13.カワアイ（箱No.8.1） 14.ヒロクチカノコ（箱No.1）
- 15.スガイ（箱No.1） 16.イボキサゴ（箱No.1）



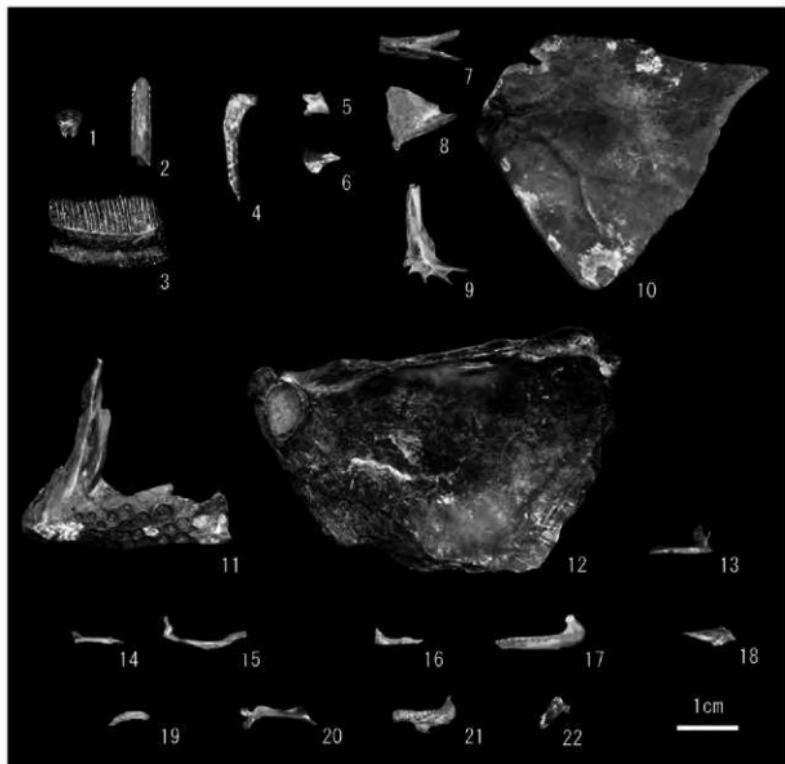
図版3 東蒲池門前遺跡から出土したイノシシ類

- 1.イノシシ左右下顎骨（18） 2.イノシシ左右下顎骨（21） 3.イノシシ右下顎骨（81）  
4.イノシシ右下顎骨（41） 5.イノシシ右肩甲骨（ト骨）（35）



図版4 東蒲池門前遺跡から出土した哺乳類、爬虫類、鳥類、甲殻類

- 1.ニホンジカ右角 (26)
- 2.ニホンジカ右角 (27)
- 3.ニホンジカ角 (40)
- 4.ウシ右上顎大3後臼歯 (追加2)
- 5.イヌ左下顎骨 (17)
- 6.イヌ左下顎骨 (9)
- 7.アシカ左右上顎骨 (22,36)
- 8.ウミガメ科背甲 (15)
- 9.アオサギ属左上腕骨 (23)
- 10.カモメ科?左足根中足骨 (14)
- 11.カニ類爪 (62)



図版5 東蒲池門前遺跡から出土した魚類

- 1.アカエイ歯板 (55)
- 2.エイ類尾棘 (45)
- 3.トビエイ科歯板 (54)
- 4.ナマズ左胸鰭棘 (45)
- 5.フグ科右前上顎骨 (78)
- 6.フグ科左歯骨 (78)
- 7.スズキ属左歯骨 (71)
- 8.スズキ属左方骨 (71)
- 9.スズキ属右前鰓蓋骨 (59)
- 10.スズキ属右主鰓蓋骨 (31)
- 11.クロダイ属右前上顎骨 (32)
- 12.ボラ科右主鰓蓋骨 (39)
- 13.ニベ科?右前上顎骨 (46)
- 14.ハゼ科?左前上顎骨 (53)
- 15.ハゼ科?左主上顎骨 (66)
- 16.硬骨魚綱A左前上顎骨 (67)
- 17.硬骨魚綱B左歯骨 (67)
- 18.硬骨魚綱C左角骨 (58)
- 19.硬骨魚綱左主上顎骨 (69)
- 20.硬骨魚綱左主上顎骨 (67)
- 21.硬骨魚綱左歯骨 (67)
- 22.硬骨魚綱左主鰓蓋骨 (55)

### 3 貝殻成長線分析

畠山智史（東京大学総合研究博物館）・米田恭子（パレオ・ラボ）

#### (1) はじめに

東蒲池門前遺跡のB区から出土した弥生時代のハマグリとハイガイの貝殻について、死亡季節の推定および貝殻堆積季節の検討を目的として、レプリカ法を用いた貝殻成長線分析を行った。

#### (2) 試料と方法

試料は、ハマグリ *Meretrix lusoria* 20点（試料No.1～20）とハイガイ *Tegilla granosa* 10点（試料No.21～30）の計30点である（表6）。ハマグリは、北調査区貝塚トレンチ（試料No.1とNo.9～No.14）、南調査区東西貝塚トレンチ（試料No.2、No.3、No.15、No.16）、南調査区南北貝塚トレンチ（試料No.4～No.8、No.17～No.20）から採取された。またハイガイは、すべて南調査区南北貝塚トレンチ（試料No.21～30）より採取された。試料の時期は、弥生時代後期～終末期主体である。

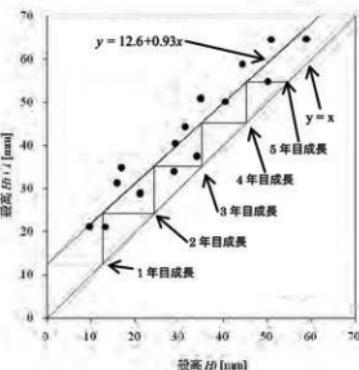
貝殻成長線分析のレプリカ法は、Koike (1980) にはばしがって行った。破壊分析であるため、切断作業の前にノギスを用いて試料の詳細な計測を行った後、正中線を記入し、ダイヤモンドカッターを用いて貝殻を切断した。次に、切断した試料を樹脂で包埋して固化させたのち、耐水ペーパーで切断面を研磨した。希塗酸によるエッチングを行った後、酢酸エチルを滴下し、アセチルセルロースフィルムで成長線を転写した。転写したフィルムをプレバラートに挟み込み、貝殻成長線分析の観察用プレバラートとした。検鏡には生物顕微鏡を用い、40～200倍下で観察を行った。

貝類の採集（死亡）時季は、2月～3月初旬頃に形成される成長不良部分を冬輪と認定し、縁辺に最も近い最終冬輪からその後に生存した縁辺までの日周線の本数を計算し求める。冬輪は日本の沿岸において海水温度が最も低くなる2月15日に近接すると推定し、(2月15日)+(日周線の本数)=（貝の死亡日）として算出する。

算出された貝の死亡日は、小池が定めた日周線の本数を基準とした1年を8期に区分する方法を利用して（表7: Koike, 1980）、採集季節を推定した（表8）。

年齢査定については、成長線分析で計数できた冬輪数をその個体の年齢とした。また、各年齢での貝殻サイズの推定は、Walford法（Walford, 1946）より求めた（第74図）。

Walford法は、X軸にi年目の成長量、Y軸にi+1年、つまり翌年の成長量をプロットし、近似直線  $Y = aX + b$  を描かせる。ここでは切片  $b$  が、その遺跡における貝種の初期成長（満1年目の成長）、 $Y=X$  との交点が最終成長時の値となる。また満2年目の成長は、 $X=b$  のときの  $Y_1$ 、翌3年目の場合  $X=Y_1$  のときの  $Y_2$ ……と年毎の理論値を求めることができる。



第74図 Walford法による市販の福岡県糸島市加布里産ハマグリの成長図

表6 貝殻成長線分析試料リスト

No.	範No.	番号	小分類	LR	殻長	殻高	殻厚	HL	UL	UH	肋数	重量
1	2	R5-1	ハマグリ	R	104.90	89.70	27.15				-	104.71
2	8	R6-1	ハマグリ	R	76.48	65.16	19.74				-	34.51
3	8	R6-2	ハマグリ	R	40.56	34.19	11.98	-	-	-	-	5.65
4	16	R18-1	ハマグリ	R	56.91	49.13	15.83	-	-	-	-	11.89
5	16	R18-2	ハマグリ	R	73.83	59.56	19.02	-	-	-	-	26.26
6	16	L21-1	ハマグリ	L	61.70	52.08	16.82	-	-	-	-	20.54
7	16	L21-2	ハマグリ	L	76.00	64.40	20.96	-	-	-	-	37.89
8	16	L21-3	ハマグリ	L	85.41	73.93	24.42	-	-	-	-	55.46
9	3	R8-1	ハマグリ	R	[78.08]	79.37	23.34	-	-	-	-	59.05
10	4	R-1	ハマグリ	R	76.16	62.00	22.19	-	-	-	-	40.10
11	4	L-1	ハマグリ	L	84.74	70.32	21.08	-	-	-	-	46.63
12	4	L-2	ハマグリ	L	60.01	50.55	18.84	-	-	-	-	20.42
13	4	L-3	ハマグリ	L	[66.27]	73.61	20.94	-	-	-	-	36.53
14	5	L-4	ハマグリ	L	104.90	92.22	27.61	-	-	-	-	116.68
15	7	L2-1	ハマグリ	L	[41.58]	55.40	20.47	-	-	-	-	12.77
16	13	L-1	ハマグリ	L	86.10	73.35	23.75	-	-	-	-	46.39
17	17	R12-1	ハマグリ	R	75.53	84.77	21.74	-	-	-	-	53.66
18	17	R12-2	ハマグリ	R	75.97	64.66	21.49	-	-	-	-	37.17
19	17	L11-1	ハマグリ	L	65.16	55.10	19.82	-	-	-	-	18.98
20	17	L11-2	ハマグリ	L	[63.86]	59.17	20.29	-	-	-	-	21.79
21	17	L33-1	ハイガイ	L	46.16	38.48	17.72	28.64	22.15	9.74	19	13.60
22	17	L33-2	ハイガイ	L	46.58	40.80	17.74	30.43	22.81	11.45	20	11.56
23	17	L33-3	ハイガイ	L	50.81	42.05	18.90	32.41	21.93	11.69	19	12.70
24	17	L33-4	ハイガイ	L	51.31	44.53	20.60	40.51	27.20	13.48	20	17.19
25	17	L33-5	ハイガイ	L	53.29	42.55	17.46	32.73	21.22	11.79	20	14.26
26	17	L33-6	ハイガイ	L	50.16	45.69	19.74	35.24	23.98	12.73	19	16.39
27	17	L33-7	ハイガイ	L	50.62	46.69	20.21	36.61	23.78	13.99	19	18.09
28	17	L33-8	ハイガイ	L	55.41	48.77	21.18	[27.97]	26.07	14.22	18	19.93
29	17	L33-9	ハイガイ	L	62.10	55.07	26.10	41.33	29.95	19.15	20	33.18
30	17	L33-10	ハイガイ	L	73.52	63.67	28.11	49.85	28.55	18.93	20	52.85

※ [ ] の数値は残存値を示す。

また、年齢を経た貝殻は、殻頂部が磨耗や欠損し、初期（1年目）の成長がうまく観察されないが、Walford 法を用いると、i 年と i+1 年という連続する冬輪が検出されれば、例数に加えられるという利点がある (Koike, 1980)。

表7 日周線による季節区分 (Koike, 1980 他を基に作成)

日周線数	月日	季節	主な行事
0-45	2月15日～3月31日	春季前半	雛祭（3月3日）
46-90	4月1日～5月15日	春季後半	端午（5月5日）、立夏（5月6日頃）
91-135	5月16日～6月29日	夏季前半	夏至（6月21日頃）
136-180	6月30日～8月13日	夏季後半	立秋（8月7日頃）
181-225	8月14日～9月27日	秋季前半	
226-270	9月28日～11月11日	秋季後半	立冬（11月7日頃）
271-315	11月12日～12月26日	冬季前半	冬至（12月22日頃）
316-365	12月27日～2月14日	冬季後半	元日（1月1日）、立春（2月4日頃）

※旧暦1月1日は、毎年1月22日頃～2月19日頃まで移動する

表8 東蒲池門前遺跡出土ハマグリとハイガイの採集季節・年齢

試料No.	分析No.	種名	LR	調査区	試料採取位置	最終日周線	採集推定日	推定季	年齢	備考
1	170	ハマグリ	R	北	貝塚トレンチ下層	128	6月22日	夏季前半	12	
2	171	ハマグリ	R	南	東西貝塚トレンチ	10	2月25日	春季前半	8	6年目の成長が不良
3	172	ハマグリ	R			115	6月9日	夏季後半	2	
4	173	ハマグリ	R			142	7月6日	夏季後半	5	
5	174	ハマグリ	R			107	6月1日	夏季後半	8	
6	175	ハマグリ	L			89	5月14日	春季後半	4	
7	176	ハマグリ	L			35	3月21日	春季前半	9	
8	177	ハマグリ	L			58	4月13日	春季後半	12	
9	178	ハマグリ	R			124	6月18日	夏季後半	7	モザイク状のため誤差を含む
10	179	ハマグリ	R			112	6月6日	夏季前半	7	
11	180	ハマグリ	L			142	7月6日	夏季後半	8	
12	181	ハマグリ	L			110	6月4日	夏季前半	6	
13	182	ハマグリ	L			84	5月9日	春季後半	8	
14	183	ハマグリ	L			114	6月8日	夏季後半	7	
15	184	ハマグリ	L	北	貝塚トレンチ下層	56	4月11日	春季後半	6	
16	185	ハマグリ	L			28	3月14日	春季後半	10	
17	186	ハマグリ	R			103	5月28日	夏季後半	12	
18	187	ハマグリ	R			62	4月17日	春季後半	6	モザイク状のため誤差を含む
19	188	ハマグリ	L			113	6月7日	夏季後半	6	
20	189	ハマグリ	L			68	4月23日	春季後半	6	
21	190	ハイガイ	L			157	7月21日	夏季後半	4	
22	191	ハイガイ	L			56	4月11日	春季後半	6	モザイク状のため誤差を含む
23	192	ハイガイ	L			20	3月6日	春季後半	6	
24	193	ハイガイ	L			8	2月23日	春季前半	5	
25	194	ハイガイ	L			109	6月3日	夏季後半	4	
26	195	ハイガイ	L			24	3月10日	春季後半	8	
27	196	ハイガイ	L			89	5月14日	春季後半	6	
28	197	ハイガイ	L			117	6月11日	夏季後半	5	
29	198	ハイガイ	L			70	4月25日	春季後半	8	
30	199	ハイガイ	L			53	4月8日	春季後半	8	多毛類による障害?

\*ハマグリ・ハイガイとともに4年目以降の冬輪間では1年に相当する365本の日周線が計数できないため、死亡の推定日に誤差が含まれるとされる。

### (3) 結果

#### ①成長線の形成パターン

貝殻外縁に微細な成長線が観察できた。潮汐周期を反映したとされる成長線（A線、B線）の配列が主に1歳から3歳までの若歳時期に観察できた。ここでは明瞭なA線を1日1本できる日周線として計数した。日周線は、1歳から3歳までの若歳時期における冬輪間では、1年に相当する365本に近似した。しかし4歳以降の日輪は、冬輪間で減少し、10歳近い老齢個体になると200本にも及ばなかった。冬輪間の日周線数が270本未満の場合は、偽冬輪の可能性が示唆されている（小林、1998）。月間成長量（28日）の変化を検討したところ、夏季における成長のピークやその後の停滞がみられたため、季節性が成長線に反映しており、偽冬輪ではなく、冬輪と判断した。

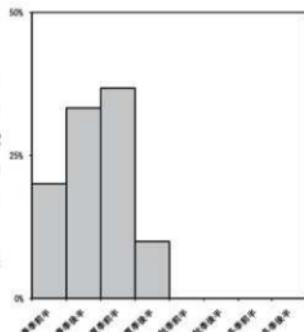
#### ②採集季節

推定された30点の採集季節は、春季前半が6点と、春季後半が10点、夏季前半が11点、夏季後半が3点となり、夏季前半にピークを持ち、秋や冬が未検出であった。

貝種毎に比較すると、ハマグリ20点の採集季節は、春季前半が3点、春季後半が6点、夏季前半が9点、夏季後半が2点となり、夏季前半にピークを持つ。一方、ハイガイ10点の採集季節は、春季前半が3点、春季後半が4点、夏季前半が2点、夏季後半が1点であり、春季後半にピークを持つ。

### ③年齢査定

冬輪の計数に基づいたハマグリの年齢は、若齢個体である2歳が1点のみであり、成熟した4歳以上の個体で占められた。ハイガイも同様であり、最も若い4歳の個体が2点のみで、その多くは成熟した個体で占められた。一般的に若齢個体の増加は、人類による高い捕獲圧を示唆しており、水産資源の枯渇が危惧される。しかし、今回のような老齢個体の構成は、捕獲圧がそれほど高くなく、人類の採集活動と貝類の繁殖が調和的であり、需要と供給の安定した関係が成立した持続可能な生業活動が想像される。

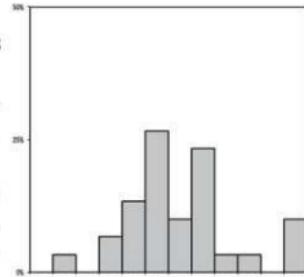


第75図 採集季節の分布図

### ④成長速度

Walford法に基づいたハマグリの成長速度は、成長勾配0.89、殻高が1年目11.0mm、2年目20.7mm、3年目29.5mm、4年目37.4mm、5年目44.4mmであった。初期成長は低いが、その後の成長を示す成長勾配が高く、小池(1982)が指摘する北方系の成長パターンと類似している。福岡県糸島市加布里産ハマグリ(1年目12.6mm、2年目24.2mm、3年目35.1mm、4年目45.2mm、5年目54.6mm)と比較すると、東蒲池門前遺跡のハマグリの初期成長や成長勾配は低く、若干生息に適さない環境であったと推定される。

一方、Walford法に基づいたハイガイの成長速度は、成長勾配0.85、殻高が1年目9.0mm、2年目16.6mm、3年目23.3mm、4年目28.7mm、5年目33.5mmであった。同じ有明海沿岸部の縄文時代早期の東名遺跡で行われたハイガイの貝殻成長線分析(樋泉2009)では、1年目12.2mm、2年目20.8mm、3年目26.8mm、4年目30.9mm、5年目33.9mmであり、これと比較すると東蒲池門前遺跡のハイガイは初期成長が最も低いが、その後の成長勾配が高く、2年目以降の成長が早いという特徴を有する。



第76図 年齢構成の分布図

### (4) 考察

#### ①季節分布からみた貝塚の形成過程

季節分布は、トレンチごとに異なる傾向を示した。北調査区貝塚トレンチでは夏季、南調査区南北貝塚トレンチでは春先から夏季中頃、南調査区東西貝塚トレンチでは主に春季でわずかに夏季に採集した貝が確認された。これは各地点での堆積季節を示している可能性がある。平面的にみると貝塚縁辺に春、中央に夏の時期に採集された貝が破棄されたと想像される。しかし分析試料は貝層の一括サンプルであるため、サンプリングエラーの可能性もあり、詳細な堆積状況についてはここでは追及できない。平面のみならず、断面において層位を意識したサンプリングを行い、分布状況を確認する必要があろう。

表9 東蒲池門前遺跡出土ハマグリ・ハイガイの各年齢における殻高（mm）

No.	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年
1							59.1	73.5	83.1	90.2	95.5	100.2
2	13.8	25.9	36.9	47.8	53.4	57.2	60.4	64.9				
3	17.1	28.6										
4	15.5	26.7	36.5	41.4	48.1							
5	15.2	27.9	40.7	46.2	49.8	52.1	53.8	55.7				
6	18.8	28.7	37.9	44.4								
7						57.4	59.4	61.1	63.7			
8		31.6	36.1	40.0	43.8	48.1	55.2	59.4	62.3	65.7	71.0	73.3
9							60.0					
10						55.5	58.3	61.0				
11							67.1	69.0				
12						42.4	48.9					
13								67.9				
14							61.0					
15						56.2						
16							63.2	66.5	69.5	72.7		
17									79.0	81.5	83.7	
18					50.4	52.8						
19						53.3						
20						58.3						
21	16.5	22.1	25.9	29.6								
22						35.7	39.7					
23					27.9	35.4	37.7					
24	16.3	23.5	28.2	33.8	37.9							
25		22.1	32.3	35.9								
26			27.8	30.3	33.8	36.9	40.0	42.7				
27						38.3						
28	16.4	21.0	29.0	35.6	40.9							
29					35.5	38.0	40.9	42.0	45.9			
30							41.5	46.8				

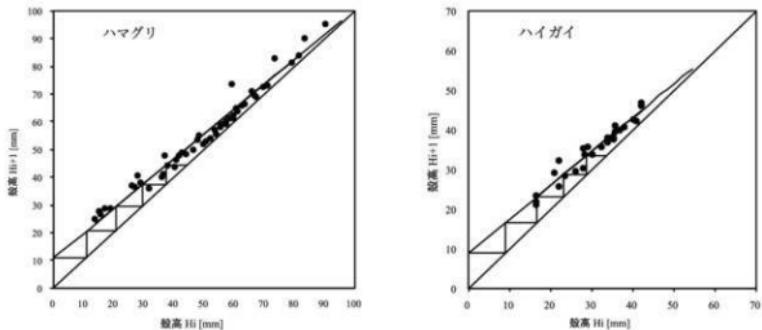
## ②農耕社会における貝採集活動

分析の結果、本遺跡での春から夏にかけての貝採集活動が認められた。

若齢個体は、認定した冬輪間での日周線が年間日数に近似しており、その結果が当時の季節性を反映していると評価できる。しかし、分析試料には老齢個体が多く、さらに4年目以降の冬輪間での日周線は年間日数に近似しないため、海水温度の低下する秋から冬にかけては、未成長もしくは顕微鏡でも検出できない程の微細な成長があった可能性があり、秋から冬の時季にも貝採集活動がなされていた可能性は十分にありえる。老齢個体に関する季節推定の精度については、大韓民国全海貝塚より出土したハマグリの分析（細山・富岡、2010）でも指摘されており、今後、生物学的な基礎研究が必要である。

春季前半から開始された貝採集活動は、次第に増加し、夏季前半でピークに達し、その後減少し、秋や冬にはみられなかった。推定された春から夏をさらに細かくみると、採集のピークである夏季前半の中でも、現在の季節観でいう初夏（5月初頭）に相当する時季の採集はわずかであった。この時季は、現在の有明海の海水温度をみると約20度で、貝類の採集に適した季節であり、環境的要因の影響ではなく、人類による生業活動の結果と予想される。例えば、弥生時代後期～終末期において、貝採集のピークである夏季前半の人類の主な生業活動としては、稲作や製塩などが考えられる。特に稲作は、田植えや稲刈りの時季に多大な労力を要するため、他の生業活動の停滞が想像される。

貝採集活動の結果と稲作の年間スケジュールを比較すると、貝採集の減少した初夏は、地域によつ



第77図 ハマグリ・ハイガイの成長速度

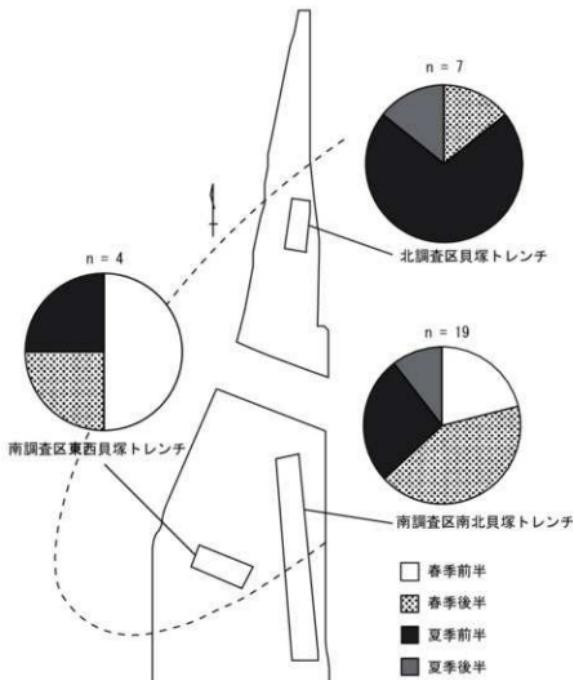
て若干異なりをみせるが、田植えの時季に相当する（第79図）。この時季に採集されたと推定される貝類がわずかであることから、貝採集活動が停滞した可能性があり、その要因として、農繁期が考えられる。今回の結果は、サンプリングの偏りにより、ある特定の時季のみを検出した可能性もあるが、農耕社会における貝採集活動の在り方を示す一例であろう。今後、分析点数や同じ時期の遺跡の分析例を増やすことで、当時の生業活動を具体的に明らかにできると期待される。

### (5) 結論

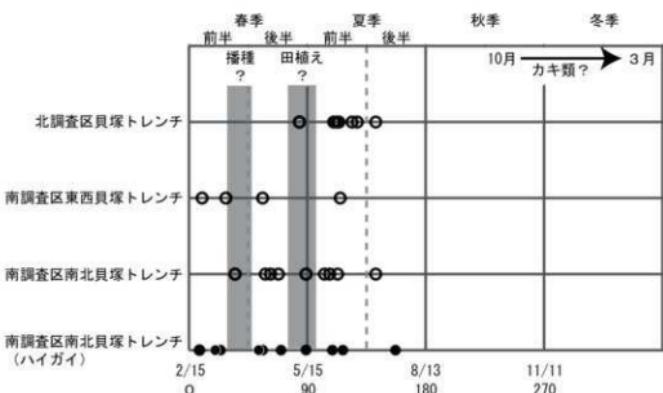
観察ができたハマグリ・ハイガイの季節は、春から夏であった。しかしマガキも出土しており、秋や冬の季節にも採集していた可能性がある。年齢は、冬輪の数から推定したところ、両種ともに4歳以上の成熟した個体で占められていた。そのため試料には、大型（老齢）個体が多く、成長線が密集しており、正確な貝採集活動の季節性を理解するのは困難であった。

### 引用・参考文献

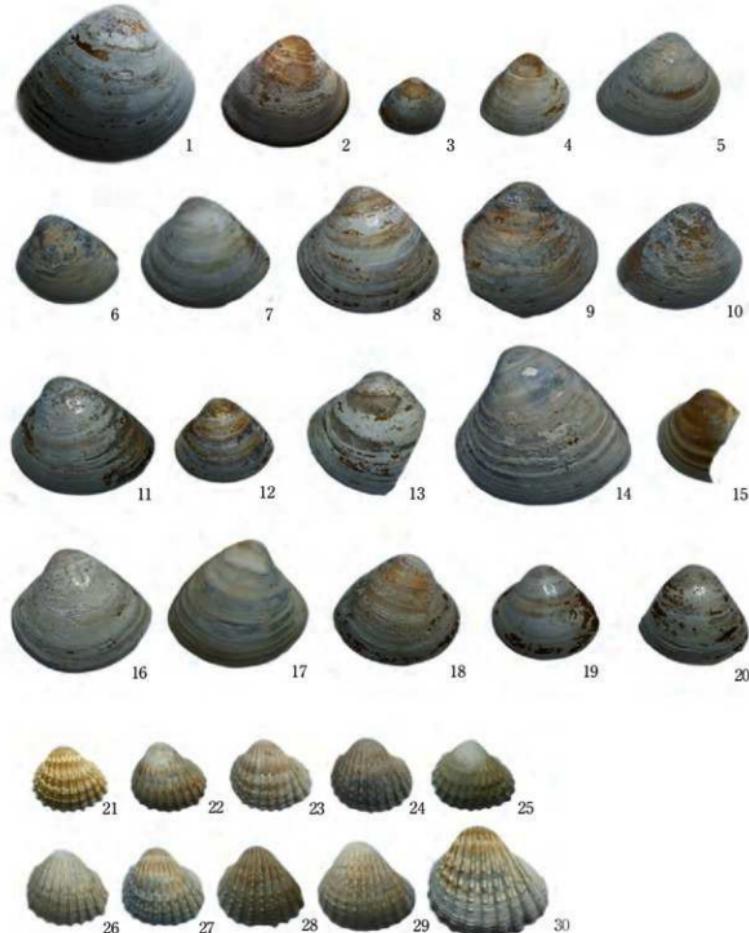
- Koike, H.(1980) Seasonal dating by growth line counting of the clam, *Meretrix lusoria*. The university museum, University of Tokyo. Bulletin, 18, 1-104.
- 小池裕子（1982）日本海北陸地域産ハマグリ類の貝殻成長線分析. 第四紀研究, 21, 273-282.
- 小林園子（1998）有吉北貝塚出土ハマグリの貝殻成長線分析について. 千葉県文化財センター編「有吉北貝塚 I」: 91-105. 住宅・都市整備公團.
- 樋泉岳二（2009）ハイガイ貝殻成長線分析に関する予察. 佐賀市教育委員会編「東名遺跡群II第6分冊」: 141-145. 佐賀市教育委員会.
- 畠山智史・富岡直人（2010）金海観音里貝塚出土大蛤の貝殻成長線分析. 三江文化財研究院編「金海観音里貝塚II」: 324-328. 三江文化財研究院.
- Woodford, L. A. (1946) A new Graphic method of describing the growth of animals. Biol. Bull. Woodsholow, 90, 141-147.



第78図 各トレンチの季節分布



第79図 採集季節の分布



— 5 cm —

図版1 東蒲池門前遺跡の貝殻成長線分析（1）

1～20. ハマグリ（試料No.1～20）、21～30. ハイガイ（試料No.21～30）



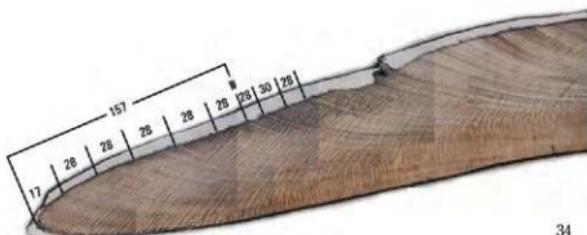
31



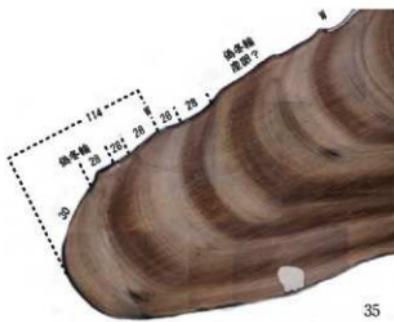
32



33



34



35

34-35 : — 1mm

31 · 32 :                  2 cm

33: \_\_\_\_\_ 1 cm

図版2 東蒲池門前遺跡の貝殻成長線分析(2)

31. 貝試料断面（試料 No.10）、32. 貝成長線レプリカプレバート（試料 No.10）、33. ハマグリ成長線全体写真（試料 No.3）、34. ハイガイ成長線拡大写真（試料 No.21）、35. ハマグリ成長線拡大写真（試料 No.14）

## 4 大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スタルシャン(パレオ・ラボ)

### (1)はじめに

福岡県柳川市西蒲池に位置する東蒲池門前遺跡B区から出土した大型植物遺体の同定結果を報告する。東蒲池門前遺跡は有明海沿岸地域に形成された粘土質地盤の低地に立地し、弥生時代と中世を主体とする複合遺跡である。ここでは、弥生時代の貝塚と中世の井戸や溝から出土した種実を同定し、種実の利用や周辺の植生について検討した。

### (2) 試料と方法

試料は、B区において南調査区の井戸である16号土坑から出土した1試料と、1号溝から出土した1試料、4号溝から出土した2試料(下層と不明)、南北貝塚トレンチから出土した1試料の計5試料である。1試料中には1点から数10点の種実が含まれていた。遺構の時期は南北貝塚トレンチ出土を除き、中世後期を主体とする。16号土坑は16世紀主体、1号溝は15世紀後半~16世紀前半主体、4号溝の下層と層位不明は15~16世紀(ただし、下層の遺物は12世紀後半~13世紀主体であるが、埋没は16世紀の可能性が高い)、南調査区南北貝塚トレンチは弥生時代後期~終末期主体の遺物が出土している。試料は、発掘調査時に目視で取り上げられた。

同定は、肉眼および实体顕微鏡下で行った。試料は、九州歴史資料館に保管されている。

### (3) 結果

同定の結果、木本植物ではクロマツ球果と、モモ核、センダン核の3分類群、草本植物ではトウガン種子1分類群の計4分類群が得られた(表10)。

以下に、産出した種実を遺構別に記載する。

16号土坑: モモ完形が1点得られた。

1号溝: トウガン完形が27点、破片が26点得られた。

4号溝: 下層からクロマツ完形が4点、層位不明試料からクロマツ完形が5点得られた。

南調査区南北貝塚トレンチ: センダン完形が1点得られた。

次に、大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

#### ①クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. 球果 マツ科

茶褐色で、上面観は円形、側面観は広卵形。種鱗はくさび形で、木質化しており、硬い。露出部は菱形状。高さ39.6mm、幅43.5mmと高さ34.4mm、幅25.7mm。

#### ②モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

淡褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面

表10 東蒲池門前遺跡から出土した大型植物遺体(括弧は破片数)

	遺構	土坑16	溝1	溝4	南北貝塚トレンチ
層位	-	-	-	下層	-
時期		中世後期		中世後期か (遺物は前期)	弥生後期~終 末期
分類群	整理 No.	82	83	84	追加3
クロマツ 球果				5	4
モモ 核		1			
センダン 核					1
トウガン 種子			27(26)		

に不規則な深い皺がある。片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。長さ 22.1mm、幅 14.9mm、厚さ 10.3mm。

③センダン *Melia azedarach* L. 核 センダン科

淡褐色で、上面観は星形で五分裂し、側面観はやや菱形。下端に大きな円形の着点がある。長さ 9.9mm、幅 7.7mm。

④トウガン *Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn. 種子 ウリ科

黄白色で、倒卵形。表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり、中央部は窪む。任意に抽出した種子 10 点の大きさは、長さ 10.7 ~ 11.6 (平均 11.0) mm、幅 6.1 ~ 6.5 (平均 6.3) mm。

(4) 考察

弥生時代後期から終末期の遺物が出土した南北貝塚トレーニングからは、野生植物で落葉高木のセンダンが得られた。遺跡内にある貝塚のごく近くにセンダンが生育し、そこからもたらされた可能性がある。なお、センダンは未炭化の状態であり、貝塚が地下水の高い位置に形成されて生のセンダンが残存したと考えられる。センダンは、柳川市三橋町に位置する蒲船津江頭遺跡でも、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構などから一定量得られており（佐々木・パンダリ、2011）、この地域に普通に生育していた樹種と考えられる。

16世紀主体の遺物が出土した井戸である 16 号土坑からは、栽培植物のモモが出土した。井戸および遺跡のごく近くでモモが栽培されていて果実や核が井戸内に流れ込んだ可能性や、利用後に廃棄された可能性、祭祀など何らかの目的で意図的に入れられた可能性が考えられる。

15世紀後半～16世紀前半主体の遺物が出土した 1 号溝からは、破片も含めて約 50 点のトウガンが得られた。果実はみられなかったが、同一種がまとまっている様相から、果実の状態で堆積していた可能性がある。溝の周辺で栽培されていたと考えられる。

15～16世紀の（出土遺物は12世紀後半～13世紀もあるが、2次堆積か）4号溝下層および出土位置不明の試料からは、クロマツの球果が合計 9 点得られた。溝のごく近くにクロマツが生育していたと考えられる。クロマツは海岸近くに生育する針葉樹で、本遺跡の立地とも整合的である。

今回は発掘調査現場において目視で取り上げられた種実のみを検討したが、今後堆積物を水洗して、堆積物中に含まれる微小な種実を合わせて検討することにより、当時の利用植物や植生についてより多くの情報が得られると期待される。

引用文献

佐々木由香・パンダリ・スダルシャン（2011）大型植物遺体の同定。福岡県教育委員会編「蒲船津江頭遺跡Ⅲ」：108-110。福岡県教育委員会。



スケール 1, 2:10mm, 3-5:5mm

図版1 東蒲池門前遺跡から出土した大型植物遺体

1. クロマツ球果（溝4下層）、2. クロマツ球果（溝4）、3. モモ核（土坑16）、  
4. センダン核（南北貝塚トレンチ）、5. トウガン種子（溝1）

# V 考 察

## 1 弥生時代の周辺地形に関する予察

### (1) はじめに

東蒲池門前遺跡が所在するのと同じ柳川市内にあって、以前有明海沿岸道路建設に係り調査した蒲船津江頭遺跡は、弥生時代終末から古墳時代前期主体の集落である。その報告（福岡県教育委員会 2009～2011）において、建物跡礎盤の検出で目立った高低差がある点等から、現在はほとんど平坦ながら旧地形はある程度の起伏があったものと想定した。今回の調査地点では弥生時代の明瞭な遺構はないものの、標高 30～50 cm 程度の下層の低位部で弥生時代中期～終末の貝塚が検出された。一方、北に隣接する西蒲池池淵遺跡等では上層域で同時期の濃密な遺構が検出されているため、蒲船津江頭遺跡と同様に当時の地形に明瞭な高低差があったと言える。そこで、今回の調査成果で地形を想定するのに関連する要素を整理するとともに、隣接調査地点の遺構の広がりや周辺の遺跡分布、特に貝塚確認地点の位置関係をもとに近隣地形の様相を想定する。なお、周辺域は沖端川等による土砂の堆積や有明海の潮汐による大きな干満差が影響して、西・南の有明海側へと陸地化する中で形成された冲積地であり、基本的な大枠では西・南側へと低くなると言える。また、弥生時代の期間を通じても徐々に地形状況が変化しているはずであり、1点のみであるがカキ殻の付着した中期の甕の底部（遺物洗浄時に確認していたが整理段階で所在不明）があり、中期ではカキの生息できる海が近隣まで入っていた時期があると想定できる。

### (2) 今回の調査成果から

周辺地形を判断するにあたり、本報告で関連する内容は以下の点である。

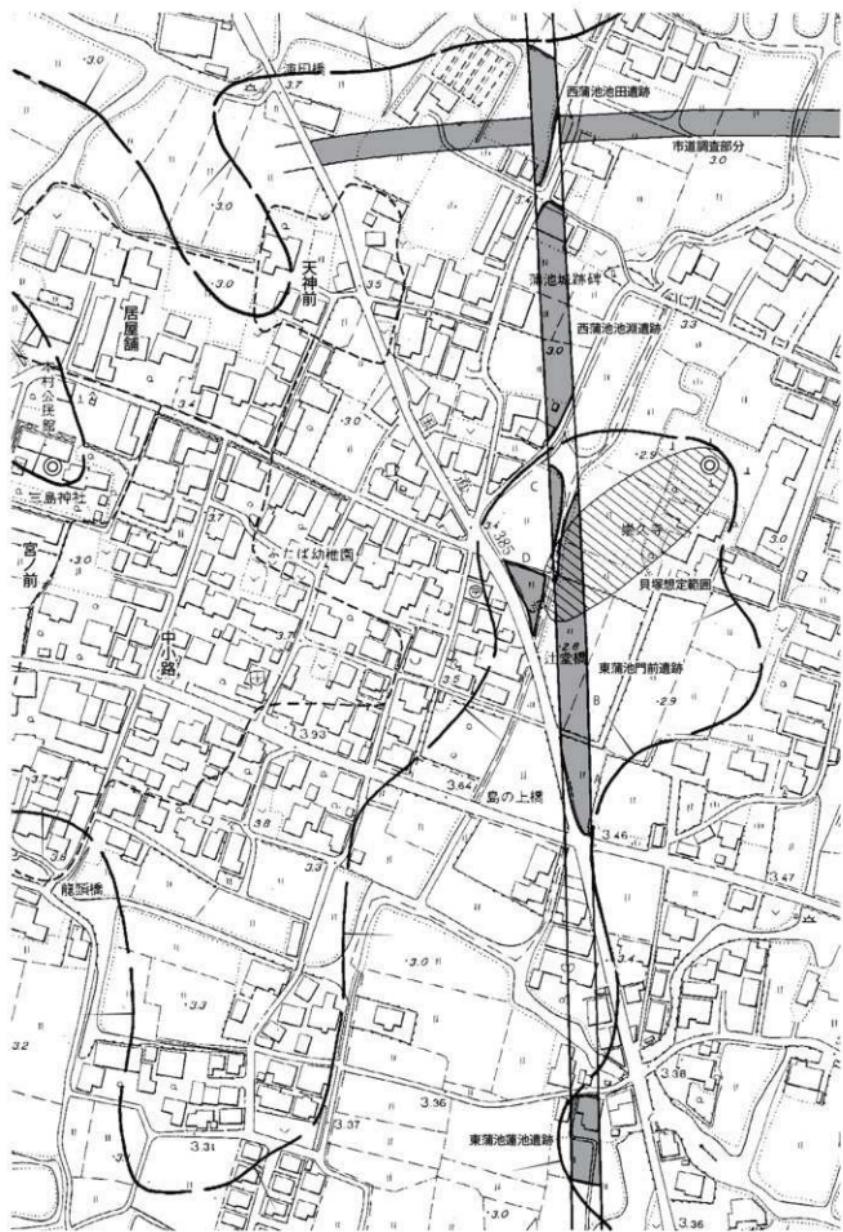
- ・ A区内トレンチの淡黄灰褐色地山近似層のさほど深くない位置から多量の弥生土器が出土。
- ・ B区内南側では貝塚分布外でも下層に一定の広がりのある活動面が存在し（土層（s - s'）、その上位の淡黄灰褐色土および青灰色土の地山近似層からはほとんど弥生土器が出土しない。
- ・ C区、D区では弥生時代の遺構は検出されていない。
- ・ B区内の貝層は北側の方が上面の標高がわずかに高い。また、北調査区の土層（p - p'）では、西より東側の方が貝層上面の標高が高い傾向がある。また、CおよびD区では下層で貝塚が検出されていない。

上記の点から次のような判断が可能である。B～D区内は貝塚分布域を含め、全体的に低位部となる。A区では高位部が近いためさほど低くない位置から土器が出土したと考えられ、他区より地形が上昇するとみられる。A区の西側にはB区の貝塚に連なる低位部が続くと想定されるため、A区の南および東側が弥生土器の出土している東蒲池蓮池遺跡を含む高位部となる可能性がある。また、B区内の貝層は北および東方向へと上昇していく、一方で西側ではCおよびD区内には及ばない。

### (3) 周辺の様相

本報告の調査以外に、近隣の調査成果等の関連情報を以下にまとめる。

- ・ 調査地点の西側にあたる三島神社を中心とした集落では、貝塚をはじめ濃密な遺物の散布地と知られており、集落の集中した展開が想定される。



第80図 萌生時代の周辺地形想定図 (1/2,500)

- ・本遺跡北側では、西蒲池池淵遺跡および西蒲池池田遺跡の範囲で、弥生時代の掘立柱建物跡をはじめとした遺構を検出。これらより北側では遺構が途切れる。
  - ・西蒲池池田遺跡からは直行する柳川市道の建設関係で発掘調査（柳川市教育委員会実施）が行われている。西蒲池池田遺跡より東に250m程度、西に少なくとも100m程度（更に西側は確認調査が未実施ながら、ある程度の遺跡の広がりが見込まれる。）の広がりが確認されている。
  - ・『福岡県遺跡等分地図（大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡）』（福岡県教育委員会 1978）では、周辺に貝塚の分布が記録されている。「崇久寺墓地裏の遺跡」や「三島神社遺跡」と詳細な地点の特定可能なものの（第80回◎）や、詳細な地点は不詳ながら「居屋舗」、「宮ノ前」、「中小路」、「天神前」と字名からある程度の位置が判断可能なものもある。
- 以上の点から、細かい時期の変遷はともかく、一帯はかなり広域に集落が展開していることが想定される。また、上記分布図の貝塚は、かなり以前に記録された性質上、今回の調査のように現地表より著しく低位のものではなく、現地表に近い深度で認められたものと考えられる。上層域で貝塚が確認された場合、限られた生活域からその外へと不要物を投棄した位置と想起される。そうすると、そこは居住域である高位部の中でも低位部へと下降していく縁辺にあたるということになる。ただし、高位部での落ち込み等への一時的な投棄も否定できず、またB区の中層貝塚やC・D区の土器貝殻層のように後世の2次堆積によって形成されたものが含まれる可能性を考慮しておく必要がある（既存分布図中の内容でも出土遺物は弥生時代の遺物に限られない場合が少くない）。

#### （4）まとめ

②の調査結果から、今回の調査地点は全域が低位部にあたり、高位部に開まれて南西側に開口した谷状をなすとみられる。検出した貝塚は②で触れたように北東方向へ上昇していくとすれば、③で挙げた崇久寺内の貝塚につながって同一単位の貝塚遺跡となる可能性があり、③で想定した居住域縁辺から低位部への投棄行為の蓋然性が高まる内容である。他の貝塚分布地点でも、堆積が高位部から低位部へつながる可能性を否定できない。ただ、既存分布図中で貝塚の所在が示される三島神社や字名の位置は、その分布図での主要遺跡分布域の必ずしも縁辺ではないため、弥生時代の居住域はそれよりも狭まるか、今回の調査地点のように谷状の低位部が入り込む可能性を考慮しておきたい。

不確実な想定要素を積み重ねており、大幅な修正が必要な前提で居住域として高位部を仮定で示したのが第80図である。それに従うと、今回報告の東蒲池門前遺跡は谷状の低位部で、それを挟んで東西に集落が広がりつつ、西蒲池池淵遺跡および西蒲池池田遺跡の南北の幅でつながっていたとみられる。この両遺跡を陸橋状として、三島神社一帯は西・南の海側の低位に向け島状に突出した様相が想定され、そのような立地に重要性があるて、多種多量の出土土器に見られるように、弥生時代以降も長期にわたり集落が営まれた要因と考えられる。

## 2 崇久寺と関連して

### （1）はじめに

今回の調査地点のすぐ東側に隣接する崇久寺は、蒲池氏の菩提寺であるなど周辺の地域史にとつて重要な位置づけにあると言え、また遺跡名にもある「門前」の字名が残ることからも調査成果と



第81図 崇久寺周辺の地形および調査区内溝略配置図 (1/1,000)

の関連性を整理する必要がある。五輪塔をはじめとした石塔類と瓦が、まず寺院と直接関連する要素として挙げられる。また土器・陶磁器類についても、15～16世紀のものが主体であり、蒲池氏の活躍時期と齋船のない内容と言える。遺構としては、土坑の多くが用途不明で、一部井戸と思しきものを除いては、明らかな墓とみられる1号土坑のみが寺院との関連遺構と言える。このように寺院との直接的な関連性としては、個別的で僅少な要素しか認められない。

そこで着目したいのは、周辺の地割と調査で検出した溝との方向軸の相関である。第81図では崇久寺周辺の地形図の中に、主な溝を対象とした今回の調査区の略配置図をはめ込んでいる。崇久寺の建物と敷地、周辺の田畠を含めた地割の方向軸がほぼ一致することがわかる。現在の本堂が、幾度の建て替えを経ているとは言え、かつて「塔頭八箇寺」とされた広範な寺域の影響が残っていると判断するのに十分と言える。更に今回の調査で検出したほとんどの溝がこの主軸と直行もしくは平行する点が認められ、これらの溝が寺域の区画に関わる可能性が高いと想定される。

## (2) 各調査区の溝の相関性

A～D区の全てで溝が検出されているが、規模が多様で切り合いもあり、もちろん同時併存したわけではない。そこで各調査区間での相関性や変遷について整理する。なお、B区南端の3号溝は当初A区北端の1号溝と連続すると想定された。しかし、わずかな範囲での検出とは言え、図面上の位置関係で連続性は疑わしく、個別の遺構と判断した。

A区1号溝とB区1・5号溝は平行しており、各間隔は23m前後と共通している。また、出土遺物が多く、その内容についても類似性が高いと言える。もし仮に更に北側へ1条平行していたとすればB区大溝の位置にあたり、その掘削で消滅したこととなる。

B区3・4・6号溝については、4号溝北側で屈曲が見られ、同様に屈曲しつつ4号溝と並ぶような位置となる6号溝が相関する可能性が高いと判断した。また、3号溝は屈曲する形で4号溝と連続して方形の区画をなすと想定した。ただし、各溝の出土資料の量が限られていたり、混入の可能性が高かったりと、いずれも遺物のみでの掘削・埋没時期を判断するには制約が大きい。また相互の関連を明瞭に提示できるわけではなく、仮説に止まらざるを得ない。なお、この溝の連続性が妥当なものであった場合、4号溝北側と3号溝との間隔は、55m程度とほぼ一町の半分に近い値となる。

A区2号溝、B区大溝、D区2号溝はいずれも非常に大型の溝であるとともに、クリーク跡に伴うような共通した特徴的な埋土が見られ、出土遺物による各個の時期の判断が難しいにも関わらず、相関性が非常に高いと見込まれる。B区大溝とD区2号溝は東西には連続した位置関係にある。またA区2号溝はコーナー部分が検出されており、そこから北に延ばし、更にB区大溝を東に延ばした場合、ほぼ直交して方形の区画をなした可能性がある。ただ、A区2号溝内で複雑な切り合があり、度重なる掘り返し等が想定され、単純に一様な構造が継続されたわけではないかもしれない。

以上で整理した各溝群のまとめが妥当であると仮定して、各群間の先後関係を確認する。B区内で5号溝が4号溝に切られる関係上、A区1号溝とB区1・5号溝の一群は、B区3・4・6号溝の一群に先行することになり、出土遺物のみでの傾向とは逆転する。B区3・4・6号溝とA区2号溝、B区大溝、D区2号溝の両群については、直接の切り合いはない。なお、(w-w')および(j-j')の両土層からは、層位的にともに遺構面が同一とみられる包含層の直下のため、両者の時期差を明瞭に認識する要素はない。B区内では5・6号溝の間にちょうど大溝が納まっている点から、こ

の両群が併存した可能性がある。また、A区1号溝とB区1・5号溝の一群とA区2号溝、B区大溝、D区2号溝との先後関係を直接判断する材料に欠ける。したがって、出土遺物の傾向と遺構の切り合いが異なったり、明瞭な先後の判断材料に乏しかったりと課題が山積状態である。

### (3) 寺域の変遷

今回の調査の出土遺物の時期は弥生・古墳・古代・中世前期・中世後期更に近世と各時代継続している中で、確実に遺構に伴うとみられる遺物は15世紀前半頃である。「南筑明覧」で崇久寺の創建に関わったとされる蒲池久恵が、筑後国三瀬郡蒲池村に移ったのが応永年間（1394～1428年）頃とされているため、年代の概ねの整合性は興味深い結果である。また、A区出土の五輪塔地輪（第19図3）の墨書「康正」（1455～1457年）は、直接有意な年代の定点を示すわけではないが、寺院活動の実年代の一端を示している点で重要と言える。

遺構としては主に溝に注目したが、A・B区のピット群にも言及しておく必要がある。特にB区内でピット群が著しく疎となる境界のラインが、溝群の軸ともほぼ平行・直交する。このピット群の境は、溝等に区切られているわけではなく、また上部に構造物があったわけでもなさそうである。調査区内では、西側では落ち込んで包含層が堆積している様相となっているが、そのような低くなる地形に制約を受けての日常の土地利用の結果がピット群の境界となって表れている可能性がある。15世紀の土坑の存在からピット群も15世紀代には既に形成されると考えるのが自然であり、初期の崇久寺の軸・構造が地形に合わせて成立したと想像される。そこで確立した構造が後の変遷にも影響を与え、溝の方向軸を規定したのではないだろうか。

区分した溝群の中で、時期の把握のしやすい一群（A区1号溝とB区1・5号溝）の埋没は、出土遺物から16世紀中頃から後半とみるのが妥当である。他の溝群を含めた構造変化はいかなる背景によるものであろうか。享禄年間（1528～1532）に死去した蒲池治久の法名をとって崇久寺となつた改称や、天文22年（1553）に蒲池鑑盛が施主となった大乗妙典看読の大法要の実施など蒲池氏と結びつきを強くして発展した段階、鑑盛の子の鎮並が天正9年（1581）に竜造寺隆信に謀殺され後ろ盾である蒲池氏滅亡となった段階、その後の立花氏や田中氏の庇護のもとで安定した段階といったこれらの歴史的な背景と遺跡に見られる変遷が相關するかは現段階では不明である。

出土遺物のみでは詳細な時期差が見出し難く、溝の群設定や変遷で不明瞭な点が多大であるとともに仮説を重ねるだけに終始してしまった。今後の周辺調査での成果の整理・蓄積によって、具体的な検証や新知見に結びつくことを期待したい。

#### 〔出土土器類等に関する主な参考文献〕

- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」「貿易陶磁研究」No2 日本貿易陶磁研究会  
小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」「貿易陶磁研究」No2 日本貿易陶磁研究会  
蒲原宏行 2003「佐賀平野における弥生後期の土器編年」「調査研究書」第27集 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館  
久留米市教育委員会 1994「安武地区遺跡群Ⅶ」久留米市文化財調査報告書第87集  
坂本嘉弘 2006「中世大友城下町跡の発掘調査」「日本考古学」第21号 日本考古学協会  
太宰府市教育委員会 2000「大宰府条坊XV～陶磁器分類編」太宰府市の文化財第49集  
田中克子 2011「博多遺跡群出土の中国陶磁器と対外貿易」「博多研究会誌 20周年特別号」博多研究会  
徳永貞紹 1990「肥前における中世後期の在地土器」「中近世土器の基礎研究」VI 日本中世土器研究会  
森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」「貿易陶磁研究」No2 日本貿易陶磁研究会

## 図 版

A 区



1. 調査区遠景  
(北から)



2. 調査区全景  
(東から)

図版2



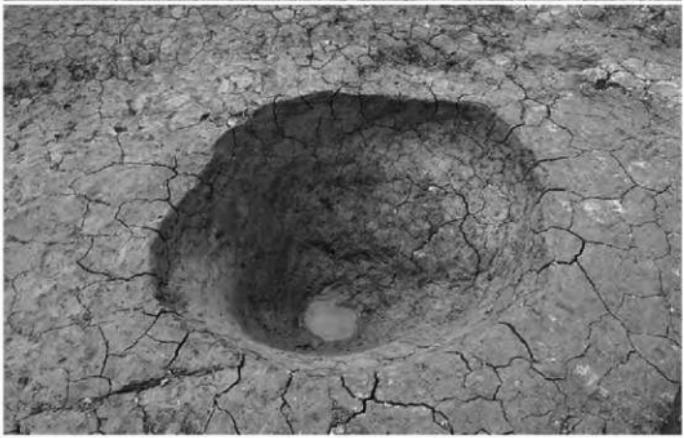
1. 調査区全景  
(北東から)



2. 調査区全景  
(上が南)



1. 1号土坑  
(南から)



2. 2号土坑  
(東から)



3. 3号土坑  
(南から)



1. 土坑群  
(上が西)



2. 土坑群  
(西から)



3. 4号土坑  
(北から)



1. 5号土坑  
(東から)



2. 3・5・6号土坑  
(北から)



3. 4号土坑から崇久寺を望む



4. 1号溝 (西から)

図版6



A区出土遺物

B 区

図版7



1. 調査区遠景（北上空から）



2. 北調査区全景（上空から）



1. 南調査区北半全景  
(南から)



2. 南調査区南半全景  
(上空から)



1. 1号土坑（西から）



2. 2号土坑（北から）



3. 3号土坑（北から）



1. 4号土坑（北から）



2. 4号土坑土層（北から）



3. 5号土坑（南から）

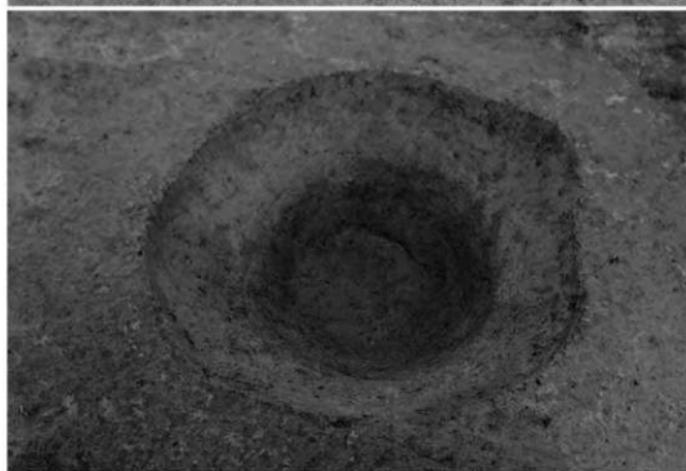
図版11



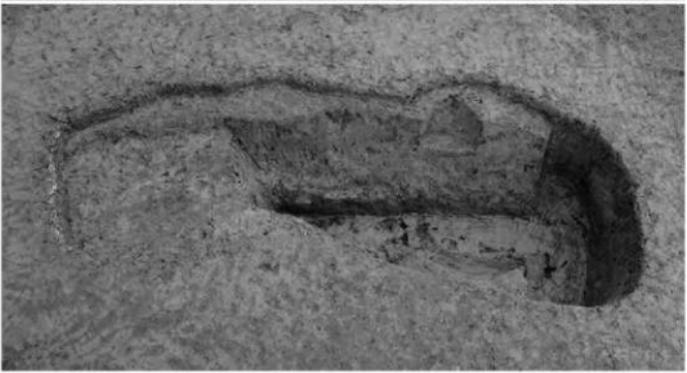
1. 6号土坑（北西から）



2. 7号土坑（北から）



3. 8号土坑（北から）



2. 10号土坑（北西から）



3. 11号土坑（北西から）

図版13



1. 12号土坑（東から）



2. 13号土坑（南から）



3. 14号土坑（北から）



1. 15号土坑（北西から）



2. 16号土坑（東から）



3. 17号土坑（北東から）

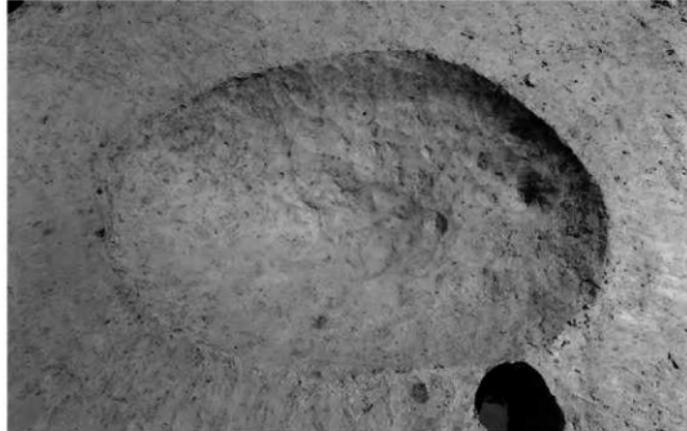
図版15



1. 18号土坑（北から）



2. 19号土坑（東から）



3. 20号土坑（西から）





1. 3号溝（南から）



2. 3号溝西壁土層（e-e'）  
(東から)



3. 4・5号溝（南から）



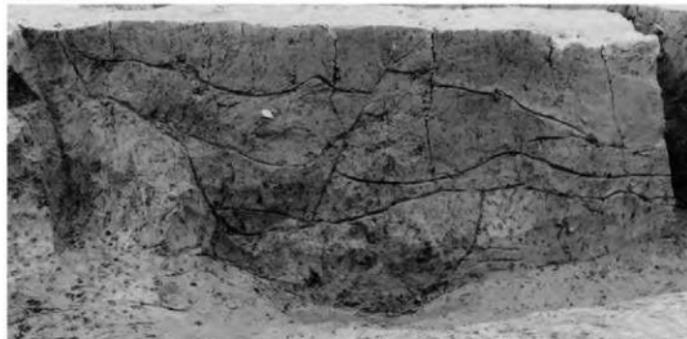
1. 4号溝土層 (f-f')  
(北から)



2. 4号溝土層 (g-g')  
(北から)



3. 4号溝土層 (h-h')  
(南から)



1. 4号溝土層 (i - i')  
(北から)



2. 4号溝東壁土層 (j - j')  
(西から)



3. 5号溝東壁土層 (k - k')  
(西から)



4. 5号溝土層 (l - l')  
(西から)



1. 6号溝土層 ( $m - m'$ )  
(西から)



2. 北調査区貝塚トレンチ土層  
( $n - n'$ ) (6号溝含む)  
(北から)



3. 北調査区貝塚トレンチ土層  
( $p - p'$ ) (6号溝、貝塚含む)  
(南から)



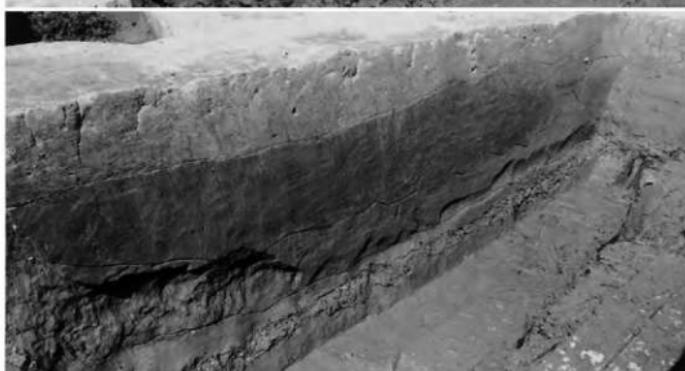
4. 北調査区北端トレンチ土層  
( $o - o'$ ) (6号溝含む) (北から)



1. 大溝南東側トレンチ土層  
(w - w') (西から)



2. 大溝南西側トレンチ土層  
(v - v') (西から)



3. 南調査区南北トレンチ  
土層 (t - t') (大含む)  
(南東から)



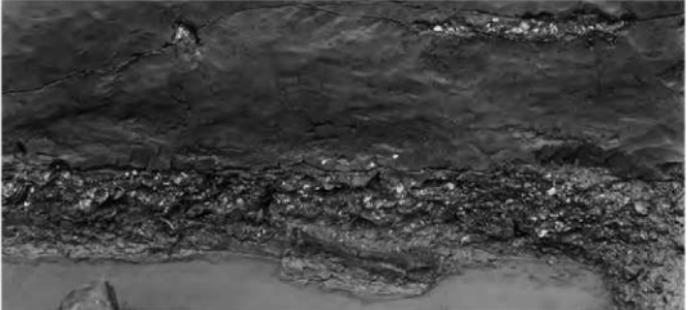
4. 南調査区南北貝塚  
トレンチ土層  
(s - s') (東から)



1. 南調査区東西貝塚トレンチ  
土層 ( $u - u'$ ) (北から)



2. 北調査区貝塚トレンチ  
土層 ( $q - q'$ ) (南西から)



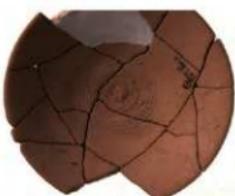
3. 北調査区貝塚トレンチ内  
木器出土状況 (西から)



1. 南調査区南北貝塚トレンチ内  
北側木杭（①）検出状況（東から）



2. 南調査区南北貝塚トレンチ内  
北端木杭（②）検出状況（南から）



土16-1

土1-1



土16-4

土1-2



土16-5



土5-9



土16-6



土6-17



土19-14



土7-19



土20-18

土坑出土土器類等



1号溝出土土器類等



溝4-1



溝5-14



溝4-13



溝4-14



溝5-16



|



溝5-17



溝5-2



溝5-3



溝5-21

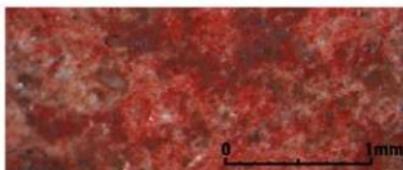


溝5-7

北窯調査区  
北窯トレンチ  
(溝6) 29



ピット-3



ピット-4



ピット-5



南包トレンチ-5



ピット-7



南包トレンチ-7



南包-2



北包-3



南包-3



北包-6



南包-4



北包-12



南包-11



北包-20



南包-22



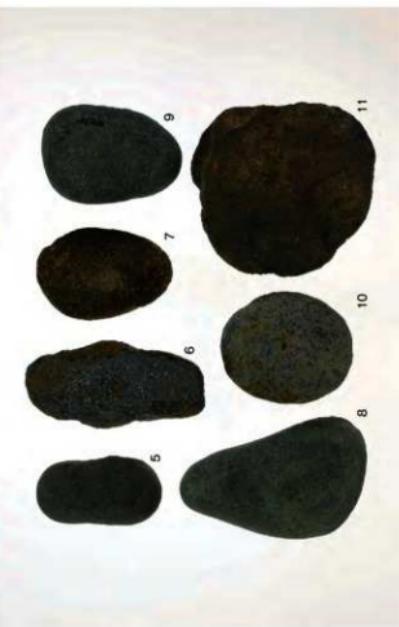
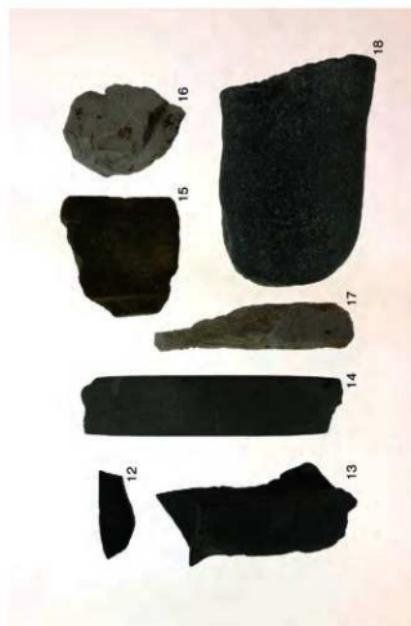
北包-21

ピットおよび包含層出土土器類等





北調査区貝塚およびその他の下層出土土器



3. 出土石製品③  
4. 出土石製品④

1. 出土石製品①  
2. 出土石製品②



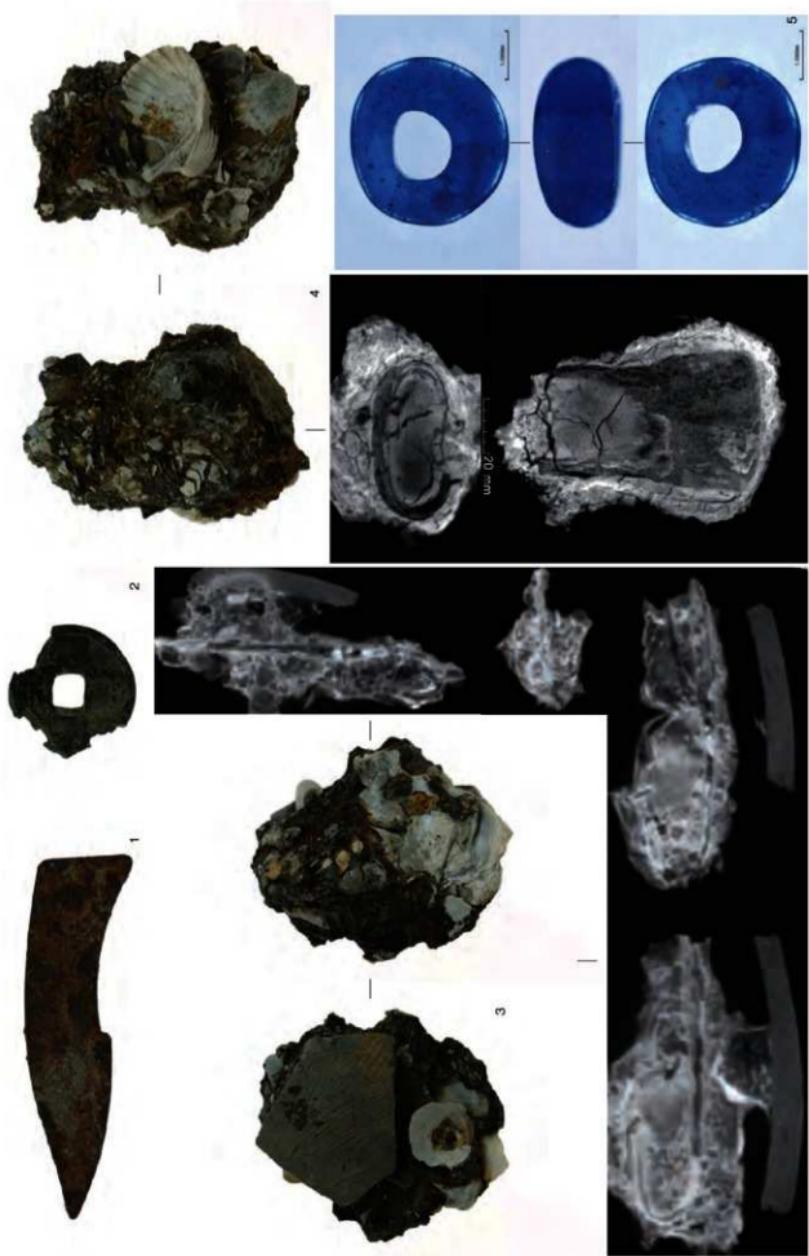
出土石塔類①

出土石塔類2

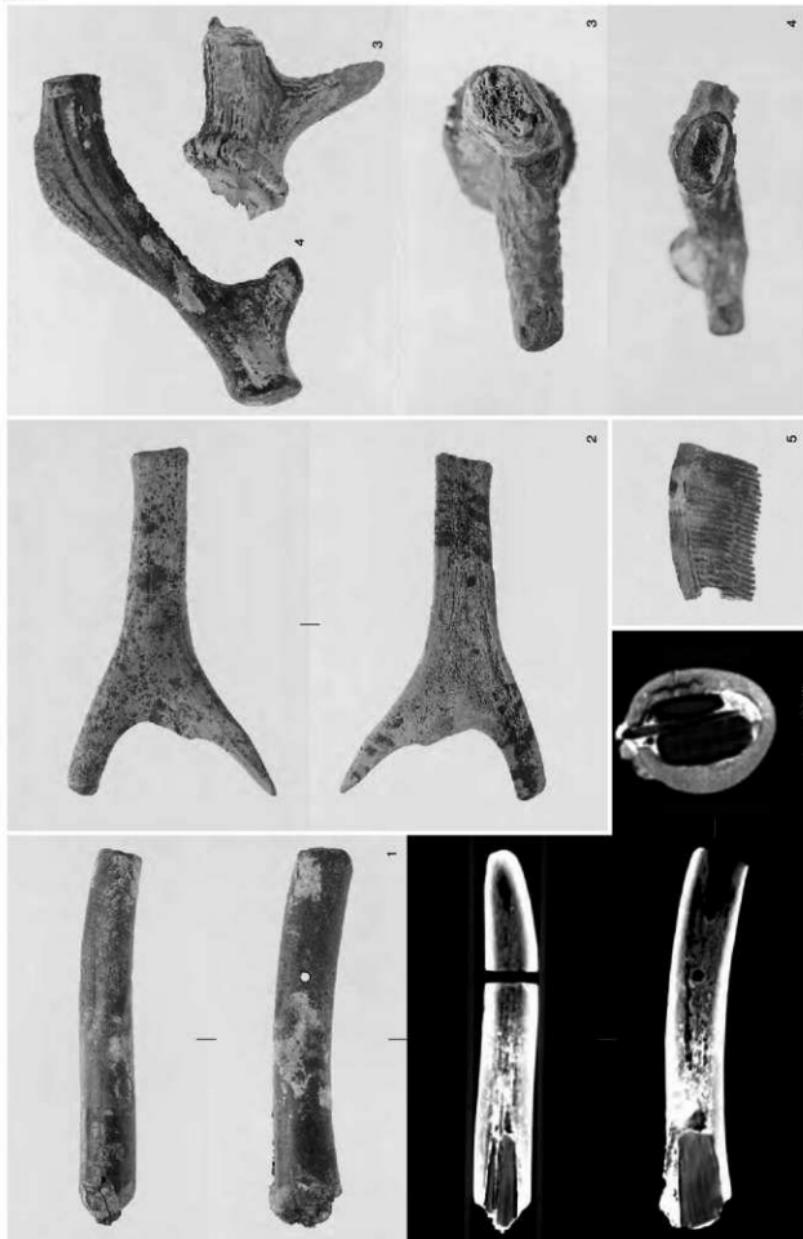




出土木製品および土製品

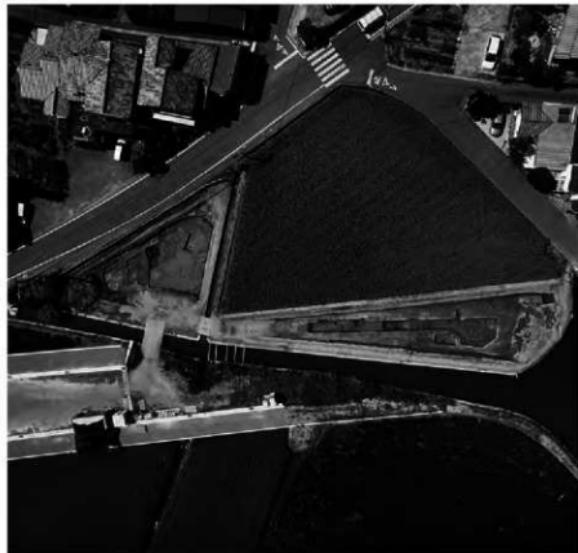


出土金属製品およびガラス小玉



出土骨角製品

C . D ✕



1. 調査区全景（右が北）



2. 調査区遠景（北から）



1. C区全景（北から）



2. D区全景（北東から）



3. 1号土坑（C区）（東から）



1. 1号土坑（C区）（北東から）



2. 1号溝（C区）（北東から）



3. 1号溝（C区）土層および  
遺物出土状況（北東から）

1. 2号溝（D区）上層土層断面  
(北東から)



2. 2号溝（D区）下層土層断面  
(北東から)



3. C区土器具殻層堆積状況①  
(東から)





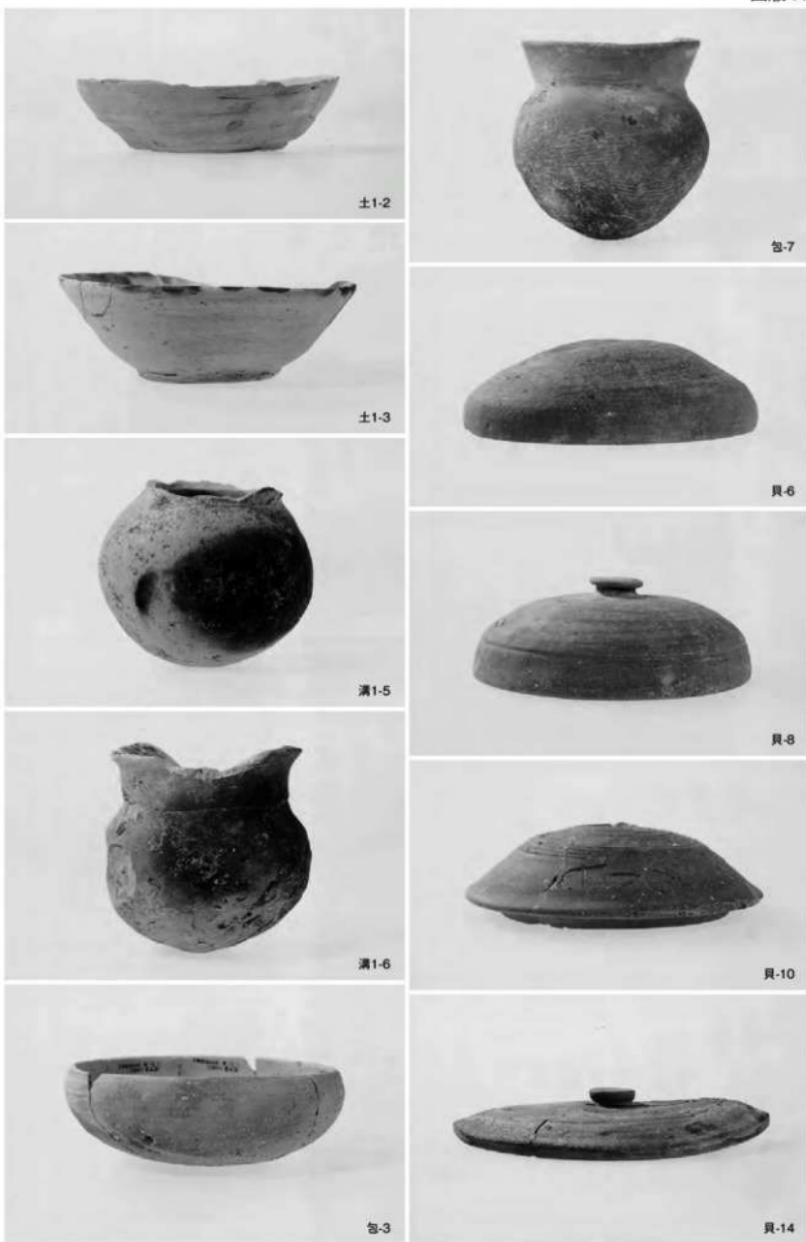
1. C区土器貝殻層堆積状況②（東から）



2. C区土器貝殻層遺物検出状況（北から）

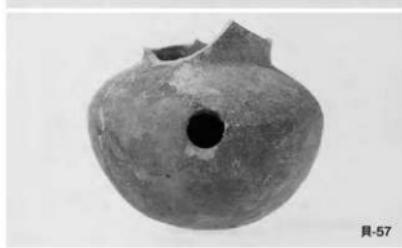


3. C区土器貝殻層検出状況（北から）



C·D区出土遺物①

図版42





貝-86



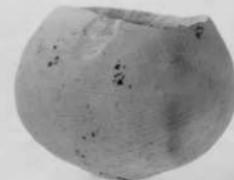
貝-114



貝-87



貝-124



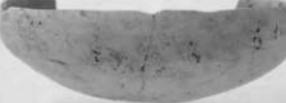
貝-88



貝-126



貝-89

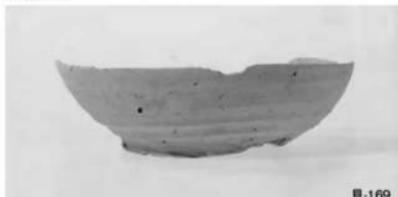


貝-158



貝-168

図版44



貝-169



貝-201



貝-173



貝-202



貝-185



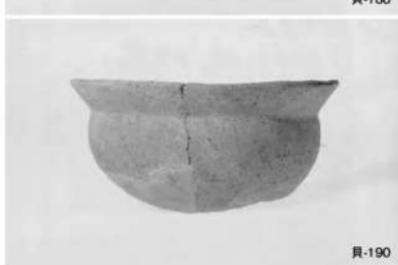
貝-204



貝-188



貝-215



貝-190



貝-73-1

C・D区出土遺物④



-



图72-6



图72-8



图72-11



图72-9



图72-10



图72-14



图72-13



图72-4



图72-7



图72-2



图72-3



图73-4



南から施工中の元調査地点を望む（奥は崇久寺）



「蒲池城跡之碑」前から施工地点を望む（西蒲池池淵遺跡付近）

## 報告書抄録

ふりがな	ひがしかまちもんぜんいせき							
書名	東蒲池門前遺跡							
副書名	国道385号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告第3集							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第240集							
編著者名	福岡県教育委員会・岸本圭・坂元雄紀(編集)・齊藤麻矢・城門義廣 九州大学・高橋浩史(大学院比較社会文化学府)・舟橋京子(総合研究博物館)・田中良之(大学院比較社会文化研究所) 東京大学総合研究博物館・畠山智史 ㈱パレオ・ラボ:中村賢太郎・米田恭子・佐々木由香・パンダリスダルシャン							
収集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-8575 小郡市三沢5208-3 TEL0942-75-9575 FAX0942-75-7834 E-mail kyureki@prefukuoka.lg.jp							
発行年月日	平成25(2013)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	通路番号					
ひがしかまちもんぜんいせき 東蒲池門前遺跡	福岡県柳川市 東蒲池・西蒲池	402079		33° 11' 3"	130° 24' 17"	A区 20090911 ～20091013 B区 20091009 ～20090927 C-D区 20100709 ～20110315	計2460 m <sup>2</sup> A区 400 m <sup>2</sup> B区 1300 m <sup>2</sup> C-D区 760 m <sup>2</sup>	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東蒲池門前遺跡	集落 貝塚 寺院	弥生時代 中期～終末 中世後期	土坑 溝 貝塚 ピット	弥生土器・土師器・須恵器 黒色土器・陶磁器・瓦 動物遺体・石製品(石塔頸含む) 金属製品・ガラス小玉・木製品			・弥生時代の貝塚検出 ・複数の溝が寺院と関連する 可能性あり	
要約	<p>国道385号三橋大川バイパス建設(道路改良事業)に伴う東蒲池門前遺跡の発掘調査の報告である。調査地点はA～D区に分かれ、面積は全体で約2500 m<sup>2</sup>である。調査区は主に25m前後の低平地上に位置しており、一帯は特有の粘質土地盤で構成される。</p> <p>上層では中世後期(15～16世紀)が主体で、井戸や土壙墓を含む土坑と多様な溝からなる。調査地点のすぐ東側に現在も所在する崇久寺は同時期の豪族蒲池氏と結びつきの強い寺院として知られ、五輪塔部材や瓦の出土から遺跡の内容も関連すると考えられる。特に複数の溝の軸が現在の崇久寺の建物およびすぐ周辺の田畠の地割と対応することが注目される。</p> <p>下層ではA区で中世遺構の基盤となる層から多量の弥生土器が出土するとともに、B区では標高30cm前後の位置から弥生時代中期から終末期(後期主体)の土器を含む貝塚が検出された。貝層は概ね20cm以下の厚さで、土器以外にも木製品・骨角製品や多様な動物遺体が出土し、貝層中に含まれる微細な骨類を整理段階で抽出している。また、C・D区では弥生土器・土師器・須恵器を含む土器貝殻層が認められ、この貝塚の2次堆積層の可能性がある。</p> <p>なお、包含層出土の遺物は、弥生時代中期から中世までがほぼ揃っており、かなりの長期間にわたって土地利用のされた旧地形での高位部が隣接することが想定される。</p>							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 24	登録番号 0011

国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第 3 集

## 東蒲池門前遺跡

福岡県文化財調査報告書 第 240 集

平成 25 年 3 月 31 日

発行 九州歴史資料館  
小郡市三沢 52083  
印刷 久野印刷株式会社  
福岡市博多区奈良屋町 3-1